宮ノ前遺跡

福岡県那珂川市大字仲所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書
第271集

2019

九州歴史資料館

序

九州歴史資料館では、都市計画道路現人橋乙金線建設事業に伴い、那珂川市（筑紫郡那珂川町、当時）大字仲に所在する宮ノ前遺跡の発掘調査を平成27年度から28年度にかけて実施しました。本書はその成果の報告です。

調査地は、福岡都市圏の重要な水源の一つとなっている二級河川那珂川に比較的近い位置にありますが、町内で最も由緒あるといわれる現人神社の境内に隣接することから、神社に関連する遺構・遺物の出土も期待されました。調査の結果は、宅地として使用されていたこともあって近現代の遺構・遺物が大部分であったものの、今なお希少な緑釉陶器や初期貿易陶磁器などの注目すべき資料を得ることができました。今後、周辺の調査が進めば、当地の古代の姿がより一層明らかになるものと思われますが、この度の発掘調査はその端緒となるものと思われます。

本書が、地域のみならず広範に歴史資料として活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、現地調査・報告書作成にいたる間には、福岡県県土整備部公園街路課・同那珂県土整備事務所および那珂川市教育委員会、そして那珂川市をはじめとする地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成31年３月31日

九州歴史資料館

館長　杉光　　誠

例　言

1　本書は、都市計画道路現人橋乙金線建設に伴い、平成27・28年度に九州歴史資料館が実施した那珂川市（筑紫郡那珂川町、当時）大字仲に所在する宮ノ前遺跡の発掘調査の報告である。

2　調査および報告書作製は、福岡県県土整備部公園街路課の執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して那珂川市・同教育委員会及び地元の多大な御協力を得た。

3　本書に掲載した遺構写真は撮影は飛野・坂本が行い、遺物写真の撮影は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が行った。また、空中写真撮影は（株）東亜航空技研に委託した。

4　本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、飛野・坂本が作成した。

5　出土品の整理は小川泰樹の指導の下で九州歴史資料館で実施し、図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管している。

6　本書に使用した地形図は国土地理院発行の1/25,000地形図「福岡南・不入道」を改変したものである。

また、本書で使用する方位は個別遺構図は磁北、全体遺構配置図は座標北である。

7　本書は坂本がⅢ－４・５を、その他の執筆を飛野が行い、編集は両者で協力して行った。

目　次

頁

Ⅰ　はじめに …… 1
1　発掘調査に至る経過…… 1
2　発掘調査の組織と関係者…… 3

Ⅱ　位置と環境 …… 5
1　地理的環境…… 5
2　歴史的環境…… 5

Ⅲ　調査の内容…… 11
1　1区の調査…… 11
1）土坑…… 11
2）溝…… 47
3）その他の遺構と遺物…… 59
2　2区の調査…… 67
1）土坑…… 67
2）溝…… 83
3）その他の遺構と遺物…… 83
3　3区の調査…… 89
1）土坑…… 89
2）溝…… 119
3）その他の遺構と遺物…… 130
4）一次調査小結…… 134
4　4区の調査…… 137
1）土坑…… 137
2）溝およびその他の遺構と遺物…… 149
5　5区の調査…… 155
1）建物跡…… 155
2）土坑…… 157
3）溝…… 161
4）その他の遺構と遺物…… 174
5）二次調査小結…… 181

Ⅳ　おわりに…… 183

図版目次

図版１	1	調査地全景（西北から）	2	調査地全景（南東から）
図版２	1	1区西半（上空から）	2	1区西半（西から）
	3	1区西半（東から）		
図版３	1	1区東半（西から）	2	1区東半（東から）
	3	1号土坑（北から）	4	1号土坑（北から）
図版４	1	2～4号土坑	2	7～10号土坑
	3	11・15号土坑（東から）	4	11・15号土坑（北から）
図版５	1	12～14号土坑（南東から）	2	13・14号土坑（北西から）
	3	16・19・22・23号土坑（北東から）		
図版６	1	16・19・22・23号土坑（南西から）	2	18号土坑（北から）
	3	30・28号土坑・2号溝（南東から）		
図版７	1	21号土坑（北から）	2	22号土坑（東から）
	3	24・25・27号土坑（東から）		
図版８	1	26号土坑（東から）	2	29号土坑（北から）
	3	33−２号土坑床面（北東から）		
図版９	1	35号土坑土層（東から）	2	35号土坑（南西から）
	3	37号土坑周辺（北東から）		
図版10	1	38号土坑土層（北西から）	2	39−３号土坑（北西から）
	3	45号土坑（北から）		
図版11	1	1号溝（北から）	2	1号溝南壁土層（北から）
	3	1号溝中央畦土層（南東から）		
図版12	1	1号溝北壁土層（南東から）	2	1号溝北壁土層（南東から）
	3	1号溝南半礫群（北から）		
図版13	1	1号溝中央畦北礫群（北西から）	2	1号溝北端石組（北西から）
	3	1号溝北端石組（北から）		
図版14	1	1号溝北端遺物出土状況（北から）	2	1号溝中央畦北遺物出土状況（北東から）
	3	6号溝（北から）	4	Ｐ90（北東から）
図版15	1	1W区全景（西から）	2	２Ｅ区全景（西から）
	3	２Ｅ区全景（東から）		
図版16	1	2W区西半（南から）	2	2W区東半（南西から）
	3	2W区南半（北東から）		
図版17	1	202・203・205号土坑（北東から）	2	204号土坑（南東から）
	3	206号土坑堆積状況（西から）	4	同完堀後（東から）
図版18	1	208号土坑（南西から）	2	209号土坑（南から）
	3	209号土坑床面（南から）		
図版19	1	201号溝検出状況（北西から）	2	201号溝（南から）
	3	3区全景（上空から）		

図版20　1　301・302号土坑（西から）　2　303号土坑（北から）
3　305号土坑（東から）
図版21　1　308号土坑（北東から）　2　309号土坑（東から）
3　310号土坑（東から）
図版22　1　311・312号土坑（東から）　2　311号土坑（北東から）
3　315号土坑（南東から）
図版23　1　316−１（左）・２号土坑（南から）　2　316−２号土坑下層（東から）
3　316−３号土坑（南から）
図版24　1　316−３号土坑床付近（南から）　2　316−４号土坑上層（東から）
3　316−４号土坑下層（東から）
図版25　1　318号土坑床付近（南から）　2　320号土坑上層（東から）
3　321号土坑検出状態（南西から）
図版26　1　322（左）・323号土坑（南から）　2　324号土坑（東から）
3　324号土坑床面付近（東から）
図版27　1　327号土坑検出状態（東から）　2　327号土坑（東から）
3　329号土坑（西から）
図版28　1　329号土坑細部（西から）　2　330号土坑（北から）
3　330号土坑（北から）
図版29　1　331号土坑（西から）　2　332号土坑（北西から）
3　333（右）・334号土坑（北から）
図版30　1　338号土坑（南東から）　2　303号溝西半（北東から）
3　303号溝東半（南西から）
図版31　1　303号溝中央付近（東から）　2　303号溝中央付近土層（西から）
3　303号溝西側遺物出土状況（北から）
図版32　1　304（右）・307号溝全景（南西から）　2　307号溝全景（北東から）
3　307号溝北壁土層（南西から）
図版33　1　4区遠景（東上から）　2　4区全景（真上から）
図版34　1　4区東側全景１（東から）　2　4区東側全景２（東から）
3　4区東側全景３（西から）
図版35　1　401号土坑・402号溝（南から）　2　403・404号土坑（北から）
3　409号土坑（南から）
図版36　1　410・411・414号土坑（東から）　2　420号土坑（南から）
3　423号土坑（南から）
図版37　1　427・432号土坑・422号溝（南から）　2　434号土坑（南から）
3　437号土坑（北から）
図版38　1　414号土坑・425号溝（南から）　2　443号土坑（南から）
3　441・445・446号土坑（西から）
図版39　1　413号溝（東から）　2　415・416号溝（南から）
図版40　1　415・416号溝土層（東から）　2　423号溝土層（西から）
3　428号溝（東から）　4　3区307号溝（南から）

図版41　1　5区全景合成写真（真上から）

図版42　1　5区東側１（真上から）　2　5区東側２（真上から）
　　3　5区西側１（真上から）

図版43　1　5区西側２（真上から）　2　501号掘立柱建物跡（南から）
　　3　501号土坑（南から）

図版44　1　502号土坑（東から）　2　503・504号土坑（北東から）
　　3　507号土坑（南から）

図版45　1　508（514）号土坑（西から）　2　508（514）号土坑土層（南から）
　　3　509号土坑（南から）

図版46　1　510・511号土坑（西から）　2　501号溝（南から）
　　3　501号溝土層（南から）

図版47　1　501号溝礫石検出状況（南から）　2　501号溝土器出土状況（北から）
　　3　503・504号溝（東から）

図版48　1　504号溝土層（東から）　2　504号溝（南から）
　　3　506号溝（北から）　4　507号溝土器出土状況（北から）

図版49　1　507号溝（北から）　2　507号溝（南から）
　　3　507号溝土層（南から）

図版50　1　504・509・510号溝土層（南西から）　2　509号溝礫石検出状況（南から）
　　3　509号溝土層（西から）　4　512号溝土層（南から）

図版51　1　511号溝土層（北東から）　2　511号溝（南から）
　　3　512号溝（東から）

図版52　1　P5045（西から）　2　P5183（西から）
　　3　P5272（東から）　4　調査終了後（西から）

図版53　1区出土遺物１

図版54　1区出土遺物２

図版55　1区出土遺物３

図版56　1区出土遺物４

図版57　2区出土遺物１

図版58　2区出土遺物２

図版59　2区出土遺物３・３区出土遺物１

図版60　3区出土遺物２

図版61　4区出土遺物１

図版62　4区出土遺物２

図版63　4区出土遺物３・５区出土遺物１

図版64　5区出土遺物２

図版65　5区出土遺物３

図版66　5区出土遺物４

図版67　5区出土遺物５・縄文土器・石器

図版68　4・5区石製品・銅製品・鉄製品

挿図目次

頁

第１図　宮ノ前遺跡の位置…… 1
第２図　宮ノ前遺跡周辺地形図（1/2,500） …… 2
第３図　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 4
第４図　宮ノ前遺跡遺構配置図（1/200） …… 折込
第５図　1区土坑実測図1（1～5・7～11・15号土坑、1/40） …… 12
第６図　1区出土遺物実測図1（1～14号土坑、1/3） …… 14
第７図　1区土坑実測図2（12～14・16・17・19・22・23号土坑、1/40） …… 16
第８図　1区出土遺物実測図2（14～22号土坑、1/3） …… 18
第９図　1区土坑実測図3（18・20・21・24号土坑・2号溝、1/40） …… 20
第10図　1区出土遺物実測図3（23～32号土坑、1/3） …… 22
第11図　1区土坑実測図4（25～29・31号土坑、1/40） …… 24
第12図　1区土坑実測図5（32・33号土坑、1/40） …… 28
第13図　1区出土遺物実測図4（32・33号土坑、1/3・1/8） …… 29
第14図　1区出土遺物実測図5（土33-2号土坑下層、1/3） …… 30
第15図　1区出土遺物実測図6（土33-2号土坑下層～44号土坑、1/3） …… 32
第16図　1区土坑実測図6（34～36・38号土坑、1/40） …… 34
第17図　1区出土遺物実測図7（35号土坑-1、1/3） …… 36
第18図　1区出土遺物実測図8（35号土坑-2、1/3） …… 折込
第19図　1区出土遺物実測図9（35号土坑-3、1/3） …… 40
第20図　1区土坑実測図7（37・39・40・44号土坑、1/40） …… 42
第21図　1区出土遺物実測図10（36～45号土坑、1/3） …… 43
第22図　1区土坑実測図8（41・42・45号土坑、1/40） …… 44
第23図　1区出土石製品実測図1（石斧・砥石等、1/3） …… 46
第24図　1区1号溝実測図（1/80） …… 48
第25図　1区1号溝石組実測図（1/40） …… 49
第26図　1区溝出土遺物実測図1（溝1出土石臼等、1/3） …… 50
第27図　1区溝出土遺物実測図2（溝1出土石製品、1/3） …… 51
第28図　1区溝出土遺物実測図3（溝1、1/3） …… 52
第29図　1区溝出土遺物実測図4（溝1、1/3） …… 54
第30図　1区溝出土遺物実測図5（溝1、1/3） …… 56
第31図　1区溝出土遺物実測図6（溝2・溝4、1/3） …… 58
第32図　1区P90板碑出土状態実測図（1/30） …… 60
第33図　1区P90出土板碑実測図（1/4） …… 60
第34図　1区その他の出土遺物実測図1（1/3） …… 61
第35図　1区その他の出土遺物実測図2（1/3） …… 62
第36図　1～3区出土縄文土器実測図（1/3） …… 64

第37図　1区出土石製品実測図2（打製石器、2/3）…… 65
第38図　1区出土石製品実測図3（打製石器、2/3）…… 66
第39図　2区土坑実測図1（201～205・208・209号土坑、1/40）…… 68
第40図　2区土坑出土遺物実測図1（201～204号土坑、1/3）…… 69
第41図　2区土坑実測図2（206・207・210号土坑、1/40）…… 70
第42図　2区出土遺物実測図2（206号土坑-1、1/3）…… 71
第43図　2区出土遺物実測図3（土206号土坑-2、1/3・1/4）…… 72
第44図　2区出土遺物実測図4（土206号土坑-3、1/3）…… 74
第45図　2区出土遺物実測図5（土206号土坑-4、1/3・1/4）…… 76
第46図　2区出土遺物実測図6（土206号土坑-5、1/3）…… 78
第47図　2区出土遺物実測図7（207～209号土坑、1/3）…… 80
第48図　2区出土遺物実測図8（210号土坑・溝201・柱穴ほか、1/3）…… 82
第49図　2・3区出土石製品実測図1（砥石等、1/3）…… 84
第50図　2区出土石製品実測図（石臼等、1/3）…… 86
第51図　2・3区出土石製品実測図2（打製石器、2/3）…… 87
第52図　3区土坑実測図1（301～312号土坑、1/40）…… 88
第53図　3区出土遺物実測図1（301～310号土坑、1/3）…… 90
第54図　3区出土遺物実測図2（308号土坑瓦、1/3・1/2）…… 91
第55図　3区出土遺物実測図3（311号土坑、1/3）…… 93
第56図　3区出土遺物実測図4（312～316-2号土坑、1/3・1/4）…… 94
第57図　3区土坑実測図2（315・316・318・320・321号土坑、1/40）…… 96
第58図　3区出土遺物実測図5（316-3～316・317号土坑、1/3）…… 98
第59図　3区出土遺物実測図6（318号土坑、1/3）…… 102
第60図　3区出土遺物実測図7（319号土坑-1、1/3）…… 103
第61図　3区出土遺物実測図8（319号土坑-2、1/3）…… 104
第62図　3区出土遺物実測図9（319-3～321号土坑、1/3）…… 106
第63図　3区出土遺物実測図10（321-2～326号土坑、1/3）…… 108
第64図　3区土坑実測図3（322～329号土坑、1/40）…… 110
第65図　3区出土遺物実測図11（327～332号土坑、1/3）…… 112
第66図　3区土坑実測図4（330～337号土坑、1/40）…… 114
第67図　3区出土遺物実測図12（335～337号土坑、1/3）…… 116
第68図　3区338号土坑（埋甕）実測図（1/30）…… 118
第69図　3区出土遺物実測図13（338号土坑、1/4）…… 119
第70図　3区溝土層実測図（1/80）…… 120
第71図　3区出土遺物実測図14（301～303号溝、1/3）…… 122
第72図　3区出土遺物実測図15（303号溝-2、1/3）…… 124
第73図　3区出土遺物実測図16（303-3～306号溝、1/3・1/4）…… 126
第74図　3区出土遺物実測図17（307・308号溝およびその周辺、1/3）…… 128
第75図　3区出土石製品実測図（石臼等、1/3）…… 132
第76図　3区出土遺物実測図18（その他の出土遺物、1/3・1/4）…… 133

第77図　4区土坑実測図1（401・403・404・409～411号土坑、1/40）…… 138
第78図　4区出土遺物実測図1（401～403号土坑、1/3）…… 139
第79図　4区出土遺物実測図2（406～408・411号土坑、1/3）…… 140
第80図　4区土坑実測図2（414・420・423・427・431・432・434・435号土坑、1/40）142
第81図　4区土坑実測図3（437・439・441・446・447号土坑、1/40・1/60）…… 144
第82図　4区出土遺物実測図3（422・423・436・437・439・443号土坑、1/3）…… 146
第83図　4区出土遺物実測図4（441・443・445・446号土坑・416号溝、1/3、9は1/4）… 147
第84図　4区溝実測図（402・412・413・415～417・421・423～427号溝、1/20・1/40）… 148
第85図　4区出土遺物実測図5（405・413・415・416号溝、1/3）…… 150
第86図　4区出土遺物実測図6（416・423・424号溝、1/3）…… 151
第87図　4区436・443号土坑・428号溝実測図（1/60）…… 152
第88図　4区出土遺物実測図7（溝、1/3）…… 152
第89図　4区出土遺物実測図8（遺構検出、1/3）…… 154
第90図　5区501号建物跡実測図（1/50）…… 155
第91図　5区土坑実測図1（501～504号土坑、1/40・1/60）…… 156
第92図　5区土坑実測図2（507～510号土坑、1/40）…… 158
第93図　5区出土遺物実測図1（502～504・507・508・511・512号土坑、1/3）…… 159
第94図　5区501号溝実測図（1/30・1/40）…… 160
第95図　5区出土遺物実測図2（501号溝、1/3）…… 162
第96図　5区出土遺物実測図3（501号溝-2、1/3）…… 163
第97図　5区502～504・507号溝実測図（1/30・1/40）…… 164
第98図　5区出土遺物実測図4（502～504号溝、1/3）…… 166
第99図　5区出土遺物実測図5（504号溝、1/3）…… 167
第100図　5区出土遺物実測図6（506・507号溝、1/3）…… 168
第101図　5区509～511・512号溝・ピット実測図（1/20・1/30・1/40）…… 169
第102図　5区出土遺物実測図7（509号溝、1/3）…… 170
第103図　5区出土遺物実測図8（510～512号溝、1/3）…… 172
第104図　5区出土遺物実測図9（ピット、1/3）…… 174
第105図　4・5区出土縄文土器実測図（1/3）…… 175
第106図　4・5区出土打製石器実測図（6・8・10は1/2、他は2/3）…… 176
第107図　4・5区出土石製品実測図１（1/3）…… 177
第108図　5区出土石製品実測図２（1/3）…… 178
第109図　5区出土石製品実測図３（1/3）…… 179
第110図　4区出土銅製品・鉄製品・銭実測図（11～17は1/3、他は1/2）…… 180
第111図　5区503号土坑出土櫛 …… 182
第112図　宮ノ前遺跡周辺古地図等（1/20,000・1/25,000）…… 184

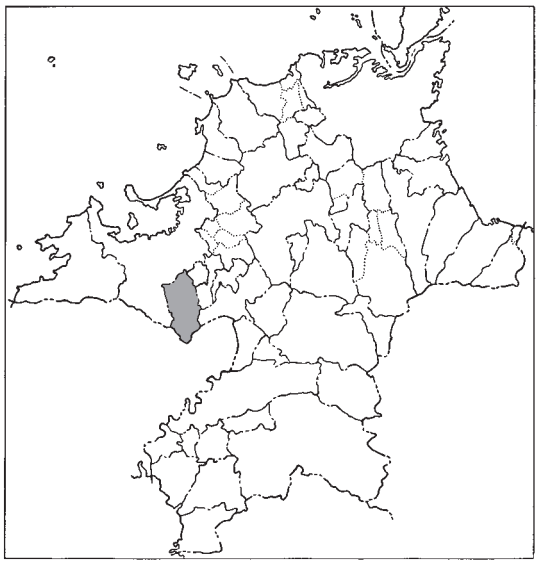
平成31年1月22日現在の仲宮ノ前遺跡(2W区から東を見る)

Ⅰ　はじめに

1　発掘調査に至る経過

福岡県教育庁教育総務部文化財保護課（以下、文化財保護課と記す。）では、毎年、福岡県および県内の国の機関等に次年度の開発事業について照会を行い、それらを集約して関係する市町村へ事業地内の文化財の有無および取り扱いについて確認するとともに、開発部局も認識を共有するように文書を交換している。

この都市計画道路現人橋乙金線建設事業も上記の流れの中で、那珂川町（当時）教育委員会が「試掘調査を要する」旨を回答し、同教委が平成27年（2015）１月22・23日に試掘調査を実施して遺構を確認、事業部局の福岡県県土整備部那珂県土整備事務所へ工事着手前に「発掘調査を要する」との内容で協議を行っていた。



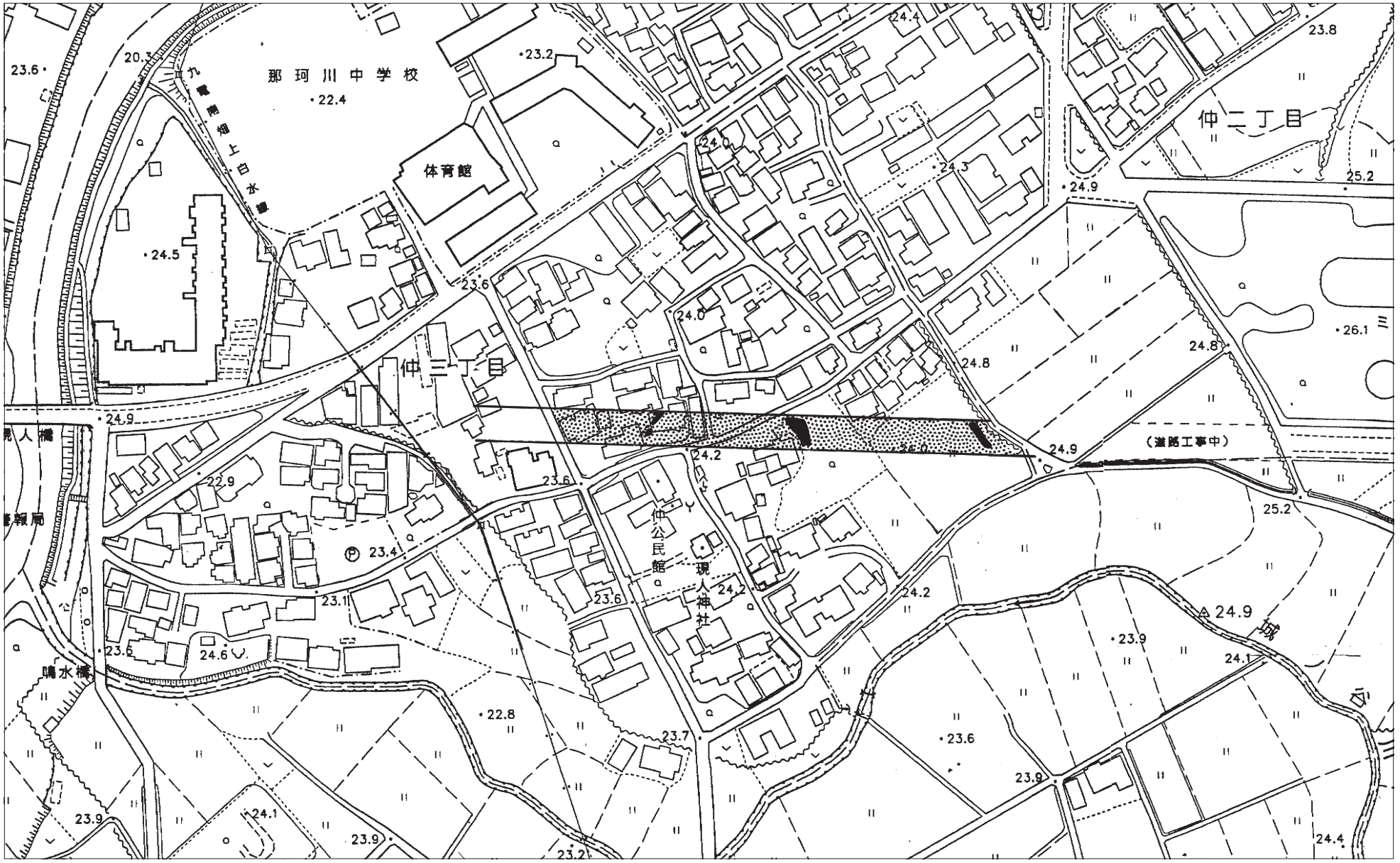
第１図　宮ノ前遺跡の位置

その後、那珂川町教育委員会文化財担当部局は継続または予定されている発掘調査事業を抱えていたため、この事業への対応が困難であるとして文化財保護課に協議を申し入れ、その結果、県教委の発掘調査担当部局の九州歴史資料館が調査を担当することとなった。

平成27年５月26日、九州歴史資料館文化財調査室文化財調査班と那珂県土整備事務所との間で最初の協議を行った。この段階ではまだ事業地内の住宅の一部が撤去されていなかった。その後、同年８月４・12日にも協議を行い、また、地元仲（ちゅう）地区の役員の方々への工事および発掘調査に関する説明会を県土整備事務所と合同で行うなどの経過を経て、調査に着手したのは８月19日であった。調査対象地は住宅地の中にあって狭い市道・私道が横断しており、表土掘削・土砂移動に手間取るなどして、27年度中に対象地すべての調査を終えることができず、東西両端の区画を残して、２月末に一旦調査を終えた。

平成28年５月10日から３区の西側に位置する４区の調査を開始した。ここでも排土置き場の関係で一度に全面を剥ぐことができず、調査区の西端から東側2/3程の調査を先行した。調査区西側は近世～現代までの遺構及び攪乱が多く、掘削には手間がかかったが、６月９日に空撮を行い、その後バックホーにより埋め戻して終了した。東側の残り1/3の調査でも、西側同様の遺構及び攪乱を検出した。前年度の調査終盤に３区西端で古代に遡る可能性のある直線的な溝を発見していたことから、この溝の延長を確認することが調査の主眼の一つとなったが、３・４区間の南北方向の私道を残した状態での調査では溝の延長を確認できなかった。そのため、道路使用者の了解を得て私道を調査区内で東西方向に付け替え、私道部分も発掘して漸く溝の延長を検出するとともに、特異な形状を確認することができた。４区の調査は８月10日にすべてを終了した。

９月８日からは１区の東側に位置する５区の調査を開始した。ここでは工事の関係上、調査区内が真砂土で盛土されていたため、表土剥ぎにかなりの時間を要した。ここでも排土置き場の関



第２図　宮ノ前遺跡周辺地形図（1/2,500）

係で、一度に表土剥ぎができないため、調査区を４つに細分し東側から1/4程の範囲を順に調査した。５区は４区とは異なり、中世の土坑や溝、ピットが密集していたが、西側1/4は近世以降の遺構はなく攪乱されていた。５区は平成29年２月３日ですべての現地調査を終了した。

2　発掘調査の組織と関係者

九州歴史資料館の平成27・28・30年度の関係者は以下の通りである。

	平成27年度	平成28年度	平成30年度
館　長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
副館長	伊﨑俊秋	飛野博文	東　　良
参　事	飛野博文（調査担当）		
総務室長	塩塚孝憲	塩塚孝憲	
総務班長	中村満喜子	中村満喜子	中村満喜子
事務主査			前原俊史
事務主査	宮崎奈巳	西村知子	林田朋子
主任主事	西村知子	原野貴生	原野貴生
主任主事		秦　健太	
主　事	秦　健太		具志堅靖知
主　事		甲斐進也	
文化財調査室文化財調査班			
室　長（企画主幹）	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
室長補佐（企画主幹）		伊﨑俊秋	伊﨑俊秋
班　長	秦　憲二	秦　憲二	森井啓次
参事補佐（整理担当）			小川泰樹
技術主査		坂本真一（調査担当）	
福岡県教育委員会総務部文化財保護課			
企画・埋蔵文化財係技術主査（報告書担当）			飛野博文
文化財保護係技術主査（報告書担当）			坂本真一

発掘調査の過程においては地元仲区役員の皆様、また調査地周辺の住民の皆様の多大な御理解・御協力を得ることができました。また、那珂川市在住の方々を初め近隣から調査に参加してくださった皆様には、酷暑・酷寒にも拘わらず、決して楽ではない作業に尽力していただきました。また、報告書作成に当たっては、石器について梶佐古幸謙（九州歴史資料館）、縄文土器については宮地聡一郎（文化財保護係）、近代遺物については秦憲二（九州歴史資料館）の協力・助言を得た。この調査に関わったすべての皆様に感謝申し上げます。

第３図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

II　位置と環境

福岡県筑紫(ちくし)郡は、福岡市の南西部に接し、佐賀県との県境を有する那珂川町一町だけで構成されていた。ただこの筑紫郡の歴史は浅く、明治29年（1896）に３郡を合わせて発足したものである。それ以前は席田(むしろだ)郡（現福岡市）、那珂(なか)郡（現福岡市・春日市・那珂川市）、御笠(みかさ)郡（現大野城市・太宰府市・筑紫野市）に分かれていた。ＪＲ鹿児島本線・西鉄天神大牟田線や国道３号線・九州縦貫自動車道などの交通の動脈が早くに整備された旧筑紫郡東部では福岡市のベッドタウン化が進んで早くに市制が施行されている。この那珂川市では、昭和50年（1975）の山陽新幹線の博多延伸により博多総合車両所が春日市にまたがって置かれ、平成２年（1990）には回送線に「博多南駅」が営業開始されて10分に満たない時間で鉄路が博多駅に直結された。昭和45年（1970）の人口は11,245人であるが、平成７年（1995）には42,345人となり、その後は増加率が減じたが、先の国勢調査で人口が50,000人を上回り、平成30年（2018）10月１日に「那珂川市」となった。

１　地理的環境

那珂川市は福岡市の南西部に位置する。筑紫山地の一部をなす背振山地から北へ派生する油山山地で西側を福岡市早良区と接し、同じく牛頸・那珂川丘陵とその北側に延びる那珂川・御笠川台地（大野・春日原台地）で東を大野城市・春日市と接する。南は背振山地で佐賀県吉野ヶ里町と、北は福岡市南区と接するが、北には明瞭な地形的隔たりはない。旧筑紫郡北部を形成していた９村が福岡市に編入されたことにもよる。

南北15㎞弱、東西９㎞弱の南北に長い市域をもち、中央部を二級河川那珂川が蛇行しながら北流して博多湾へ流入する。新幹線博多総合車両所の南端に接して、略東西方向に走る道路を西へ延伸させたものが今回の発掘調査の契機となった都市計画道路である。この道路から北側は市街化が著しく、福岡市南区と一体化した様相であるが、南側は都市計画の規制によって水田・畑が広がる田園風景を残す。特に山田地区以南は狭い谷が延び、南端近くに南畑ダムが昭和40年度に竣工し、またその上流に県下最大規模の五ケ山ダムが平成29年に竣工した。

２　歴史的環境

市域の東側で南北方向に延びる那珂川・御笠川台地の北端付近に、弥生時代「奴国」の中心地と目される春日市須玖地区の遺跡群が位置する。この台地が「弥生銀座」とも呼ばれる地域である。「奴国」の有力構成員と目される墓地は那珂川市内にもある。また、市域の東西の台地や山麓には無数の古墳・古墳群が位置していて、豊かな歴史を物語っている。

市内では、山陽新幹線の博多延伸に伴って初めての本格的な発掘調査が昭和46年度に着手され、その後の急激な都市化に伴い考古資料が蓄積されてきた。加えて、県営五ケ山ダムの建設に伴い、通常では埋蔵文化財発掘が行われないであろう山間地でも発掘調査が行われて色を添えた。

以下で市内を中心に、周辺も含めた歴史的環境を概観する。

旧石器・縄文時代　山陽新幹線博多車両所建設に伴って発掘調査がなされた春日市門田遺跡で重要、かつまとまった遺物が出土している。黒曜石製のナイフ形石器から細石刃・細石核への変遷が

層位的に確認されるとともに、遺構に伴わないものの全体を窺える縄文草創期の爪形文土器も出土している。１点は口径22㎝、器高19㎝の深鉢形に復元され、わずかに外反する口縁部と球形の底部をもつ。外面では底部に至るまで全面に爪形文が施文されている。もう１点はやはり球形の浅鉢形に復元されるが、口縁部を欠く。施文は同様である。旧石器時代の遺物は他にも二次的な状態で出土するが、単発的なものがほとんどである。この門田遺跡とその周辺部は旧石器～縄文草創期の遺物量が突出している。那珂川市観音山古墳群平石Ⅲ群とした遺跡では、遺構を伴わないとはいえ細石刃・細石核・槍先形尖頭器など草創期に属すると思われる石器群や鍬形鏃・トロトロ石器などの早期の石器群（押型文土器も出土）などが一定量の出土を見ているが、これは門田遺跡から南へ１㎞余の距離を隔てるだけであり、関連するといってもよい。また、これも門田遺跡に卑近な春日市原遺跡では早期に属すると思われる石組炉が５基検出されている。上記の遺跡はいずれも同一丘陵上あるいはその西麓に位置する。一方、上記遺跡の南約16㎞、標高350～400ｍほどに位置する那珂川市五ヶ山地区では、明確な遺構を確認しなかったとはいえ，早期～前期、中期～後期の大きく二時期に分けられる土器・石器が一定量出土していて、狩猟場が想定されている。

その後、縄文後期に遺跡が拡大するようである。丘陵端の春日市柏田遺跡では竪穴式住居跡６軒などが、那珂川の自然堤防上の那珂川市山田西遺跡では過去数次にわたる調査で後期から晩期に至る30軒近い竪穴式住居跡などを確認している。そして、晩期の遺物は観音山古墳群ののる丘陵の北西山麓から山陽新幹線博多総合車両所およびその西側の低地まで広く出土するが、住居跡といった遺構はまだ少ない。

弥生時代　弥生時代中期後半の「奴国」王墓と目される春日市須玖岡本遺跡では、明治32年（1899）に甕棺から舶載鏡をはじめとする大量の副葬品が出土したが多くが散逸してしまった。しかし、その後の継続的な発掘で、この岡本地区は銅剣を副葬する甕棺の比率が非常に高いことが指摘されている。かつては副葬品をもたない数多くの甕棺墓の中に厚葬の甕棺墓が置かれるという北部九州社会の等質性の問題が指摘されたこともあったが、福岡市吉武高木遺跡周辺や佐賀県吉野ヶ里遺跡等の発掘調査により、墓域さらには墓壙や甕棺そのものの大きさにも階層性が現れていることが明らかとなってきた。須玖岡本遺跡の甕棺墓の在り方にも同様の階層性が指摘されている。厚葬の甕棺墓といえば、先の門田遺跡では27基の甕棺墓の中で、23号甕棺（盗掘坑から青銅製鋤先）・24号甕棺（棺内に直径13～14㎝の青銅鏡の痕跡、棺外に鉄戈１）・27号甕棺（棺内に鉄剣２、棺外に鉄戈１）が近接して位置していた。また、市内安徳台遺跡では確認調査で発見した甕棺のうち、２号甕棺（貝輪43個以上、ガラス製勾玉３個、管玉334個、塞杆状製品２個、鉄戈１本、鉄剣１本）、５号甕棺（塞杆状製品２個）が、特に大きな墓壙の中に埋められた６基の甕棺の最下部で発見されている。須玖岡本地区の銅剣と門田・安徳台遺跡での鉄戈の間には当時としてはそれ自体に評価の差があったように指摘されるが、それは置いておいて、須玖岡本–門田–安徳台の各遺跡間の距離はそれぞれ2.5㎞・３㎞弱を隔てた直線的な位置にある。須玖岡本遺跡に王墓が造られた頃、奴国を構成する小地域の首長が門田・安徳台遺跡の厚葬墓の被葬者と見てよいであろう。

弥生時代が開始された頃の遺構・遺物は那珂川市や春日市でも散見されるが、福岡市板付遺跡や同那珂遺跡に見られるような初期の環濠集落は未発見である。春日市域では中期でも前半以降に遺跡が拡大するという。また、上記したように副葬品を伴う甕棺などの墳墓の比率も非常に高いことが指摘されている。中期中葉以降の春日市域ではガラス装飾品や多種多様な青銅器の生産が活発化し、関連する多くの遺構・遺物が出土、近年では今まで知られていなかった土製の鋳型も発見されている。こうして後期にかけて隆盛を極めた春日市域にあっても、「弥生終末期の遺跡は、それ以

前に比し、やや弱小化する。そして、古墳時代に入ると，墳墓も集落もさらに貧困となる（渡辺正気氏）」状況へと変わっていく。

古墳時代　先の安徳台遺跡に近接する那珂川右岸の丘陵の西端に安徳大塚古墳が造営される。礫床粘土槨を主体部とし、葺石・埴輪を具える墳長64m、周溝を含めた全長81mの前方後円墳とされる。那珂川左岸では安徳大塚古墳の北西２キロほどの丘陵先端で妙法寺前方後方墳が調査された。前方部端を画する周溝をもたない全長18mの小型の古墳で、割竹形木棺直葬の主体部から三角縁六神四獣鏡１面や玉類・鉄製農耕具などが出土した。また、安徳大塚古墳ののる丘陵の北端には一辺長18mの方墳エゲ古墳、その南では尾根線上に竪穴系の主体部をもつ方墳群や竪穴系横口式石室をもつ円墳群などからなるカクチガ浦古墳群が位置する。エゲ古墳は割竹形木棺を薄く粘土で包み込んだ主体部を有し、仿製四獣鏡や鉄製品（剣・工具）などを出土した。

前方後円墳は、那珂川市域では西側を南北方向に連なる油山山地東麓の丘陵先端部に位置し、東の春日市域では牛頸・那珂川丘陵とその北側の那珂川・御笠川台地（大野・春日原台地）の縁辺部に位置するといってよいようである。当地で最も豊富な内容をもつ前方後円墳は福岡市老司古墳で、油山山地東麓にあって、那珂川市・福岡市境からわずかに北に位置する。報告書によれば全長75～76m、後円部は直径42mの三段築成で高さ7.9m、前方部はその前端に不明瞭な部分があって「変則二段築成」と表現され幅は不明、高さは４mを測る。後円部頂に３基、前方部頂に１基が置かれた主体部はいずれも割石を小口積みにして板石で小口を閉塞する初期の横穴式石室であった。墓道を前方部に向けた中心主体の３号石室からは円孔が開けられた三角縁神獣鏡片をはじめとする舶載鏡４点、仿製鏡４点や甲冑を構成する一部（三尾鉄・肩鎧・籠手・草摺）、国内初現期の轡や鉄製農耕具・武器類、１号石室からは３号石室に次ぐ量の玉類、舶載方格規矩鏡１点や鉄製農耕具・武器類、２号石室からは仿製鏡１点、三角板革綴短甲１領、３号石室と同様の轡金具や鉄製品（剣・鏃）、４号石室からは42個の滑石製勾玉の他，鉄製品（武器・農耕具）が出土したが、鉄鏃は４基の中で最も少ない12点であった。

この老司古墳に先行する古墳がわずか200ｍほど北にある卯内尺古墳である。明治20年（1987）に粘土槨から所謂仿製三角縁三神三獣鏡や柳葉形銅鏃などが出土したが、古墳の詳細は不明である。

５世紀後半代には墳丘を削平された全長53mの貝徳寺古墳が知られ、周溝から家形・蓋形・人物などを含む多くの埴輪が出土していて注目される。そして、６世紀代には春日市日拝塚古墳が貝徳寺古墳の北東１㎞ほどの同一台地上に築かれる。周溝を含めた全長56mほどの前方後円墳で、巨石を用いた単室横穴式石室を主体部とし、金製垂飾付耳飾などを出土した。これら以外にも、先述した山地・丘陵の縁辺に中小の前方後円墳、中小の円墳・方墳が造られ、後期群集墳の時代には多くの円墳群が営まれた。特に牛頸・那珂川丘陵では西に観音山古墳群、東では牛頸窯跡群とそれに関連すると思われる古墳群が顕著である。

古　代　山陽新幹線博多総合車両所の建設およびその周辺での土地区画整理事業に伴う発掘調査によって、掘立柱建物跡や土坑を検出していて、随所で奈良・平安時代の土器が出土している。ただ、密集する該期の遺構群は未確認である。

春日市域では、奈良県山田寺系軒先瓦を焼造したウト口（うとぐち）窯跡が調査された。古墳時代から古代にかけての九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の北西端に位置するといってよいであろう。牛頸窯跡群では７世紀初頭前後から無文あるいは畿内と異なる独特な文様の軒丸瓦が焼造されていて、福岡市南部の遺跡などから出土するが、まとまったものではなく遺構の性格も不明である。北

部九州で初めての本格的な造寺のためと考えられる重圏縁複弁八葉蓮華文の軒丸瓦、瓦当と下顎部に重圏文を刻む軒平瓦そしてやはり複弁八葉蓮華文で飾る鬼板や鴟尾が、法量が最小化し、蓋に身受けのかえりとつまみが付く須恵器蓋杯のセットを伴ってウト口瓦窯跡から出土した。渡辺正気氏は『春日市史』の中でこの窯跡について、塔原廃寺を筑紫大宰帥蘇我日向が孝徳天皇の病気平癒を祈願して造立した般若寺とする小田富士雄説を引用しつつ、ウト口瓦窯跡の位置から考えて最初に造立を試みたのは春日市上白水付近で、金堂だけが建設されたあるいは未完成のままに、大宰府都城整備の過程で筑紫野市塔原廃寺の地へ変更、ここも塔の建設だけで中断して現在の般若寺跡に再度変更したと推論した。春日市上白水から那珂川町にかけてウト口瓦窯跡で造られた瓦が出土する理由として興味深い説である。

律令制下那珂郡の郡衙はまだ知られていないが、那津官家（なのつのみやけ）を構成する倉庫群あるいは後の評衙と思われる遺跡が福岡市那珂・比恵遺跡群中で調査されている。比恵遺跡では布掘掘形に３本の柱を建てた構造物で囲繞する倉庫群が顕著で、複数の区画が発見されている。那珂遺跡では三本柱の囲繞施設はないが、軒丸瓦が出土するという。福岡市西区有田遺跡でも比恵遺跡と同じような三本柱の囲繞施設が複数あって、内外で多くの倉庫が見つかっている。これらはいずれも６世紀後半から７世紀後半にかかる遺構群で、これらの倉庫群の廃絶と大宰府Ⅰ期の成立がほぼ同時期と目されている。

福岡県農政部農地計画課『福岡県福岡広域生活圏土地分類基本調査（福岡　津屋崎　神湊）』1984
福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第１～12集、1976～1979
福岡県教育委員会「五ケ山Ⅲ」（『福岡県文化財調査報告書』第258集、2017）
那珂川町教育委員会「山田西遺跡」・同Ⅱ・「山田西遺跡群Ⅲ」（『那珂川町文化財調査報告書』第28・36・59・66集、1991・1995・2002・2005）
那珂川町教育委員会「安徳台」・「安徳台遺跡群　付編」（『那珂川町文化財調査報告書』第52・67集、2000・2006）
那珂川町教育員貝「国史跡安徳大塚古墳」（『那珂川町の文化財』24，2016）
那珂川町教育委員会「エゲ古墳」（『那珂川町文化財調査報告書』第18集、1988）
那珂川町教育委員会「カクチガ浦古墳群」（『那珂川町文化財調査報告書』第９集、1983）
「カクチガ浦遺跡群」・同Ⅱ～Ⅳ（『那珂川町文化財調査報告書』第23・29・34・64集、1990・1992・1994・2005）
福岡市教育委員会「老司古墳」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第209集、1989）
那珂川町教育委員会「貝徳寺古墳」（『那珂川町文化財調査報告書』第16集、1987）
那珂川町教育委員会「観音山古墳群」・同Ⅱ～Ⅶ（『那珂川町文化財調査報告書』第８・14・17・30・50・63・74集、1982・1986・1988・1992・2000・2003・2009）
福岡県教育委員会「観音山古墳群平石Ⅲ群」（『九州新幹線関係埋蔵文化座調査報告』第15集、2010）
米倉秀紀「那津官家？–博多湾岸における三本柱柵と大型総柱建物群–」（『福岡市博物館研究紀要』第３号、1993）
大野城市教育委員会「牛頸窯跡群–総括報告書１–」（『大野城市文化財調査報告書』第77集、2008）
春日市域の遺跡については渡辺正気他『春日市史』上巻、1995によるところが大きい。

第4図　宮ノ前遺跡遺構配置図（1/200）

Ⅲ　調査の内容

平成27年度の調査に着手するときには４区とした地区にはまだ住宅が建ち、５区としたところは大部分で作物が作られていたため、対象地東よりの１区から表土掘削を開始した。１区北は市道、東は里道と未買収地であったため、１区の中で排土処理を行い、その結果、東西に２分割して調査を行った。かつ、西端付近には南に隣接する住宅への自動車進入路を確保するために部分的に未発掘で終わった個所がある。その後、２区・３区と進めていったが、２区にも住宅正面玄関や駐車場へ通じる道があって、その部分は調査対象から除外した。また、３区西端でも北側の住宅への進入路があり、その東端で調査を止めた。２・３区間は市道。

翌28年度は担当者が交替し、３区西隣りを４区として調査を再開、３区西端で検出した307号溝の続きを確認するために両区間の住宅進入路を撤去、付け替えた。４区終了後に対象地東端を５区として調査に着手したが、ここは道路建設予定地の南北に畑が、東には市道・水路がある上、西側の１区とした部分はすでに仮舗装までの工事が終了していたなどの条件から狭い範囲で複数回の排土移動を余儀なくされた。

１　１区の調査

最も広く調査を行った地区で、調査面積は約530㎡である。なお、東端近くは立木を抜根したらしく広い範囲で下位の黄色粗砂が現れていて、周辺で検出した遺構もほとんどが近代以降のものであったこともありその部分は掘り下げていない。

また、西端部の狭い調査区を１W（West）区としたが、ここは若干の柱穴、そしてその西端で略南北方向の幅0.7m以上、深さ0.4mまでを確認した溝状遺構があるが、詳細は図示していない。この溝状遺構の堆積はレンズ状で、中位に灰黄褐色土、下位に混ざりの無い灰褐色土が堆積していた。位置から見て２区202号溝に連続する可能性が高い。遺構名としては土坑・溝としたが、撹乱とすべきものも含んでいて峻別はできていない。

１）　土　坑

１号土坑（図版３、第５図）　１区南西隅付近で検出した一辺長0.8mほどの正方形に近い平面をもち、深さは0.48m、床面が一辺長0.6mほどの隅丸方形に近い土坑で、四壁および床には灰黄褐色を呈し、粗砂を多く含む漆喰を貼っている。四周での厚さは約２㎝強であった。床面付近に礫を交えて板状の漆喰が転落していて、本来はさらに高さを有していたことがわかる。積み上がった漆喰間や床面付近にはヘドロ状の灰黒色粘土が見られた。

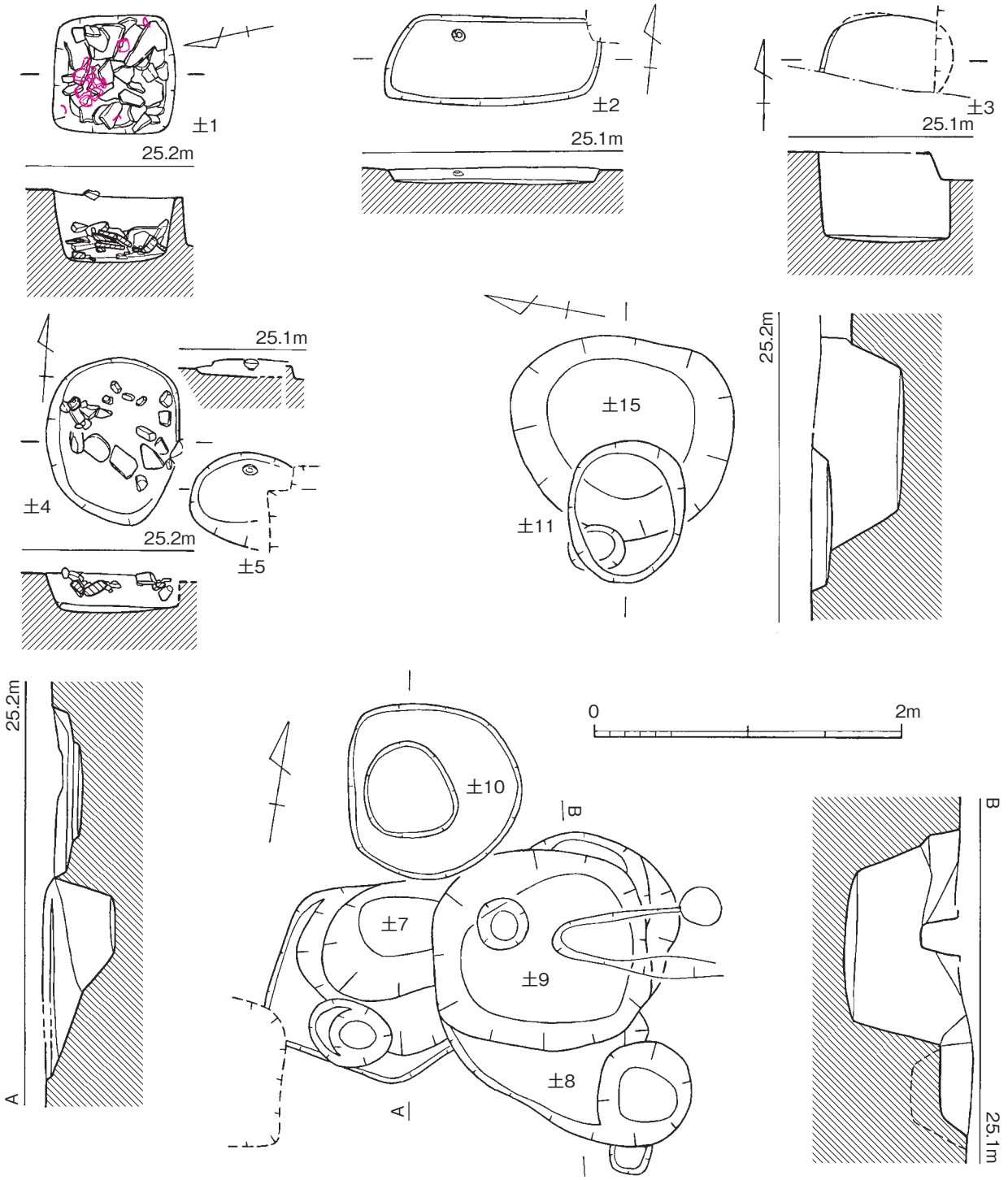
出土遺物

土器等（図版53、第６図）　いずれも小片で、２・３に「床面」、６・７には「床付近」の注記がある。１は最上層出土の土師質七輪の口縁部片で、口縁部は小さく内傾して端部に水平な面をもち、その直下は2.4㎝ほどの厚い器壁となる。ここは口縁部内側に粘土を貼付て肥厚させるようだが、厚い部分は長さが不揃いで最大で4.5㎝を測る。欠損もあろうが下端は破面のようになって、内面には１㎝以上の段が付いている。内面は口縁部付近を除いて全体に、外面も残存部下端付

近が赤く変色している。なお、胎土は１㎜前後の小さな砂粒を多く含む通常の土師質である。

２は陶器小片。破面は灰黄褐色となるが、外面は灰茶褐色、内面は茶褐色の濃淡で同心円状に刷毛目文様を施す。畳付は露胎。体部外面下端には篦削り、内面の残存部上端付近には繊細なカキ目状の工具痕が残る。また、高台の一部が剥がれて欠損し、対応する内面には目跡が見える。３は残存部全体に白濁した釉が掛かる焼成不良の染付か。４は削出高台とその直上の刳り込みが非常にシャープに整形される小型椀で、刳り込み以上の外面と内面に灰味帯びた透明釉を掛け、貫入が目立つ。陶器であろう。５は体部が直立する染付椀。外面は三段に、内面では口縁部下に幅１㎝ほどの帯状にくすんだ灰青色となる装飾を施す。

６は丸瓦片で、内面に布目痕を残し、外面は火熱を受けて赤変し、器表が弾けて荒れている。光



第５図　1区土坑実測図1（1～5・7～11・15号土坑、1/40）

沢は見えない。

７・８は須恵器。７は低平な高台をもつ杯身。高台内に篦切り痕が見える。８は壺片で、体部外面は全体にやや雑な篦削りで、底部外面は丁寧な篦削りで仕上げる。胎土は灰味強い小豆色となる。

２号土坑（図版４、第５図）　１号土坑の東側に近接する略長方形土坑である。灰黄色シミ状の埋土で、かつ浅いために形状に不安がある。幅0.45～0.6m、長さが最大で1.4mほどの平面規模で、西小口は形状が乱れる。深さは0.1mほどに過ぎず、床面はほぼ水平となる。

ほぼ東西方向に配置されていて、方位を意識したもののようである。出土した陶器が副葬品であるならば、頭位を西方浄土に向けた墓地を想定できよう。

出土遺物

土器等（図版53、第６図）　口縁部の一部を打ち欠いたような陶器皿、灯明皿であろうか。露胎部は小豆色を呈し、基本的に口縁部を除く内面に掛けた釉は茶黒色といった発色となる。体部外面は口縁部下を除いて丁寧な回転篦削りで、底部外面も回転篦削りで仕上げている。

３号土坑（図版４、第５図）　２号土坑の東隣にあって、調査区外へ続き、また一部を川原石を詰めた布掘基礎（溝3）に切られる。平面は長軸0.9m、短軸0.5m以上の楕円形に近く深さは0.6mほどで、壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。

４号土坑（図版４、第５図）　２号土坑の北西に近接する不整楕円形土坑。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.25mの規模で、検出時は東に張出しがあるように見えたが、発掘後は不明瞭となった。

埋土は上層に灰褐色土、下層に黄褐色砂ブロック混じりの灰黒色土が堆積、無秩序な状態で現れた礫などは床から浮いてほぼ上層に位置する。

出土遺物

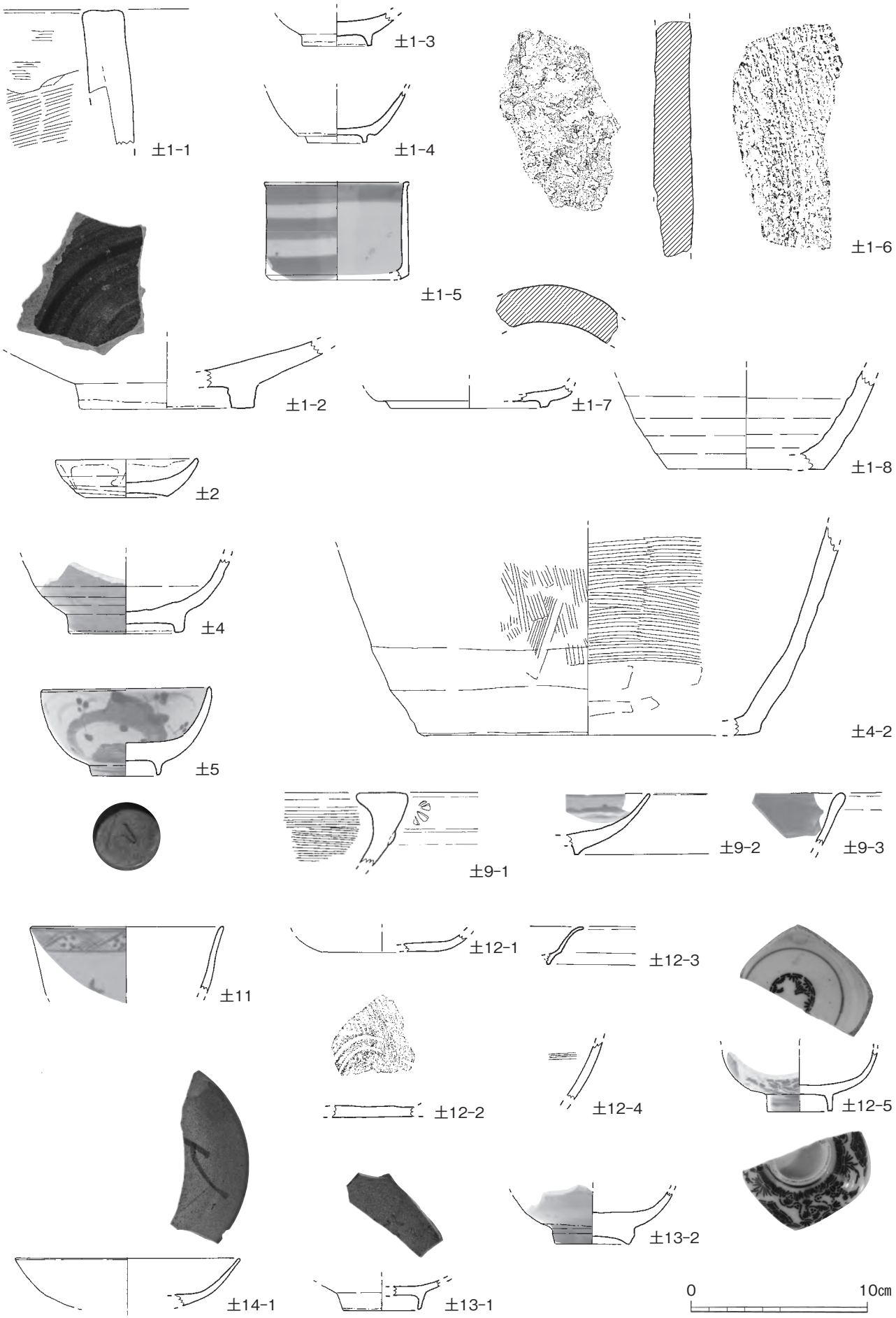
土器等（図版53、第６図）　１は胎土が灰色～灰黒色となる陶器壺であろう。体部外面下位に篦削りの痕跡が見え、外面には茶黒色～茶褐色に発色する鉄釉を掛けている。内面は丁寧に横撫でで整形され、ここも黒色となって器肉とは明らかに異なる発色となるが、施釉したような光沢もないことから露胎部の発色のようである。畳付の釉を掻き取って露胎とするが、若干の削り残しがある。高台の1/2強が残存。２は瓦質鉢。破面の大部分で芯が灰黒色、内外とも表面に近い部分が灰白色のサンドイッチ状になる。内面は横方向の連続的な刷毛目で比較的平滑化するが、外面は縦位の刷毛目を多用し、特に刷毛目のあまり及ばない下位で器表が乱れる。1/4弱が残存する。

５号土坑（図版４、第５図）　４号土坑の東に隣接し、６号土坑とした解体前の家屋の排水用溜枡に一部を切られ、全体は不明である。残存状況から長軸0.6m以上、短軸0.6mほどの扁円形プランをもち、深さは0.1m強を測るに過ぎない。なお、南辺は上手く発掘できなかった。

染付椀の完形品が出土した。２号土坑との位置関係・主軸方位から見てこれも小型の墓地の可能性が考えられる。

出土遺物

土器等（第６図）　口縁部の一部を欠くがほぼ完存する、肉厚で重量感がある染付椀。全体に灰黄色がかっていて、雪輪文も青味が乏しい。総釉であるが、畳付では部分的に剥がれている。高台内に「八」のような文字がある。



第６図　1区出土遺物実測図1（1～14号土坑、1/3）

７号土坑（図版４、第５図）　溜枡（６号土坑）の北東に位置し、８～10号土坑にも切られた南西–北東に主軸を置く土坑。９号土坑には床面も破壊されている。長軸約1.5m以上、短軸1.3mほどで、西から南にかけて方形に近い浅い落ち込みが付設されたように取り付くが、この部分の深さは0.1mに満たない浅いもので不安がある。また、西小口から南にかけては二段となり、深さは上段が0.2mほど、下段も0.2mほどとなる。９号土坑の北から東の壁面に現れたラインが７号土坑のものである可能性があり、その場合は全長2.8mほどの規模となる。ただ、このラインは９号土坑本来のものであることも考えられ、断定しかねる。出土遺物はない。

８号土坑（図版４、第５図）　７号土坑の東に接してその一部を切り、９号土坑の南側が張り出すような形で一部を検出した。深さは0.2mほどで、南東隅の直径0.6m、深さ0.4mほどの柱穴は一連のものか確認できていない。これも出土遺物はない。

９号土坑（図版４、第５図）　７・８号土坑を切るような形で検出した。北側から東側にかけてのプランが乱れていて、７号土坑の東端の可能性があるとしたものである。発掘後の規模は1.6×1.3mの不整隅丸方形というもので、深さは0.7mほどである。東側の長楕円形土坑および西よりの柱穴は明らかにこの土坑を切っている。

出土遺物

土器等（図版53、第６図）　１は瓦質の火鉢であろう。口縁部を内側へ肥厚させて平坦面を作る。口縁部外面下位に甘い幅広の突帯を付し、その上方にスタンプが見えるが、全体に器表が荒れている小片。器壁の厚いところは芯が暗灰色、内外の表層が黄褐色のサンドイッチ状になり、内外の器表は暗灰色となる。２は染付皿で、見込外周の二重圏縁上に同じ文様を連続して描くようである。造作、発色ともに良好。小片だが畳付のみが露胎である。３は口縁部をわずかに外彎・肥厚させ、釉がオリーブ色に発色する龍泉窯系青磁椀片で、内面下位にスタンプと思われる施文があるが図柄はよくわからない。

10号土坑（図版４、第５図）　７・９号土坑の北側に隣接し、両土坑とのわずかな重複から10号土坑が後出すると考えている。

平面形は東半が円形、西半が方形に近く1.1×1.1mの規模をもち、中央付近に径0.6mほどの扁円形の数㎝の浅い落ち込みを認めたが、確信を持てないものである。検出面から最深部までの深さは0.2mに満たない。新しいとの印象を受ける瓦片が出土。

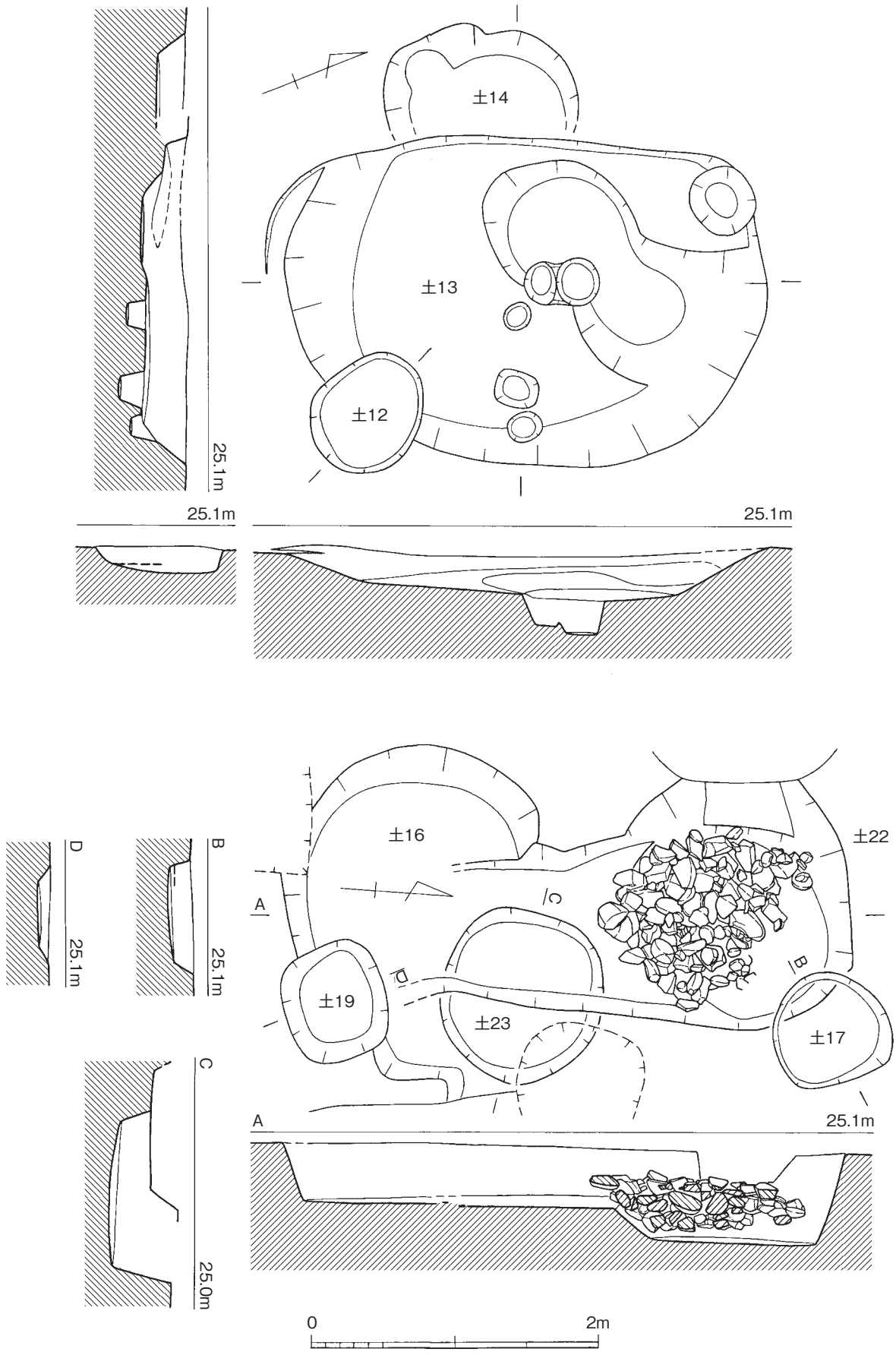
11号土坑（図版４、第５図）　10号土坑の東に近接する小型扁円形の土坑。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.1mほどの規模である。半分強が15号土坑を覆う。

出土遺物

土器等（第６図）　口縁部外面に四方襷文を描き、その下位にも施文が見えるがその意味は不明。発色ははくすんでいる。内面は無文。体部は直線的に高く立ち上がる。

12号土坑（図版５、第７図）　11号土坑の北東、大型の13号土坑の肩に位置する小型扁円形の土坑。長軸0.9m、短軸0.75m、深さ0.1mほどの規模である。埋土に若干の礫が入っていた。

出土遺物



第７図　1区土坑実測図2（12～14・16・17・19・22・23号土坑、1/40）

土器等（第６図）　１は土師器皿片で、底部内面の外周に水挽き痕が連続する。底部外面に回転糸切り痕を残し、胎土精良、灰黄褐色となる。２は瓦質擂鉢の底部小片。内面に櫛描の沈線が残るが、全体に使用による摩滅が認められる。

３は透けるような薄手純白の白磁。小型の杯形で、畳付だけ釉を掻き取って露胎とするほかは高台内まで施釉される。４は輸入白磁片で、釉は黄味を帯び、内面に４条からなる櫛描文が残る。５は染付小型椀。見込外周と高台に施した圏線の一部は淡い青色だが、外面の主文様・見込内の円文は発色が鮮やかで、線がすべて不連続であることから所謂印判手によるものであろう。

13号土坑（図版５、第７図）　12号土坑の北から西へかけて広がる隅丸長方形に近い大型の不整形土坑である。長軸を略南北にとり、その規模は長軸3.3m、短軸2.3m、深さは北よりの凹みで0.3mほど、南辺付近では0.2mに過ぎない。南北両短辺の立ち上がりの勾配は緩く、東長側辺のそれはやや急となり、垂直に近くなる西長側辺は14号土坑と重複するために掘り過ぎたものであろう。概ね灰褐色土が堆積していて、炭・焼土といった顕著なものは見えない。柱穴状のものは切り合い関係にあったと思われるが先後を把握できておらず、北よりのやや大きな深みも別の遺構と重複していた可能性がある。

出土遺物

土器等（図版53、第６図）　１は薄手の染付底部片。見込の二重圏線内に施文があるが、釉が白濁し、そのためか文様もよく見えない。素地の焼成は良いように見える。畳付だけが露胎となるが、ここは丸味をもっていて掻き取ったようには見えない。２は青磁椀底部で、図示部はほぼ完周する。体部外面は滑らかに彎曲して立ち上がるが、内面は弱い稜線をもっている。高台から底部外面にかけては露胎で、明るい灰赤色に発色、高台の３個所に目の剥離痕がある。ただ、内面に目跡は見えない。胎土は灰白色精緻で、釉は不透明で青味を帯びる。貫入は見られない。国産か。

14号土坑（図版５、第７図）　13号土坑の西辺で重複し、本土坑が先行する。南西隅の床面の乱れは確認できなかった柱穴と重複していたのであろう。そのことを勘案すれば、辺長1.1～1.3mの隅丸方形に近い平面形を想定できる。深さは0.3mほどに過ぎない。地山の黄褐色砂のブロックを交える灰褐色土が堆積していた。

出土遺物

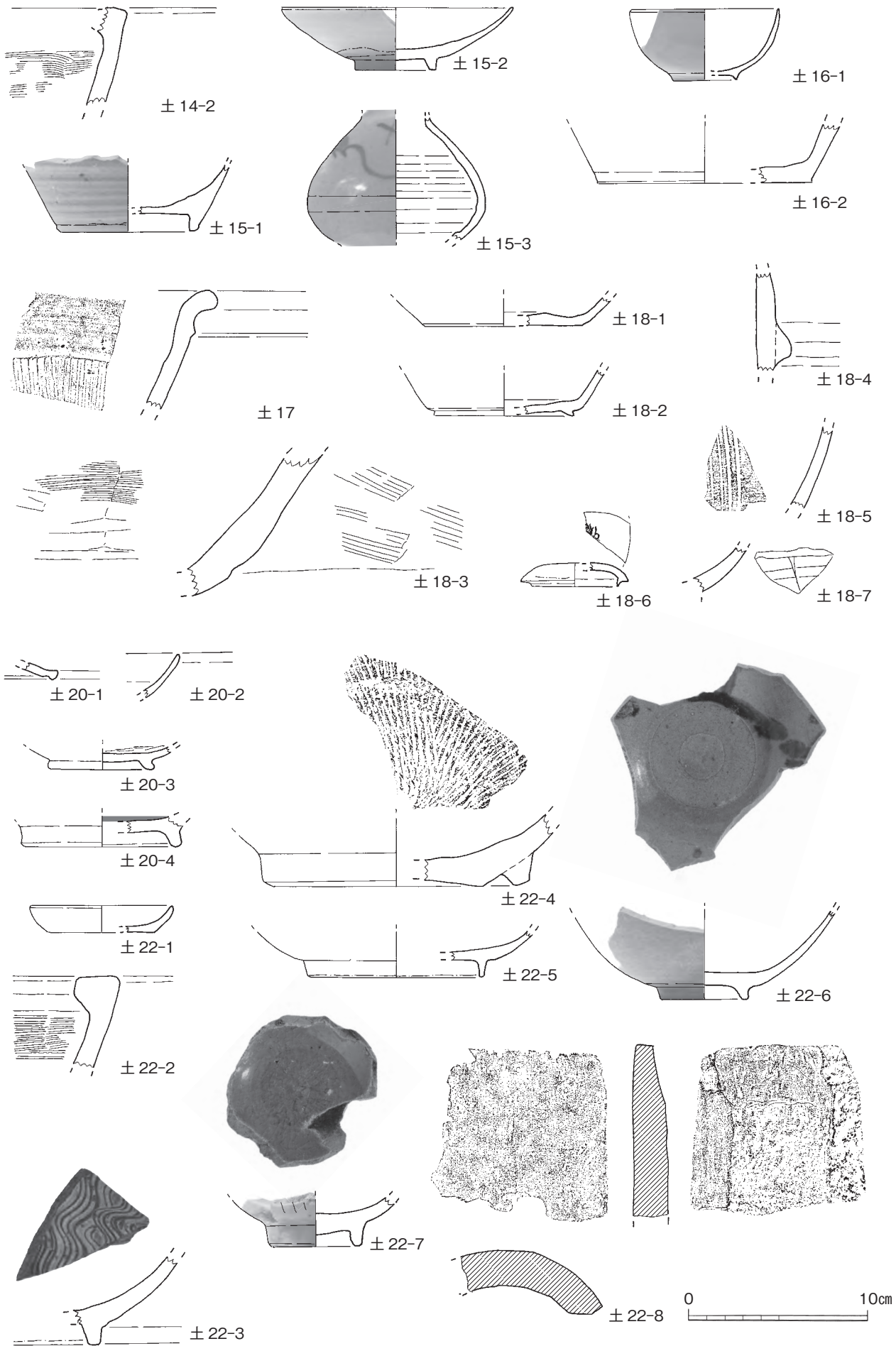
土器等（第６・８図）　１は残存部全体に灰白色釉が掛かり、外面下位の厚い部分では白色に近くなる陶器。内面に暗青灰色に発色する施文があるが、意味はわからない。一見、唐津焼の鉄絵のようであるが、あるいは胎土が磁器のようにも見えることから染付の不良品か。２は瓦質鉢片で、口縁部内側の突出部を欠くが、後述する22号土坑例によく似ている。胎土精良で明灰色、内外の器表はよく黒色化する。

15号土坑（図版４、第５図）　13号土坑の南に近く位置し、11号土坑に切られる偏円形の土坑。直径1.3～1.5mで、深さは0.5mほどである。東に位置する22号土坑との間に深さ0.2mほどの連結部をもつように発掘したが、この部分には確信がない。

図化を怠っているが、図版で見るように多くの礫が無秩序に出土した。

出土遺物

土器等（図版53、第８図）　１は陶器壺の類の底部片。胎土は灰黄色で、露胎部の内面も同じ



第８図　1区出土遺物実測図2（14～22号土坑、1/3）

色となる。外面は所謂刷毛目で、灰黄色系、褐色系に発色する釉が幅狭く帯状に交互する。なお、高台内は灰褐色系に発色、高台にも施釉されたようで全体に付着物がある。２は青味をもつ白磁皿で、高台が完周し全体が窺える。しっかりとした断面方形の高台をもち、口縁部にかけて緩く内彎しつつ浅く開く。体部下端から高台にかけては露胎、見込は幅広く蛇の目に釉を掻き取っている。なお、体部下端は篦削りで仕上げ、高台も削り出している。３は胴の張る徳利形の染付片。文様は淡いとはいえ鮮やかに発色する。内面は露胎。

16号土坑（図版５・６、第７図）　石を充填した矩形の布堀基礎の北東隅付近に位置し、23号土坑を切るほかは重複するすべての遺構に切られている。西半は円形に近い形状となるが、東半は他の土坑に切られて19号土坑の直ぐ東でほぼ直角に曲がるコーナーを確認しているので、東西は対称形とならないようである。南北長1.5m、東西長は2.4m、深さは0.5mほどの規模であった。

土層図を作成していないが、メモによれば、壁に沿って比較的厚く灰褐色粘質土が裏込めのようにあって、その内側に上方から茶褐色砂質土・灰褐色砂質土がほぼ水平に堆積、床面付近には地山崩落土と思われる灰褐色砂が凸字状に低く堆積していた。このことから、木桶が置かれていたことも考えられる。

出土遺物

土器等（第８図）　１は染付小椀小片。器壁が非常に薄く、畳付だけが露胎である。文様は一部が残存するだけで意味がわからないが、発色が鮮やかで新しいとの印象を受ける。２は陶器甕小片。内外面に茶褐色の釉が掛かる。胎土は灰色～灰黄色で、破面は層状になる。

17号土坑（図版５・６、第７図）　16号土坑の北に近接する22号土坑の北東隅で重複し、この土坑が後出する。直径0.8mほどのやや歪な円形を呈し、深さは0.1mほどに過ぎない

出土遺物

土器等（第８図）　陶器擂鉢小片。口縁部を強く外反させて、下位に断面三角突帯を１条巡らせる。残存部は全面に茶褐色となる釉が掛かり、胎土は灰赤色で層状になっている。

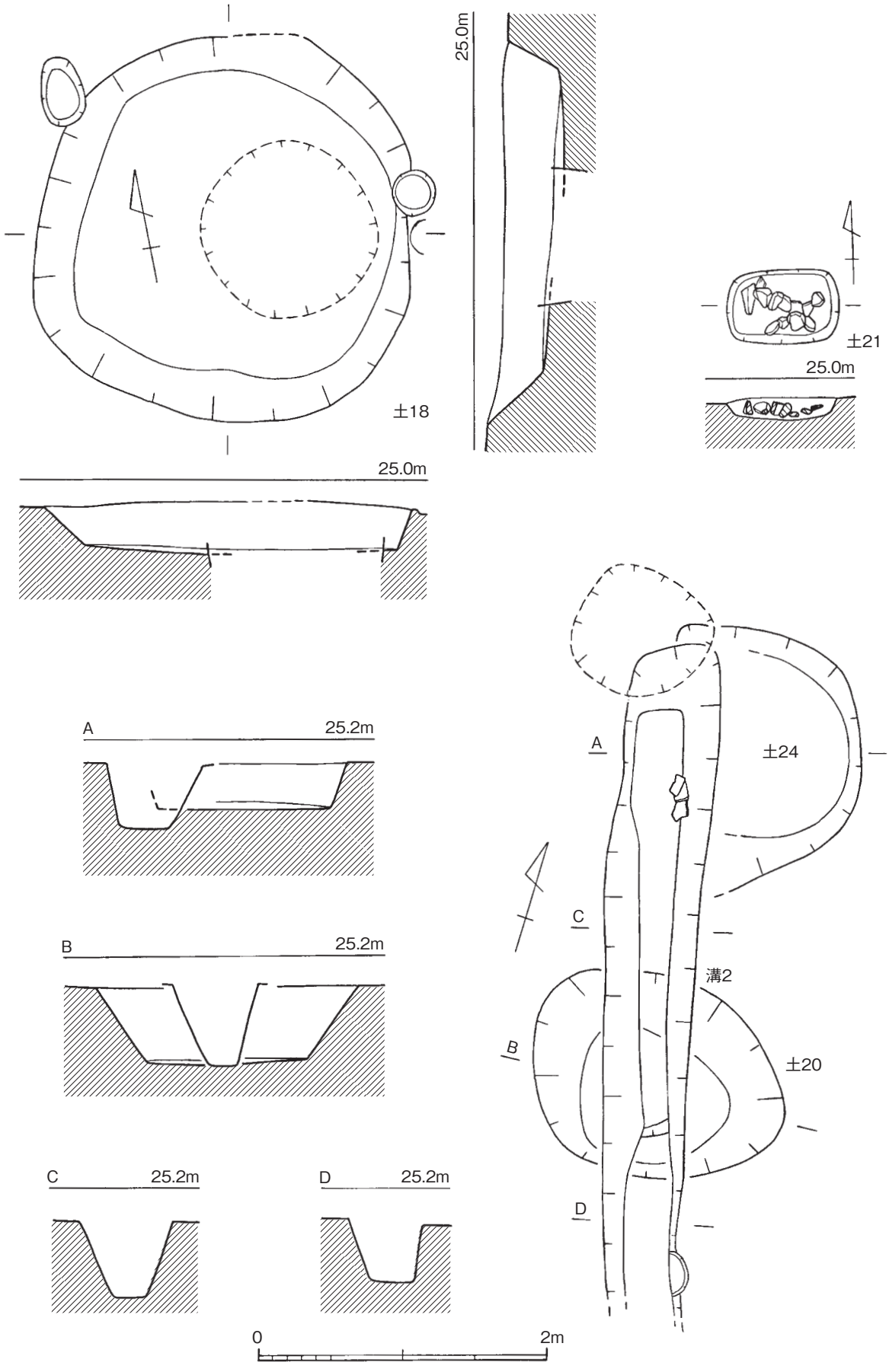
18号土坑（図版６、第９図）　13・14号土坑の西側に位置し、中央部東よりにコンクリートの井戸枠が入っていて、直径1.2mの範囲で破壊されていた。結果的には直径2.6～2.8m、深さ0.3mの円形土坑となった。壁の立ち上がりは緩やかで、床面はほぼ水平といってよい。

南北方向で土層を観察した。大部分は灰褐色土で、混入する黄褐色土の量で上下２層に分けられる。床面上には部分的に灰黒色土が薄く堆積していた。

一見、竪穴住居を思わせる遺構であるが、大きな破壊があるとはいえ柱穴や炉跡を確認しておらず、出土遺物もわずかなため、性格は不明といわざるを得ない。

出土遺物

土器等（第８図）　１は土師器皿片で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は粗い。２は低く潰れたよう高台をもつ須恵器杯身片。２次的な火熱のせいか、外面は赤変し、内面は暗灰褐色となる。３は瓦質の大型土器片で、内外面に刷毛目が残る。厚い器壁に比して砂粒は小さく、胎土良好といってよいであろう。胎土は灰色、内外の器表は灰黒色となる。４は突帯をもつ弥生土器小片。５は瓦質擂鉢の小片で、胎土は精良黒色、内外の器表は灰褐色となる。内面はよく使用されている。６は染付蓋の小片。釉は白濁し、文様は意味不明。最大径部付近から受部端まで露胎となる。



第９図　1区土坑実測図3（18・20・21・24号土坑・2号溝、1/40）

７は龍泉窯系青磁蓮弁文椀の小片。横位の沈線が見えるが、通常の幅広い蓮弁であろう。釉は灰緑色といった発色となる。

19号土坑（図版５・６、第７図）　16号土坑とその南東付近で重複し、これが新しい。0.7×0.8mの小規模な隅丸長方形を呈し、深さは0.25mほどである。図示していないが近世陶器片が出土。

20号土坑（図版６、第９図）　19号土坑の南東に近く位置し、中央部を２号溝が横切る。軸長1.4～1.8mの歪んだ円形を呈し、深さは0.5mほどである。

出土遺物

土器等（第８図）　いずれも「下層」の注記がある。１は須恵器杯蓋口縁部の小片で端部の突出が小さい。２・３は土師器。２は内彎する口縁部小片で、皿形になろうか。口端部外面を強く横撫でして面を付す。胎土は非常に精良、黄白色～灰白色で部分的に赤変する。調整は丁寧な横撫で痕が見える。３は灰白色となる高台付椀で、貼付高台の半分が欠損する。器表が荒れているが、内面は篦磨きで丁寧に仕上げるようである。胎土はごく精良。４は内面を黒色化する。貼付けた高台が灰黄褐色となる小片。

21号土坑（図版７、第９図）　20号土坑の南東に近く位置し、これは0.6×0.8mの整った隅丸長方形となる。深さは0.15mほどに過ぎない。

床面付近から礫が検出されたが、配列に規則性は見えない。出土遺物はない。

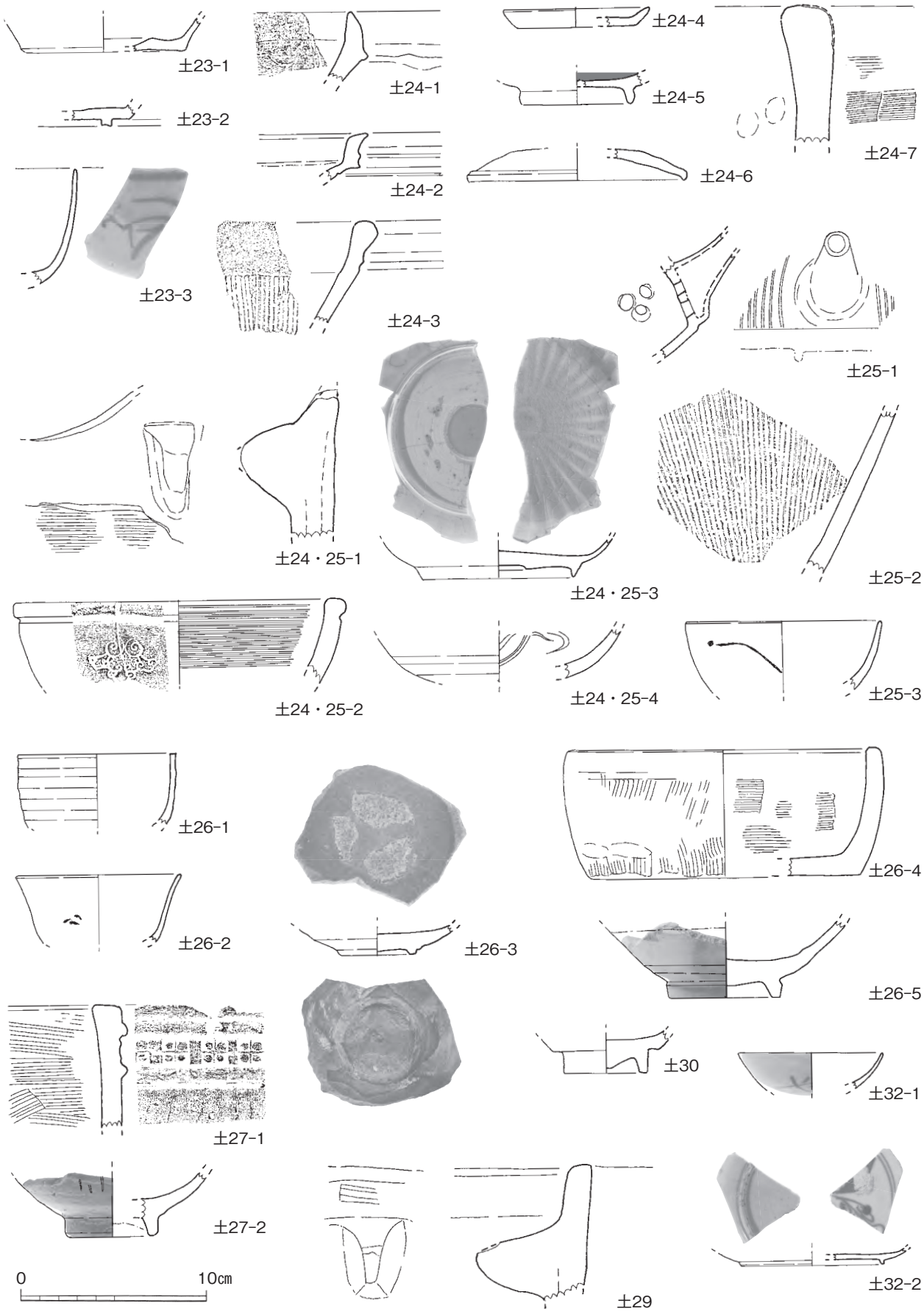
22号土坑（図版５～７、第７図）　15～17号土坑の間にあって、17号土坑に切られ、15・16・23号土坑を切ると判断している。北端に礫を詰め込んだような直径1.6mほどの円形土坑があり、これが西側の15号土坑と段をもって連接したように発掘したが、本来的な形状かどうかは確信がない。礫群は円形土坑中心から南側へややずれていて、土坑床面から0.1mほど浮いた位置にある。同床面は直径1.2mほどの比較的整った円形となる。深さは最大で0.6mほどで、床面は南側がわずかに高くなる。

土坑の南は床面から0.2mほど高くなって、幅１mほどの規模で溝状に延びていたが、その先で16・23号土坑と重複するなどして上手く検出できていない。

出土遺物

土器等（第８図）　１・３・５は「礫付近」、２・４・７・８は「礫中」、６は「土22」の注記がある。「礫付近」は礫を露出させる過程で出土したものであろう。

１は土師器皿小片で、胎土・作りともに良好で、底部外面に回転糸切り痕が残る。外面は黄褐色であるが、内面はほぼ全面に黒色物が付着する。墨入れに使われたものであろうか。２は瓦質の鉢で、14号土坑出土品に似ていて同一個体の可能性がある。３は陶器皿の小片。外面は暗灰茶褐色に発色、内面は櫛描波状文を施文、櫛が当たる部分は灰緑色、その他は白色となる。畳付と接する高台内側面下端付近が露胎であるほかは施釉される。胎土は緻密で灰赤色に近い。４は陶器擂鉢。高台と底部が接地し、高台には明瞭な接合痕が見えないことから削り出されたもののようである。赤褐色の緻密な胎土で、底部外面の露胎部もほぼ同じ色相である。体部内外面に施釉し、暗灰茶褐色に発色する。釉は畳付にも施され、その一部が欠損しているのは熔着剥離したものであるかも知れない。また、高台内にも垂れている。５は白磁というべきか。器壁が薄く、畳付付近を除いて全



第10図　1区出土遺物実測図3（23～32号土坑、1/3）

面に白濁した釉が掛かる。６は陶器で、口縁部を欠く。胎土は灰色精良で、丁寧に作られている。高台は小振りで、畳付が露胎となる。ただ、畳付は丸味をもっていて削り取ったようではない。見込は蛇の目釉剥ぎしている。釉は淡い灰緑色に発色、体部内面には飴釉を散らす。

７は見込の中心を外れて不明瞭なスタンプを付し、外面に細蓮弁の下端が残る龍泉窯系青磁。釉はくすんだ灰青色、高台内の底部外面と高台内側面上半だけが露胎で、黄褐色となる。外側に面取りした畳付にも釉が斑に掛かり、そのためか、高台の1/3が欠損する。貫入が著しい。

８は丸瓦片。凹面に布目が残るが、凸面は丁寧に篦磨きを行うようである。図上端の凹面を斜めに削り取っているが、そこも丁寧に磨くようである。残存する端面も同様である。胎土は精良、明黄褐色となる部位が多いが、図右側の残存する付近が黒変する。

23号土坑（図版６、第７図）　22号土坑が一段浅くなって南へ延びていく辺り、それに切られると認識している。直径1.2mほどの円形土坑で、深さは0.5mを測る。

出土遺物

土器等（第10図）　１は土師器皿で1/4の残片。底部・体部界にしっかりとした稜線をもち、体部が高く立ち上がる。底部内面に大きな盛り上がりがあり、外面に回転糸切り痕を残す。２は須恵器杯身小片で、低い高台を付す。図示していないが染付片も出土している。

24号土坑（図版７、第９図）　23号土坑の東に近接する。２号溝に切られ、北の25号土坑および東の27号土坑を切っている。これも埋土中に多くの礫が入っていた。

２号溝東で検出した部分は直径1.6mほどに復元できる円形プランとなるが、同溝北端に接する小型で浅い撹乱坑の床面で検出した部分は明確に直角に近く屈曲していて、西辺は２号溝に破壊されている。この土坑の深さは最大で0.4mほどで、２号溝に比べて0.1mほど浅い。

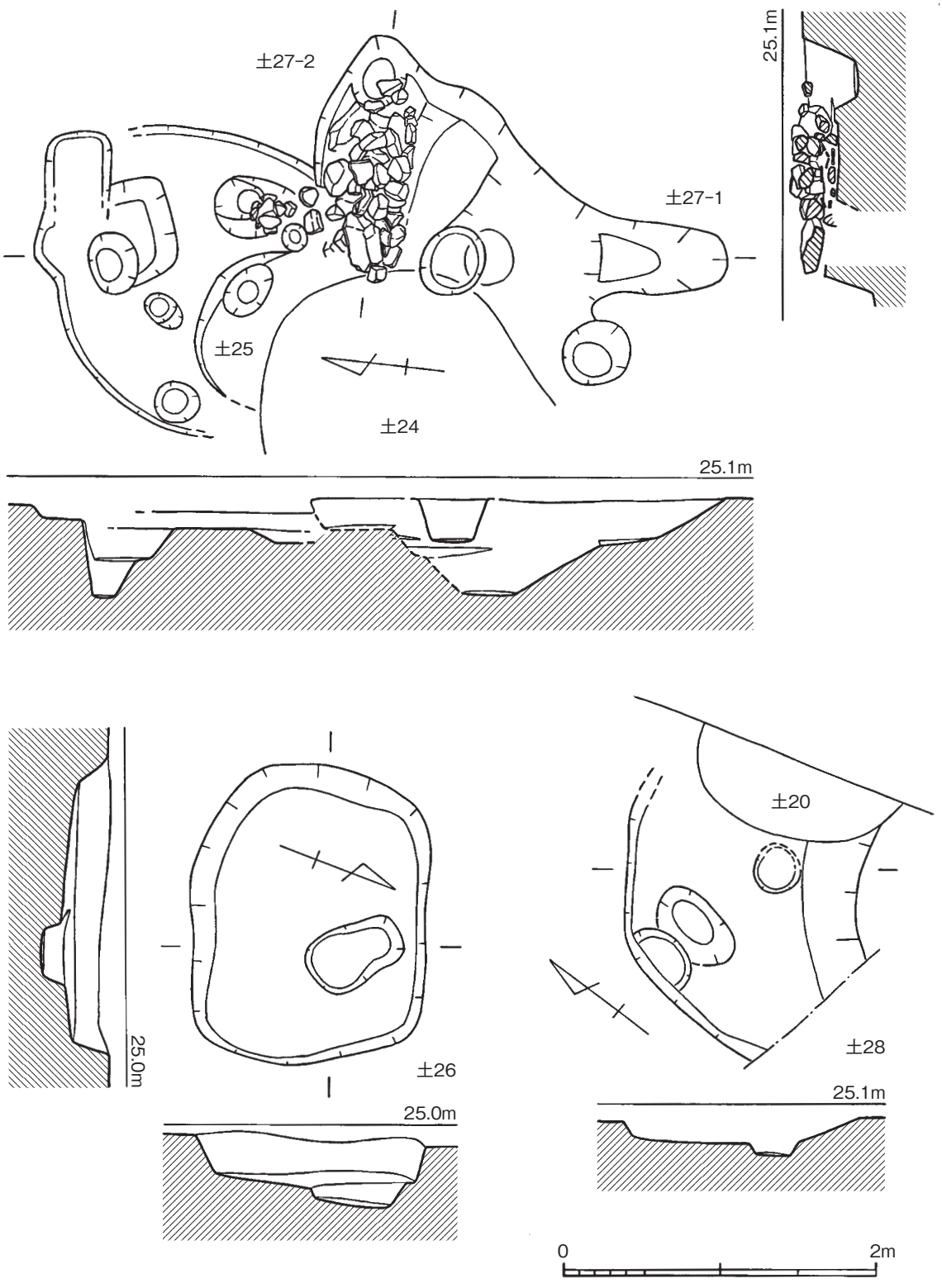
出土遺物

土器等（第10図）　１～３は「表層」、４～６は「上層」、７は「土24」の注記がある。１～３はそれぞれ異なる擂鉢である。１は口縁部が断面三角形となる備前焼で、突帯下位から口端部にかけての外面が茶褐色、それ以外の部分は灰黒色に近くなる。胎土は粗い。２は高取系で、口縁部内面の段から外面にかけて茶褐色となる釉を掛ける。灰黒色となる胎土は精良緻密で、沈線・突帯などの細部も丁寧に造作される。３は口縁部を丸く作り、外面に甘い突帯を付す唐津焼で、胎土は明灰赤色、内外面に灰茶褐色となる釉を掛ける。

４は土師器小皿で、胎土・作りともに良好。底部外面に回転糸切り痕を残す。５は土師質椀の摩耗した底部小片で、外面が黄白色、内面が灰褐色となることから内面を黒色化した黒色土器と思われる。胎土は精良といってよい。６は口縁部が小さく立ち上がる須恵器杯蓋で、残存部は全面横撫でで仕上げる。

７は大型瓦質土器の口縁部小片。口縁部付近はほとんどの器表が剥落するが、残存部を見ると調整は比較的丁寧になされる。胎土は暗灰色、砂粒の混入がほとんど見えない。器表はよく黒色化している。図示していないがほかにも近世陶器が出土している。

25号土坑（図版７、第11図）　24号土坑の北にあって、同土坑に切られるものと認識している。検出時は疎らに礫が散乱した状態であった。北端付近は他の小型の遺構と重複して判然としなかったが、東西長２ｍ余、南北長は1.4m以上の長円形に近い平面となるようである。内部は二段



第11図　1区土坑実測図4（25～29・31号土坑、1/40）

となっていて、上段の深さは0.15mほど、下段は0.1mほどといずれも浅いものである。柱穴は土坑との先後を確認できていない。

出土遺物

土器等（図版53、第10図）　1～4は「土24・25礫付近表層」出土であり、いずれに伴うものか確定できないものであるがここで紹介する。5は「上層」、6は「土25−2」とあって、これは床面東よりで確認した楕円形落ち込みから出土したものである。7は「土25」とある。

土24・25−1は土師質の七輪で、内面を肥厚させる作りは1号土坑例に似る。破面を見ると3重の粘土帯からなり、五徳となる突起の下位に内側粘土帯の破面があって、その下位の中央粘土帯の表面には刷毛目が施される。1号土坑のような変色が見えないので、これは使用後に欠損したもののようである。また、本例では鍋釜を掛けやすいように五徳の左側に刳り込みがなされている。同2は鉢形の瓦質土器である。口縁部をわずかに肥厚させて、下位に沈線を刻む。口縁部はほぼ水平となる面を作るが、ほかの部位に比べてここだけ表面が荒れている。未調整というべきか。胎土は灰白色～灰色となる精良なもので、外面は丁寧な篦磨き、内面はカキ目状の刷毛目が残るがともによく黒色化する。外面にスタンプを押すが意味はわからない。同3は内面に細い花弁をスタンプし、淡い青色透明釉を掛けた青磁で、底部外面を蛇の目凹形高台とし、高台内側面も釉を掻き取る。同4は体部内面に劃花文を刻む龍泉窯系青磁椀で、釉は灰味強い青灰色に発色する。

土25−1は土瓶形の陶器。注口の下位の最大径部にしっかりとした稜線を表出し、注口の両側には断面U字形となるしっかりとした縦位の沈線を刻む。外面では稜線の下位まで茶黒色といった色に発色する釉を掛け、内面では残存部下端付近に同色の釉が薄く掛かる。胎土および露胎部は灰赤色となる。2は唐津焼の擂鉢片であろう。胎土は灰赤色、内外面に暗灰色となる釉を薄く掛ける。3は染付椀小片。灰青色となる単純な文様が描かれる。

26号土坑（図版8、第11図）　25号土坑の東に近接し、北東部は1号溝の上に位置する。

東西長約2.0m、南北長1.5mほどの隅丸長方形プランを有し、深さは最大で0.3mほどである。検出面付近では拳大の礫が特に西側に集中していたが、埋土中には少なく、埋土にも炭や焼土といった特徴的なものはない。なお、中央付近床面の柱穴様の落ち込みは先後不明である。

出土遺物

土器等（第10図）　1～3は「表層」、4は「西半」、5は「東半」の出土。

1は白磁の小型椀で、口縁部は水平に切り取ったようになる。全面にわずかに青味帯びる半透明釉を掛ける。2は染付の小型椀で、文様がわずかに残る。3は底部が完周する唐津焼。低く形状が乱れる高台から浅く開く形態で、底部周辺を除いて灰黄褐色となる釉を掛ける。また、高台の直ぐ上、体部下端に幅狭い篦削りを施す。見込付近に大きな目跡が3個所、高台にも3個所の目跡が残る。胎土は精良で、灰黄色となり、露胎部では釉の際が赤色に、それ以外の部分は黄褐色となる。

4は瓦質の鉢で、底部の1/4弱が残存。底部は型押しで、垂直に近く立ち上がる体部を接合するために下端付近に指頭痕が集中する。外面は粗い縦刷毛、内面は細かな横刷毛で仕上げるが、器表が荒れている。胎土は暗灰色、器表は全体に灰黒色となる。使用の痕跡はわからない。5は底部が完周する陶器椀あるいは鉢。高台は高くしっかりとした形状を呈し、体部下端付近と高台内は篦削りのようである。外面残存部上端にわずかに灰白色の釉が見えるが、下位は薄く施釉して、露胎となる篦削り部とともに灰茶褐色～灰赤色に発色し、二次的被熱のためか高台の半分ほどが赤変する。内面は全体に丁寧な横撫でで仕上げるようである。体部に薄く施釉するようだが底部付近は露

胎で、その付近だけ擦っているようにも見えるが、確信はない。

27号土坑（図版７、第11図）　２号溝の東、20・24号土坑の間にある不整形土坑である。北端で礫が充填された小型土坑（27−２号土坑）と重複し、これとの先後関係は確認できていないが、礫の状態が整然としていることから小型土坑が後出するのであろう。24号土坑にも先行する。

24号土坑の床面でこの土坑のラインを検出していて、結果、南北長2.3mほど、東西長は最大部位が北に偏っていてその幅が1.6m強となる三角形に近い平面プランとなる。ただ、北辺および南端付近にテラスがあって、床面は直径0.3mほどの円形となる。深さは最大で0.6mを測る。

出土遺物

土器等（第10図）　1は遺構北端の礫群下から、2は遺構南端のテラス付近からの出土である。

１は口縁部付近が直立する瓦質火鉢で、胎土の芯は灰黄褐色、内外の器表は灰黒色となる。口縁部はほぼ水平な面をなし、その下位に断面かまぼこ形の突帯を２条付し、その間にスタンプを連続する。スタンプは「田」の各マスに円文を浮き出させたものである。内面は全体に横刷毛で、突帯以下の外面は篦磨きを施すようである。２は龍泉窯系青磁であろう。高台の1/3が残存するが、焼けて破面が黒変、高台に掛かった釉が白濁している。釉は灰青色に発色し、貫入が目立つ。また、体部下位に細沈線が１条見え、そのすぐ上に細線が数条あって細蓮弁を刻んだものであろう。なお、釉は畳付まですべてに掛かっている。内面は無文。ほかに土器等の小片が若干出土するが、明らかに新しいと思えるものはない。

28号土坑（図版６、第11図）　２号溝と礫の詰まった布堀基礎（３号溝）の間で検出したもので、２号溝の東に続かず、20号土坑に接続して終わる形となるが、両者との関係は判然としない。平面形状は幅1.0〜1.5mの弧状の溝状で、深さは最大で0.1mほどの浅いものである。南−東辺の傾斜は緩く、北−西辺のそれは急である。

出土遺物

石製品（図版55、第23図４）　ほぼ円形の安山岩だが、横断面は楔形となる。図正面および背面は全体に滑らかとなり、厚みのある部位に近い部分は特に砥石のような滑らかさである。また、中央やや右側に敲打したような浅い凹みが、これは片面にのみ見られる。反面、側縁は全周にわたって叩いたように荒れた肌となる。

29号土坑（図版８、第11図）　1号溝中程の東辺近くで検出した小型土坑で、溝埋土上に位置する。東西長0.9m、南北長0.65mほどの偏円形を呈し、内部に拳大の小礫が多く入っていた。1号溝上にあるために床面を確認できなかったが、礫群の下端を床面とすれば0.1mほどに過ぎない。

出土遺物

土器等（第10図）　土師質七輪の小片である。胎土は非常に精良で、外面は篦磨きのようである。ほかに近世陶器片や新しそうな瓦片などが出土。

30号土坑（第４図）　１号溝の西側、25・26号土坑の北に隣接する。これは図化を失念していて、短軸１m、長軸は１mまで確認するが、１号溝と重複する東側及び深さを確認できない。

出土遺物

土器等（第10図）　高台の2/3が残存する青磁椀。高台は高く、形状もしっかりしているが畳付

のほぼ全体に砂が付着して部分的に剥離する。高台内はへそ状に突出、内面中央にも螺旋状の整形痕が残る。釉は黄味帯びる灰赤色に発色、透明で内面では褐色の斑点が目立つ。朝鮮製か。図示していないがほかに玉縁白磁椀などもあって、ここも明らかに新しい遺物は見えない。

31号土坑（第11図）　１・２号溝の間には立木を抜根した東西３m、南北３m以上の大きさの撹乱坑がある。この土坑はその撹乱坑の北東部にあって半ばを破壊されていた。

残存幅１m、残存長0.5mほどの円形土坑で、深さは約0.4mである。出土遺物を図示していないが、明らかに新しい遺物はないようである。

32号土坑（図版１・２、第12図）　西半調査区の東端付近は南北両端を除いて広く厚さ10㎝ほどの堆積土が広がっていて、それを除去するといくつかの落ち込みに分かれた。その南側の遺構を32号土坑とした。なお、32・33号土坑の東端付近の南北方向の直線的な段は、排土処理のために２分割した調査区の境である。

32号土坑としたものは、幅1.5m内外で３mほどの長さで東西方向に伸びる溝状の遺構で、深さは最大で0.1mほどの浅いものである。この部分は遺構と呼ぶべきでないのかも知れない。この溝状遺構の西端は乱れていて、その部分に長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.2mほどの不整長円形といった形の小型土坑がある。溝状遺構との厳密な意味での関連性は確認できていない。

出土遺物

土器等（第10・13図）　１は染付の浅い小型椀で、文様は意味不明。発色は鮮やかで、全体に光沢をもつ。２は薄手の染付で、低く華奢な高台の畳付は露胎。

「土32・33」とした龍泉窯系青磁椀底部は、遺構検出時に出土したもので、帰属が明らかでない。底部の1/2ほどの残片で、体部に比して高台が低い。内面見込外周に片切り彫りの圏線を刻むほかは文様はない。釉は灰緑色に発色する透明なものである。また、高台畳付まで施釉、高台内に目土が残る。

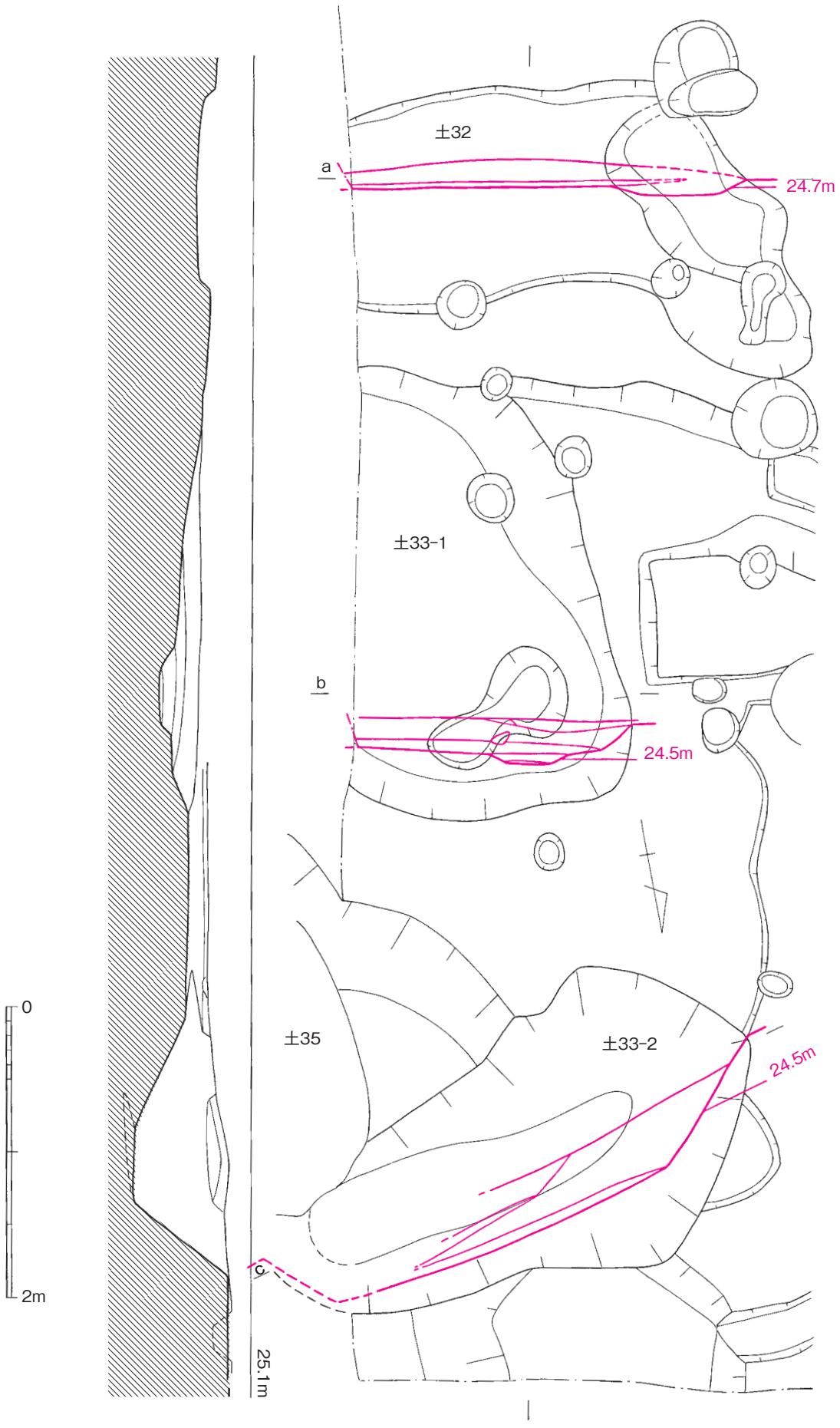
33号土坑（図版１・２・８、第12図）　32号土坑の北に位置し、当初は南北６m、東西３mほどの半円形に近く見えた包含層を除去すると、さらに南北で２基の土坑が現れた。南を33−１号、北を33−２号土坑として続ける。33−１号土坑は南北３m余、東西２m弱の規模の偏円形プランを呈し、深さは最大で0.1mほどである。北端でさらに深くなとはいえ、やはりその深さは0.1mほどに過ぎない。この深浅の両部分が本来的に一連の遺構であるか定かではない。

33−２号土坑は長軸3.7m、短軸は最大で２mほどの長円形土坑で、深さ0.7mほどと先の遺構に比べてしっかりとしている。

出土遺物

石製品（図版55、第23図３・５）　３は玄武岩製の太型蛤刃石斧残片で、刃部は鋭い。灰白色の斑点が随所に見られる。５は「上層」出土の砥石。灰黄色といった比較的目の細かい砂岩を用い、３面を使用、図上下は折損する。図右側面が未使用であるか、あるいは全体が剥落したものか断定しがたい。いずれの面も平滑化するが、手触りはザラザラする。

土器等（図版53、第13〜15図）　「土33−１下層１」は陶器の受皿付灯明皿で、灯明皿の口縁部端が２個所黒変し、黒変の範囲が広い付近の受皿口縁部を欠損する。受皿は口縁部の直ぐ下から底部外面までごく丁寧な篦削りで仕上げる。胎土も良好。灯明皿内外面・受皿内面のいずれも体部

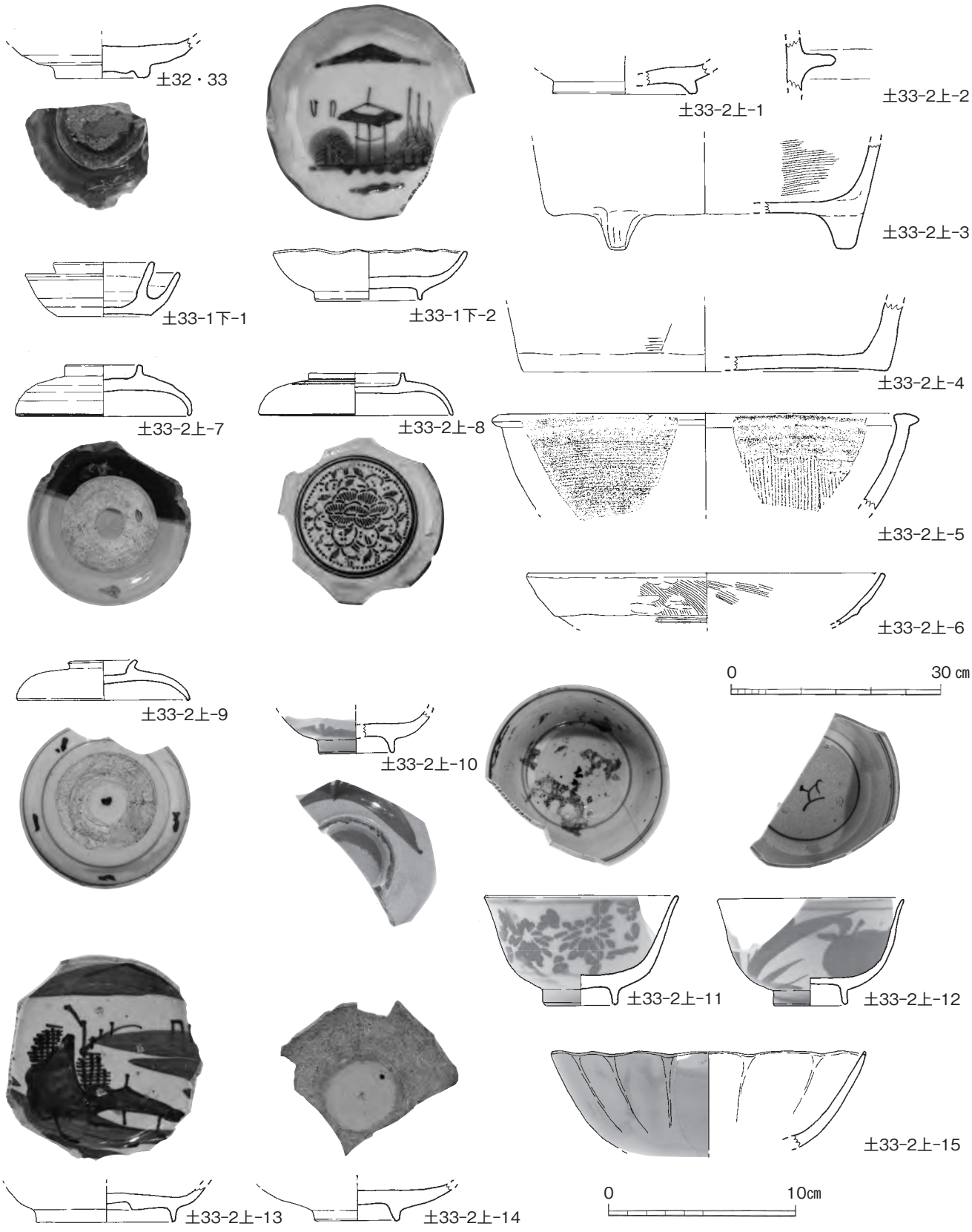


第12図　1区土坑実測図5（32・33号土坑、1/40）

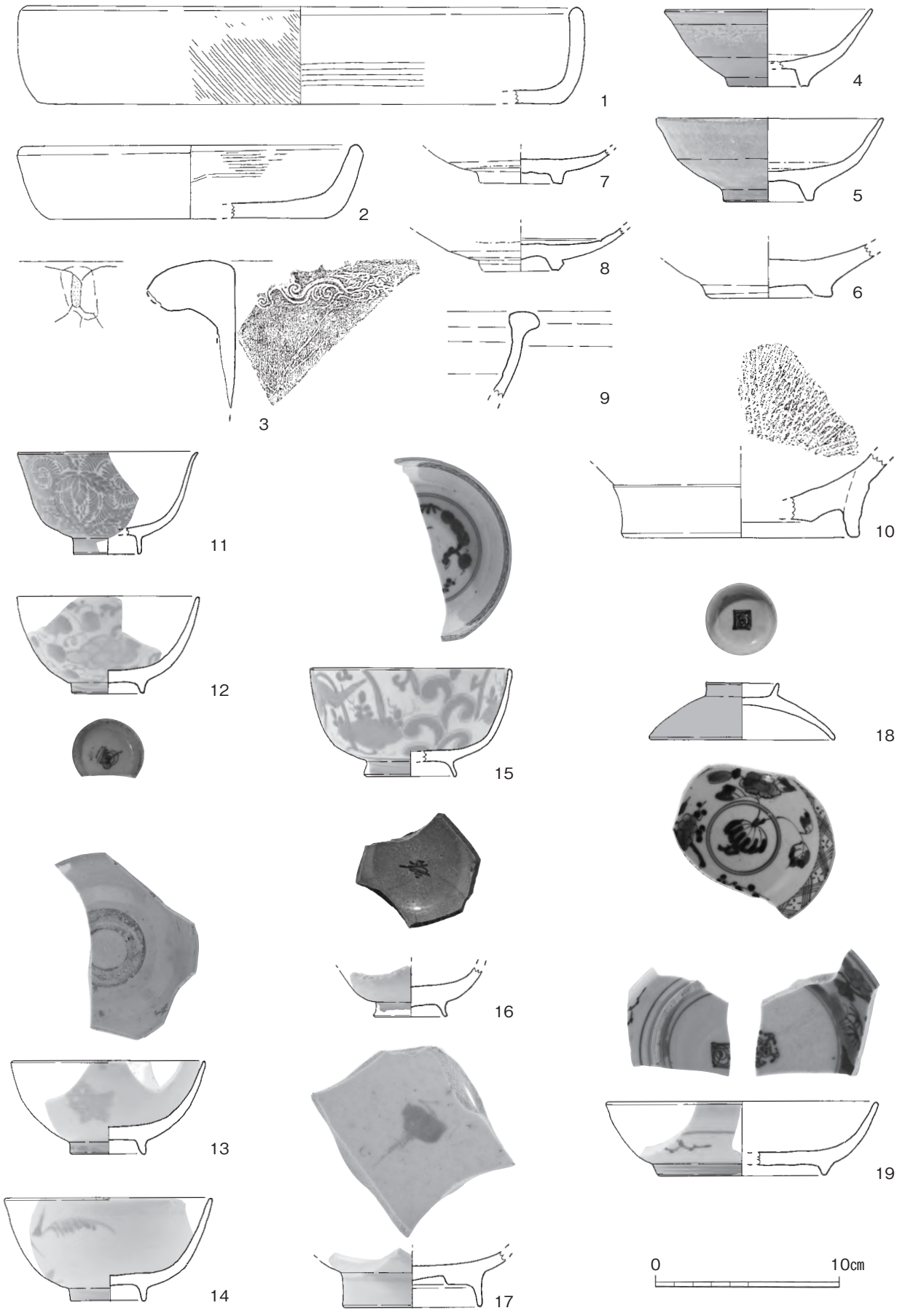
中位以下に灰緑色の釉を掛けるが、受皿の外面は露胎である。「土33−１下層２」は口縁部を輪花とする染付皿。釉は透明で、見込に楼閣風の建物や山の姿を灰青色で表し、口端部に口紅を付す。

以下は33−２号土坑出土品で、上層・下層に分けて図示した（以下は遺物番号だけを記す。）。

１はしっかりとした高台をもつ土師器椀の底部片で、高台付近の1/3が残存するが器表が荒れている。２は土師質の羽釜小片。胎土は灰褐色、内面は赤味帯びる灰黄褐色、外面は鍔の下位だけでなく、残存部全体が黒色となる。作りが丁寧。３は瓦質土器で、脚付火鉢であろうか。胎土は灰白



第13図　1区出土遺物実測図4（32・33号土坑、1/3・1/8）



第14図　1区出土遺物実測図5（土33-2号土坑下層、1/3）

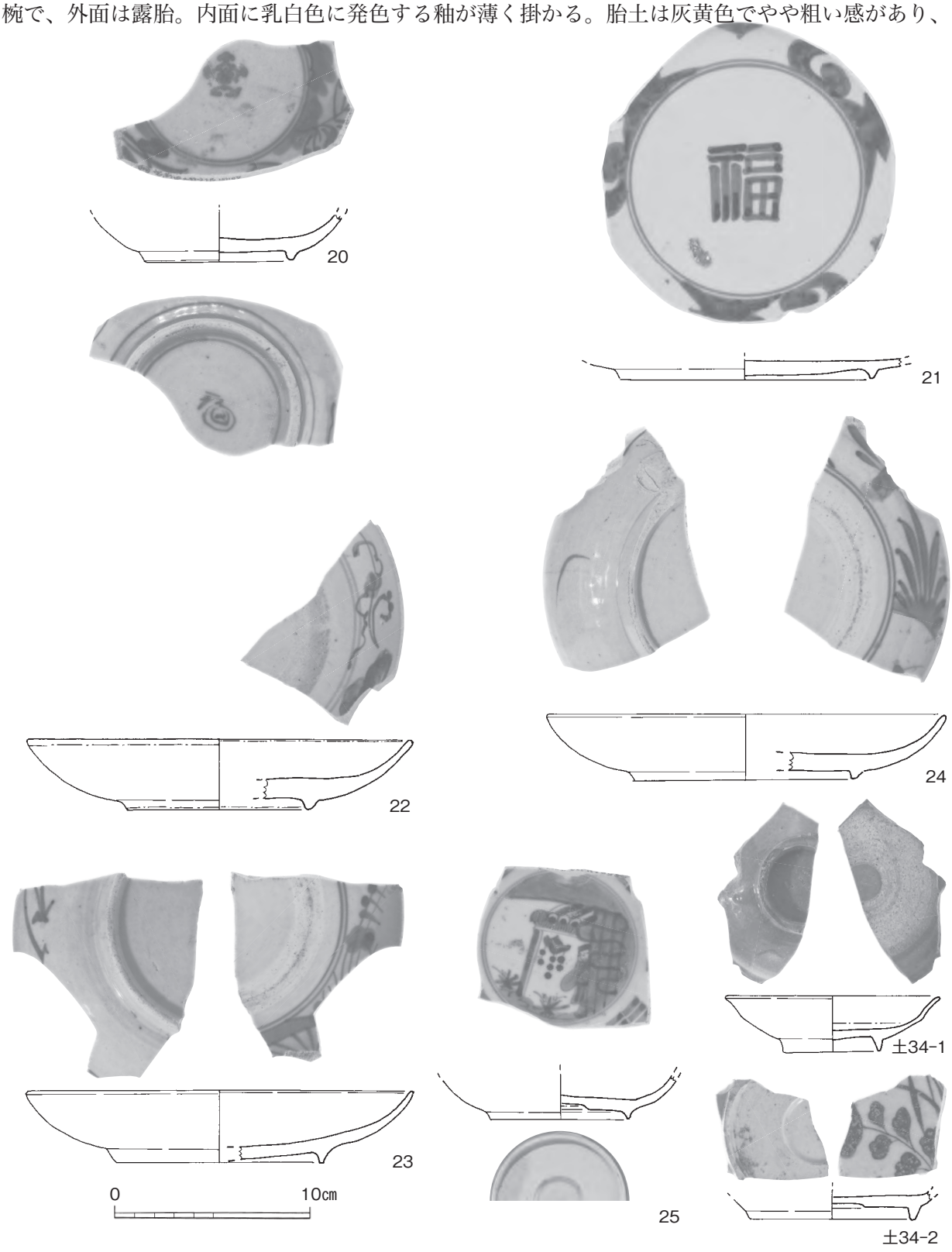
色精良で、とても丁寧に作られている。外面は刷毛目あるいは篦削りの後に篦磨きで仕上げ、内面は刷毛目で終わる。外面の一部が灰白色となっているが、内外面ともにおおむね黒色化する。４は瓦質土器の1/4ほどの底部片。粘土板の底部に体部を接合したようで、体部下端に１㎝ほどの幅で篦削り状の痕跡が見え、それ以上は刷毛目が一部に見えるがさらに撫でたようである。内面では薄くカキ目状の調整痕が見える。胎土は灰褐色でやや粗く、器表内外面は灰黒色～黒色化するとはいえ雑な感じの作りである。５は陶器擂鉢。胎土は灰黒色となり、全体に茶褐色に発色する釉を掛ける。ほぼ平坦となる口縁部上面内側に目跡があって、その内側数㎜は露胎。外面は釉の下に薄くカキ目が見え、内面は丁寧にスリ目を刻む。６は復元口径50㎝を測る大きな浅鉢形の瓦質土器。外面で屈曲し、全体に粗い刷毛目がよく見えるが、屈曲部の上付近に特に指押さえの痕跡が目立つ。内面は細かい刷毛目で仕上げる。胎土は灰白色で比較的良好といってよい。内外面ともに黒色化し、特に外面全体に煤の付着が著しい。

７～15は磁器。７～９は高台が小さいことから蓋とした。７は内外面の半分弱に鉄釉を掛けて茶褐色とするほかは無文。内面では黄白色となる化粧土を蛇の目に釉剥ぎした部分に塗っている。８は外面口端部に１条、つまみの周りに３条の圏線を描き、内面では見込外周の２条の圏線の内に印判手による花文を描く。表面に小さな熔着物が沢山あって粗悪品の感を受ける。これはつまみ頂部を２方向から削り込んで露胎とする。９は小さいつまみが外傾し、その頂部は熔着のために荒れている。外面は無文で、内面口縁部下と見込外周に各１条の圏線を巡らせて、その間と見込に意味不明の単純な文様を置く。これも７と同じように天井部内面を一端蛇の目に釉剥ぎした後に、灰白色の化粧土で覆っている。10は小型椀で底部の1/2が残存する。文様の意味は不明であるが、青色が鮮やかに発色する。畳付付近が褐色化していて、露胎のようである。11は3/4が残存する椀。内面では口縁部下と見込外周に圏線を巡らせるが、いずれも始点・終点がずれている。また、見込の文様は意味不明。外面には印判手による花文と思われるもの２個を単位として２個所に配し、その上下を圏線で画するが、色が滲んだり飛んだりして、いかにも粗悪品の感がある。見込に方形に配置する小さな目跡が４個所有り、畳付付近が露胎。なお、この椀は９に示した蓋とセットとなるようである。12は内面では口縁部下に２条の、見込外周に１条の圏線を描いてその中に単純な文様を置く。外面では中央付近に水草と今一つ図柄を描き、その上下および高台中程に圏線を描く。これはいずれも手描きのようで、文様が鮮やかで青が濃く発色する。見込に３個の小さな目跡が残り、畳付のほぼ全面に黄白色の付着物がある。13は底部がほぼ完存する皿。見込に風景画と思われるモチーフを描く。見込に４個の目跡がって、この目跡には黄褐色の土が詰まっている。底部は蛇の目凹形高台となり、高台内側面も釉を削り取っていて、削った部分に薄く灰赤色となる化粧土を雑に塗りつけている。14は白磁であろう。高台は小振りで、畳付は露胎。内面では中央付近に3.5～４㎝ほどの円形に近く施釉部を残して周囲を釉剥ぎし、そこに黄白色～明灰黄色に発色するざらつく化粧土を塗っている。15は輪花となる青磁椀。厚く施釉されるためか、明るい灰青色といった、深みのある色に発色する。

第14・15図は下層出土の遺物である。１は土師質皿状の鉢で、31㎝の復元口径に比して深さは５㎝弱と浅い。胎土は良好で器表内外と同じく灰黄褐色となるが、外面にのみ全体に煤が付着する。外面の大部分を斜位の刷毛目、口縁部付近を横撫で、内面では横撫での範囲が広く、その他の部位は浅いカキ目である。底部内面は残存部は横撫でのようで、外面は無調整のようである。２は１を小型化した瓦質の鉢。胎土は灰色となり比較的良好で、底部外面が灰色となるほかはよく黒色化する。１のような煤の付着が見えないので、底部が黒色化していないのは焼成時の問題か。３は

瓦質の七輪か。胎土は暗灰色で必ずしも精良とは言えないが、外面はよく黒色化して丁寧に磨いている。内面は暗灰色で、撫で仕上げのようである。外面に龍の線刻あるいはスタンプがある。

４～９は陶器。４は浅い椀形で、暗灰色緻密な胎土であるが、露胎部は茶褐色に近い色となる。見込を蛇の目に釉剥ぎし、そこに重ね焼きの痕跡が残る。高台は畳付だけが露胎で、そこに目跡が付着する。釉は茶黒色といった色となり、口縁部付近は茶褐色となる。５も４に器形が似るが、この胎土は灰赤褐色となり、緻密さはない。これも見込を蛇の目に釉剥ぎし、畳付とともに露胎とするが、露胎部は胎土に近い色となる。釉は暗茶褐色の鉄釉である。６は低い高台をもつやや大型の椀で、外面は露胎。内面に乳白色に発色する釉が薄く掛かる。胎土は灰黄色でやや粗い感があり、



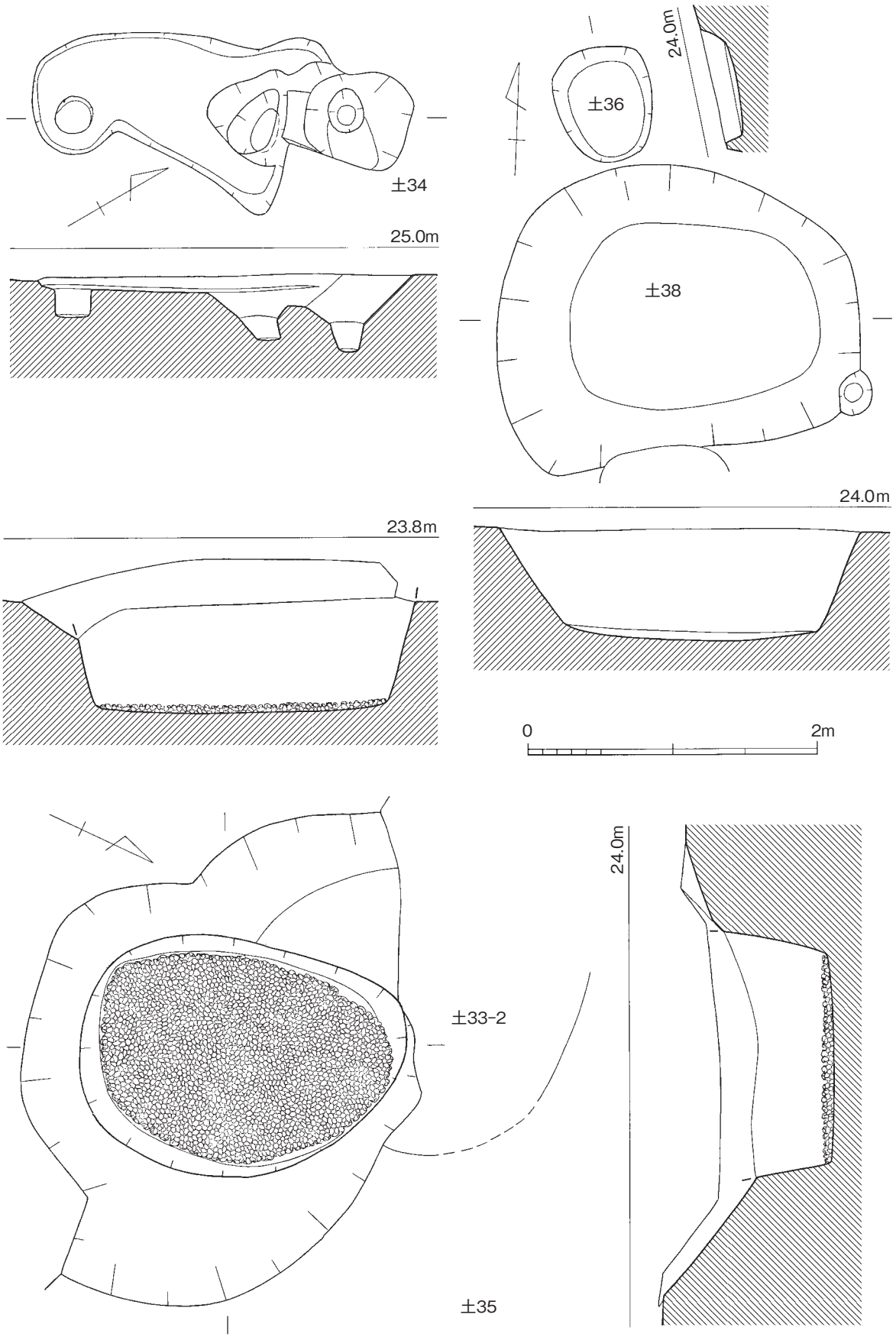
第15図　1区出土遺物実測図6（土33-2号土坑下層～44号土坑、1/3）

露胎部はやや赤味をもつ。

7は小振りだが断面方形に近い端正な高台をもち、体部外面下端を篦削りする唐津焼。胎土は灰色で精緻なもの。見込を蛇の目に釉剥ぎするが、形状が正円ではなく楕円に近く、その内外縁に白色の砂がわずかに付着する。釉は明るい灰緑色、釉溜まりは青味をもつ白色となり、青緑釉陶器の発色に近い。体部下端の篦削りを施した部分のやや上方が本来の施釉範囲で、露胎部は胎土と同色である。8は白磁とすべきか。高台外側を斜めに削って変化を加え、高台内中央を小さく突出させている。見込を蛇の目に釉剥ぎし、その内外縁に白色砂粒の付着が目立つ。この白色砂粒は畳付や体部下端付近にも付着している。体部下端の篦削りの範囲は7に比して広く、施釉範囲は同様である。胎土は灰白色、釉は水色に近い透明に発色し、露胎部は特に釉と接する付近で赤味を帯びる。見込外周、釉剥ぎ部の上位に浅く幅広の沈線状の装飾を加える。9は灰黒色緻密な胎土をもつ甕あるいは鉢。口縁部外面を肥厚させて扁平な玉縁といった形とする。内外面に掛けられた釉は茶褐色であるが、部分的に黒色に発色している。10は備前焼擂鉢底部片。高い高台の基部に段があって貼付たように見えるが、破面を見ると高台から体部にかけてが一連で、底部を充填したように見える。畳付のみ露胎。

11以下は染付で、11～17は椀。11は印判手の植物文様で外面のほぼ全面を埋めていて、口縁部内面には輪宝文を連続する。植物文様は蘇鉄のような巻き込む葉と実、それと3葉一単位の葉がある。畳付だけが露胎で、発色は鮮やかである。12は牡丹唐草文で飾り、高台内に「福」と思われる変形字がある。内面は無文。畳付だけが露胎。13はカエデ類の葉をコンニャク印判で押したようで、灰青色の呉須が滲んで広がる。内面では見込を蛇の目に釉剥ぎ、その部分に白い化粧土を塗ったようだが露胎部が赤味をもって発色する。高台外側面の一部と畳付が露胎となり、畳付には目跡が残る。14は先の2点に比して素地の白さが際立つ。文様はススキであろうか。通有の圏線が無く、内面も無文。畳付だけが露胎となる。15・16は高台が外方へ踏ん張る形となる。15は鳳凰とその両側の桐を1単位として2単位を描くようである。それらの間をシダ状の単純だが大きな文様で画する。下端の二重の圏線も変化を加えている。内面では口縁部に四方襷文帯を置き、見込の二重圏線内に松竹梅を描くが、中央付近は欠失。これも畳付のみが露胎。16は欠損部が多く、陶器質の焼成不良品である。素地は灰黄色となり、釉は白濁、文様もくすんで薄くなる。外面は草葉をモチーフとするようで、見込に単純な手描き文がある。17は大型の椀であろうか。蛇の目凹形高台となり、高台基部に2条の圏線を描くが、それらは一部で重なる。見込の文様は滲んだようになって意味不明である。18はつまみ内側および内面が染付、つまみ外側面から天井部が青磁となる蓋。つまみ内に変形字、口縁部内面に四方襷文帯を置く。内面中央に二重圏線を置き、その中に植物をあしらうがこれが何を描くかわからない。圏線の外には梅と思われる花文も見える。19は畳付だけが露胎で、その一部が欠損。外面に圏線と単純な唐草文を、内面では見込中央に手描きの五弁花文、体部にビワのような植物の文様を描く。口縁部外面が8㎜の幅で帯状に黄色味を帯びる。

20は見込中央の五弁花文がかすれ、一部が飛んでいる。体部内面には植物文様が描かれ、同外面は単純な唐草文であろう。高台内に「福」と思われる銘がある。畳付が露胎で、その内側に一部砂が付着する。21は見込中央に大きく「福」と記す。圏線の外側の文様は不明だが、3単位を繰り返す。また、砂が熔着している。これも畳付だけが露胎で、高台内中央に一つだけハリ跡がある。22～24は見込を蛇の目に釉剥ぎするもので、畳付はいずれも露胎。22は底部が肉厚となるもので、見込の釉剥ぎした部分の外側半分ほどが赤味をもって発色する。これは口縁部も釉剥ぎする。文様は植物をモチーフとする。意図したものか、体部外面上半に整形時の横撫で痕が目立つ。



第16図　1区土坑実測図6（34～36・38号土坑、1/40）

23は22に比して底部が薄い。これは体部内外面に施文するが、欠損が多く意味はわからない。24も底部が厚めとなる。これも内面の文様は意味がわからず、外面も極度に簡略化したものが描かれる。25は蛇の目凹形高台とするもので、見込に唐人と思われる人物と家屋を描く。体部に描かれたものは残存部がわずかで意味がわからない。

34号土坑（第16図）　33−２号土坑の西に近接する不整形土坑。撹乱坑を含む複数の遺構が重複するようであるが、最大長2.6m、最大幅1.2mほどで、南側の浅い部分で深さ0.1m、北端の深い部分では0.5mを測る。

出土遺物

土器等（第15図）　１は暗灰色緻密な胎土に青味を帯びる灰白色の釉を掛ける陶器で、とても丁寧に作られている。見込を蛇の目に釉剥ぎした部分に灰黄色となる化粧土を塗っている。畳付にも一部釉が掛かる。２は蛇の目凹形高台となる染付片。高台内側面は施釉。見込に植物文をき、濃い灰緑色に発色する。

35号土坑（図版９、第16図）　排土を反転して表土掘削を行った東半調査区の西端付近には、南北６mほどの青灰色の落ち込みがあった。その性格を探るために南北方向に小トレンチを入れた結果、1.2mの深さで小川原石を敷き詰めた様子が現れ、所謂地下式土坑であろうと判断した。

土層図を作成していないが、写真から判断すると、中央付近では中位付近まで浅いU字形にガラス片を含む青灰色土が厚く、その下位は地山崩落土のような黄褐色砂質土が堆積し、炭層や泥土層といったものは見えない。壁あるいは天井が崩落した後は耕作土に覆われたといった感である。

床面は長軸２m、短軸1.4mの歪んだ長円形といったプランとなり、川原石が敷き詰められていた。その大きさは縦横７㎝以下のものが９割以上を占めていて、最大で25×15㎝ほどの掌大の礫４点を数えるに過ぎない。７㎝以下の礫といっても、そのおよそ2/3は３〜４㎝以下の小さなものであった。

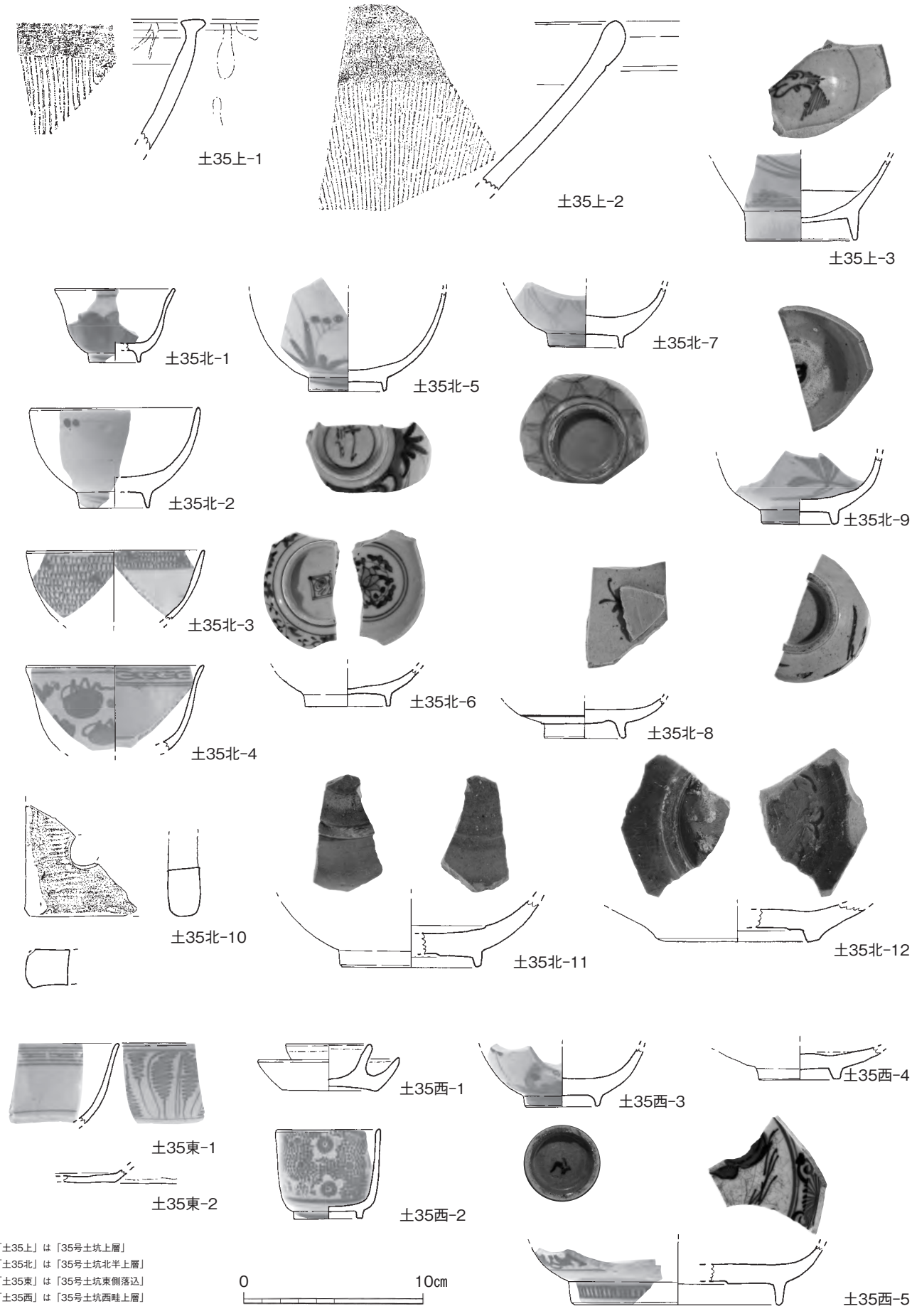
壁の立ち上がりは垂直に近い部分があって、本来の形状を残すものと思われる。上半が大きく臼状となっているのは遺棄された後の崩落によるものであろう。

出土遺物

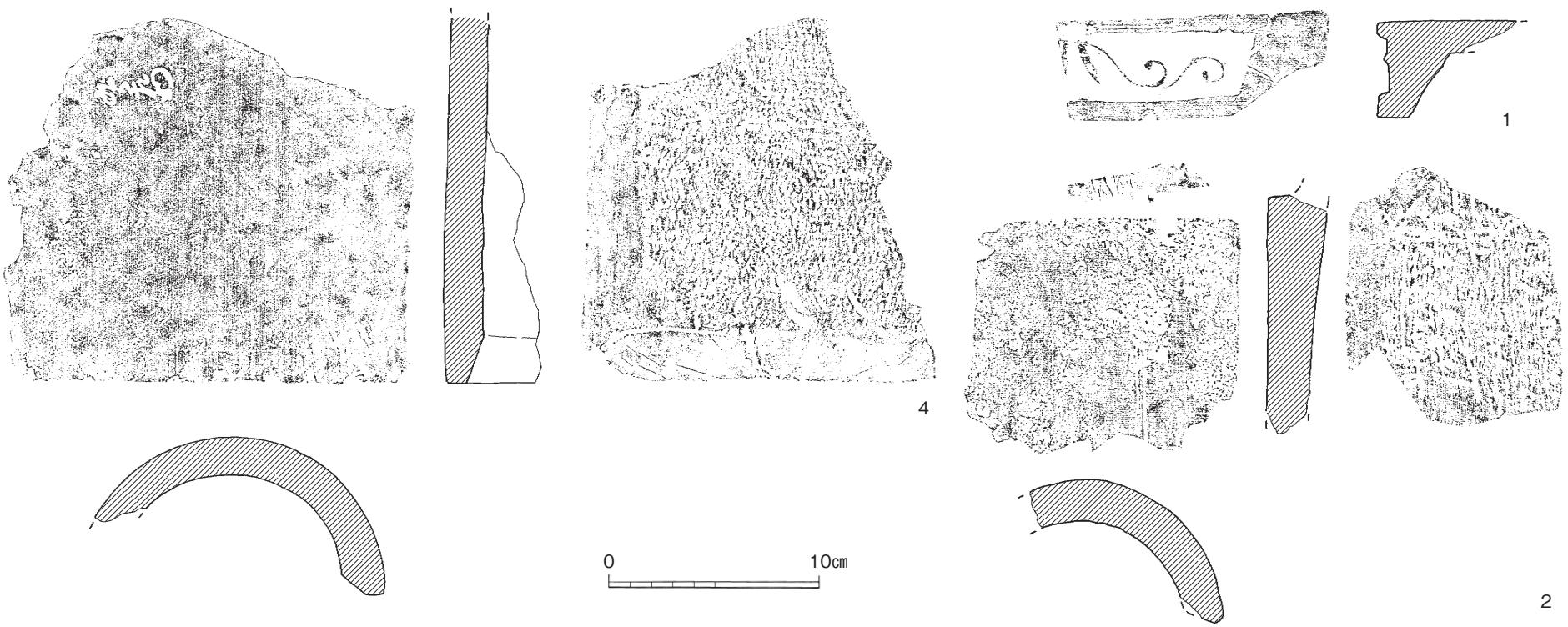
石製品（図版55、第23図６）　砥石の小片。黄褐色〜黄白色となる目の細かい砂岩を用い、２面を使用する。図上端の面は未使用。仕上げ砥であろう。

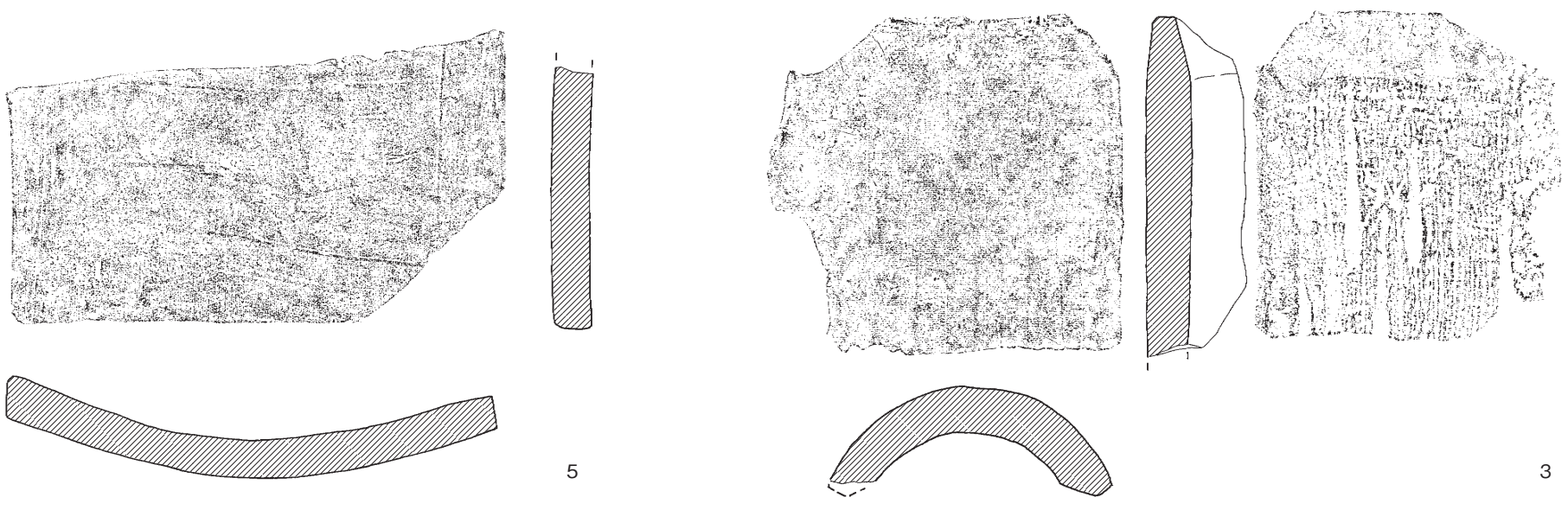
土器等　「土（坑）35」・「土35上層」・「土35下層」・「土35北半上層」・「土35西畦上層」・「土35東側落ち込み」などの注記がある。「上層」は青灰色土層を指し、下層はその下位の堆積層である、「西畦」は、南北方向のトレンチの西壁を指す。「東側落ち込み」は東半中央付近の巨株に向かって溝状に青灰色土が堆積していてそれを指す。これは35号土坑と無関係であると思われるが、ここで紹介しておく。

「上層」（第17図）　１・２は陶器擂鉢。１は口縁部内外を肥厚させて断面T字形とするもので、全体に茶褐色不透明釉が掛かる。内外面に黒色となる釉溜まりが見え、かつ下から上方へ流れている。胎土は灰黒色で石英粒を混入する。２は口縁部にさほど変化を加えず、外面に沈線を刻む。内面では口縁部付近を広く無文とするが、スリ目を入れた後に撫で消すようで、一部でスリ目が薄く見える。これも茶褐色釉を全面に掛けるが、１に比べて灰味が強い。３は所謂広東椀で、内面では見込外周に圏線を巡らせて中央付近に文様を置くが、文様が歪になっている。畳付だけが露



第17図　1区出土遺物実測図7（35-1号土坑 、1/3）





第18図　1区出土遺物実測図8（35号土坑-2、1/3）

胎で、釉は白濁する。

「北半上層」（図版50・51、第17図）　1～9は染付。1は小型椀で、外面を縦位に画して濃淡で塗り分けるが、紺色が鮮やかに発色する。内面は無文。2は小片。高台外面に露胎の部分があり、畳付とともに赤味をもつ。これも内面は無文。3は外面に「し」を天地逆にしたようなモチーフを連続して器面を埋め、内面にはそれを左右反転させたものを口縁部に連続する。処々で滲んでいて、発色も鮮やかであり印判手によるものであろう。4は外面に独立した意味不明の文様を分散して置き、内面では口縁部下に雷文を簡略化したような文様帯を置く。釉は白濁する。5は外面に植物文を描き、内面は無文。高台内に文字らしきを描くが読めない。畳付が露胎。6は見込に二重圏線とその中に牡丹唐草文を、外面にも牡丹唐草文を描き、高台内に変形字を描く。畳付が露胎。7は外面を二重網目文で埋め、内面は無文。3本の圏線は緑味を帯び、網目文は淡い灰青色となる。畳付は露胎。8は高台が開き、見込に蝶と思われる文様を描くが、別の磁器片が熔着する。このような製品が流通するとはどういう意味であろうか。残存部で施文は見込と体部下端付近の2条の圏線のみである。畳付は露胎。9は見込を蛇の目に釉剥ぎし、その部分に灰白色～黄白色となる化粧土を塗る。見込中央に意味不明の文様を付す。外面ではモミジ葉のような単純な文様を繰り返すようである。また、葉の上の数箇所で釉が弾かれたようで発色しておらず、器壁の一部も弾けている。

10は通有の瓦と同じ胎土・焼成法で作られたもので、直径2㎝ほどの円孔が開いている。胎土は暗灰色で混和材が無く、表面は光沢をもつ黒色となる。図示した面には藁状の圧痕が見え、背面は撫でのようである。また、背面では図左側辺部のみ凹面となる。

11・12は青磁。11は見込付近に低いがしっかりとした段を付け、高台内は所謂蛇の目凹形高台とする。釉は青味を帯びる灰緑色に発色する。12は龍泉窯系青磁で、見込にスタンプが押されるがモチーフはよくわからない。厚く掛けられた釉はくすんだ灰緑色といった発色となる。高台は基本的に施釉のようで、高台内の中心部付近が露胎である。

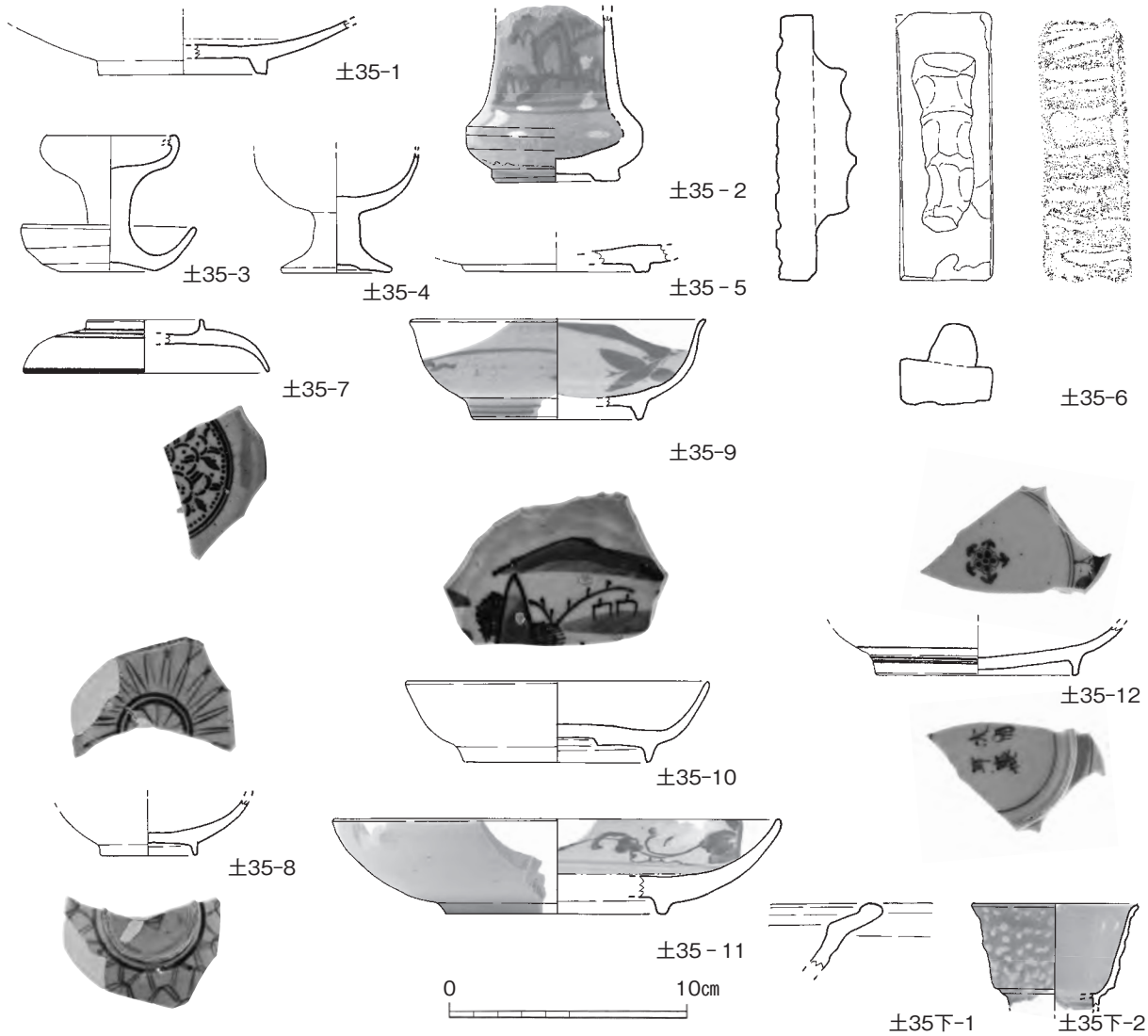
第19図は瓦。1は軒平瓦で、下向きの三葉文を中心飾りとする。瓦頭は粘土を貼付て面を広げている。胎土は微砂粒を交えるが精良といってよく、灰色となる。表面は灰黒色で色むらがあり、光沢をもつ。2は行基葺きとなる丸瓦で、凹面に粗い布目、凸面は剥落する部分が多いが一部に縦方向の篦削りあるいは撫でのような痕跡が見える。これは1に比して大粒の砂粒を含み、光沢はない。3・4は胎土良好で光沢をもつ。これは凸面の残存状況がよく、それによれば縦方向に1～1.5㎝ほどの幅の面が見え、それは篦削りのようにも撫でのようにも見える。4は凸面に「九郎左衛門」のスタンプがある。5は平瓦で、これは他の丸瓦・軒瓦に比して微砂粒の混入が目立ち、灰黒色となるが燻した風ではない。凹面は撫でのようで凸面は型押し未調整のようである。

「東側落ち込み」（第17図）　1は染付椀小片。外面はよろけ縞文だけで埋めている。口縁部内面の文様帯は雷文を簡略化したものか。2は白磁口禿の小片。

「西側畦上層」（第17図）　1は陶器灯明皿。胎土は暗灰色緻密なもので、体部外面から底部に掛けて非常に丁寧な篦削りで仕上げる。口縁部付近を除く灯明皿および受皿内面、そして灯明皿外面下半に灰緑色となる釉を掛ける。露胎部は赤味をもって発色する。2～5は染付。2は大小の珠点で埋めた中に梅花と思われる花を散らすもので、色むらや滲み、線のずれなどがあって印判手によるものであろう。青が濃く発色する。内面は無文。畳付は削り取って露胎とする。3は厚手の椀で、体部外面に雪輪文を描き、内面は無文。高台内に変形字がある。文様は灰味が強く発色する。畳付だけが露胎。4は白磁であろう。見込を蛇の目に釉剥ぎし、畳付から高台内にかけて露胎

となる。畳付や体部下端付近に砂が付着する。素地は灰白色、露胎部の発色も同様で、釉は青味を帯びる不透明。５は蛇の目凹形高台となり、露胎となる部分に重ね焼きの痕跡が黒く付着。文様は一部が残存するだけであるが、群青色といったような濃い色に発色する。

「土35」（図版54、第19図）　１は唐津焼の所謂青緑釉陶器で、見込を幅広く蛇の目釉剥ぎし、そこに重ね焼きの痕跡が残る。外面は体部下位から高台内にかけて露胎とする。胎土は灰黄色～黄白色、露胎部も同様の発色である。釉は内面が濃い灰青色、外面では薄い灰緑色となる。なお、高台内の削りが深く、底部が肉薄となる。２は体部が偏平で長い口頸部をもつ壺型の陶器。体部下位から上に施釉し、内面および高台付近は露胎となる。胎土は暗灰色緻密なもので、露胎部は茶褐色。また、釉は薄い灰緑色といった発色となり、頸部に描かれた装飾は描線が黒褐色、塗りは淡青灰色となる。モチーフは単体の山、その反対側に風景のようなものを置く。内面底部付近には土のような付着物があるが、頸部はまったく汚れていない。３は陶器秉燭。灰色緻密な胎土で、底部外面を除いて施釉し、淡い灰緑色に発色する。底部外面中央の凹部にはわずかに釉が付着していて、総釉後に削り込んだものとは違うようである。作りはごく丁寧である。口縁部付近が内側へ強く内彎するが、その付近から口縁部にかけての欠損が多いために本来の姿であるものか判断できない。４は胎土精良で、丁寧に作られた仏飯器。内面は薄く施釉されて光沢をもつ黄白色となり、外面はすべて光沢のない白色で露胎のように見えるが、胎土は黄白色であり、外面には釉薬ではなく



第19図　1区出土遺物実測図9（35号土坑-3、1/3）

化粧土が塗布されているようである。脚内面は幅広く化粧土を掻き取っているが、中央の凹部には化粧土が残存する。５は須恵器杯身片。高台が低平で、これは器表が荒れている。

６は土師質のスタンプ。胎土に微砂粒を多く含み、押捺する面は灰黄褐色、その他の面は灰黒色となる。印面は図で横方向のランダムな線が刻まれるだけで、具体的な使用法はわからない。

７～12は染付。７は33－２号土坑から出土したものと同じである。８は見込に菊花文を置き、その周りに一重の網目文を、外面に二重網目文を描く。高台内に変形字が見える。９は内面に植物文様を、外面に唐草文を描く。高台内にも圏線がある。10は内面に風景画を描き、外面は無文とするようである。青色が鮮やかに発色し、目跡が３個所に残る。底部は蛇の目凹形高台。11は見込を蛇の目に釉剥ぎし、体部内面には花文とそこから延びる唐草を描く。外面は無文。器壁が厚い。12は見込中央に大振りの五弁花を置き、二重圏線の外側の文様は一部が残るだけである。外面では高台内に圏線と「大明（？）年製」の文字を置く。また、目跡が１個所に残る。

「土35下層」（第19図）　遺物は少ない。１は口縁部が屈曲、肥厚する陶器。混ざりの無い灰赤色の素地に内面では厚く、外面には薄く灰黄緑色となる釉が掛かる。２は小椀。口端部から内面には青味を帯びる不透明釉を掛けるが、外面は露胎で内面と同じ釉をランダムに散らしている。素地は陶器とも磁器とも判断しかねる。

36号土坑（第16図）　35号土坑の直ぐ北東に38号土坑とした比較的大型の土坑があるが、その北に隣接する隅丸方形に近い小型土坑で、長軸0.8m、短軸0.7m、深さは0.1m余りに過ぎない。

出土遺物

土器等（第21図）　１は陶器蓋で、天井部端の側面まで施釉、受部も含めて下面は露胎となる。胎土は微砂粒を交え、破面は荒れた肌となる。釉は灰茶褐色といった発色となり、露胎部は灰赤褐色、小豆色に近い。受部内天井付近に鉄錆のような付着物がある。２は胎土が赤く、削り取ったような口端面を除いて外面に濃い灰緑色釉が掛かる陶器で、残存部下端で屈曲する。施文は上位に横方向の、その下に縦方向の幅広い平行沈線を刻む。また、内面は体部上端では削って釉剥ぎするが、その下位は意図的に施釉していてさらに下位が露胎となる。25号土坑出土土瓶と縦位平行沈線がよく似ているが、釉の発色が随分異なる。ただ、それでも同一個体である可能性は排除できない。３は瓦を円盤状に加工したもので、表裏両面ともに明瞭な調整痕・使用痕は見えない。４は染付皿、見込に鳥と植物を描き、体部の文様は一部が残存する。外面は無文。

37号土坑（図版９、第20図）　36号土坑の東に位置し、調査区外へ延びる。

検出時は東西長4.5mほどの半円に近い形状であったが、0.1mほど下げると隅丸長方形といったような平面形が現れた。ただ、これも結果的には深さ0.1mほどに過ぎない浅いものであった。

出土遺物

土器等（第21図）　１は瓦質土器で、胎土は灰白色で良好。内外の器表は黒色化し、外面に煤が付着する。傾きは任意。２は染付で、内面は無文。３は残存部端に円文のような一部が残る染付で、文様は淡い青灰色となる。その他内外面は無文である。畳付が露胎。

38号土坑（図版10、第16図）　35・36号土坑の間に位置する比較的しっかりとした土坑で、平面形は隅丸長方形といってよい。埋土は地山の黄褐色土と耕作土のような灰褐色土がそれぞれ一定の厚みをもって互層となっていた。床面付近で拳大ほどの礫が数点まとまっていたが、規則性は

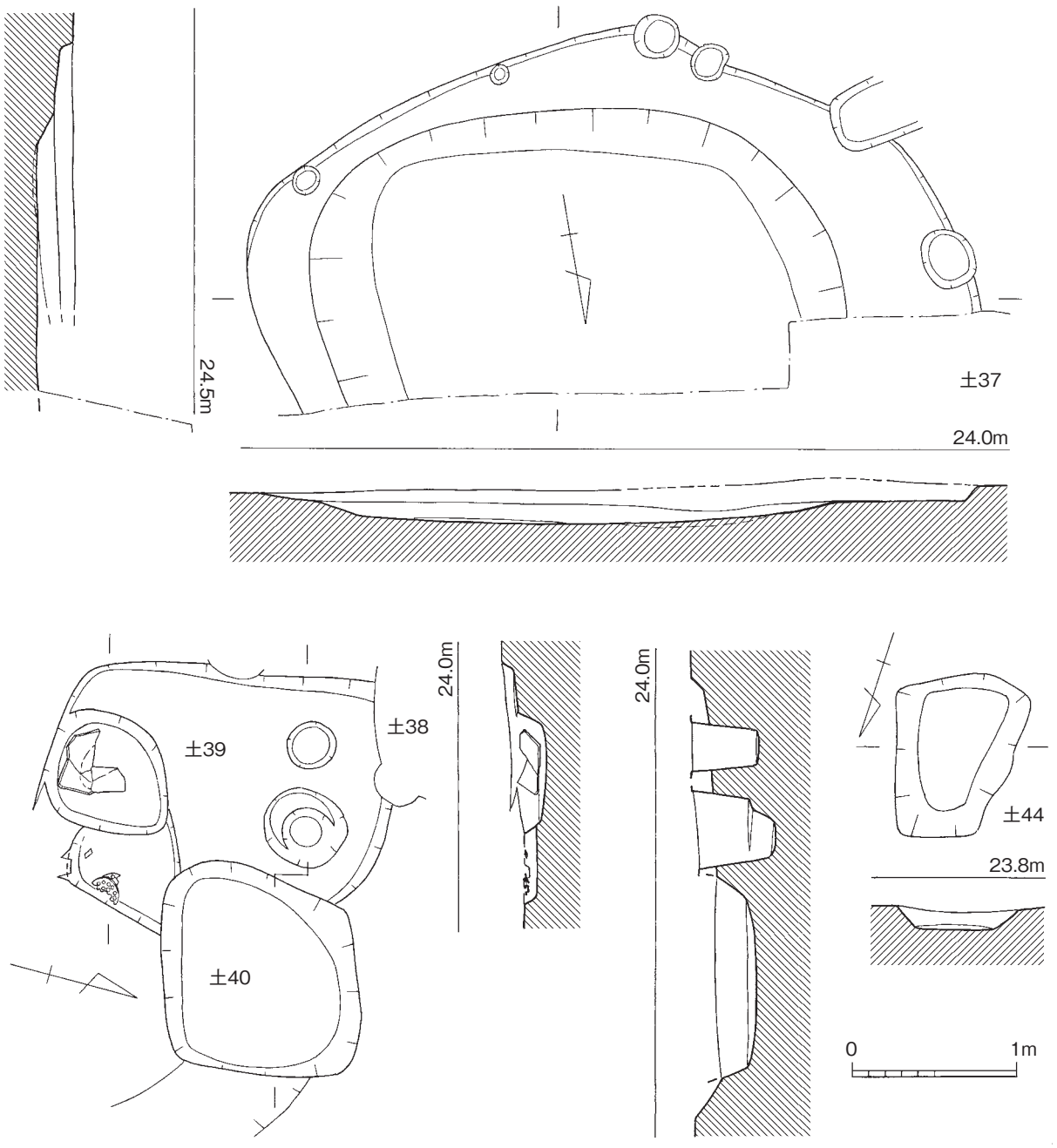
見えない。長軸2.4m、短軸2.1mほどで、深さは0.8mほどであった。

近世陶器が少量出土している。

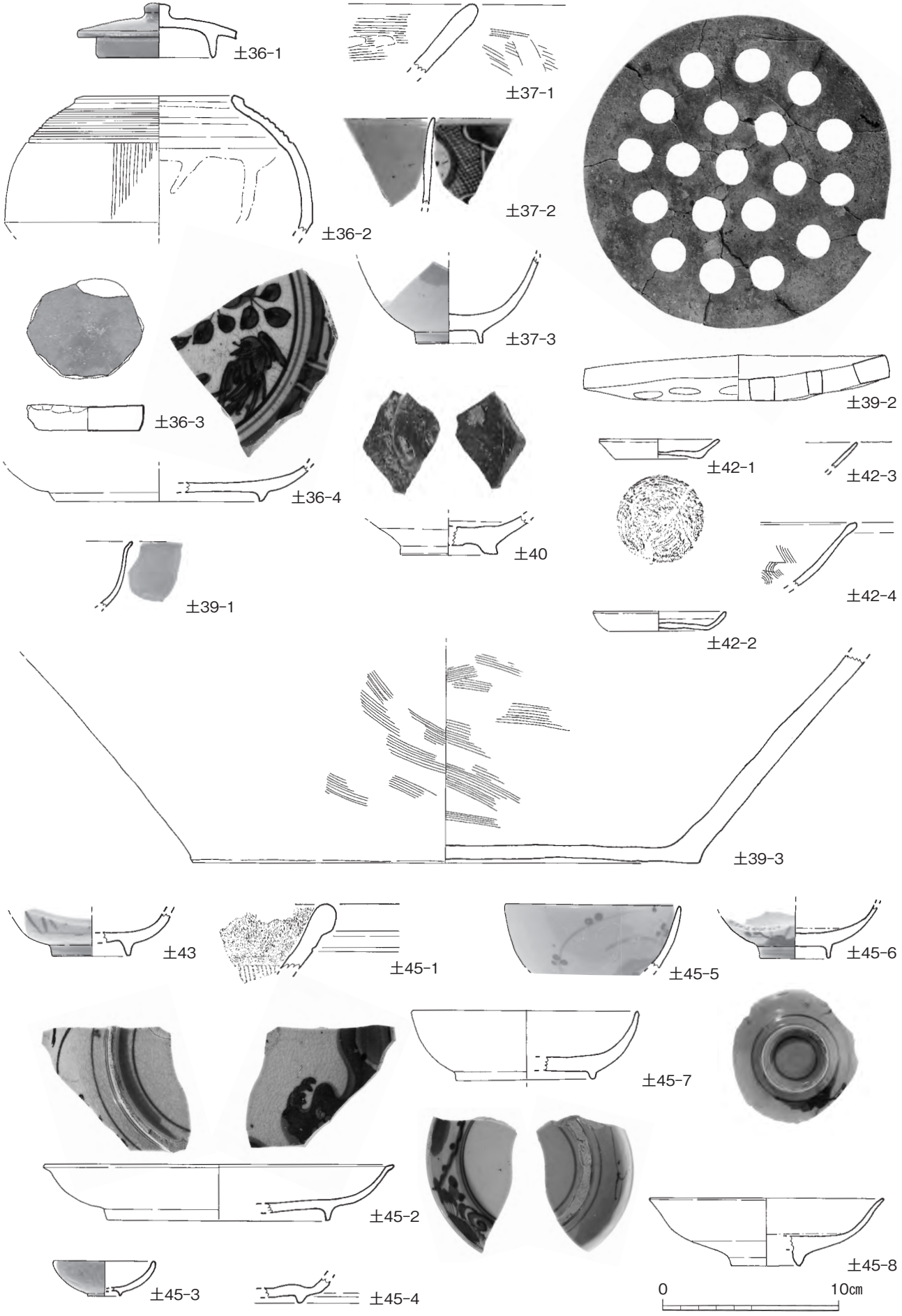
39号土坑（図版10、第20図）　38号土坑の南東に近接し、38・40号土坑に切られる。検出時は2.1×1.6mほどの隅丸長方形であったが、0.1m弱掘り下げると柱穴状あるいは小型方形土坑が現れ、枝番を付した。39−３号土坑では床面で正置された瓦質土器の底部の一部が、また、それに切られる39−４号土坑では床から浮いた状態で円形多孔の簀の子が出土した。

出土遺物

土器等（第21図）　１は陶器小椀。外面下端付近が露胎となるほかは灰黄色釉が掛かる。胎土は明灰色で破面は粗い。２は土師質の円形簀の子で、中央から順に１−５−12個の円孔が開けられ、図右側外縁に抉りを入れる。胎土に微砂粒を多く混入し、凹面となる側が黒ずんでいる。３は



第20図　1区土坑実測図7（37・39・40・44号土坑、1/40）



第21図　1区出土遺物実測図10（36～45号土坑、1/3）

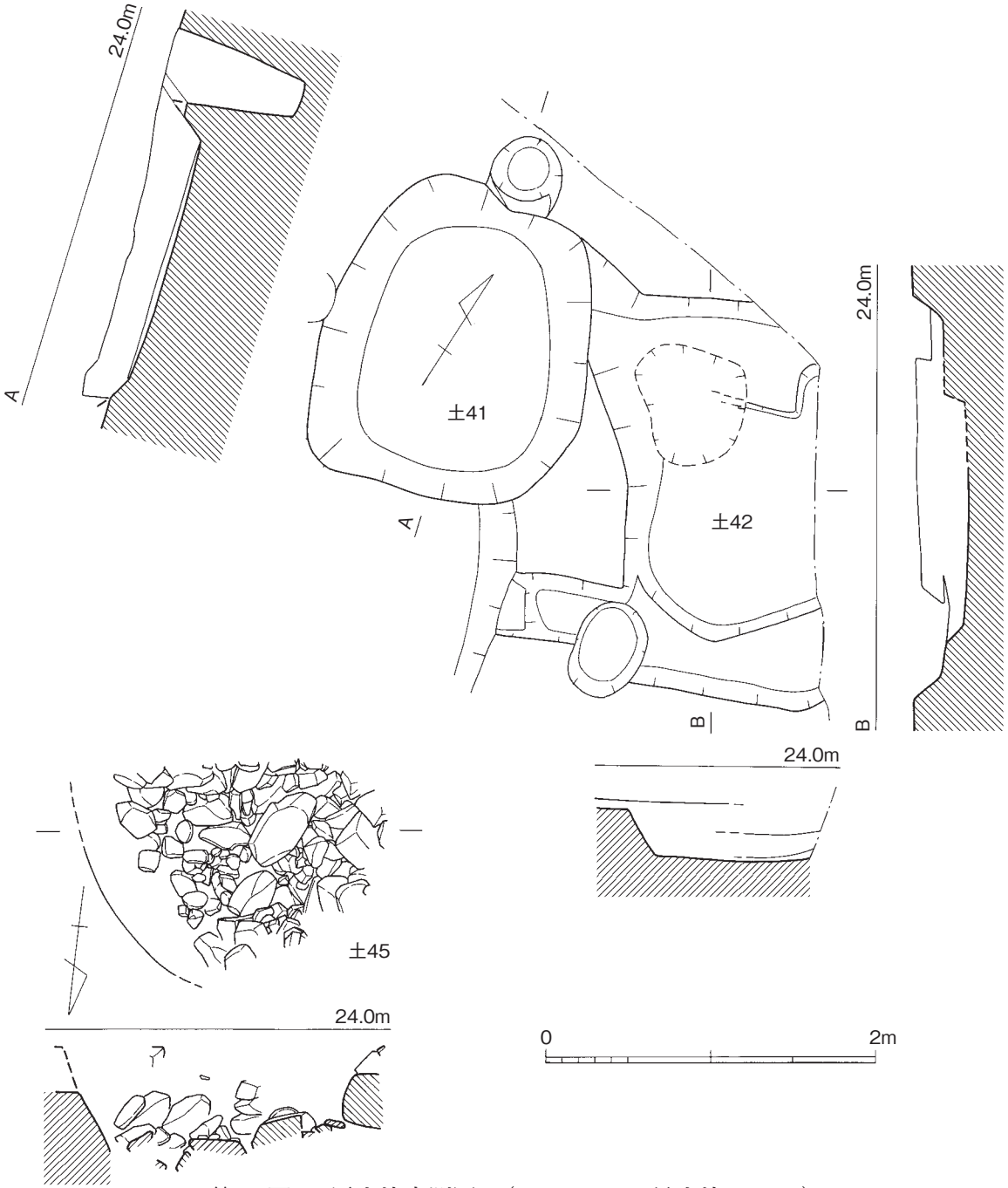
瓦質の甕か。外面および底部内面中央付近は器表の剥離が多い。体部内外面は細かい刷毛目、底部内面は横撫で、同外面は未調整のようである。胎土に砂粒の混入がほとんど無く、芯が灰黒色、内外表層部が灰黄色、器表は暗灰色～灰黒色となる。

40号土坑（第20図）　39号土坑の北東部で重複する土坑。そのためか、北西隅が乱れてるが、ほぼ一辺長1.2mの方形に復元でき、深さは最大で0.5mほどである。

出土遺物

土器等（第21図）　朝鮮陶器椀の底部。胎土は暗灰色で白色微砂粒が目立つ。畳付を除く全体に灰味の強い暗青灰色の釉が掛かり、見込と畳付に胎土目と思われる目跡が残る。他に新しそうな瓦片がある。

41号土坑（第22図）　東半調査区の北東隅付近に位置する。これも複数の遺構と重複するが、



第22図　1区土坑実測図8（41・42・45号土坑、1/40）

それらの中で後出する。

概ね隅丸長方形としてよかろう。長軸1.9m、短軸は最大で1.7mほどであるが北小口の幅が減じている。深さは0.3mほどである。

42号土坑（第22図）　41号土坑の東に近接し、調査区の北東隅に位置する。東辺は調査区外となる。上手く掘れなかった部分があるが、現状で長軸2.3m、短軸1.1m以上となる。北東および南西の小口と思われる部分にテラスが付き、検出面とテラスの比高は約0.2m、テラスから床までの深さは0.1mほどに過ぎない。

出土遺物

土器等（第21図）　1はほぼ完存に近い土師器小皿で、口径6.9㎝、器高1.2㎝を測る。体部下端はしっかりと稜線をもち、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土・作りは良好。2も土師器小皿で1/4ほどの残片。これは体部下端が丸味をもつ。作りは丁寧で、底部外面に回転糸切り痕が残る。復元口径7.6㎝、器高1.2㎝。3は朝鮮陶器椀の口縁部小片。器壁が薄く、灰味の強い灰緑色釉が掛かる。4は白磁小片で、内面に櫛描文が装飾される。

43号土坑（第4図）　東半調査区東端中央付近には巨株があって、その周辺では深部の砂が現れていて撹乱を受けたものとして発掘を行っていない。その撹乱から35号土坑へ向かって幅3m弱の灰褐色耕作土のような落ち込みが延びて同土坑を覆い、その深さは0.3mほどであった。43号土坑はこの落ち込みの北に近接し、39号土坑との間に位置する。土坑としたが、正しくは柱穴とすべきであろう。辺長0.8～0.9mの隅丸方形に近い平面形をもち、その床面に直径0.4～0.5mの柱穴様の落ち込みが伴う。上段の深さは0.1m弱、下段はさらに0.1mの深さをもつ。

出土遺物

土器等（第21図）　染付椀片で、一重網目文かと思われる文様が見える。内面などは無文。畳付だけが露胎である。

44号土坑（第20図）　43号土坑の北東、39号土坑の東に隣接する、これも小型の土坑。平面形は梯形といってよく、辺長は1.0×0.5～0.8m、深さは最大で0.2mほどである。

45号土坑（図版10、第22図）　調査時は「1区井戸」としていたものを改める。当初の1区調査区の北西隅から西側へトレンチを設定し、その先端部で検出した。掘形は弧を描き、内部に大小の川原石が現れた。掘削幅が約1mと狭く、礫直上で出土した土器が比較的新しかったので完堀をしていないが、石組井戸であろう。

出土遺物

石製品（図版55、第23図7・8）　いずれも灰黄色の石英斑岩を用いる。7はほぼ完存するようで、図示した面および右側面をよく使用し、背面・図下端面および図上端面右側も使用が認められるが図示した面ほどではない。図上端面から左側面にかけて曲線となる部分は使用されていない。これは図で縦方向に薄いオレンジ色や灰赤色の石目が走る。8は図上下が破面となるが4面を使用する。図横方向に、色調に顕著な違いがないものの石目が走る。いずれも仕上げ砥であろう。

土器等（図版54、第21図）　1～4は「上方」、5～8は「上層」の注記がある。したがって1～4は必ずしもこの遺構と伴うわけではない。

1・2・9・13	1号溝北半上層
3	33－2号土坑
4	28号土坑
5	33－2号土坑上層
6	35号土坑上層
7・8	45号土坑上層
10・14	1号溝北端礫群下
11・12・16	1号溝北端礫群以上
15	2号溝下層
17	1区検出時

第23図　1区出土石製品実測図1（石斧・砥石等、1/3）

１は灰赤褐色の胎土に灰茶褐色の釉を掛ける唐津焼擂鉢。口縁部は玉縁状となるが、その下端はしっかりとした面を付け、さらに下位にはこれもしっかりとした断面Ｖ字状となる沈線を刻む。２は染付皿で、内面に波頭のような図柄、外面には唐草文が見える。畳付の釉を掻き取っている。３は白磁紅皿で、外面に蛸唐草を陽刻する。４は須恵器高台付杯身の小片。

５～７は染付。５は雪輪文を描く椀で、残存部左下に縦位の朱線が残るが、これは釉の上面にあるようで後補であろう。意味は不明。６は岩山に生える樹木を描くように見えるが、ほかには縦線１本が残るだけで意味がよくわからない。高台内にも圏線が１条巡る。内面では見込を蛇の目に釉剥ぎし、そこに透明な何かを塗っていて光沢をもつ。施文はない。７は体部内面に花文など、外面に唐草文を描くが、見込に文様は見えない。外面では高台内にも圏線を描いている。８は白磁皿で、見込を広く蛇の目に釉剥ぎするが、釉剥ぎした部分と中心の施釉部までが黒く塗られていて、これには光沢がない。施文はないが、体部外面中位付近に弱い稜線が入り、これ以下は篦削りで仕上げるようである。釉は青味を帯びて白濁し、畳付は施釉後に削り取っている。

２）　溝

１号溝（図版11～14、第24・25図）　１区中央付近で検出した略南北方向に走る溝。南端で幅約２ｍ、検出面からの深さ0.4mほどの規模であるが、北端では幅約6.5m以上、深さ1.6mほどと大いに規模が異なっている。北側が低くなることは遺跡の西側を流れる２級河川那珂川や巨視的に見た周辺地形と同様である。また、中央に畦を残したが、畦から北側には大量の川原石があって、殊に北端では後述するように組み上げたような状態であった。

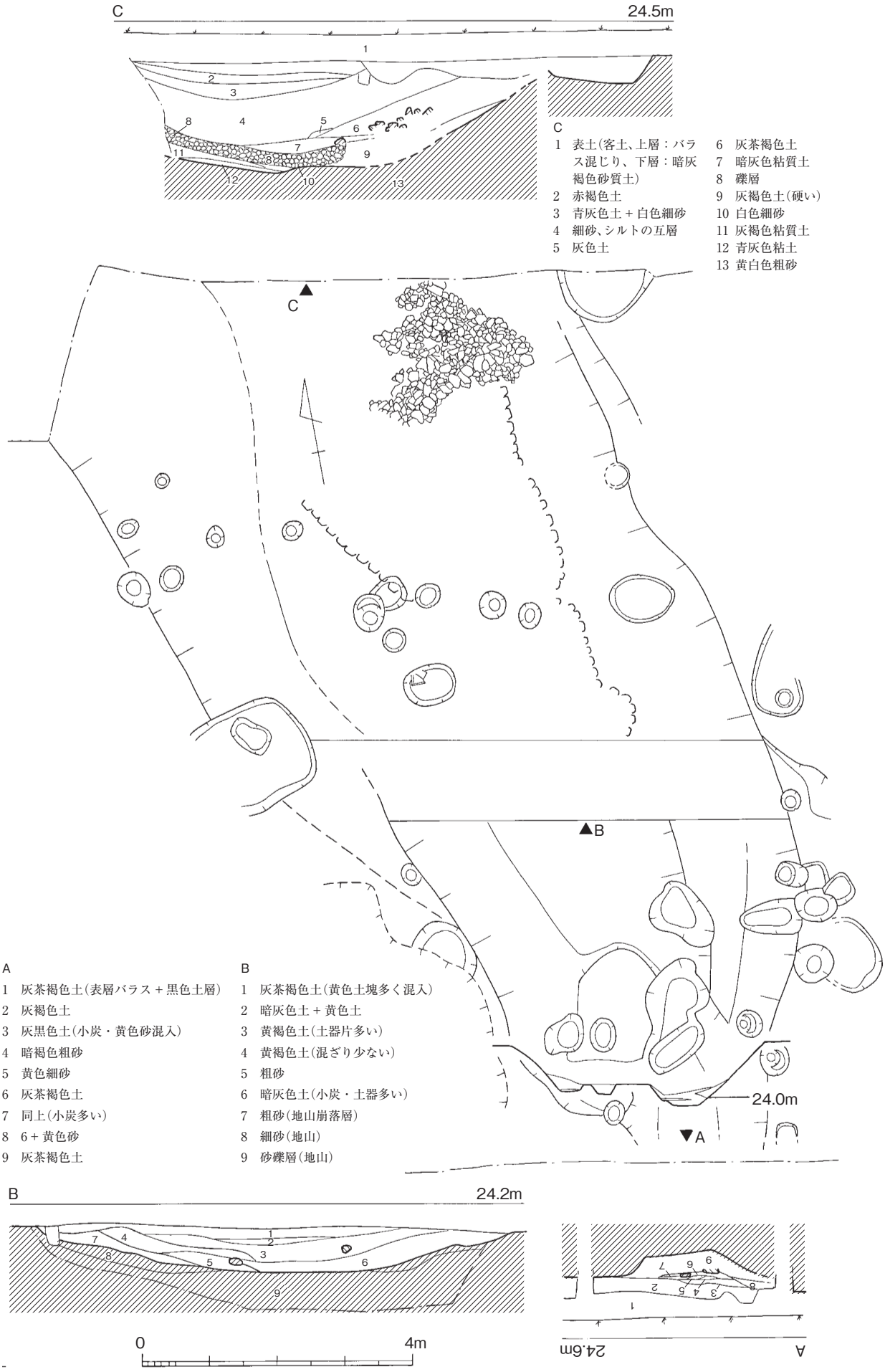
南半部：上述したように南壁に現れた土層では小規模なもので、かつ、最上層付近にのみ炭が多く入る層やわずかな礫が見られた。南壁を離れると西辺は直ぐに西側へ大きく開き、溝幅が急に広くなる。初めに発掘した部分がここで、床付近でかなりの礫が検出されたが、まとまりが見えず散乱した状態であったためにすべて除去した（図版12－３）。

中央に残した畦の南壁面で土層図を作成した。土層は単純であるが深い部分からも砂礫が現れて、戸惑いがあったが西側の比較的浅い部分に見える細砂層が非常に混ざりの無いものであり、これを地山と判断した。この場合の溝中央付近の深さは0.6m（標高23.3m）、幅７mほどとなる。

北半部：北半部は、重機の走路を確保するためにさらに北端部とそれ以南に分割して調査を行った。石組状の構造は最後に調査を行った北端部に収まっていて、その南の北半部とした部分では南半に比べてより多量の礫が現れたとはいえ、並べたように見受けられたのはその西端最上層だけだったこともあり、やはり図化は行っていない。図版で見るように、礫群は東に寄っていて、かつ中央部が凹み、東西方向で断面を見ると浅いＵ字形に堆積している。全体に小型の川原石が多いが、西端の最上部だけやや大振りの川原石を置いたように見えるが、断定的に判断できるものではなかった。また、西側は溝の立ち上がりとの間に礫のない部分が南北方向に連続する。

北端部：調査区北壁で土層を観察したが、溝西端付近は市道に近く、表土掘削を行っていないために厳密な規模は不明のままである。溝の東端は別の遺構と重複していて確認できなかった。

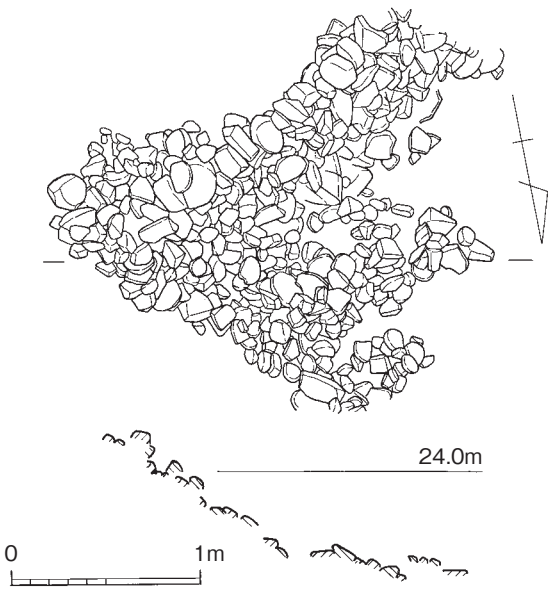
溝の最終的な埋土は最上層の赤褐色土であるが、その下位に青灰色土と白色細砂が混ざった層が浅くＵ字形に堆積、その下位に厚く細砂+シルトの「互層」があって、これは緩やかな流れがあったということであろう。その厚い堆積層の下位に、なお間層を挟んで礫がある。土層図右側の礫群は組み上げたような礫の一部であるが、その上を覆うような灰茶褐色土の上面のラインが直線的に



第24図　1区1号溝実測図（1/80）

見え、断定はしかねるがこれは自然に形成されたものでなく人為的な行為の結果であることも考えられる。この最後に調査した北端部の南壁でも礫群を覆うと見てよいであろう土層ラインが見えることから、保護層で覆われていたと考えてよいであろう。

灰茶褐色土の先端は暗灰色粘質土の上にのり、この粘質土の直下に西側では厚さ20㎝ほどの川原石の層が広がる。ただ、さらに西側へ行くとこの粘質土はなくなり、上層の細砂+シルト互層の直下が礫層となる。礫層東端付近はその直下が地山（ここでは黄白色粗砂）であるが、西へ行くと灰褐色粘質土、そして青灰色粘土が礫層の下位で見られた。床面の標高は22.3mの付近にある。



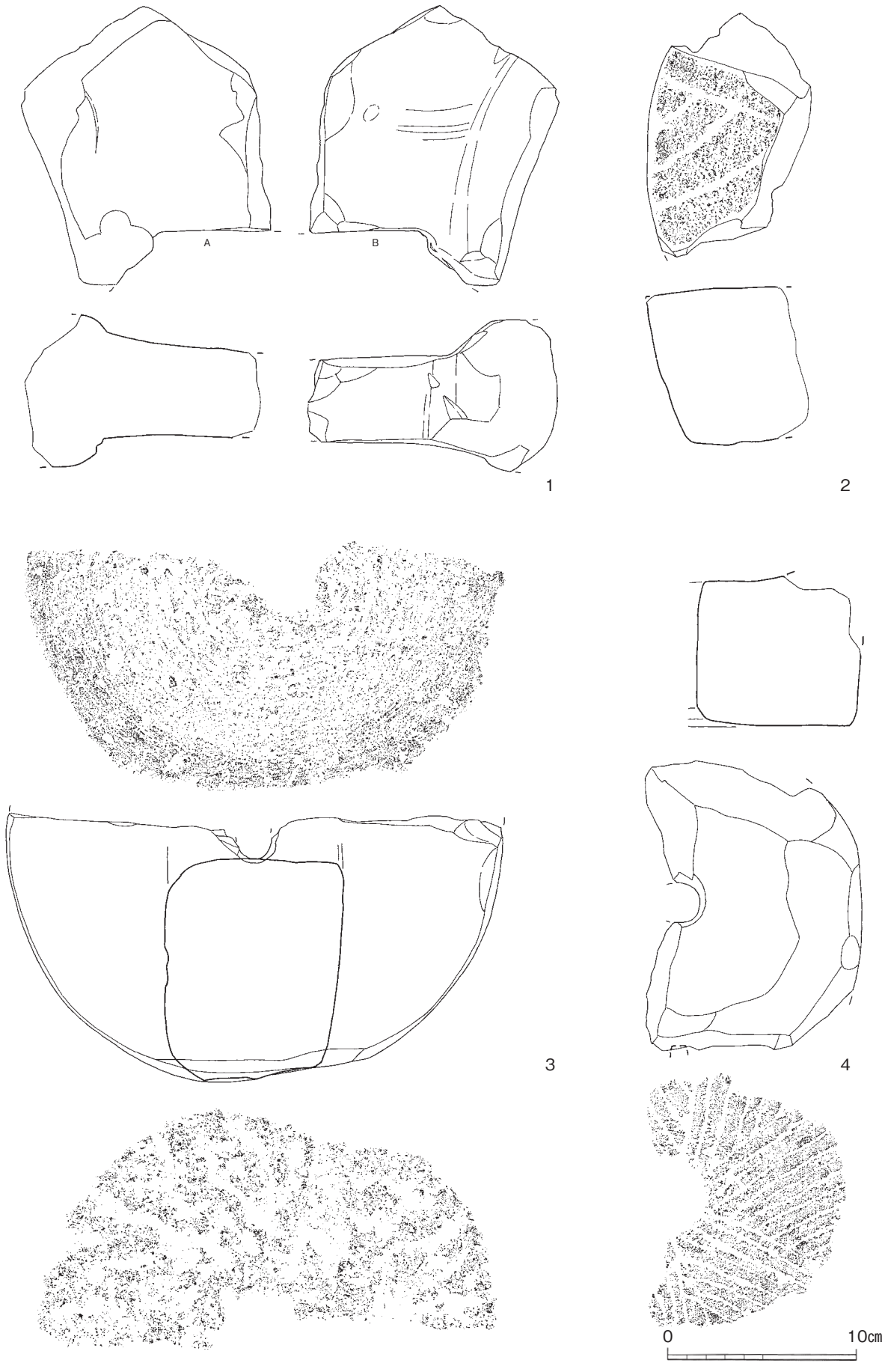
第25図　1区1号溝石組実測図（1/40）

石組のような構造は南北幅２mの北端調査区内、１号溝の東辺に寄った位置で認めたが、この部分を調査するときにはその南はすでに埋め戻した後で、連続する部分は確認できないままで終わった。ただ、図版13に見るように、中央畦北側の礫群は西辺に沿ってやや大振りの石材が見ようによっては並べられているというだけで、東辺には特別な様相を窺うことができない。そして、この石組構造は頂点を東において、南西へ向かって並びていて東辺には続きそうにない。断ち割りを行っていないが、独立した構造というよりは「斜面に貼付た」ような印象を受けた。堅固な構造物との印象はなく、礫群を覆うような土層は貼付た礫群を保護するための構造であると思われる。

面は北西へ向かって築かれているようで、頂点から北西へ延びる部位は南側のように整然としたものではない。とはいえ、北壁で見たようにこの部分にも覆土が施されているところを見るとやはり重要な意味をもっていたと考えてよいであろう。

出土遺物

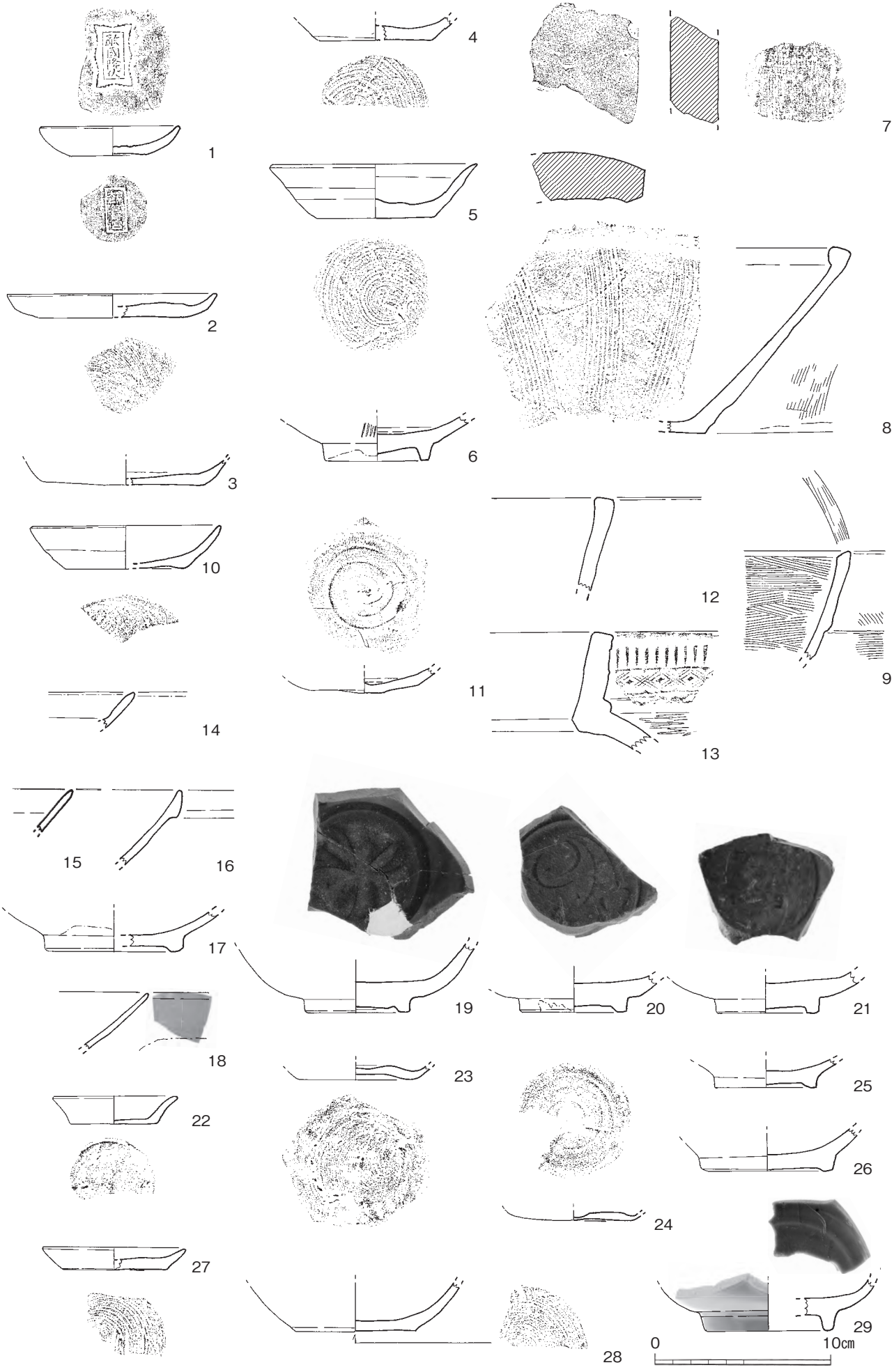
石製品（図版55・56、第23・26・27図）　第23図１・２・９・13は「北半下層」の注記がある。北半では大量の礫が検出されたが、その下位に相当する部分からの出土である。１は緑色片岩製の打製石斧で、刃部を欠く。図上端は片面からのみ、両側縁は表裏両面から調整を加えている。２は蛇紋岩製磨製石斧で、これは刃部付近のみが残存。最大幅6.5㎝、残存長9.2㎝を測る。全体に丁寧に研磨するが粗成形時の凹部には及ばず、刃部付近では身とほぼ平行となる方向に擦痕が見える。刃部は鋭い。９は粘板岩製砥石で、図示した面だけがよく使用されているが、面としては真っ平らなものではない。図上下両端は折損して灰色となる。13は凝灰岩製の五輪塔空風輪の下部。同10・14は「北端礫群下」とあり、ほぼ最下層からの出土である。10は用途不明であるが、周縁を丁寧に打ち欠き、図示した面の中央部は砥石のように滑らかとなる花崗岩。平滑な面は被熱赤変し、打ち欠いた部分および背面は煤け、特に背面には煤が１㎜ほどの厚さで残存する部位がある。打ち欠いた部分は煤けているために判然としないが、平滑な面に近い部分はやはり赤変しているようにも見える。14は目の細かい灰褐色砂岩を用いた棒状の石製品で、これも部分的に赤変している。図上端は折損するが、下端は残存、小さな凹部が２個所に残り、磨ったとはいいがたいものの比較的平滑化する。側縁は非常に滑らかな平面あるいは曲面となるが、砥石ではないように思える。11・12・16は「北端礫群以上」と注記がある。11は小豆色となる粘板岩製砥石で大きく欠損



第26図　1区溝出土遺物実測図1（溝1出土石臼等、1/3）

する。図示した面とわずかに残る背面が使用されている。12は灰色を呈する粘板岩製の砥石。図示した面では左下に断面Ｖ字形となる非常にシャープな溝が刻まれ、下端の縁辺はこの面ではすべて剥がれている。また、図左端付近と上端付近では砥面に弱い稜があって使用法が異なる。図背面では中央付近に刺突あるいは敲打したような小さな凹みが無数に残り、細くシャープな擦痕も顕著に見える。また、下端の背面は薄く剥いだような痕跡が見え、下面中央付近は砥石として使用しているようである。であれば、下面もある程度使用した後に両角を落としたものであろうか。上面は

第27図　1区溝出土遺物実測図2（溝1出土石製品、1/3）



第28図　1区溝出土遺物実測図3（溝1、1/3）

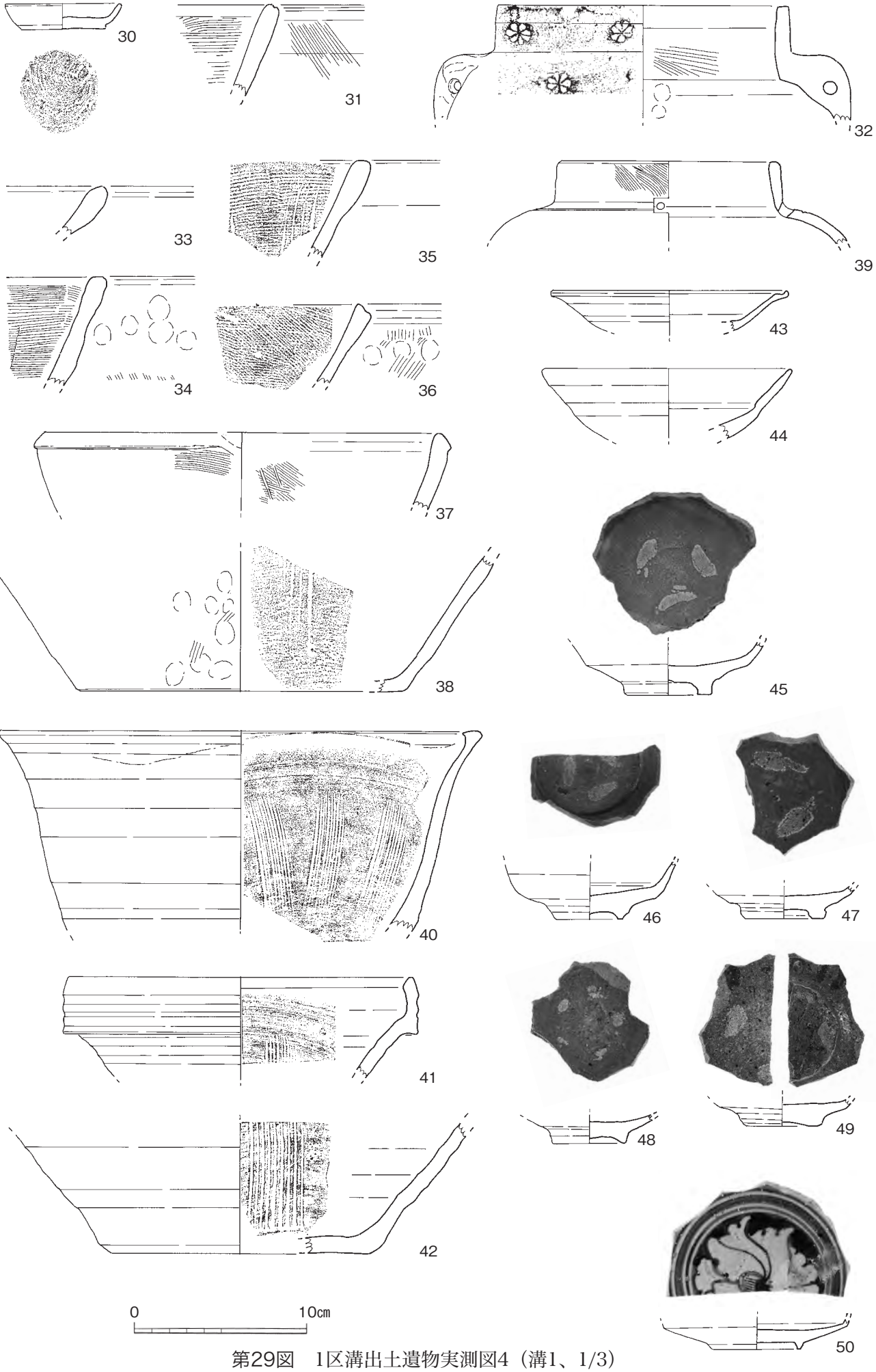
図示した面同様によく使用されている。16は滑石製石鍋の再加工品であろう。欠損が大きいが、長円形の本体の背面につまみ状の突起を付し、そこに穿孔したものである。突起中央付近の孔は半分弱が残存、欠損後にその上方に小さく掘り直したものであろう。突起上半は孔欠損後に研磨している。

第26図１は形状・用途ともに不明な石製品。Ａ面では左側に小さな盛り上がりがあるが、これはＢ面の盛り上がりとは非対称で、Ｂ面のそれは右端の破面全体に及び、かつ高くなっている。Ｂ面でいえば、盛り上がりの下端は弧を描いて、左側の直線部へ続く。この直線となる部分や表裏はよく磨かれていて、一見砥石と見紛うような仕上げとなる。灰褐色砂岩を使用。２は砂岩製石臼の小片。目は細く、一部が歪む。磨面はザラザラとしていて側面から底面にかけては被熱赤変する。３は1/2の石臼片で、磨面・底面の拓影を示した。磨面の目がほぼ消えているが、左側で右上−左下の目が微かに見え、拓影で濃く現れた外周部が特に滑らかとなる。底面の拓影でも目のように見える部分があるが、これは成形時の工具痕であろう。芯棒孔の上2/3が黒く変色し、その下端付近では１㎝ほどの幅で鉄錆のようなものの付着が見える。礫岩製。４は凝灰岩製茶臼。大きく壊れているが、芯棒孔付近は平坦となり、孔の縁から４㎝付近のところから盛り上がっていて、上縁があったことがわかる。目は多条で、細く浅い。また、平面図下端に菱形の浅い孔の一部が残る。

第27図は板状の砂岩である。折損部を除いて各面に引っ掻いたような成形時の条痕が残るが、図示した面の長辺側には深く幅広いやはり引っ掻いたような傷が不規則に入る。また、この部分は最も厚くなるところである。背面の拓影で特に黒くなる部分は砥石のように使用されて平滑となっている。

土器等（図版54、第28〜30図）　１〜14は中央畦以南の出土で、１〜３は「上層」、４〜７は「礫層付近」、８は「礫層」、９は「礫上」、10は「最下層」、11〜14は「礫群下」の意の注記がある。４〜７と９、10〜14は同じ層位と見なしてよいと考えている。15〜21は「北半最上層」、22〜26は北半の「礫付近」・「礫上（25）」。27〜29は「北半下層」である。30〜49は「北端礫以上」、上層・中層に相当する。50〜53は「礫直上」、54〜59は「礫群下」の出土である。ここでいう礫は石組遺構の下位、溝底近くに層をなしていた礫群のことである。

１〜５は土師器皿。１は胎土が水簸したように非常に精良、胎土・器表ともに灰黄色となる。調整もごく丁寧に横撫でで仕上げるようである。内面に福岡市東区筥崎宮楼門の扁額を模して「敵国降伏」と陽刻されている。底部外面はわずかにくぼめて、中央に「官幣大社筥崎宮」とこれは陰刻する。２は体部が丸味をもって内彎し、器高が低く、灰色となる。３は灰黄褐色となる皿で、色調が異なるが法量などは２に近い。４は体部下端が稜をもって立ち上がる。５は底部が完存、口縁部は小片となるが図上復元した。復元口径11.4㎝、器高は3.1㎝を測り、底部が肉厚となる。６は同安窯系青磁椀底部。灰緑色透明釉が高台外面下端に及ぶ個所があるが、基本的に体部下端付近を露胎とし、櫛描文がわずかに残る。内面では見込に小さな段を付してその内側を蛇の目に釉剥ぎし、重ね焼きの痕跡を残す。文様は見えない。７は胎土に砂粒が全く見えない平瓦小片。凹面は模骨・布目痕がよく残るが、凸面と側面はすべて篦磨きのようである。８は瓦質の擂鉢。口縁部を内側へ肥厚させて断面三角形とする。内面は刷毛目の後にスリ目を入れ、外面では指押さえ痕と刷毛目が残る。なお、内面ではスリ目が残る部分はさほど使用されていないようで、スリ目の消える付近では器表もすり減っている。胎土は灰白色で器表に直径２〜３㎜の砂粒が浮き、器表はやや褐色化する。９は瓦質土器小片で焙烙か。残存部下位に段があり、それ以上は斜位の粗い、下位は横位の細かい刷毛目が残る。口端部と内面もしっかりとした刷毛目で仕上げる。傾きには不安がある。



第29図　1区溝出土遺物実測図4（溝1、1/3）

10・11は土師器皿。10は体部下端に稜をもち、内彎気味に立ち上がる。赤味をもって焼き上がる。11は焼け歪む底部が完存。底部内面に螺旋状に水挽き痕が残る。12は土師器小片で、口縁部内面に黒色の付着物があることから焙烙であろうか。外面は灰黄褐色、内面はやや濃く変色するようである。13は瓦質の火鉢であろう。口縁部は内彎する体部から直立し、口端部外面の突帯を欠失するが頸部のような大振りの突帯があったものと思われる。口縁部外面の施文はスタンプである。器表は全体に灰黒色となるが、口縁部下位から体部に掛けての内面は灰黄褐色となる。肩部は丁寧な篦磨き。14は白磁口禿皿の小片。釉は青味が強い。

15は灰味強く発色する白磁椀口縁部小片で、口縁部下に沈線が巡る。16は白磁玉縁椀片で、玉縁は三角形に近くなる。これも釉調は灰味が強い。17は白磁底部で、16とは釉調がまったく異なって白色となる。

18は越州窯系青磁口縁部片。胎土は暗灰色緻密で、器壁が薄い。釉は灰青色に発色。口端部は露胎で茶褐色となり、図下位の露胎部も釉に接するところは褐色、離れた部位は褐色となる。19～21は龍泉窯系青磁椀底部で、いずれも畳付の一部まで釉が掛かる。19・21は灰味の強い灰緑色透明釉、20は灰黄色透明釉が掛かり、21では見込に方形の輪郭は辛うじて見えるが、その内側の文字はまったく見えない。

22はいくつかの赤褐色粒が目立つが胎土精良、調整も丁寧だが大きく焼け歪んでいて復元口径には不安がある土師器皿。赤味をもって焼き上がる。23・24はほぼ完存する土師器底部。23は焼け歪み、灰味強く発色する。24は内面に螺旋状の水挽き痕が残り、底部外縁が凹む。25・26は大きさが異なるが、よく似た形態となる白磁椀底部。

27・28は土師器。27は体部下端に稜をもち、短く立ち上がる。胎土は精良に近い。28は体部が内彎して立ち上がる椀形の器形で、これも胎土・作りが丁寧である。内面は篦磨きで仕上げるようである。29は高台内を除いて全面に灰青緑色釉が厚く掛かる龍泉窯系青磁底部。見込の釉が薄くなる部分が、細く白い圏線として浮き出ている。

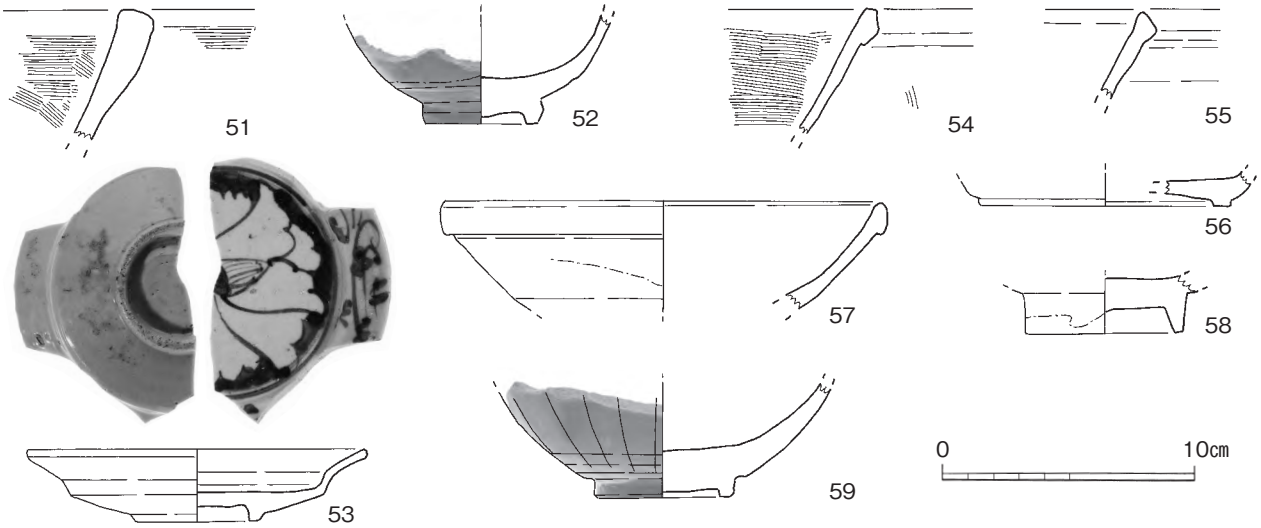
30～32は土師器。30は底部がほぼ完存。口縁部は1/4未満であるが、復元口径4.9㎝、器高は1.5㎝を測る。切り離す位置を間違えたのか、体部下端に未調整の部分がある。31は焙烙の小片か。外面に煤が厚く付着し、口縁部内面も黒変する。32は土師器茶釜で、胎土・作りともに雑なもの。口縁部は直立し、吊手上に７弁の花文を３個続け、右側に間を置いて１個スタンプする。口縁部の花文のあいた位置の肩部にも同じ花文を押している。吊手左側では口縁部のスタンプを欠失するが、肩部では右側とほぼ同じ位置にスタンプがある。器面は黄白色で煤や焦げ付きはない。

33～39は瓦質土器。33は鍋であろう。口縁部内面にしっかりとした稜線が入る。胎土は精良で灰白色、内面が灰黄色、外面には煤が厚く付着する。34は焙烙か。胎土は灰白色、器表は内外面ともに灰黒色に近く、外面には煤がわずかに付着。内面は刷毛目が顕著で、外面では残存部下端に刷毛目が見えるが、上位では指押さえ痕が目立つ。胎土に石英粒が多く入る。35は口端部に刷毛目を施す面をもち、内面では横位刷毛目調整の後にスリ目を入れる擂鉢。外面は指押さえで整形するようで、その口縁部付近が灰黒色となるが、それ以下および内面は灰白色。胎土は精良で、口縁部付近が灰白色、下端付近では芯が灰黒色で内外の器表近くが灰白色とサンドイッチ状になる。また、内面が部分的に茶褐色となり、焦げ付きあるいは火熱を受けたようである。36は口縁部に外傾する面を付すという擂鉢によくある器形であるが、残存部にスリ目はない。内面は横位・斜位の刷毛目、外面も縦位・斜位の刷毛目で仕上げる。内面は灰白色、外面は黒色化していたようである。胎土は精良。37は擂鉢片口の近くの残片で、傾きに不安がある。胎土は黒色緻密で、器表の

近くが内外面ともに灰白色となる。内面は斜位の刷毛目で一部スリ目が残存、外面は灰黒色で刷毛目が見える。38は接合しないが35と同一個体であろう。内面は横位刷毛目の上にスリ目を刻み、外面では指押さえ痕が顕著であるが部分的に刷毛目が見える。これは外面底部付近が黒色、それ以上が灰白色、内面では底部付近が灰黒色である上に焦げ付きあるいは焼かれて黒褐色となる。それ以上は黄白色。胎土はサンドイッチ状となる。39は口縁部がほぼ直立する茶釜。胎土は精良で暗灰色、器表内外面は灰黒色化する。口縁部外面に薄く刷毛目が残るが、その他は横撫でで仕上げ、肩部に細い沈線を１条巡らせる。体部上端の円孔は黒色化していないので焼成後のものであろう。

40～49は陶器。40は体部が緩く蛇行して立ち上がり、口縁部を内側へ鋭く引き出す唐津焼擂鉢。口縁部付近の内外面に暗茶褐色となる釉を掛ける。大部分を丁寧な横撫でで仕上げるが、外面下端付近では篦削りで低くシャープな段を残す。内面下端付近はよく使用されていてスリ目が薄く、器面も滑らかとなる。胎土は微砂粒を含むが精良といってよく、器肉・内面は明灰赤色～灰黄褐色、外面は灰褐色となる。41は備前焼擂鉢で、拡張して甘い凹線を刻む口縁部外面だけが灰黒色に近く、それ以外の体部は灰茶褐色となる。胎土は精良で暗灰色。42も備前焼擂鉢で、外面を見ると粗雑な作りの感があるが、胎土は暗灰茶褐色緻密なものである。外面は体部下端付近まで灰茶褐色となるが、底部外面から内面にかけては黄褐色となり、上位のあまり使用していない部分は赤味をもつ。底部内面付近は手触りが滑らかとなる。

43～49は陶器。48・49は朝鮮陶器でその他は唐津焼である。43は口縁部内面を溝状とする所謂溝縁皿で、胎土は暗灰色精良。釉は灰緑色となる。44は外面では不明瞭であるが内面にはしっかりと屈曲が現れる。これは焼成が甘いものか、釉は灰白色に発色、胎土は精良であるが灰赤褐色～灰黄褐色となる。45は大きな高台をもち、体部下位で緩く屈曲して立ち上がる。総釉で、釉は灰白色に発色、胎土は灰黄色あるいはより赤味をもつ精良なもので、これも焼成不良なのであろう。見込に３個の目跡、畳付にもその痕跡がある。また、高台内の底部にはシワが目立つ。46は45より腰折れが明瞭となる椀で、高台の形状はやや不整となる。基本的に体部下位以下が露胎のようだが、部分的に高台内まで釉が及ぶ。見込に３個、高台にも目跡が残る。胎土は暗灰色緻密、釉は青灰色に発色し、体部外面下位では白色化する。なお、高台内などの露胎部では灰赤褐色（小豆色）に近い。47は体部下位を露胎とし、畳付の角を面取りする。見込に２個、畳付にも目跡が残る。胎土は暗灰色緻密なもので、露胎部は釉に近い部分は赤味をもって発色、高台内は灰黄色となる。釉は灰緑色といった色となる。



第30図　1区溝出土遺物実測図5（溝１、1/3）

48は高台が断面三角形となり、その基部に弱い沈線を巡らせるようである。暗灰色となる胎土は微砂粒を含むが精良なもので、釉は暗灰色となる。総釉であるが、体部下位付近ではムラがある。見込・高台に５個所の目跡がある。49も胎土は48に似るが、釉はより灰味強く発色する。高台は刳り込みが無く、小さな上げ底となる。内外面に目跡が残る。

50は染付で、体部下端が浅く開き、稜をもって屈曲する。後述の53のような器形となるのであろう。図柄もよく似ている。見込には幅を違えて３条の圏線を描き、その内側に牡丹花と思われる図柄を描く。この見込では釉は及んでいない部分があり、また砂粒がいくつか熔着している。釉は青味を以て発色、図柄も濃淡あるが灰味を帯びる。総釉とした後に畳付の釉を掻き取っている。

51は瓦質擂鉢か、胎土は精良といってよく暗灰色、内外の器表は灰白色に近い。調整は細かい刷毛目を主とするが、外面では口縁部付近を除き指押さえで仕上げるようである。52は肉厚の陶器椀。体部外面下端に篦削りが見え、その上あたりから高台にかけては露胎。畳付には糸切り痕が残り、高台基部をわずかに削り込む。胎土は暗灰色精良だが緻密といったものではなく、露胎部は灰茶褐色に近くなる。釉は灰緑色に発色する。53は体部下位が浅く開き、稜をもって強く外反する染付皿で、出土状態の記録がある（図版14）。見込の圏線の数が違うものの50に図示した染付に図柄がよく似ている。器形や法量、釉の発色も同様でありセットにあったものと思われる。見込に牡丹花を描き、体部内面は唐草であろう。外面は無文。

54は瓦質の鉢あるいは鍋小片。口端部にシャープな匙面を作り、外側に肥厚させて断面三角形の突帯を付したような形とする。内面は丁寧に刷毛目が施され、外面は器表が平滑化せず、刷毛目あるいは削りのような痕跡も一部に見えるが、総じて指押さえであろうか。胎土は灰黄色精良で、外面では全体に煤が付着する。55は東播系須恵器擂鉢。口縁部を断面三角形とし、外側上面のみ濃く発色するが全体に青灰色系となる。56は古代の須恵器杯身小片。57は白磁玉縁椀で、玉縁が小振りで垂れるようになる。釉は灰味強く発色。外面下位に篦削り痕がよく残る。58は高い高台をもつ白磁椀底部片で、3/4ほどが残存する。釉は黄味を帯びる。59は蓮弁文で飾る龍泉窯系青磁椀で、図示部はほぼ完周する。釉は灰黄緑色に発色し、内外面とも貫入が多い。畳付は露胎の部分もあるが、その1/2強が剥がれていて、高台内に目土が残存する。

２号溝（図版６、第９図）　調査区南西部の礫を詰めた矩形の布掘掘形を３号溝としたが、これは移転前の建物基礎と思われ、説明を略する。その東側で検出した直線的な溝が２号溝である。

幅0.6m前後で、4.8mの長さを検出したが、そこで途切れて終わる。重複する20・24・27-１号土坑をいずれも切っている。この溝も特に検出面付近で多くの川原石などが検出されたが、規則性は見えず、遺棄されたものと思われる。埋土は灰黄褐色系の砂質土で、地山土に近い。

出土遺物

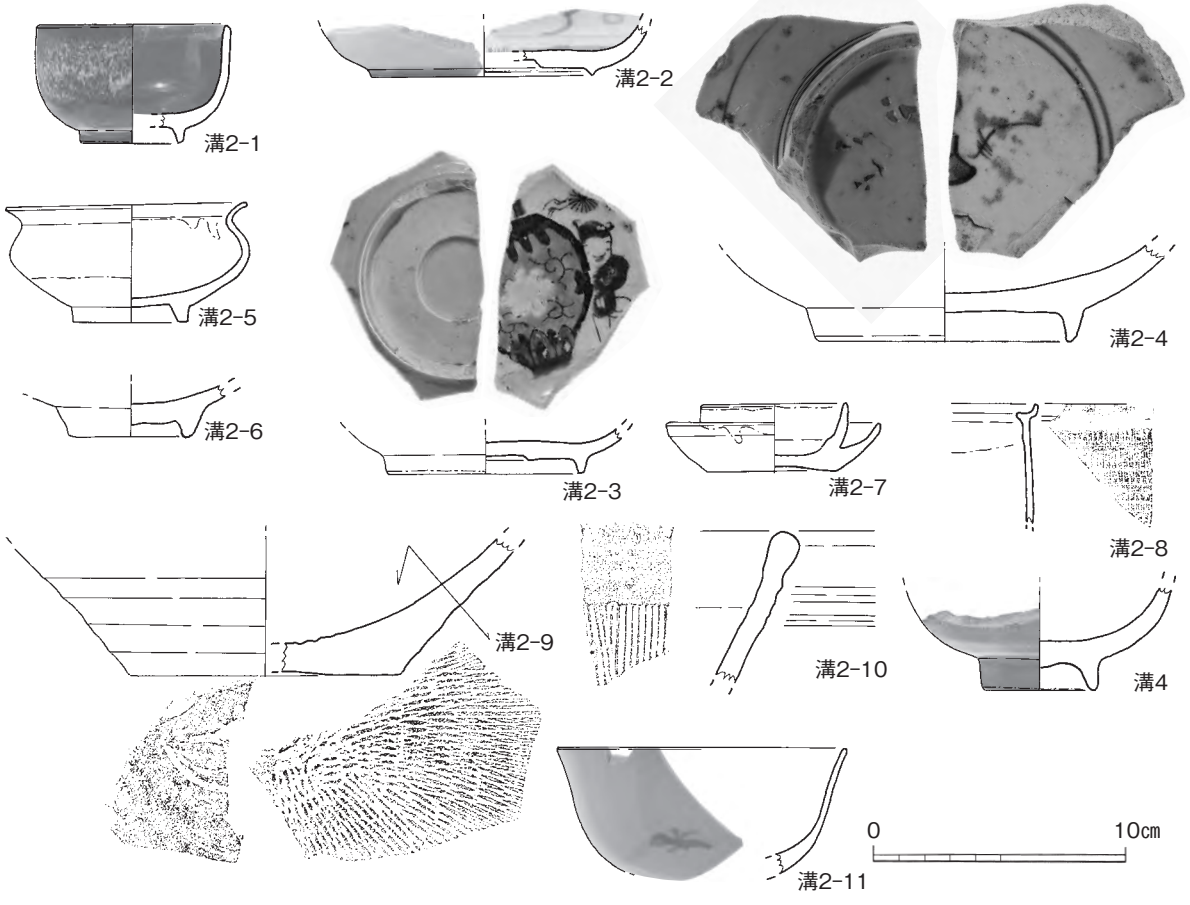
石製品（図版55、第23図15）　「下層」出土の安山岩川原石であるが、図示した面が平滑ではないが滑らかとなる。図示した傷は使用痕とは言えず、図示していない微細な擦痕が認められる。凹んだ部分の中央付近が不整形ながら茶褐色となるが、これが意味をもつものであるかも知れない。なお、本来厚みのある石材ではなかったようであるが、背面のほとんどが破面となる。

土器等（図版54、第31図）　１～６は「溝２」とあり礫群上・礫群中から、ほかは「下層」とあって礫群下から出土したものである。

１は陶器小椀で、胎土は暗灰色緻密。釉は暗緑褐色というような発色だが、口縁部下の外面では広く、内面では狭く白色化する部分がある。畳付は露胎。２～４は染付。２は蛇の目凹形高台と

し、見込外周に二重圏線を配するがその内部は無文、体部の文様は意味不明。同外面では下位に１条、高台に２条の圏線があるが、その上の図柄はやはり意味がわからない。３も中央に置かれたものの意味はわからないが、その脇に唐子、背後に松を描く色絵である。体部外面にも文様の一部が見える。これも底部は蛇の目凹形高台であるが、掻き取った部分の色調は純白といってよい。４も見込外周に２重圏線を描き、その内部のモチーフはわからない。外面は体部下位と高台の圏線が残るだけで、高台のそれは始点と終点がずれる。畳付の釉を掻き取るが、高台内には部分的に釉が及ばないところがある。５は白磁の火入か。口径の大きい壺形となり、青味をもつ釉は口縁部内面から体部外面中位におよぶ。体部下半は篦削りを行うようであるが、釉がその上でとどまる部位、削り取られた部位がある。高台断面は整った方形。上述したように内面のほとんどが露胎であるが、底部中央付近が不整形に灰黄色化していて、化粧土が塗られるようである。６は総釉の青磁椀。高台は畳付が小さく、すぼまって畳付の全面に砂が付着する。釉は深みのある灰青色に発色する。

７は陶器灯明皿。受皿外面は底部までごく丁寧な篦削りで仕上げ、露胎となる。また、受皿口縁部付近、灯明皿口縁部付近の内外面が露胎となるが、外面の方が範囲が広い。釉は灰緑色となる。８は口縁部を受け口とする薄手の陶器で行平か。口縁部外面から内面のやや下位までが露胎。内面では一面に、外面では横刷毛状に濃淡を付けて茶褐色釉が掛かる。また、外面には所謂トビカンナを用いたような短線が連続する施文が全面に付される。９は備前焼擂鉢で胎土は精良緻密。底部外面に糸切り痕が残る。底部付近は胎土・器表ともに明灰赤色、残存部上端付近ではいずれも暗灰色となる。作りは丁寧。10は口縁部を玉縁とし、外面にごく甘い突帯を２条付す陶器擂鉢。全面に灰茶褐色釉を掛ける。胎土の色がよく見えないが、赤味をもつようで唐津焼であろう。11は染付椀。外面に蝶と思われる手描き文様が２個所に見えるほかは無文。釉は青味を帯びる。



第31図　1区溝出土遺物実測図6（溝２・溝4、1/3）

４号溝（第４図）　１区西北部を西側へ拡張したが、その付近にある小溝。幅0.2mほどで、深さは0.1mに満たない。耕作に関連するものであろうか。

出土遺物

土器等（第31図）　灰黄色の素地、器表も灰黄色となる京焼風陶器で、文様はない。畳付は丸味をもつが露胎となる。

５号溝（第４図）　１区西北部を拡張したその西端で一部を検出した。幅はおよそ１m以上であるがこれも深さは0.1mに満たず、調査範囲が狭いこともあってよくわからない。

６号溝（図版14、第４図）　東半調査区の東より、巨株の南側で一部を検出したものである。南壁の観察では、上端幅1.5m、下端幅0.8m、深さ0.4mほどの小規模な溝で、２mほどの長さを確認しただけである。下から２番目の堆積層は炭を多く含む暗灰色粗砂という特徴的な埋土をもつが、調査区北端付近では続きを確認していない。

７号溝（第４図）　東半調査区南東隅付近で確認したもので、幅0.9～1.2m、深さ0.2mほどの浅い南北溝である。埋土には締まりのない灰褐色土と地山土が混ざっていて、耕作に伴う遺構であろうと思われる。

３）　その他の遺構と遺物

柱穴や遺構検出作業中の出土遺物および不手際から出土地が不明となった遺物に説明を加える。

Ｐ３（第４図）　1区南西隅にある。上端は一辺長0.4～0.5mほどの方形に近い形状であるが、0.15mほど掘り下げたところにテラスがあり、そこから床までは0.3mほどである。床面は円形。

出土遺物

土器等（図版54、第34図）　図示部がほぼ完周する青磁椀底部で、素地は暗灰色緻密、薄く掛けられた釉は灰黄緑色といった発色となる、釉は内面全体と外面では体部下半に及ぶが、高台付近は施釉されていない。また、内面では見込の釉を蛇の目に釉剥ぎしているが、その付近に施釉された低い段が残っていて、釉剥ぎする前、整形時に見込に段を付していたものと思われる。釉剥ぎした部分やその内側に重ね焼きによる色調の変化と白色目土が熔着する。畳付には目跡等重ね焼きを示す痕跡は見えない。

Ｐ７（第４図）　調査区西端近くに位置する、直径0.2m強、深さ0.3mほどの小型柱穴。

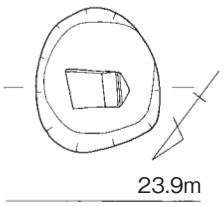
出土遺物

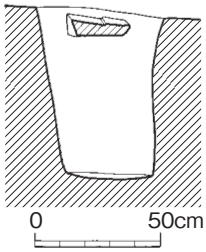
土器等（第34図）　白磁玉縁椀であるが、口縁部はもう断面三角形に近く、かつ下位が２段となる。釉は灰黄色に近く発色。

Ｐ37（第４図）　１区西よりの10号土坑に掘り込んだ柱穴で、上端で直径0.3～0.4m、深さ0.3mほどの規模である。

出土遺物

土器等（図版54、第34図）　素地が灰黄色、釉が白濁半透明となる唐津焼である。素地は精良堅致。低いがしっかりとした高台を削り出し、体部下端に幅の狭い篦削りを施すほかは横撫でで仕上げる。施釉は内面と体部外面下半までで、高台周辺は施釉されていない。見込には白色の目跡が残り、外周に２条の圏線を描き、発色が悪いが鉄絵であろう。



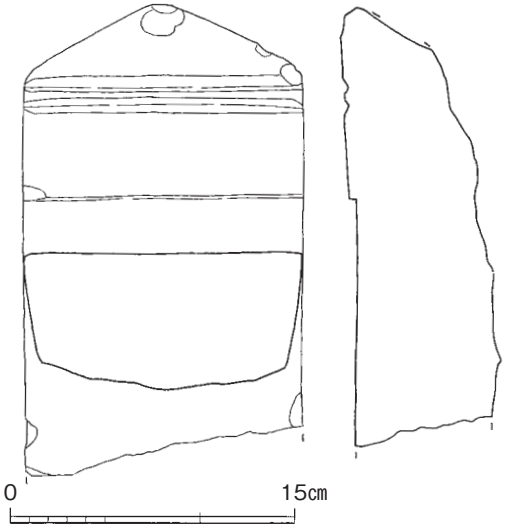


第32図　1区P90板碑出土状態実測図（1/30）

P90（図版14、第32図）　37号土坑の直ぐ南に近接する柱穴。直径0.5mの扁円形を呈し、深さは0.7mを測る。この柱穴の埋土最上部といってよい部分から板碑（碑伝）の残片が、額部を上面に向けてほぼ水平の状態で出土した。

出土遺物

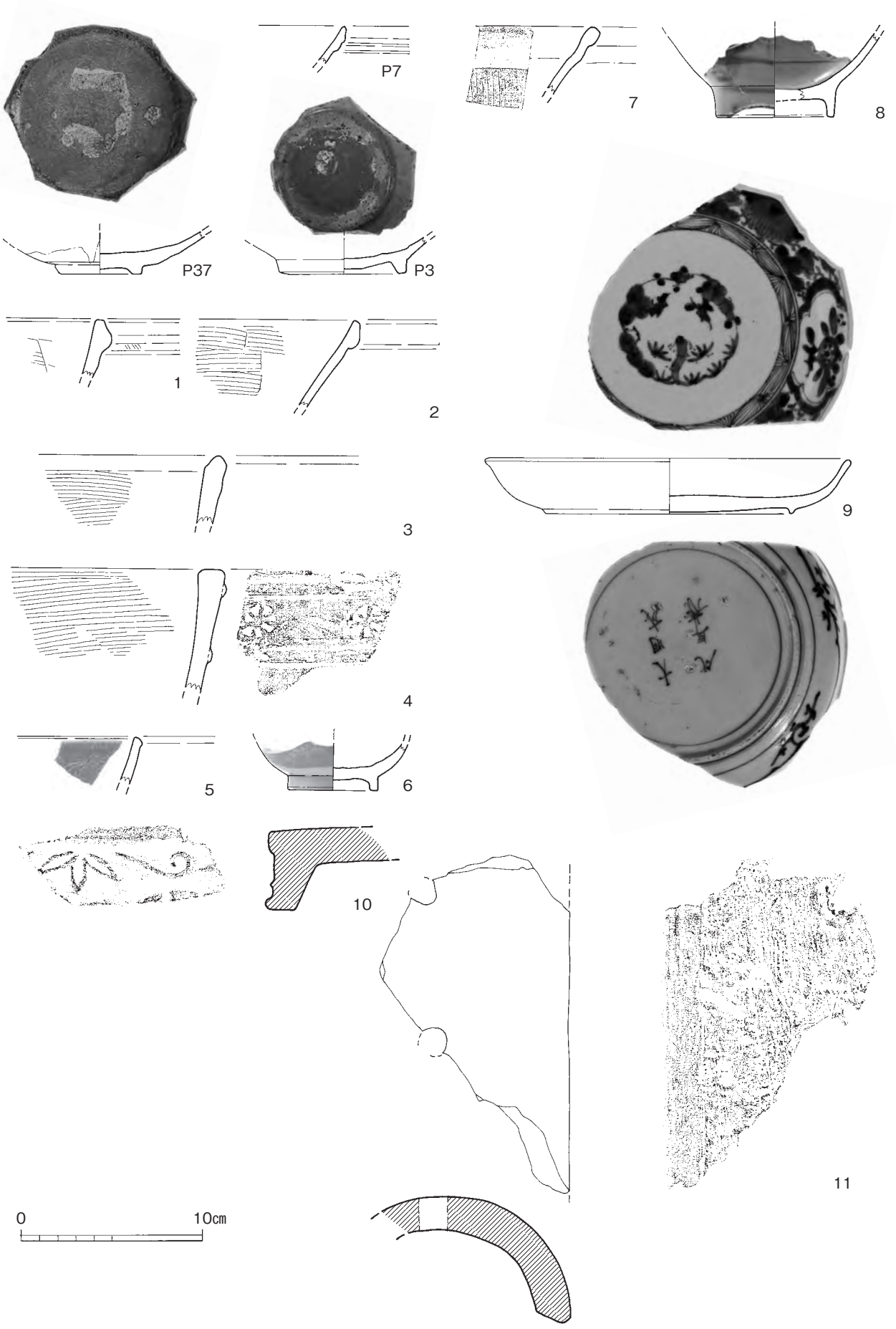
石製品（図版56、第33図）　砂岩製の板碑（碑伝）である。頂部は勾配の緩い山形に整形、頂部背面を欠損するが、四角錐とはならない。頂部下に断面Ｖ字形となる２条線を前面のみに刻み、下位の線の下4.5㎝のあたりに５㎜ほどの顎を付す。文字等は見えない。正面および左右両側面を丁寧に平滑化するが、手触りはざらつく。背面は粗成形のままで、整形していない。下端の破面は明灰色となるが、正面は暗褐色で図右下隅付近は赤変する。左右両側面や背面は破面と同じ色調であり、正面だけ火熱に晒されたようである。



第33図　1区P90出土板碑実測図（1/4）

その他の土器等（図版51、第34・35図）　遺構に伴わない土器、あるいは不手際で注記が判読不能になった遺物の一部を紹介する。

第34図１～11は「土16北付近検出」と注記がある。11～15・17・22号土坑などが密集する付近での検出作業中の出土である。１・２は土師質の鍋あるいは鉢。１は胎土が赤味を帯びる黄褐色となり、良好であるが金雲母が目立つ。意図的なものであるかも知れない。口縁部を断面三角形とし、上端に面を作る。内面は弱い刷毛目、外面は撫でるようである。三角形とした口縁部下方から体部にかけての外面に煤が付着。２も口縁部上面に面を付して肥厚させる点は同様だが、最大径部がやや下がる。胎土・調整手法も１と同様のようだが、外面は全面に煤が厚く付着して見えない。３・４は瓦質土器。３は口縁部内面にしっかりとした稜線を残して面を作る鍋あるいは鉢。胎土は比較的良好で、器壁の厚い部分では芯が灰黒色、内外の表層が灰黄色となる。内外の器表は灰褐色で、外面の一部に煤が付着する。４は口縁部がほぼ直立する火鉢で、胎土は精良といってよく灰黄色となる。器表は暗灰色で、内面は粗く刷毛目が残るが、外面は横撫であるいは篦磨きで仕上げる。形状が雑な花文をスタンプするが、その上下に幅広い断面蒲鉾形の突帯を巡らせる。５～７は陶器。５は灰赤色となる精良緻密な胎土をもち、残存部の全体に灰緑色となる釉を掛ける。施釉は内面で厚く、外面では薄いようである。内面に線刻で文様を描くが、詳細は不明。６は体部外面下位まで施釉、内面が露胎であることから瓶類であろう。胎土は灰黄色精良緻密なもので、露胎部も同色である。釉は灰茶黒色とでもいうような発色となるが、光沢が乏しい。残存部では横位の篦削



第34図　1区その他の出土遺物実測図1（1/3）

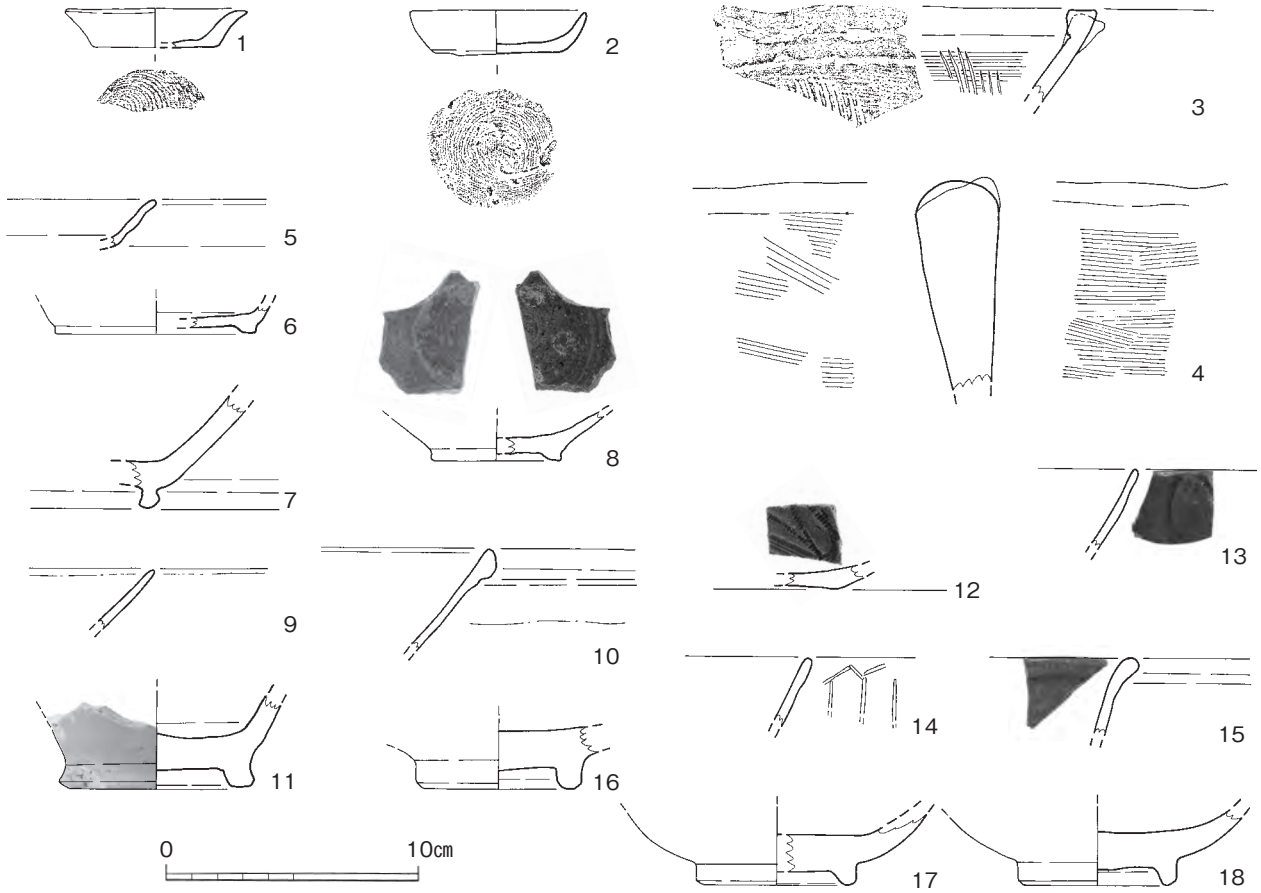
り痕は見えないが、縦位の微少な凹凸が目立つ。７は擂鉢小片、胎土は灰黒色で精良緻密。口縁部内外面のみに灰茶褐色に発色する釉を掛け、露胎の部分も灰茶褐色というべきか。幅狭いスリ目を刻む。８・９は染付。８は椀で、体部外面に文様の一部が見えるが意味は不明。内面は見込外周の圏線だけが残る。９は高台の小さな皿。体部に数種類の花文、見込外周の二重の圏線、それに接する内側にやはり花を表現したものか複線文、そして見込中央に松竹梅を円内に描く。外面は体部に唐草文と圏線、高台内に「大明成化年製」と記して、中心からずれた部分に正三角形の各頂点の位置および中央の４個所にハリ痕がある。畳付だけが露胎。

10・11は瓦。10は中心飾り付近が残る。胎土は砂粒を含むが比較的良好といってよく、瓦頭面と顎部が暗灰色、凹面・凸面は赤味を帯びる灰黄色で、特に凸面と瓦頭裏の赤味が強い。調整痕はよく見えない。12は丸瓦片で、これも灰色の胎土は良好といってよい。内面に粗い布目、外面は縦位に丁寧に撫でるようである。直径1.4㎝の円孔が２個、焼成前に穿孔され、全体がよく黒色化するが光沢はない。

第35図は注記したラベルが不良で文字が不明となり、出土地がわからなくなったもの。

１・２は土師器、３・４は瓦質土器、５～７は須恵器、８は朝鮮陶器、９～11は白磁、12～18は青磁である。

１は体部が強く外反外彎する小皿で、胎土精良。丁寧に作られ、赤く焼き上がる。底部外面に回転糸切り痕が残る。復元口径7.2㎝、器高1.5㎝を測る。２は体部が内彎し、灰黄色～暗灰色に焼き上がる小皿で、微砂粒を含むとはいえ胎土は良好といってよい。口径7.1㎝、器高1.8㎝である。３は口縁部を断面三角形として内側へ肥厚させる擂鉢。胎土は微砂粒を含むが灰黄色で良好、器表は全面が黒色化する。内面は横刷毛の後にスリ目を刻み、外面の調整痕はよくわからないが、縦位刷毛目のように見える。４は大型土器の小片。微砂粒を含むが器壁の厚さに比べれば良好といってよ



第35図　1区その他の出土遺物実測図2（1/3）

い。胎土の大部分が灰黒色、器表の数㎜が灰黄色となり、表面はさらに黒色化する。上面の一部が山形となるようであるが、欠失。５は胎土精良、作りも丁寧な皿小片。６は底部外縁に小振りの高台を付す杯身で、底部外面は篦切りである。外面全体だけが灰を被って黒色化する。７は瓶類の底部片。胎土に２～３㎜の砂粒が目立つが、緻密なものである。外面は篦削りで仕上げるが、下端の高台との境付近は強く横撫でを施す。８は朝鮮陶器。断面三角形に近い低い高台をもつ1/2の残片であるが、見込、高台にそれぞれ３個の目跡が残る。総釉で、灰黄緑色といった発色となる。胎土は暗灰色精良。

９～11は白磁、12は同安窯系、13～17は龍泉窯系青磁である。９は口縁部内面を幅広く、同外面では幅狭く削り取って露胎とする口禿皿片。釉はやや黄味を帯びる。10は玉縁椀片で、体部外面下位は露胎で篦削り痕が明瞭となる。これも釉は黄味を帯びていて、口縁部上端で特に顕著となる。11は瓶類の底部でほぼ完存する。高台は畳付を大きく、その外側を小さく削って面を作るが、それは施釉前で面の一部に釉が垂れている。高台外側面付近から高台内にかけて露胎とするが、残存する底部内面には全面に釉が掛かっている。素地は灰白色で釉は黄味を帯びる。12は皿底部の残片。底部外面を篦削りし、ここのみ露胎。釉は灰味帯びる緑色となる。13は無鎬の蓮弁文を片切彫りで描く椀で、釉は灰黄緑色となる。素地は暗灰色。14はしっかりとした縦沈線の上に弱く山形を置く細蓮弁文の椀で、13に比べて器壁が厚く、釉は灰味帯びる水色となる。15は口縁部が弱く外彎する椀で、無文。器壁が厚く、釉は灰味の強い灰青色となる。16は高台が肉厚で直立する底部。総釉とした後で高台内だけを蛇の目に釉剥ぎし、高台内側面に目跡が付く。釉は見込では黄味強く、外面では青味が強く発色する。17は畳付・高台内ともに部分的に釉が掛かり、高台内に目跡が付着。釉は黄味強い灰黄緑色となる。18は畳付とその外側を削って面を付すが、これも外側の面の一部に灰味強い水色の釉が垂れている。高台内はすべて露胎。これも龍泉窯系か。

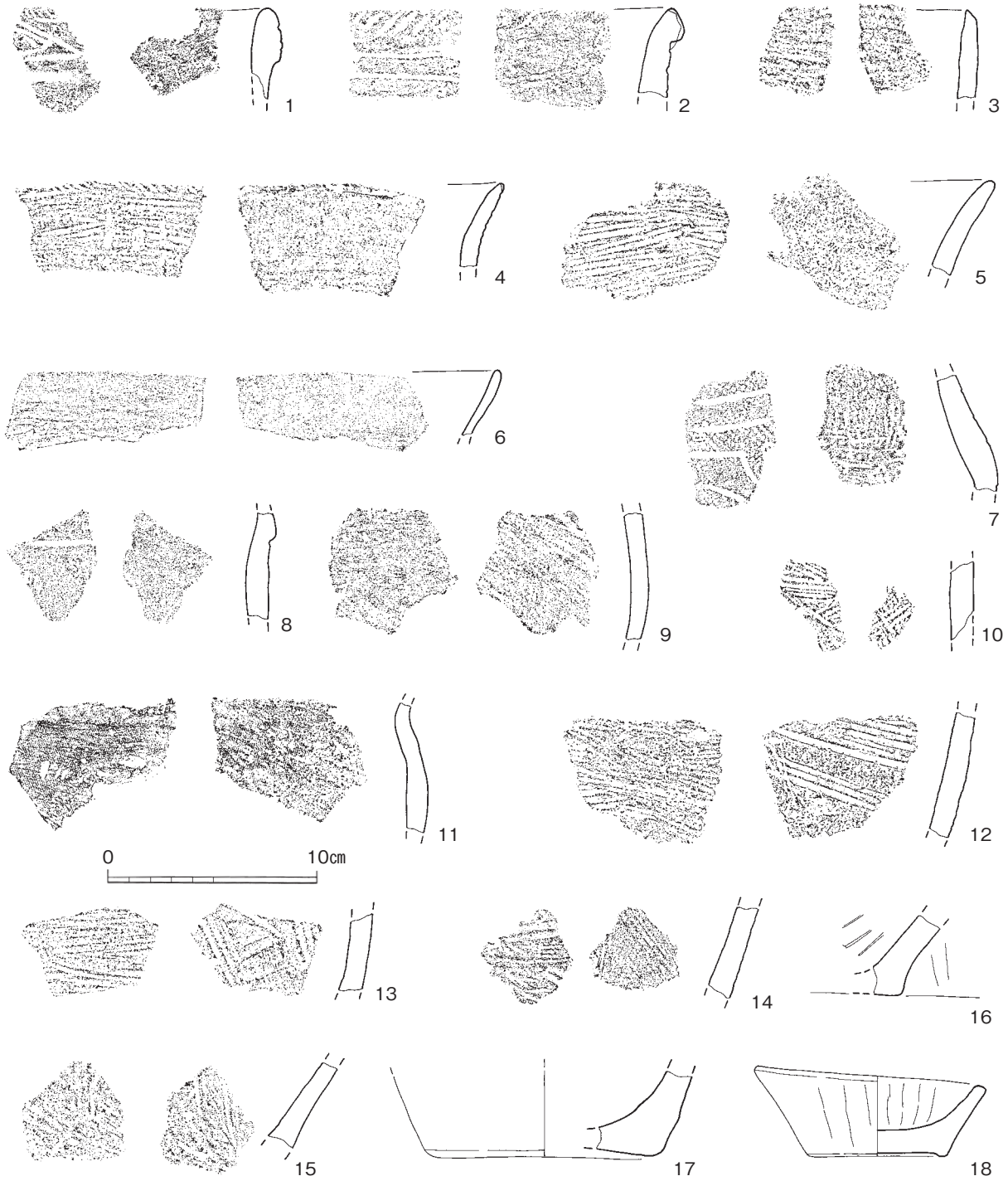
その他の石製品（図版55、第23図17）　直方体に加工した滑石製品で、一部を欠損する。図示した面に小さな凹みがあるが、これに意味はなさそうである。検出作業時の出土。

縄文土器（図版56、第36図）

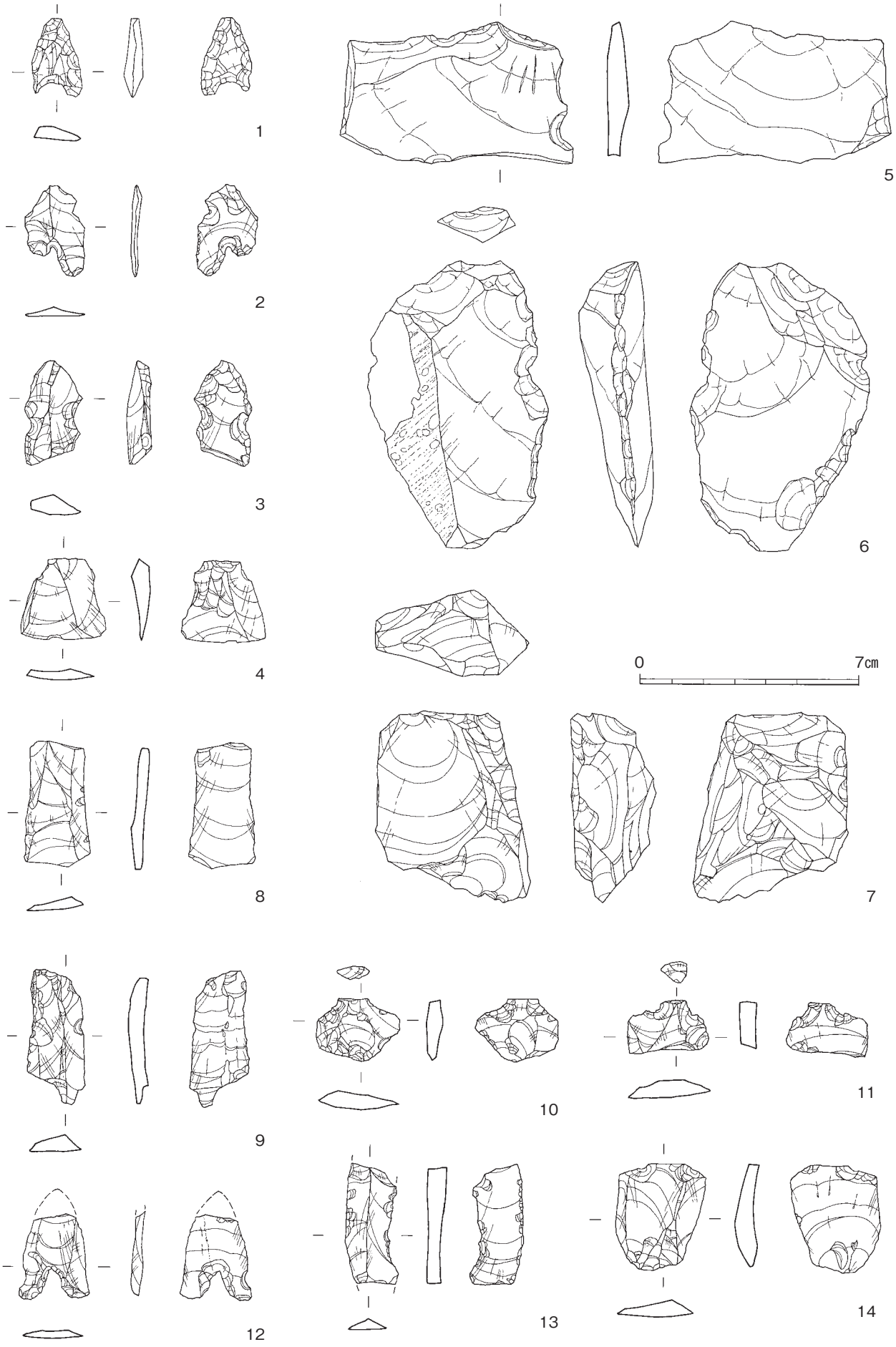
総数が多くないので、１～３区出土の縄文土器をここでまとめて報告する。６・８・15・17が２区、14が３区、その他が１区出土であるが、土坑・溝・柱穴や包含層の出土であり、本来的な位置を失っているので詳細は略す。ただ、器表の摩耗がほとんど無く、遠隔地からの流入は考えなくてよいであろう。

１は口縁部を外側に肥厚させて文様帯とする。薄く終わる頂部には二枚貝によるものと思われる刻みが付され、主文様は篦描の直線で構成される。残存する内外面は篦磨きで調整するようである。２も口縁部をわずかに肥厚させて、その上面に篦描の斜行沈線を連続させ、破面にかかるものも含めて３条の水平な篦描沈線を巡らせる。残存部右端に瘤条の隆起の一部が見える。調整は内外面ともに篦磨きである。３はほぼ直立して薄く終わる口縁部小片。内外面ともに条痕で調整。４は弱く外彎する口縁部片で、端部に篦描の刻みを入れるほかは外面を条痕で埋め、内面は撫でで仕上げるようである。残片中央の口端部に小さな剥離痕があり、わずかであるがその両側が低くなるようである。５も外彎する口縁部片であるが、４に比して器壁が厚い。外面は条痕で埋め、内面は撫でで仕上げるようである。６はわずかに内彎する口縁部片であるが、下端が外方へ開くようである。内外面ともに撫で調整か。砂粒が見えるが、ほかの土器に比べれば格段に微少で少ない。形状

や装飾性において特記すべき土器ではないが、製作時に胎土に対する特別な配慮があったものと思われる。７は磨消縄文の小片。無文部は篦磨きで調整する。内面は上半で縦位の、下半では横位の撫で調整か。灰黄褐色を呈する内面に対して、外面は灰褐色～灰黒色となる。８は残存部上端近くに横位の沈線を巡らせて、その上位を肥厚させている。肥厚部に施文は見えないが、篦磨き調整された沈線以下とは見た目が異なっていて摩滅したものか。内面は撫で調整のようである。９はわずかに内彎する体部片で、外面上半は撫でで下半は条痕のようである。内面は篦削りか。10は内外面に粗い条痕を残す小片。11は上端が外彎していて肩部の破片であろう。外面は篦磨き、内面は篦削りで部分的に篦磨きを施すようである。これもほかに比べて胎土が選別されるようで、外面には砂粒が見えない。12は内外面に巻貝を使用した条痕が残る。外面は横優先の斜位で全面を覆い、内面



第36図　1～3区出土縄文土器実測図（1/3）



第37図　1区出土石製品実測図2（打製石器、2/3）

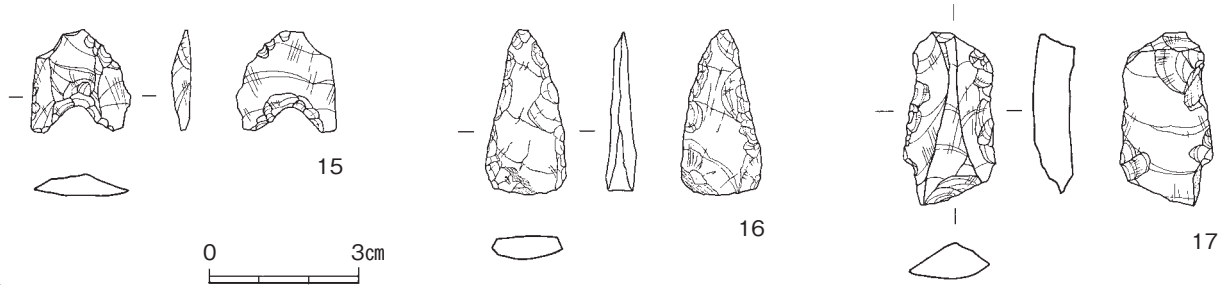
では単一方向で不連続に残る。13では外面でほぼ同一方向の条痕が見え、内面では条痕は同じ方向であるが、その下に条痕と直角に近い方向で別の工具を使用した調整痕が残る。14も内外面に条痕を残す小片。15は底部に近い体部下端の小片。これも内外面に条痕が残る。16も底部小片で15に似るが器壁の厚さが異なる。17はわずかに上げ底となる肉厚の底部片。体部下端の内外面がよく赤変する。18は一見弥生土器かと見まごう灰黄色の鉢である。底部は上げ底となり、体部が直線的に立ち上がる。一部で口縁部が残存するが、それより高い位置に破面が残っていて、本来水平口縁ではなかったようである。以上は縄文後期中頃の土器群と見てよく、本遺跡の南西約２㎞ほどに位置する那珂川沿いに展開する山田西遺跡と共通する内容であるとの教示を得ている。

打製石器（図版56、第37・38図）

１は１号溝南半上層出土の安山岩製石鏃。左右非対称となる。2.2×1.4×0.5㎝：1.0ｇ（長さ×幅×厚さ：重量、以下同）。２は１号溝北端付近西辺肩付近に位置するＰ72出土の腰岳産黒曜石製の剥片鏃。で細部の調整は少なく、一方の先端を欠く。2.6×1.7×0.3㎝：0.5ｇ。３は両側縁に抉りを入れた二次加工剥片で、腰岳産黒曜石を使用する。１号溝南半部の礫上出土。2.9×1.5×0.7㎝：2.3ｇ。４は31号土坑出土の腰岳産黒曜石を使用した二次加工剥片.2.3×2.4×0.5㎝：2.0ｇ。５は１号溝北半最上層出土の安山岩製二次加工剥片。側縁に粗い剥離痕があるが、使用痕といったものは見られない。3.7×6.1×0.6㎝：22.7ｇ。６は１号溝北半下層出土の安山岩剥片。両側縁に使用痕が見られる。7.9×4.9×1.8㎝：56.6ｇ。７は腰岳産黒曜石の石核で１号溝南半礫群中以下と注記がある。5.2×4.1×2.4㎝：44.4ｇ。８・９は41号土坑出土の腰岳産黒曜石を使用した縦長剥片。８は図上下を折損する。3.4×1.8×0.4㎝：2.1ｇ。９も図下を折損。これは一方の側縁に使用痕が認められる。3.6×1.6×0.5㎝：2.6ｇ。

10以下は遺構検出時の出土あるいは出土地不明のものである。10・11は腰岳産黒曜石のつまみ形石器。上辺の左右直下に抉りを入れている。それぞれ1.7×2.3×0.5㎝：1.8ｇ、1.3×2.3×0.4㎝：1.7ｇ。12は先端を欠く剥片族で腰岳産黒曜石を使用。2.3×2.0×0.3㎝：1.1ｇ。13は腰岳産黒曜石を使用した縦長剥片。上下両端を折損するが、左右両側縁を使用している。3.1×1.3×0.5㎝：2.1ｇ。14も上辺の左右直下に浅い抉りが見え、つまみ形石器であろう。下端にはスリガラス状の擦痕が見える。2.9×2.4×0.5㎝：3.5ｇ。15は腰岳産黒曜石製の剥片族。原形を留めるようである。2.0×1.9×0.4㎝：1.1ｇ。16は安山岩製で、形状は石鏃であるが刃部がない石鏃未製品か。3.3×1.7×0.6㎝：2.8ｇ。17は腰岳産黒曜石を使用した二次加工剥片。3.4×1.8×0.7㎝：4.5ｇ。

以上の石器群も先述した縄文後期土器群と時代的な齟齬はなく、この地に足跡を残した縄文人は山田西遺跡を根拠地としていたのであろう。



第38図　1区出土石製品実測図3（打製石器、2/3）

２　２区の調査

２区も宅地であったが、庭として使用されていて建物はなかった。ただ、１・３区との間には市道、２区東端付近には自動車の出入口が、そして中央付近に住宅へ通じる道があるなどのため、ここも狭い調査区を南北に分けてそれぞれ２Ｅ（東）、２Ｗ（西）区として以下を続ける。

２Ｅ区では、北辺に沿って１ｍ強の幅で0.1ｍに満たない浅い包含層が堆積していて、それを除去して比較的密集する柱穴群が現れた。最も深い柱穴は0.8ｍの深さを測るしっかりとしたものであったが、建物跡を構成するものは確認できない。

２Ｗ区も遺構の密度は濃いというべきであるが、北東隅の206号とした大型土坑は炭などとともに「大正４年」銘土器を始めとする多くの遺物が出土、隣接する210号土坑にも大量の炭や焼土塊・廃材が入っていて、これらは火災家屋を片付けた際のゴミ穴を思わせた。これらからは、新旧入り交じった遺物が出土している。

１）　土　坑

201号土坑（図版15、第39図）　２Ｅ区東北隅で検出した土坑で、南北長1.2m、東西長１ｍほどの規模まで確認した。内部に隅丸長方形あるいは長円形といった掘り込みがあり、その長さは0.7m以上、幅は0.5mで、その部分の深さは0.2mほどである。検出面からの深さは0.6mほどとなる。ただ、これも複数の遺構が重複していることも考えられる。

出土遺物

土器等（第40図）　頂部が山形となる細蓮弁を刻む龍泉窯系青磁椀小片。素地は暗灰色、釉は灰緑色透明となる。

202号土坑（図版17、第39図）　２Ｗ区北西隅で検出した埋甕の底部付近で、1/2ほどを検出した。壁面を清掃したが、掘形は判然としなかった。また、埋甕の周囲には直径1.3m、深さ0.1ｍに満たない浅い落ち込みがあり、甕を取り巻くかのような幅0.2m、深さ0.1ｍの弧状溝が掘られていて、これらも埋甕に伴うもののようである。

出土遺物

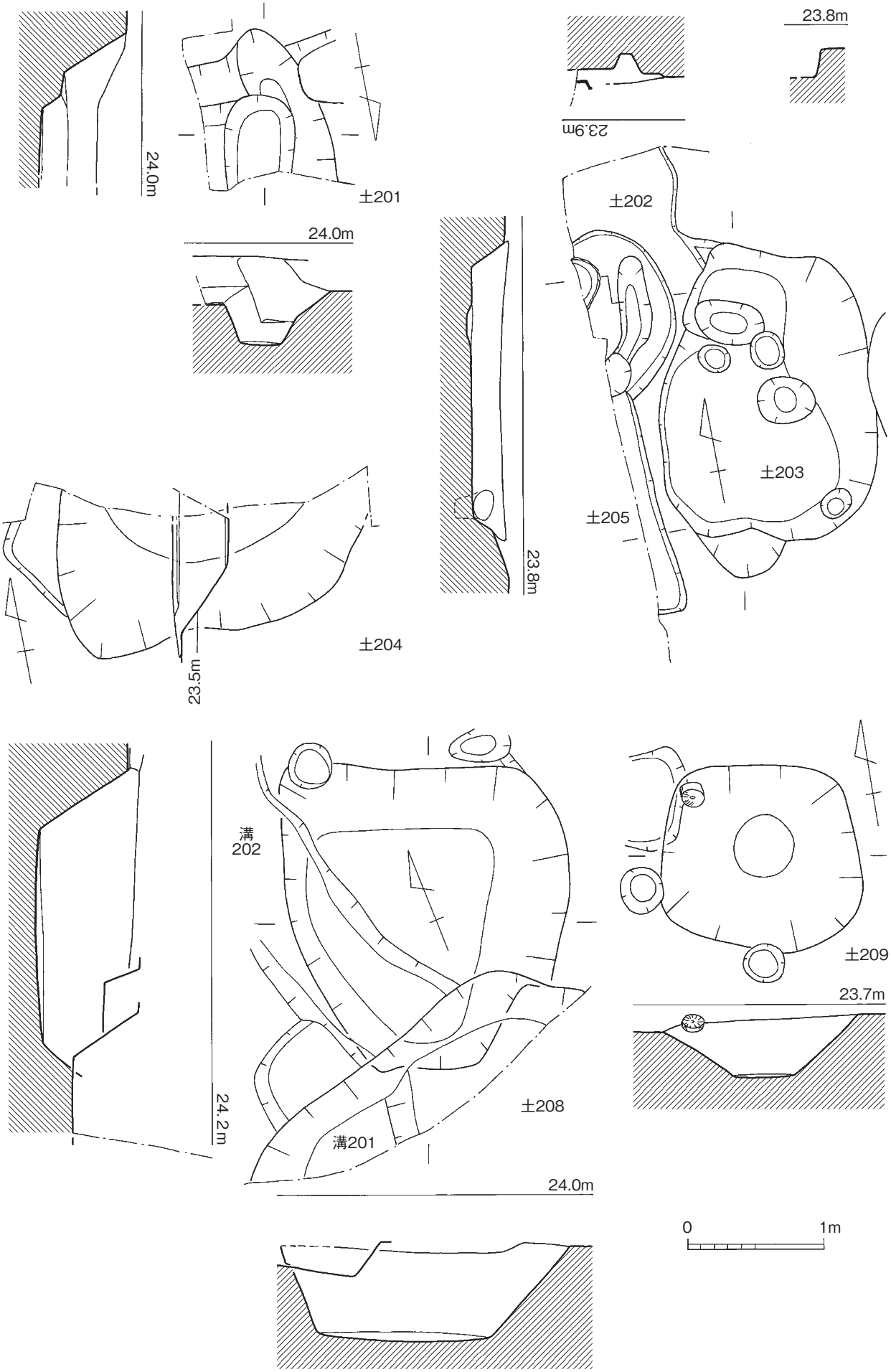
土器等（第40図）　埋甕は瓦質土器で、取り上げ時に細片化し、図示していない。１は灰黒色に近い緻密な胎土をもつ陶器片で、鉢形となろうか。口縁部を外側に肥厚させて玉縁状とし、全体に釉が掛けられる中、この上面部だけが６㎜ほどの幅で釉を掻き取るあるいは施釉がごく薄くなっている。釉は暗茶褐色不透明で、無数の黒色の斑点が生じている。２は染付小椀。高台が華奢で、畳付だけ釉を掻き取っている。文様は圏線と円文のほかはわからない。

203号土坑（図版17、第39図）　２Ｗ区北西隅、202号土坑の東に近接し、南北長2.1m、東西長1.8mの不整長方形を呈する。床面も不整形で、深さは最大で0.3mほどである。

川原石や土器が検出されたが、多くは床面から浮いていてやはり規則性は認められない。

出土遺物

土器等（第40図）　１は体部が内彎する土師器皿で、胎土に金雲母や赤色微砂粒が目立ち、底部外面に回転糸切り痕が残る。２はしっかりした高台が付く大型の土師器皿あるいは杯の底部片。



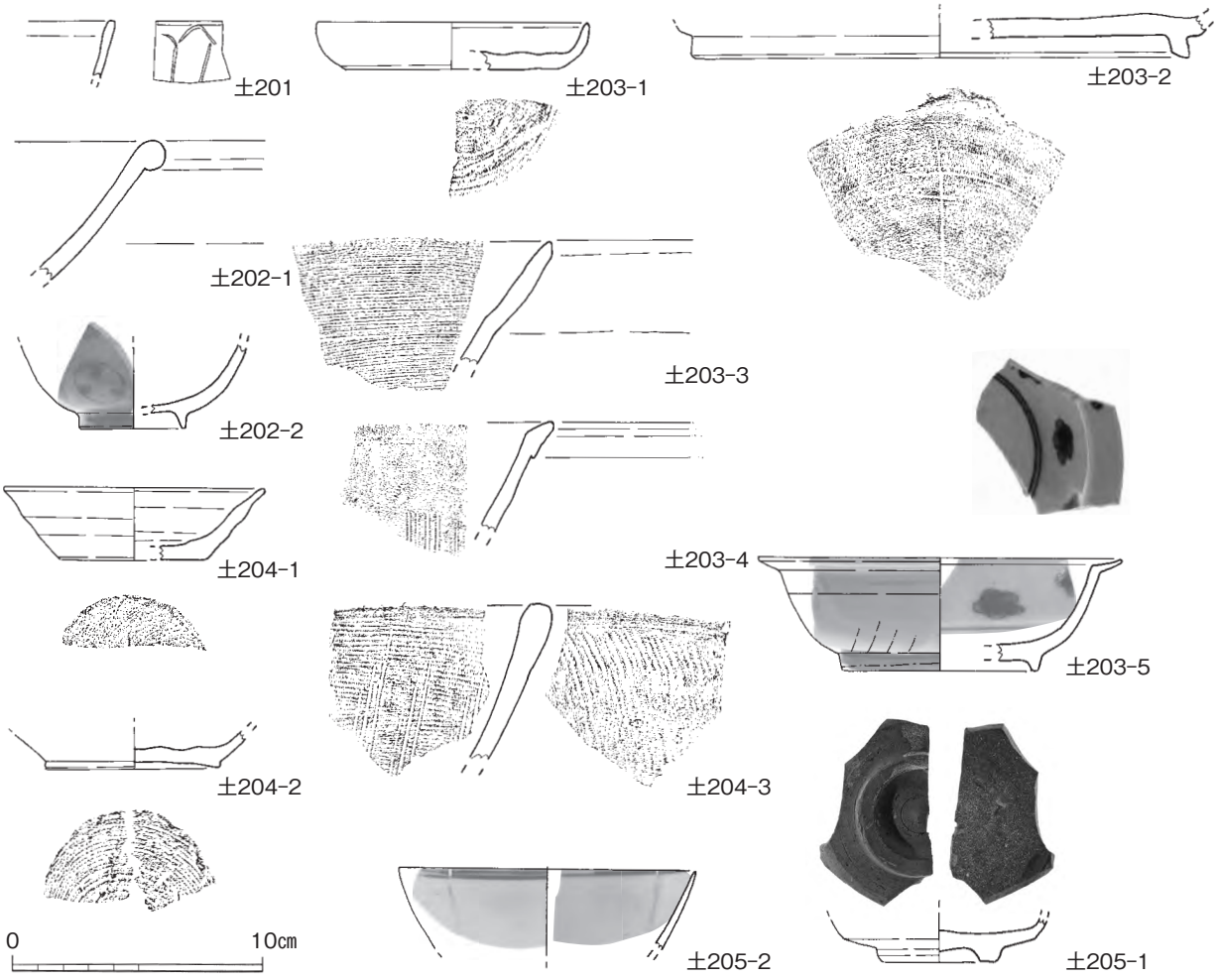
第39図　2区土坑実測図1（201～205・208・209号土坑、1/40）

全体に灰赤色となり、意図的に赤く焼かれたものであるかも知れない。底部外面は回転篦削りで丁寧に仕上げ、篦記号と思われる直線が１条走る。同内面は荒れて調整痕が見えない。胎土に微砂粒を交えるが精良といってよいであろう。他の須恵器と同様の８世紀後半のものであろう。３は瓦質の鍋。内面は丁寧に横刷毛を施し、外面は手捏ねであろうか、口端部を除いて明確な調整痕は見えない。内面が灰黄色、外面が灰褐色で、胎土も内側が黄褐色、外側が暗灰色となり、精良といってよい。４は口縁部を外側に折り返して肥厚させる陶器擂鉢。胎土は灰赤色だが、全体に施釉されて内外面は灰黒色に近くなる。５は口縁部を外折させる染付皿で、畳付とその外縁だけ釉を掻き取っている。見込外周に二重圏線、体部には梅花と思われるものを描き、口縁部内面にも同様の一部が見える。外面は体部下端付近の３条の圏線だけが施文されるが、体部下位に斜位の突線状の隆起が見える。４条だけであり、意図したものでなく整形時の痕跡であろうか。

204号土坑（図版17、第39図）　２W区北辺の西よりに位置する。検出した上端は東西長2.3m、南北長1.2mほどの不整円形状であるが、下端は確認した範囲で直径1.5m以上の比較的整った円形となっている。深さは最大で0.4mである。

土層を図化していないが、埋土の下層には青灰色系の耕作土のような堆積があり、その上に地山土を交えた黄褐色土の堆積が見える。埋土上位で小礫がまとまって検出されたが、これは西側から投棄されたような状態であった。

出土遺物



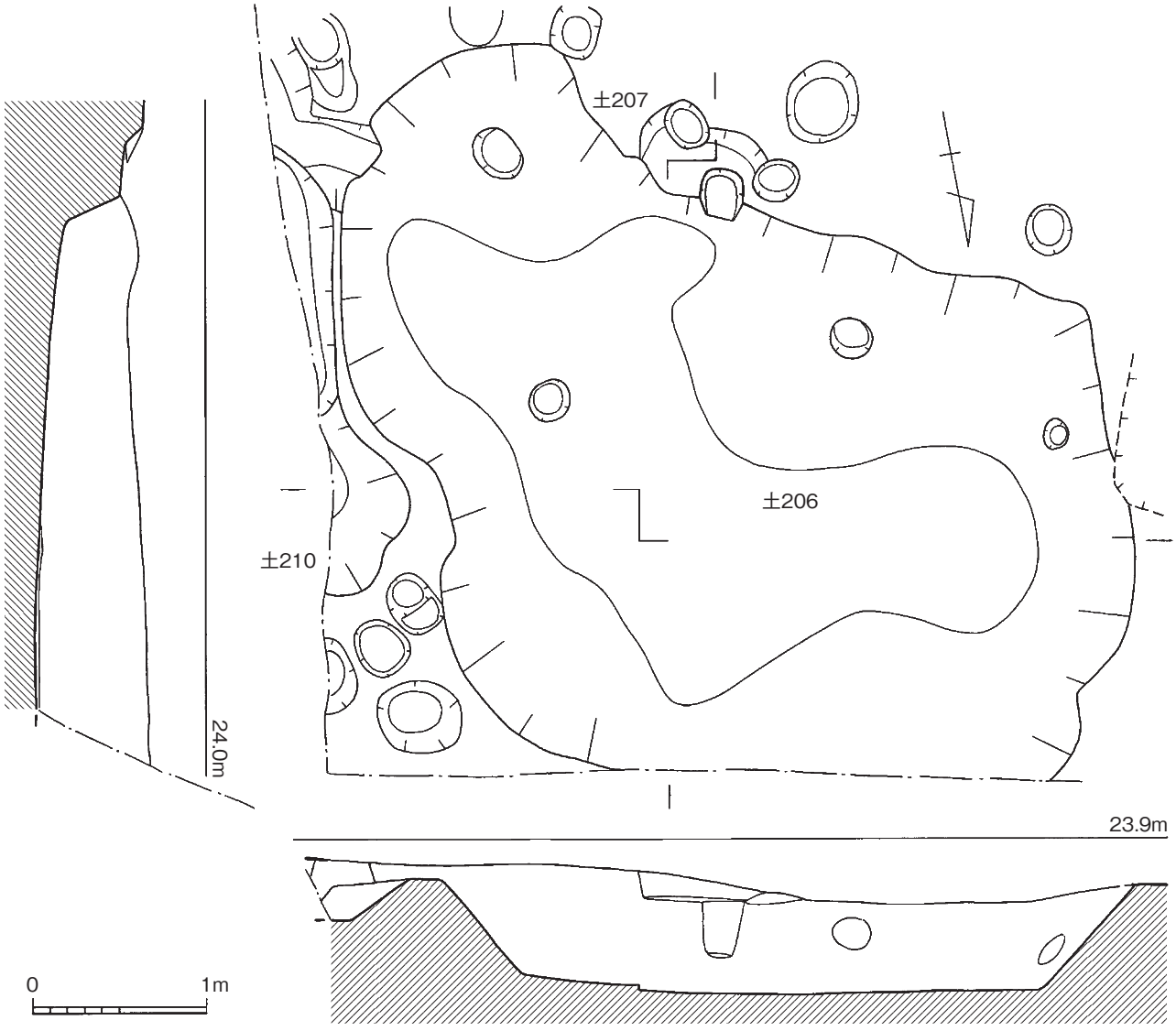
第40図　2区土坑出土遺物実測図1（201～204号土坑、1/3）

土器等（第40図）　１・２は土師器皿というよりは杯とすべきか。１は全体がわかるもので、体部が急角度で直線的に立ち上がる。胎土は微砂粒を含み灰白色に近いが、内外の表層近くは灰黄色～黄褐色となる。２も体部と底部の境は明瞭で、１に似た形状になるものかも知れない。これは胎土精良で、見込に水挽き痕らしきものが見える。３は瓦質擂鉢小片。胎土は灰白色に近く、微砂粒を含んで緻密さを欠く。内外面全体を灰黒色とし、内面では粗い横刷毛の後にスリ目を入れ、外面では指押さえ痕と斜位の刷毛目がよく残る。

205号土坑（図版17、第39図）　北西隅の202号土坑とした埋甕に切られて、その南に位置する土坑で、長さは1.6m以上、深さは0.2mほどに過ぎない。ここも小礫が多く入っていた。

出土遺物

土器等（第40図）　１は体部下位が水平に近く広がって急角度で立ち上がる椀であろう。高台は大きいが低く、体部下端だけ篦削りを施す。胎土は灰赤色緻密なもので、内面では釉は薄く白濁する。残存する外面は基本的に露胎であるが、一部釉垂れが見える。見込に２個所の小さな目跡があるが畳付には見えない。唐津焼であろう。２は薄手の染付椀小片。口縁部外面に２条、内面にも２条の圏線を巡らせるようであるが、内面のそれは癒着する。また、発色に斑がある。



第41図　2区土坑実測図2（206・207・210号土坑、1/40）

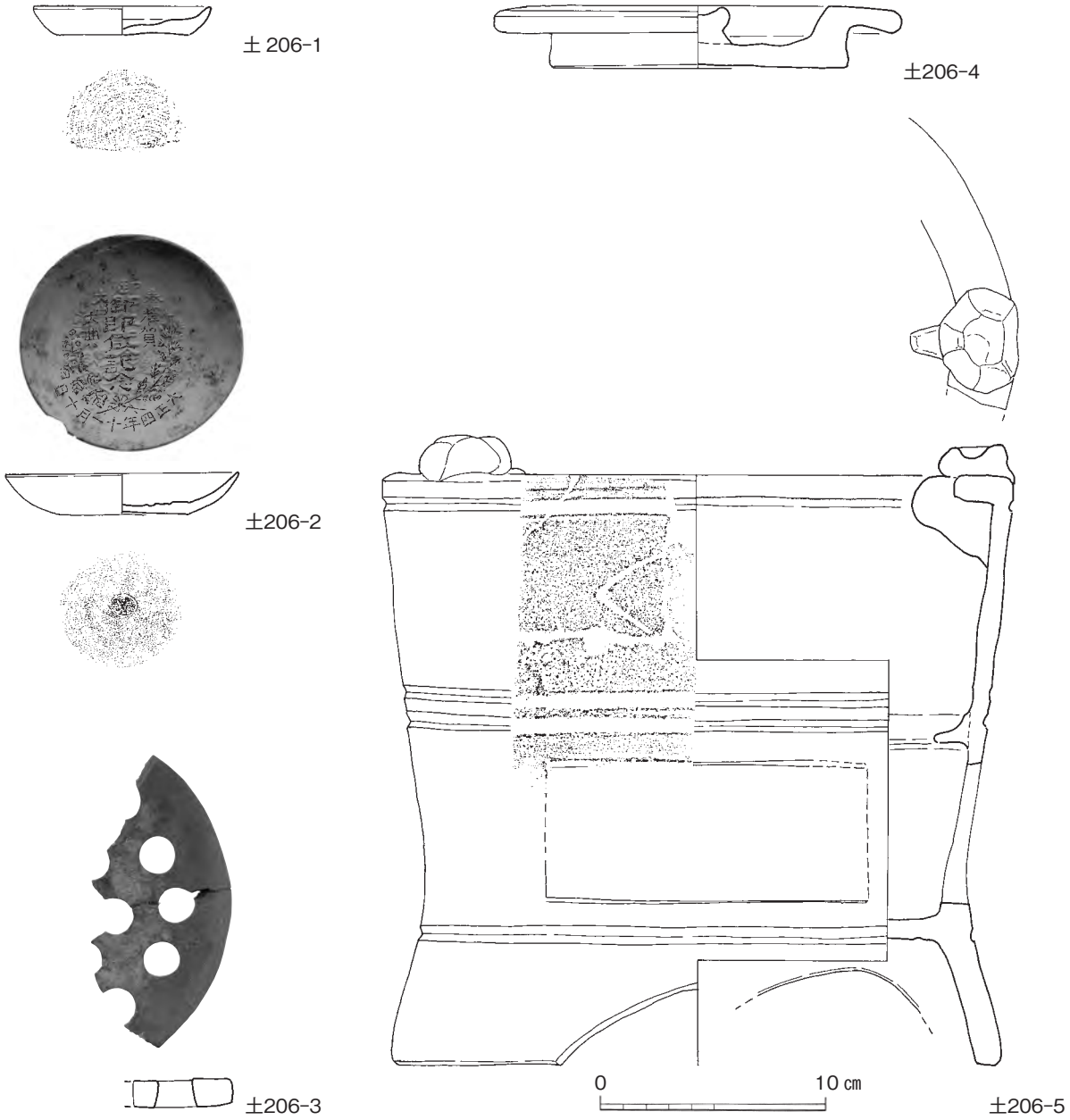
206号土坑（図版17、第41図）　北東部の大型土坑で、炭を交えた暗灰色砂（質土）が主要な埋土であった。東壁に沿ってわずかな部分を確認した焼土・炭が詰まった210号土坑との厳密な切り合い関係は確認できていないが、内容から見て火災後の一連のゴミ穴であろうと思われる。

上端で東西長4.6m、南北長４m余りの不整形土坑で、深さは最大で0.8mほどとなる。床面の形状も不整であり、特別な意図を持ったものでなく、ゴミ処理のために掘削したものと思われる。

出土遺物

土器等（図版57・58、第42～46図）　第43図８・９、第46図51～54は「下層」、その他は「上層」出土。

１～５は土師器。１は小皿で、底部の1/2ほどが残存。胎土精良で、黄白色～灰黄色となる。底部外面に回転糸切り痕、同内面には轆轤整形によると思われる凹凸が見える。２は胎土精良で灰白色～黄白色となる皿。底部外面は丁寧な篦削り、その他の部位は横撫でで仕上げる。内面は中央で結わえた桐花を左右に広げ、その上中央に大きく「御即位記念」、その右に「奉賀」、左に「大典」とやや小さく記す。桐花の下位には右から「大正四年十一月十日」と入れるが、これらはいずれもスタンプで陽刻されたものである。また、底部外面には判読が難しいが、「飯塚町」と読めそ



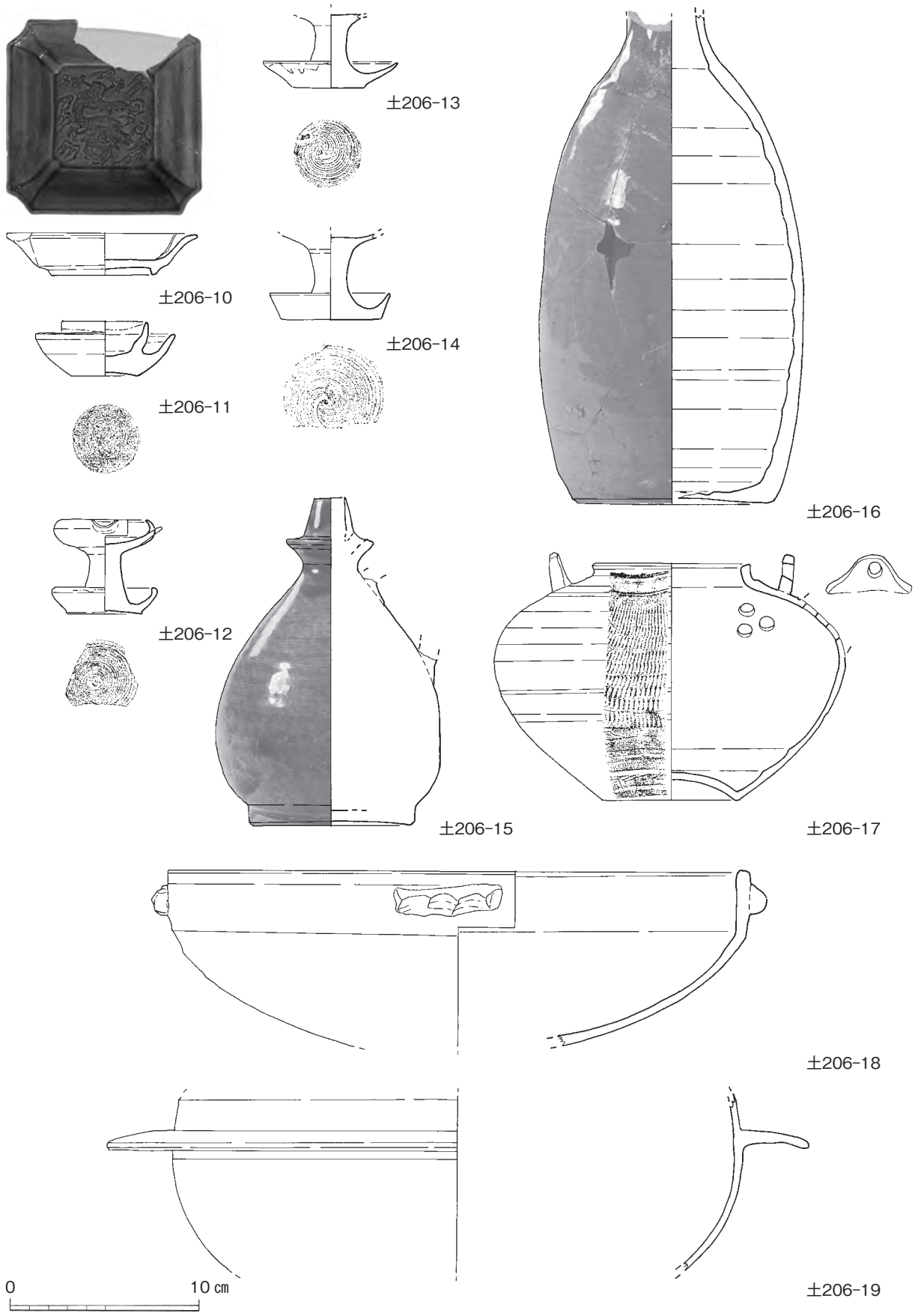
第42図　2区出土遺物実測図2（206号土坑−1、1/3）

第43図　2区出土遺物実測図3（土206号土坑−2、1/3・1/4）

うな楕円で囲んだ文字が陰刻されている。３は１～３㎜の砂粒を数点交えるが精良といってよい胎土で作られた簀の子片。わずかに彎曲していて、凹面となる図上面では外側が黄褐色、その内側が灰赤褐色、さらに内側が灰白色となっていて、被熱の度合いによって変化している。凸面は灰黄褐色のままで直接火に接していないことがわかる。４は蓋で、突出する下面に煤が多く付着、口縁部下面には見られないことから、火消し壺のようなものの蓋であろう。これも胎土はおおむね良好といってよい。煤が付着する部分の調整痕は不明であるが、全体に横撫でを多用している。５は黄白色土師質の所謂七輪。胎土は緻密さを欠くものの砂粒の混入は少ない。口縁部を内側へ水平に折り返し、その上に５方向から押さえて五角形に近く成形、さらに頂部を凹ませて五徳とする突起を載せる。この突起は２個は接合不可だが計３個が出土。体部中央付近の内面に突帯を巡らせるが、これは簀の子を受けるためであろう。その下位に大きな長方形の通風口を配する。下端には大きな刳り込みがあって、三脚とするようである。口縁部直下、体部中位付近、底部付近の外面に１～２条の沈線を入れるが、口縁部直下のそれにはほぼ全周に鉄錆が付着していて、鉄線で締めていたのであろう。外面は全体に丁寧に篦磨きを行ったようであるが、上部沈線以上と脚裾を除くほぼ全面で器表が剥落する。内面は横撫で調整であるが、簀の子受部の下位が部分的に剥落するほかは器表の遺存状態が良く、変色も見られない。ただ、体部内面の簀の子受部以上の上半、五徳、口縁部正面には煤が多く付着、その他体部外面でも部分的に厚い煤あるいは吹きこぼれが残る。なお、通風口の上部、中央からやや左に偏すると思われる部位に菱形の左半分の線刻がある。

６～９は瓦質の大甕。６は口縁部付近の外面の一部を除いて器表のほぼすべてが剥落する。胎土は灰色で最大５㎜ほどの砂粒が多く見える。器表が残る部位はよく黒色化する。７は素地中心部が暗灰色、器表近くが暗灰黄褐色となり、器表を黒色化したようだが口縁部付近の内外面で暗灰褐色となり、下位では黒色となる。胎土に微砂粒が多く混入、内外面ともに刷毛目を多用する。８は体部上端近くの外面が赤味帯びる灰黄褐色、それ以下の外面と内面の全体が黒色化している。素地の芯付近が暗灰褐色、器表近くが灰赤褐色に近いサンドイッチ状となり、砂粒を多く交える。外面上部には部分的に斜位の刷毛目が残るがほとんどはカキ目状の水平な刷毛目である。内面は上端付近でカキ目状の、以下は斜位の刷毛目である。底部内面は刷毛目、外面は剥落が多くてはっきりしないが型押しで成形するようで無調整と思われる。内面では中位やや下方に白色の付着物があり、その付近は器表の遺存状態がよいが、付着物から上は剥落が多い。外面では上下の剥落が目立ち、中位付近の遺存度が高い。なお、口縁部付近は内面に粘土紐を付して厚みを増すが、その部分の接合を容易にするために複数の沈線を刻んでいる。９は身の深い鉢で、これは砂立を多く含む灰白色の胎土で、内外の器表全面が黒色化する。体部は内外面ともに斜位の刷毛目、底部内面は刷毛目、同外面は型押し未調整。内面では口縁部下５㎝付近以下に濃淡があるが白色の付着物がほぼ全面に付着する。白色付着物は小便器として使用されたことを示す。

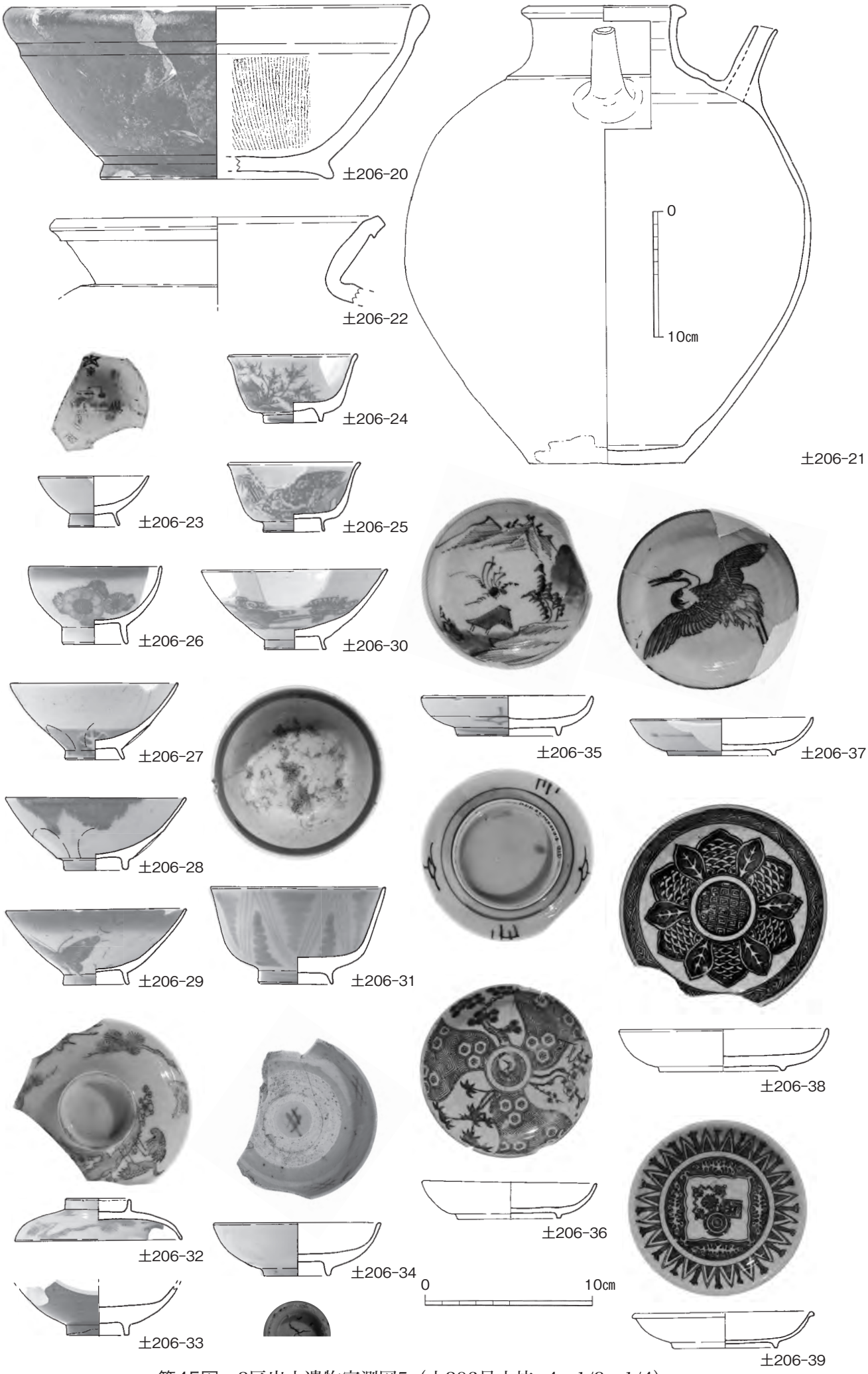
10～22は陶器。10は方形皿で、灰白色～黄白色精緻な胎土に黄褐色に発色する釉を掛け、畳付付近だけが露胎となる。内面底部に正面を向く龍を陰刻していて、そのスタンプはよく見えるが、調整痕などは見えない。11は受皿付の灯明皿。胎土は暗灰色精良緻密なもので、受皿外面の口縁部直下から底部にかけてとても丁寧な篦削りで仕上げる。灰緑色に発色する透明釉は灯明皿の口縁部付近を除く全体、受皿内面の半分ほどに掛けられる。12～14は秉燭。12は精良緻密な胎土をもち、露胎部は黄白色～灰白色となる。茶褐色となる釉は受皿外面を除いて全体に掛けられていて、一部は受皿外面にも垂れている。露胎部に見える横撫でや回転糸切り痕などは非常に丁寧である。13は受皿体部が浅く開くもので、これも基本的に受皿外面を除いて全体に施釉し、灰味の強



第44図　2区出土遺物実測図4（土206号土坑-3、1/3）

い灰黄褐色に発色する。胎土は灰黄色で精良緻密なものである。14は灰白色の胎土で、精良だが緻密さを欠く。受皿の外面は露胎で、底部外面には回転糸切り痕を残す。受皿の内面から脚部中位までは黄褐色、それ以上は薄緑色に発色する釉が掛かる。15はすぼまる口縁部をもち、その下位に大振りの突帯を巡らせ、突帯の基部に斜位の小孔を穿つ油差。底部は丁寧に篦削りしていて、外周も小さく面取りを施す。面取りした面には釉が垂れているが、底部は露胎。内面も見える範囲は施釉していて、釉は暗茶褐色透明に発色する。上の把手下位から下の把手下位までの間はカキ目風の調整、体部下位に熔着痕が残る。16は灰黄色～灰色の精良緻密な胎土の瓶。頸部下までは緑青釉が濃い青灰色となり、それ以下は灰黄色となるが、これはほぼ無色の透明釉であろうか。内面にも釉が垂れているが基本的に露胎である。底部外面の回転篦削り、外縁の小さな面取りは15に似る。17は注口を欠損する土瓶。胎土は精良で黄白色緻密、口縁部外面からトビカンナ風に施文された範囲に施釉し、その部位は明灰黄色といった色相となる。注口部に３孔があって、それを円形の沈線が囲む。耳にも同様に貼付部の輪郭に沿う方形の沈線があり、円形沈線も注口の接着を補強する処置であったと思われる。上げ底となる底部、体部外面下半の丁寧に篦削りされた露胎部に煤の付着が著しい。内面は赤味を帯びていて湯垢が付着する。18は焙烙。これも黄白色精良な胎土であるが、緻密さを欠く。口縁部上面から内面全体に薄く施釉し、灰黄色～黄白色となる。手捏ねの把手が２個所にあって、そのやや下位以下は丁寧に回転篦削りで仕上げ、煤が付着する。19は胎土・作り・釉の発色等18によく似る羽釜で、鍔の上面から体部内面にかけて施釉する。鍔の下位はごく丁寧な回転篦削りで仕上げている。外面に煤などの痕跡は見えないが、内面には茶褐色に変色した部位が残る。20は低い高台から緩く内彎して立ち上がる体部に玉縁状の口縁部を付す擂鉢。胎土は灰黄色～黄白色で混入は少ないが緻密さを欠く。底部を除いて総釉で、暗茶褐色に発色する。スリ目は密。21は暗灰色精良緻密な胎土をもつ壺で、ほぼ全体が残る。短く直立する頸部に玉縁状となる口縁部を付し、体部は張りが強く、肩部に弱い段を付して装飾とする。体部下端付近から底部外面にかけては露胎、内面も基本的に露胎とする。また、口縁部内側上端付近の釉は掻き取っている。底部外面には回転糸切り痕を残す。22は短い口頸部をもつ須恵器甕で、口縁部を外側へ肥厚させて断面方形とする。

23～47は磁器。椀・皿はいずれも畳付を露胎とする。23は純白の白磁小椀。薄手で、内面中央に日露戦争時の「二十八糎榴弾砲」と思われる大砲が砲身を左に向けて砲弾を詰め込む様子を置き、その上方に日本帝国陸軍の星章、その下に右から「對重□」、大砲の下は欠損が多いが「婦念」の二文字が見える。これらはすべて金色で描く。24は口縁部をわずかに外反させる小椀で、外面に藁葺き風の家屋と大樹を描く。反対側にも大樹が描かれるが、共通する部位がないために同じ図柄の繰り返しであるか不明。鮮やかな青色に発色し、大樹には花あるいは果実と思われる珠点が黒で描かれ、その周囲は黄味を帯びる。内面は無文。25は24に器形が似る小椀。これは外面に「富士山に松」・「梅花」・「竹に満月（太陽）」を描いた３枚の扇子を重ね、その真反対に扇子の向きを変えて「海から昇る太陽（沈む満月）」を描いた扇子を１枚置く。青の発色は灰味が強く、富士山・太陽（あるいは満月）の背景となる空と梅花の中心部は金色で塗りつぶしあるいは描く。扇子の輪郭にかすれ部分がある。内面は無文。26は高台が高く、体部が強く内彎する。体部外面の対称的な位置に大小２種類の花文を描くが、大小を入れ替えている。花文は緑と金を意識したような色相で描き、塗りつぶした部位は斜線となる。花文のモチーフはわからない。また、口縁部内外面を青く塗るが、その下端は漸移的。内面は無文。27～30はやや外方に踏ん張る華奢な高台が付き、体部の内彎が弱いもので、口径10.1～11.2㎝、器高4.3～4.8㎝で近い法量となる。



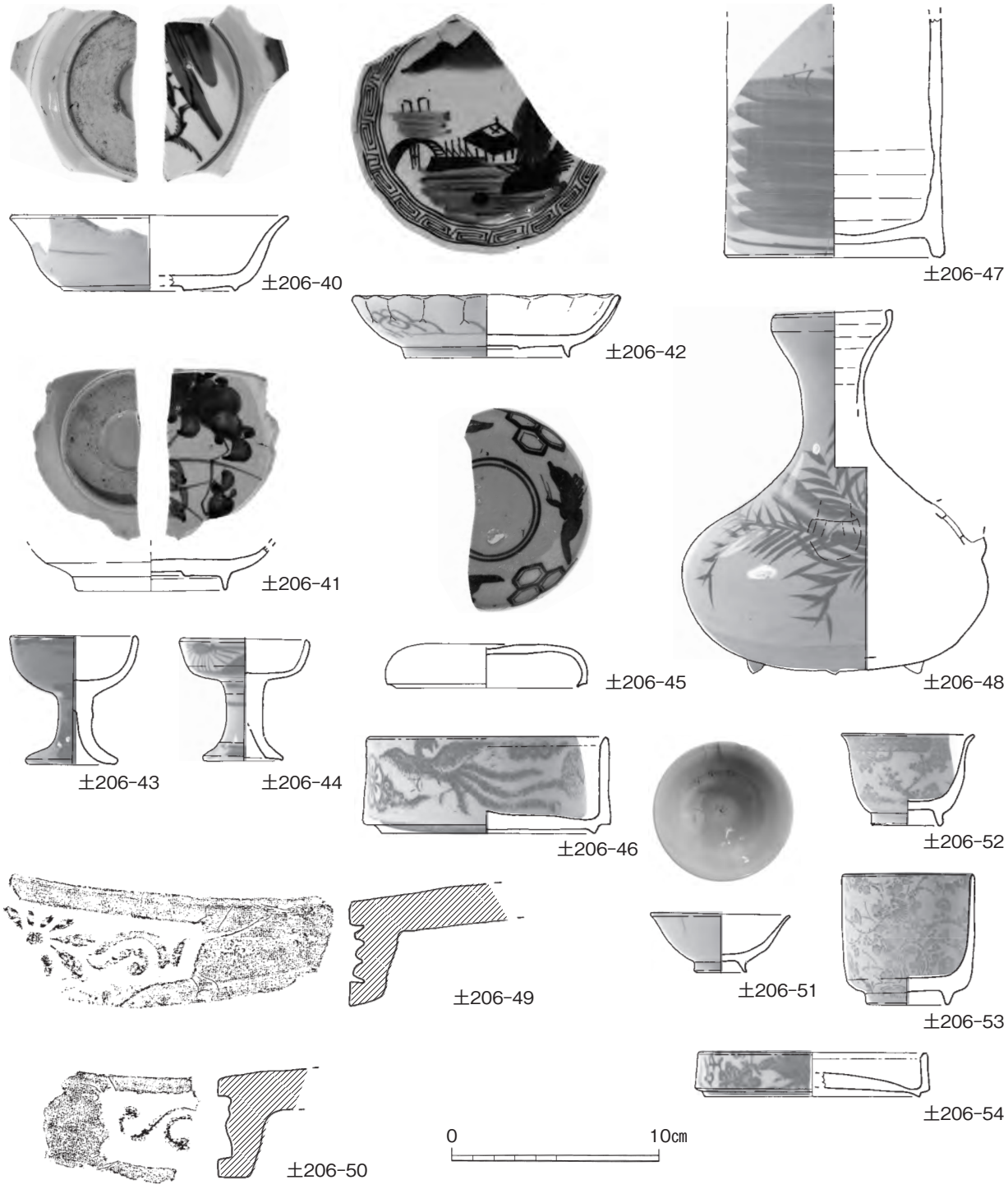
第45図　2区出土遺物実測図5（土206号土坑−4、1/3・1/4）

27は体部下位をカキ目調整してその部分を灰褐色に塗り、その範囲の５個所を押さえて青地に白抜きの樹影を配する。青い部分は地の灰褐色の釉が弾けているが、青塗り部のすべてが合致するわけではなく、ずれている。28も体部下端付近の６個所を半長円形の型で押さえているが、ここは無文。口縁部内外面の２個所に鉄釉を掛けて、暗茶褐色とする。29は大小２匹のアゲハチョウを緑色で描くが、これは同一文様の繰り返しのようで、塗りつぶしは細線で表現する。26と同様に口縁部内外面を青くし、その下端は漸移的となる。30は菊水文様で、流水を鮮やかな青で、その上に金色を意識したような黄褐色で描いた菊花を置く。２つの文様を相対して置くが、一方は菊花を二つ、他方は菊花が一つで異なっている。菊花と読み取れないほど乱れたものや塗り潰しが線で表現される部分がある。31はほぼ完存する椀。口縁部内面に幅広い横帯を描き、見込には変形字（「壽」？）を置く。外面は三条の線を山形に置き、その間を濃淡をつけたよろけ縞文で埋める全体に文様簡素な椀である。32は蓋で、天井部に松と鶴、梅を複数描くが欠損部が多く全体はわからない。文様の一部が乱れて判読できない部分があり、これも印判手であろう。青の発色は灰味を帯びる。33は体部から高台にかけての外面に暗茶褐色に発色する釉を、高台内及び体部内面に青味を帯びる白色釉を掛ける磁器椀。見込を蛇の目に釉剥ぎしているが、さらにその上に黄白色となる化粧土を塗る。34は見込を蛇の目に釉剥ぎした後に白色の化粧土を塗っている。見込中央、体部内面の２個所に傾いた「井」字状の文様が残り、外面は無文。釉を掻き取った畳付に砂が付着、高台内にヒビが入る。35は体部の形状が32に似るが、高台が小振りであるために皿とした。内面には手前に家屋、奥に山岳を置くが、中央の図柄は船の帆のように見える。外面には単純な文様２種４個を交互に配置するが、正確な配置ではない。36は中央に鶴、その外周に松竹梅を置くが、それぞれの間を幾何学文帯で画する。これは文様が薄緑色に発色、口端部を赤くするようである。外面は無文。

37は内面に大きく翼を広げて飛翔する鶴をくすんだ青色で描き、口端部及び外面口縁部下の圏線は茶褐色に発色するが、特に圏線は不連続で半周するだけで終わる。38は小振りの高台をもつ皿。内面に雷文・青海波・葉文を配置する。発色が鮮やかで濃く、体部の連続する雷文にずれが数箇所見えることから印判手であろう。口端部が茶褐色となり、畳付が露胎。39は口縁部を短く折り返す皿で、内面全面を薄緑色に発色する文様で埋める。同様な発色となる38は伝統的なモチーフを使用しているが、これは斬新に見える。塗りは線で表現し、特に口縁部付近でかすれやずれが見える。外面は無文。40～42は所謂蛇の目凹形高台となる皿。40は口縁部が外彎し、内面に洲浜のような風景を描き、点状の目跡が一つ残る。体部外面中位に１条の圏線を描くが、完周しない。41は草花か、これには∟字形に配置された点状の目跡が３個残る。外面は残存する範囲で無文。42は口縁部を輪花とするもので、内面では体部に雷文帯、見込には家屋・山岳や橋・樹木等の風景を描く。発色は鮮やかである。外面は体部中位付近に１条の圏線を巡らせてその上は唐草文の退化したものか。底部外面では釉剥ぎした部分に黄味帯びる化粧土を掛けている。43・44は仏飯器。43は口縁部から脚端部まで濃青色とする。内面は白濁するが、意図的なものか中心部に青い釉が垂れている。脚裾では、白濁釉だけの部分もあって、瑠璃釉はその上から掛けたもののようである。脚内部は露胎。44は残存する文様は圏線・菊花文を含めてほぼ赤色であるが、端に黒色の線描と緑色に発色する部分がわずかに見える。45は蓋で、口端部の身受部だけが露胎。また天井部の相対する２個所に細長い剥離痕があり、板状の把手を欠損したものであろう。文様は亀甲文と飛翔する鶴を交互に３個ずつ配するようである。内面は無文。46は段重で、口縁部と体部外面下端の釉を掻き取っている。文様は飛翔する鳳凰と円文３個を重ねたものを繰り返すようである。円文の中には古代の軒

丸瓦のような文様、草花、そして四方襷で埋めたような３種であるが、すべてが鮮明ではない。鳳凰の一つは頭頂部が切れ、滲んで細部不鮮明、今一つは尾羽の型が折れ曲がったようでこれだけでは意味不明の文様となる。印判手であろう。47は瓶の類。青い濃淡を帯状に重ね、残存部上端付近に帆のような線画があり、海を表現したものであろうか。畳付の釉を掻き取り、内面は露胎。48は注口付瓶で注口を失う。細長い頸部の上に小さく開く受け口状の口縁部を付し、体部は玉葱状。底部に小さな三足を付す。丸底となる底部付近は露胎で、釉垂れもなく施釉は刷毛で行ったようである。頸部付近には点的に釉が及ばない個所が見られる。釉は白濁し、鮮やかな濃青色で地に生える竹を描く。なお、露胎部のうち、三足内はほぼ白色、外は赤味を帯びる。

49・50は軒平瓦。49は現在と変わらないような燻瓦であるが、凸面の半分ほどが黒色化せずに



第46図　2区出土遺物実測図6（土206号土坑−5、1/3）

灰白色となる。50は暗灰色となる胎土に赤色砂粒が目立ち、全体に暗灰褐色となる。前端上面が異様に赤くなっていて、顔料が塗られているようである。

51は白磁の小椀あるいは猪口で、畳付だけが露胎。純白といってよく、見込を外れたところに「商物間小」と金文字が書かれている。その下に「〆」、見込にも屋号のような印が金で描かれるが、判然としない。52も小椀。内面は無文だが、外面は四方襷文や松竹梅などで飾り立てる。ただし、発色は非常に悪く、不明瞭な部分がある。これも印判手のようである。畳付だけが露胎。53は染付椀で、口端部内外面、体部下端付近、高台中程に圏線を巡らせ、梅と思われる花木と草花をモチーフとする同一文様が３単位描かれるが等間ではない。印判手であろう。釉は白濁し、文様の一部は滲む。これも畳付だけが露胎。54は段重。器高2.1㎝と非常に浅いが、口縁部の釉を２方向から掻き取り、体部下端も削り込んで露胎となる段を作る。内面は無文、外面はアゲハチョウと花文で飾り、かすれや滲みがあり印判手で施文したものであろう。

207号土坑（図版16、第41図）　206号土坑の南辺で重複し、未確認であるがこの土坑が先行するであろう。小型不整形土坑で、長軸1.6m、残存の幅は0.4m余りである。深さは0.1m。

出土遺物

土器等（第47図）　口縁部の1/4強が残存し、復元口径10.2㎝、器高2.1㎝を測る土師器皿である。砂粒は少ないが、３㎜程度のものが見える。口縁部を強く横撫でして立ち上がる。

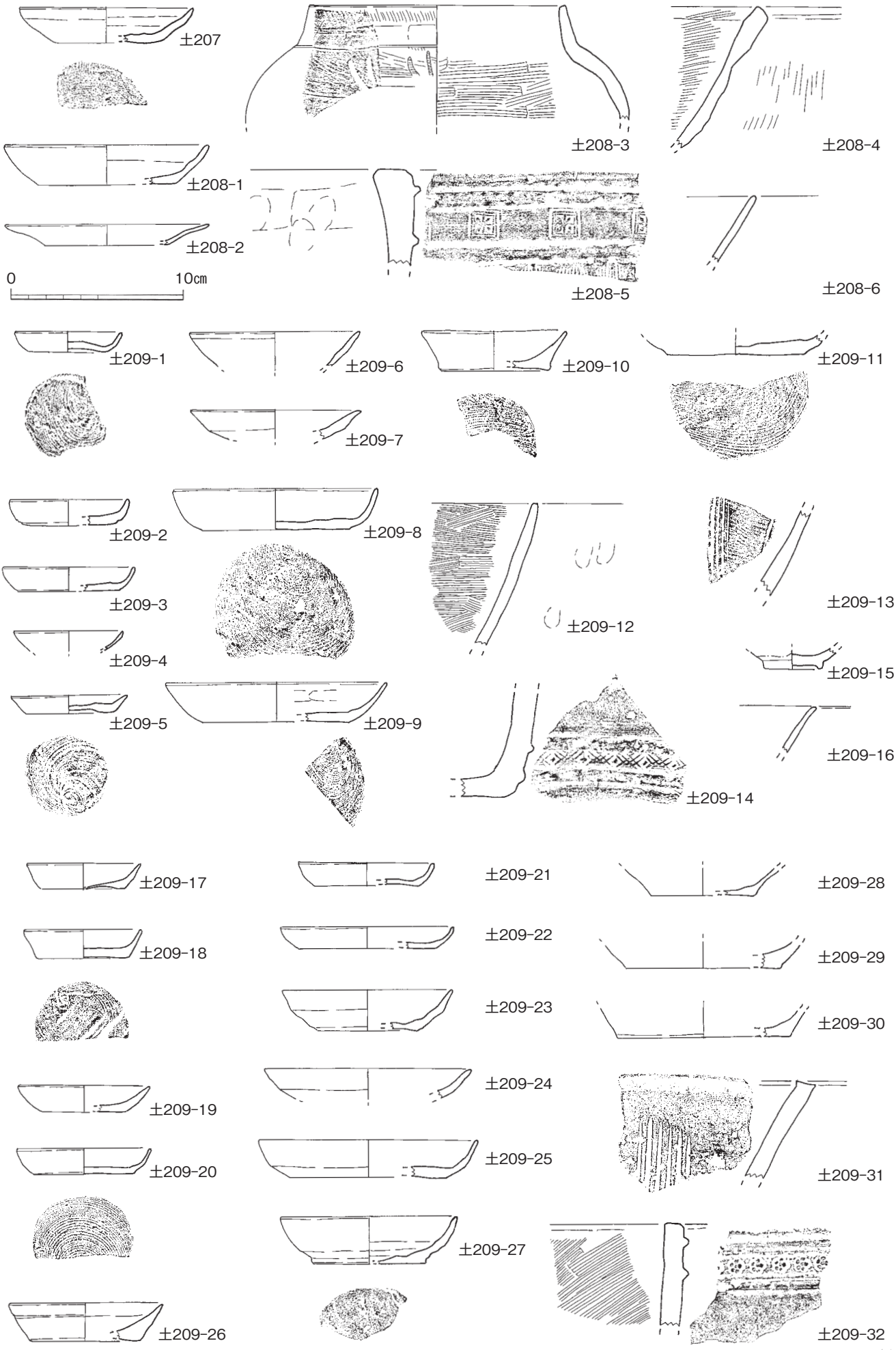
208号土坑（図版18、第39図）　調査区南西隅付近に位置し、201・202号溝と重複してそれらに切られる。検出面の埋土は「濁った地山土」といった風な判断が困難なものであったが、重複する溝を掘りあげた後にその壁面を見て漸く気付いたというものである。

平面形は長軸2.2m、短軸は北辺で2.1m、南辺で１mほどの梯形となる。南辺部が他の溝と重複するために規模が減じたという部分もあるが、床面形状も上端と同様の形状を見せていることから本来的に変形の四辺形であったと見てよかろう。深さは最大で0.7mほどである。

出土遺物

土器等（第47図）　１は体部が内彎気味に開く灰褐色の土師器皿で、胎土に砂粒が目立つ。底部外面には回転糸切り痕が残る。２は体部が外彎して浅く開く灰黄色の土師器皿で、これは胎土精良。この２点は小片のため復元口径に不安がある。３は口頸部が短く直立する土師質の茶釜か。胎土精良といってよく、灰褐色～赤味を帯びる黄褐色となる。刷毛目を多用し、肩部に同原体を押捺して文様を付けるようである。４は胎土が暗灰色、内外の器表が黒色化された瓦質の鍋あるいは鉢。口縁部は明瞭な稜をもって断面方形となり、直下の内面には弱い稜が入って狭い凹面を作る。内面は横刷毛を用いて平滑化し、外面は指押さえの凹凸が目立つが縦刷毛が部分的に残る。５は瓦質火鉢。口縁部下に突出する断面半円形となる突帯を２条巡らせてその間にスタンプを押す。下位突帯の直下もしっかりとした縦位の線刻があり、これも押捺したものであるかも知れない。胎土は良好で暗灰色、器表付近は灰黄褐色となる。６は須恵器杯の口縁部片。

209号土坑（図版18、第39図）　調査区中央部に位置する。遺構検出作業中に異様に土師器皿が集中する部分があり、その段階では遺構の輪郭がまったく見えなかったために「土器溜」と呼称していた。結果的には一辺長1.3～1.4mほどの隅丸方形の土坑となった。深さは0.4mほどで、床面は直径0.4mほどの円形となる。



第47図　2区出土遺物実測図7（207～209号土坑、1/3）

出土遺物

石製品（図版58、第50図）　ほぼ完存する凝灰岩製茶臼。臼本体は直径17.8㎝、対角線上に置かれた子持菱の部分では18.6㎝を測る。上縁幅は2.7㎝、高さは1.5㎝ほどで、くぼみは芯棒孔に向かって緩やかな勾配をもつ。臼面は大きく片減りしていて、高さの最大は9.4㎝。目は雑に彫り直している。臼面と側縁下端付近は全体に被熱赤変している。

土器等（第47図）　多くの土器が出土したが、ほとんどが細片化してた。１～16は「土209」、17～32は同「下層」とある。また、図示していないが朝鮮陶器の比較的大きな体部片が２点出土している。

１～12・17～30は土師器、13・14・31・32は瓦質土器、15は白磁、16は須恵器である。１～４は体部が内彎気味に、５は直線的に立ち上がる小皿。４は傾きが浅く、器壁が薄い。６は体部が直線的に浅く開く。７は体部中位に弱い稜をもつ。８は底部の2/3が残存、体部が丸く急角度で立ち上がる。内面の底部から体部へ移行する付近の一部に煤が集中して付着していて、灯明皿として使用されたようである。胎土には１～３㎜の砂粒が目立つ。９は1/4弱の残片で、これは外面体部下位に横方向に連続して煤が付着。胎土に赤色の微砂粒が目立つ。10は体部が直線的に高く延びる皿。11は暗灰褐色を呈し、内面の半分以上、外面も部分的に黒変する。12は胎土が灰赤褐色となり、内面を微細な刷毛目で、外面を指押さえなどで仕上げる鉢あるいは鍋。内面は暗褐色化、外面は煤が付着する。12は擂鉢である。胎土は微砂粒を含むがおおむね精良で、赤味を帯びる灰黄色となる。内外面ともによく黒色化し、外面は指頭痕がわずかに見えるだけである。14は火鉢の底部付近であろう。体部下端にしっかりとした突帯を２条巡らせてその間に菱形のスタンプを連続する。胎土には微砂粒が多く、灰黄色となるが、内外面は火熱を受けて赤味を帯びる。15は完周する小型の白磁底部片。釉は白濁の感があり、作りも粗雑。

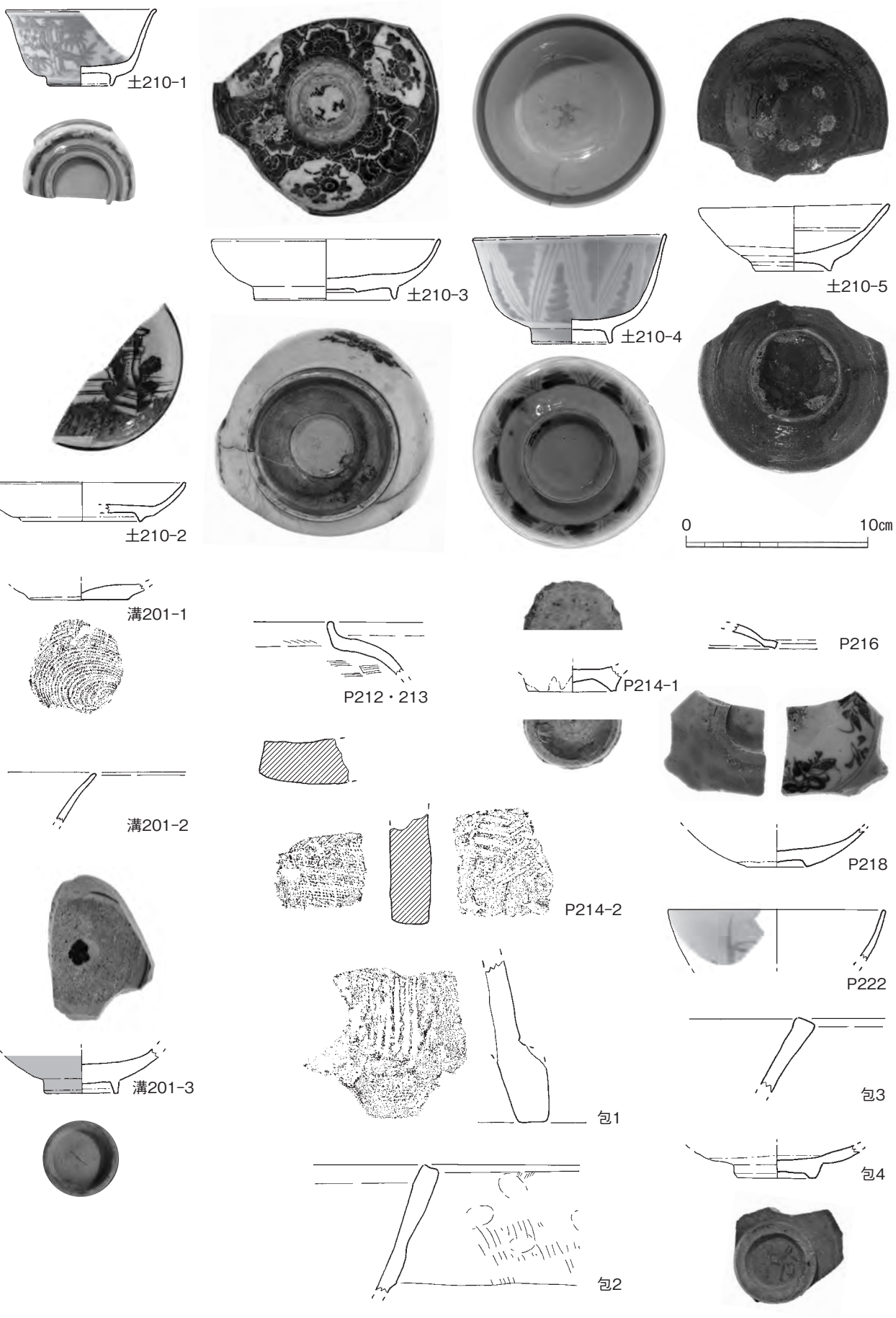
17・18は体部が急角度で立ち上がるもので、いずれも底部は1/2ほど残存。17は灰褐色で、内面の半分強、外面の一部も口縁部から垂れるように黒色化する。18は黄褐色。19～22は体部が内彎するもので、20以外は小片で復元口径に不安がある。20は底部の1/2が残存し、胎土良好、丁寧に作られる。23～25は体部中位付近に弱い稜をもつもの。26は上層10に似る器形。27は体部が内彎し、底部の切り離し部位を違えたようで形状が乱れる。28～30は底部片。これらは胎土良好。

31は擂鉢で、内面は横位刷毛目の後にスリ目を入れ、外面は指頭痕が残るがしっかりとした調整痕は不明。器表が荒れ、内面が黒変する。胎土は砂粒を含み、灰黄色となる。32は火鉢で、口縁部下外面にしっかりとした突帯を付してその間に梅花を模したスタンプを連続する。文様帯の下は篦磨き、内面は刷毛目で仕上げる。胎土は微砂粒を含み灰黄色となる。

210号土坑（図版16、第41図）　２W区東端で一部を検出したもので、南北長2.5mほどまで確認しているがさらに広がるのであろう。内部には焼土や炭が沢山入っていて、火災の後片付けに使用したものと思われた

出土遺物

土器等（図版58、第48図）　１～４は染付。１は小椀で、内面は無文。外面には松竹梅が見え、口縁部下には白線を巡らせてその上に青海波文などを置くが、別の文様と重複しているか、細部がわからない。文様には色斑があり、灰味帯びる青になる。２は内面に大きな石灯籠を置き、背後は海であろうか。口縁部を口紅とし、外面は無文であるが一部で呉須が垂れている。３は内面の見込を蛇の目に幅狭く釉剥ぎし、その上に化粧土を塗っている、見込から口縁部まで全面に花文を



第48図　2区出土遺物実測図8（210号土坑・溝201・柱穴ほか、1/3）

用いて装飾するが、基本的に同じパターンを３度繰り返す。外面は高台に２条の圏線を置き、口縁部下にやはり花文と思われる文様を３度繰り返す。内側の文様との対応関係は特に看取できない。文様は印判手によるものであろう。また、上面観では輪花とするようにも見受けられるが、明瞭なものではない。高台は蛇の目凹形高台で、高台の内側側面の釉も掻き取っている。４は第45図31と同じである。５は断面三角形となる低い高台をもち、体部はわずかに内彎気味に立ち上がる朝鮮陶器。その内面中位付近に甘い沈線を１条巡らせている。胎土は微砂粒を含む暗灰色の比較的緻密なもので、青味を帯びる暗灰色の濁った釉を全体に掛けるが斑がある。見込付近と高台に無数の目跡が残る。

２）　溝

201号溝（図版19、第４図）　南西部でその一部を検出したもので、厳密にいえば性格を把握できていない。延長約３m、幅は0.7mまでを検出した。灰褐色系埋土中やその上面に大小の川原石がかなり入っていた。深さは最大で0.5mほどである。

出土遺物

土器等（第48図）　いずれも「下層」出土である。

１は土師器皿底部で図示部は完存、胎土は精良といってよい。これも切り離しの部位を違えている。２は須恵器杯の口縁部小片。３は外面を青磁とする染付椀である。見込を蛇の目に釉剥ぎして、その上に暗灰黄色となる化粧土を塗っている。見込中央には五弁花文と思われるコンニャク判が見えるが滲んではっきりしない。その外側に二重圏線が見える。外面は無文で、高台外面から体部にかけては灰味強い灰青色に発色するが、高台内は灰白色である。畳付は露胎で目跡が付着。

202号溝（図版16、第４図）　西半に位置する略南北方向の溝。204号土坑の南から208号土坑西までの幅約1.1m、長さ４m余りの直線的な溝は試掘トレンチで、この溝はそのトレンチと多くが重なる。トレンチと203号土坑の間で溝の北端が現れ、トレンチと重複、その南端付近から東へ曲がりながら201号溝に切られるところまで確認した。１W区西端の溝状遺構と一連のようである。全体がわかるのは208号土坑と重複する付近で、幅0.9m、深さは0.15mほどの規模である。床面は北端が最も高くなる。

３）　その他の遺構と遺物

Ｐ212・213上層（第４図）　２Ｅ区南東隅付近にあり、遺構検出中の出土である。Ｐ212は径0.2～0.3m、深さ0.4m、Ｐ213は径0.4m、深さ0.5mほどの規模である。

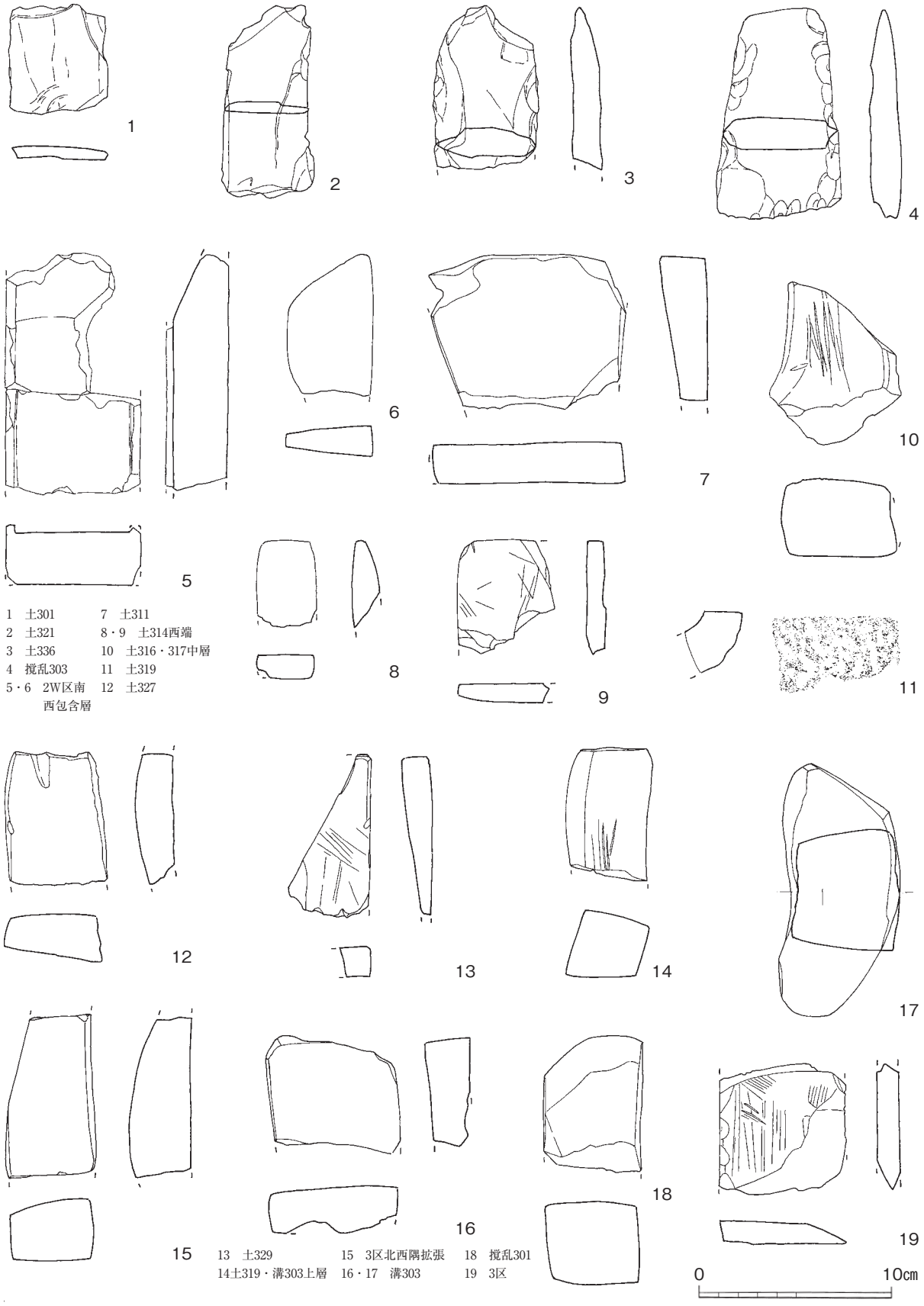
出土遺物

土器等（第48図）　土師器壺小片で、胎土・器表は赤味を帯びる明黄褐色を呈する。微砂粒を交えるがおおむね良好と言える。内面に刷毛目が見え、外面の調整は不明だがとても丁寧に仕上げられている。頸部下７㎜付近から口端面までが黒色化する。

Ｐ214（第４図）　Ｐ212の西近く、撹乱坑の壁で検出した。２段となっていて、上段は軸長0.6～0.8m、深さ0.3m、下段は直径0.2m、深さ0.2mほどの規模であった。

出土遺物

土器等（第48図）　1は見慣れない磁器である。高台外側面に釉が垂れるが、ここは本来高台内まで露胎である。高台は特に内側の勾配が緩く、中央部はわずかに突出する。釉は青味が強い透明釉で、灰白色の素地に微少な黒色粒があるが、特に釉の下で目立つ。内面に目跡はないが、高台



1　土301　　7　土311
2　土321　　8・9　土314西端
3　土336　　10　土316・317中層
4　撹乱303　　11　土319
5・6　2W区南西包含層　　12　土327

13　土329　　15　3区北西隅拡張　　18　撹乱301
14土319・溝303上層　　16・17　溝303　　19　3区

第49図　2・3区出土石製品実測図1（砥石等、1/3）

内には目が熔着し、あるいは畳付が剥離していることから磁器に使用した素地を団子にして目に使用したようである。２は平瓦小片。胎土に１㎜ほどの砂粒を多く交え、灰赤褐色～灰褐色に焼き上がる。凹面は細かな布目、凸面は粗い平行叩きである。土師質というべきで古代瓦の趣がある。

Ｐ216（第４図）　Ｐ214の西に近接する。長軸0.4m、短軸0.2mの長円形を呈し、深さは0.2mに過ぎない。

出土遺物

土器等（第48図）　須恵器杯蓋の小片。

Ｐ218（第４図）　調査区南西隅付近にある。長軸0.8m、短軸0.4mの長円形を呈し、深さは0.15mを測る。この遺構を発掘後、北端で重複する直径0.2m、そこからの深さ0.15mほどの柱穴を認めたが、この遺物がどちらからの出土であるか確認できていない。

出土遺物

土器等（第48図）　明染付であろう。底部を碁笥底とし、接地部付近は釉を掻き取っているが、高台内には施釉。見込に細い２重圏線を巡らせて複雑な植物文を描いているようである。文様は灰味を帯びている。また、見込中央に目跡かと思われる乱れがある。

Ｐ222（第４図）　Ｐ218の北に近く位置する柱穴で、直径・深さともに0.4mほどの規模である。

出土遺物

土器等（第48図）　染付の小片。外面の文様の一部が残る。

２Ｗ区南西包含層（第48図）　201号溝や208号土坑付近は表土掘削後に遺構の見極めが困難で、浅く掘り下げて検出作業を行ったが、その際の出土品である。

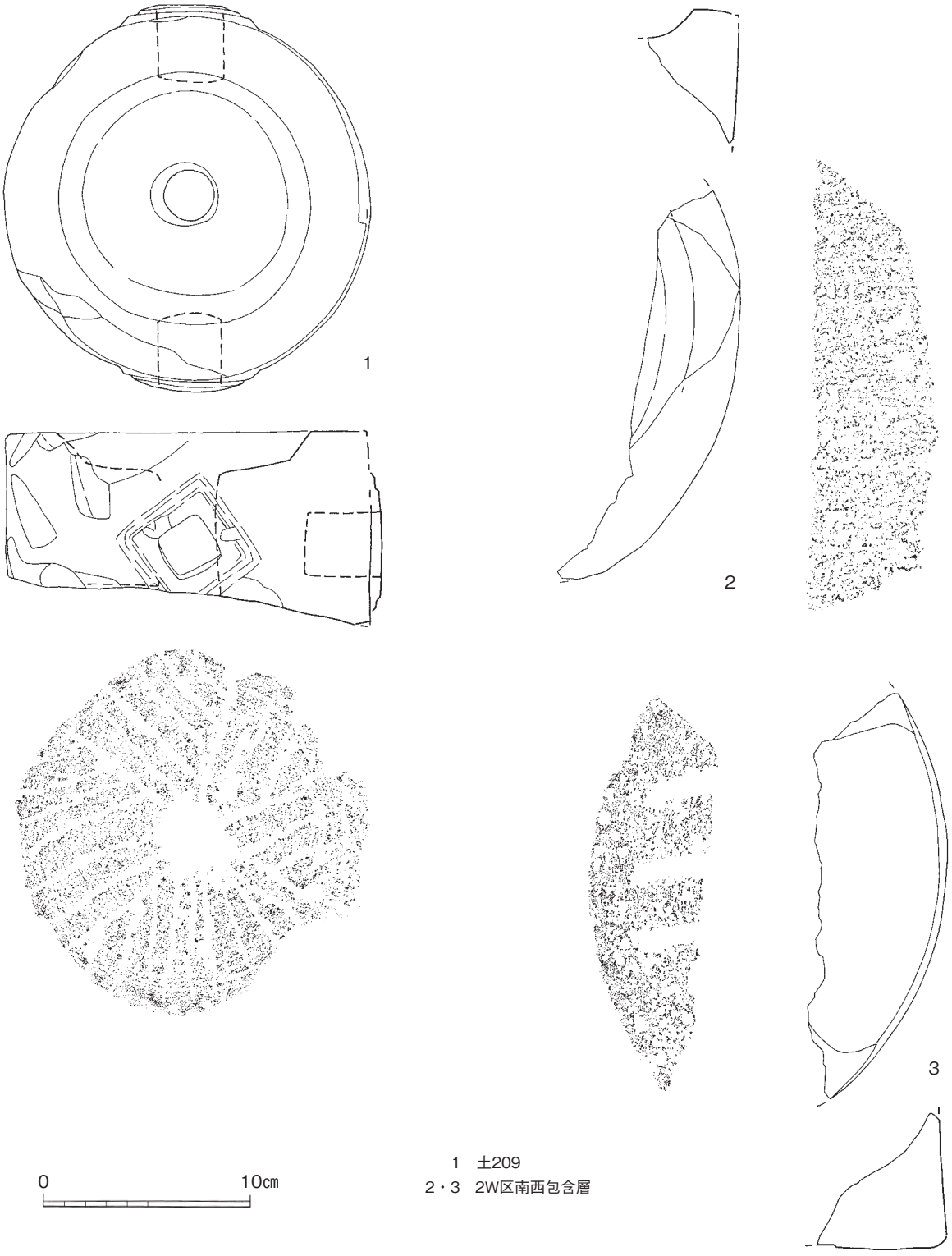
出土遺物

石製品（図版58、第50図２・３）　上縁１点、臼面２点の残片がありいずれも同一個体と思われる多孔質暗灰色の凝灰岩製石臼で、２点を図示した。上縁はわずかに残り、幅２㎝余、高さ1.5㎝弱、復元径は30㎝ほどとなる。側面には成形時の引っ掻いたような縦位の整形痕が顕著である。臼面は幅0.8～1.0㎝、深さ0.2㎝の幅広で浅い目が規則的に刻まれ、かつ外周２㎝ほどには刻まれていない。１片の臼面が黒ずんでいるものの、他の２点に変色は見られない。

土器等（図版58，第48図）　１は土師質の七輪あるいは火鉢の脚部。胎土は精良といってよく、赤味の強い黄褐色となる。段の直ぐ上に幅1.4㎝の赤味のない部位があり、貼付部が剥落したものと思われる。内面は暗褐色～黄褐色となる部分があり、黄褐色部には接合のための刻みが見られる。接地部付近に煤が付着。２は暗灰色精良な胎土をもつ瓦質の鉢で、内面の大部分が灰黒色、外面はほぼ全面に煤が付着する。内面の調整痕はよくわからないが、外面では指頭痕と粗い刷毛目が良く残る。口縁端部の面とその内側1.2㎝ほどの部位が黄白色で色調的に際立つ。３は胎土が灰黒色、内外の器表が灰黄褐色となる鉢で、内外面ともに調整痕はよくわからない。４は唐津焼底部。胎土は黄白色～灰白色精良なもので、見込を蛇の目に釉剥ぎする青緑釉陶器と呼ばれるものである。体部下位から高台にかけては露胎である。高台内に墨書がある。中央付近に「午」あるいは「十」、右上に「夂」、右下に「門」と記されるように見える。X線スキャナーで見ても、これ以上は読めない。

打製石器（図版59、第51図）　数が少ないので、２・３区をまとめて紹介する。

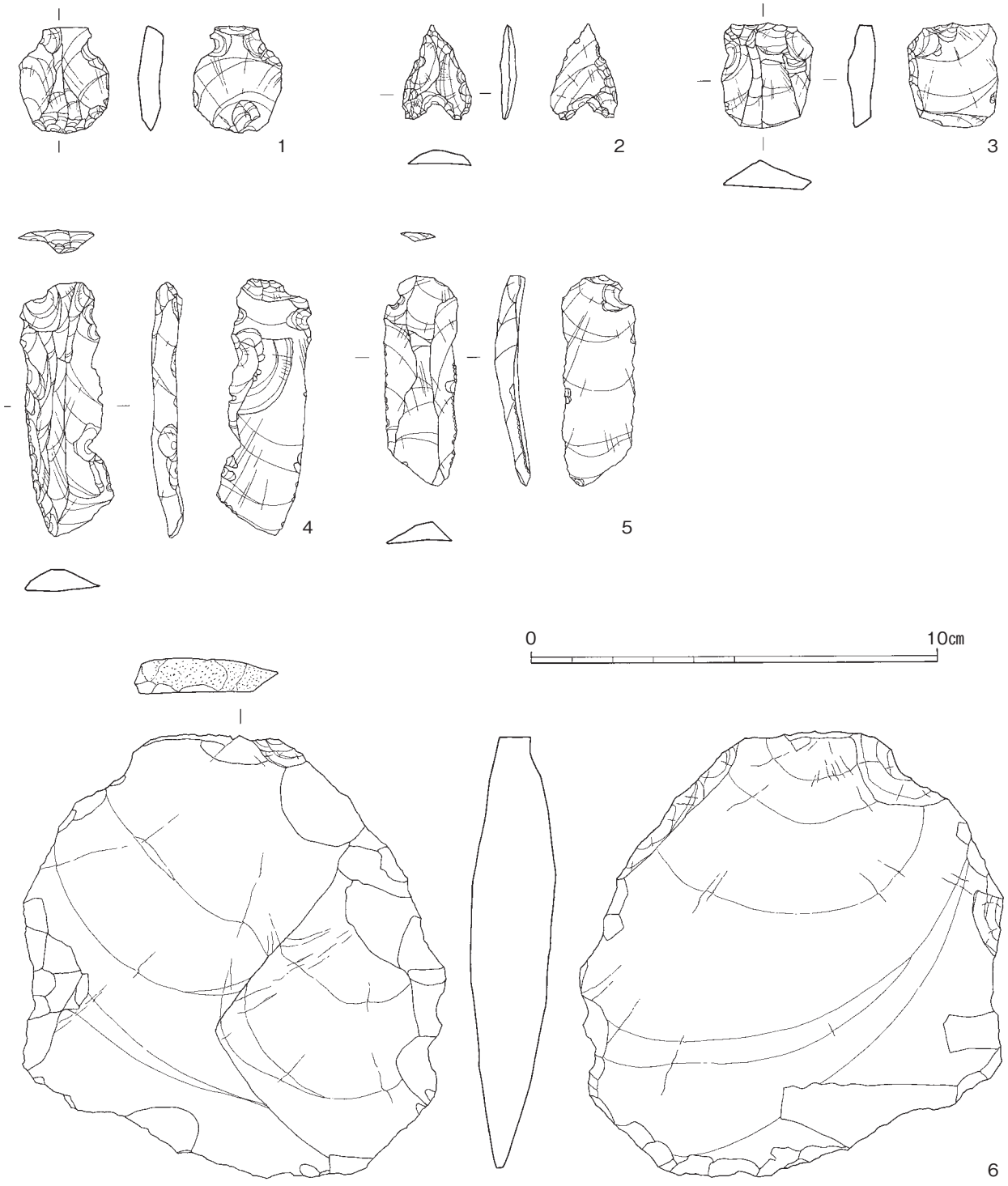
１は調査区北西隅付近の柱穴Ｐ205出土のつまみ形石器。図上端左右に抉りを入れ、下端を一方の面からだけ叩いて刃部を作り出す。2.6×2.2×0.5㎝：3.2ｇ（長さ×幅×厚さ：重量、以下同）。２は基部が抉れる三角形の石鏃で329号土坑出土。図右に示した面は細部の調整が少ない。2.3×1.6×0.4㎝：1.3ｇ。３は「北東隅暗灰色土」とあり、３区での遺構検出時の出土であろう。２次加工剥片で、2.6×2.2×0.6㎝：4.0ｇ。４は図下部の両側に使用痕が見える縦長剥片で、315号土



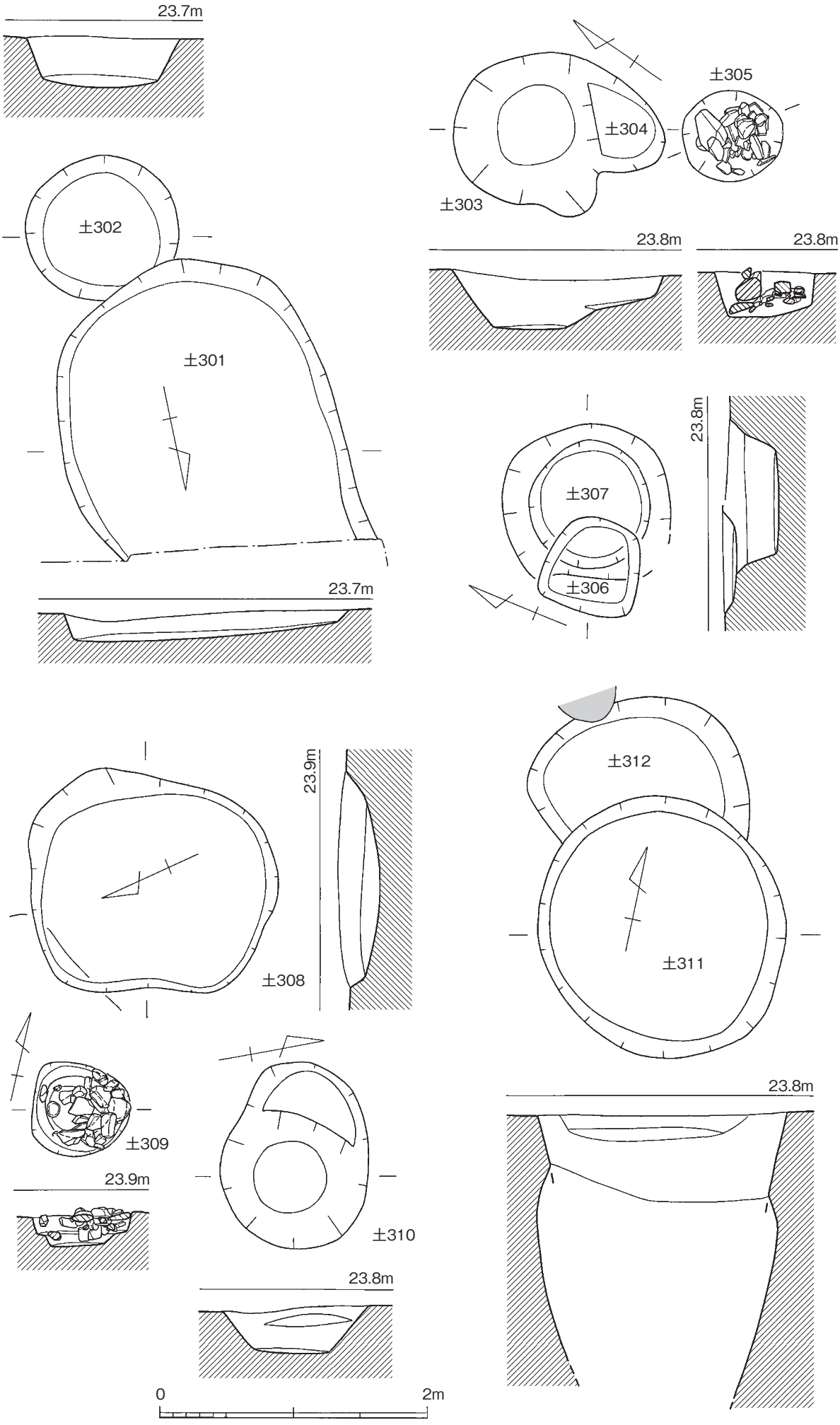
1　土209
2・3　2W区南西包含層

第50図　2区出土石製品実測図（石臼等、1/3）

坑北の出土。6.2×1.9×0.6㎝：7.4ｇ。５も図下半の全体に使用痕が見える縦長剥片で319号土坑出土。5.1×1.8×0.6㎝：4.1ｇ。この５点は腰岳産黒曜石を使用。６はガジリが多い安山岩で石核か。303号溝出土。10.6×10.0×2.0㎝：248ｇである。



第51図　２・3区出土石製品実測図2（打製石器、2/3）



第52図　3区土坑実測図1（301～312号土坑、1/40）

3　3区の調査

3区も住宅が建っていた宅地跡である。調査区の南側は市道、東側も2W区との間を市道で画され、西側は4区との間に住宅への自動車進入路があるためにそこまでを調査対象地とした。

1）　土　坑

301号土坑（図版20、第52図）　調査区北東端に位置する比較的大型の土坑。調査区外へ続くが、長軸2.4m以上、短軸2.1mほどの長円形となり、深さは0.1～0.25mほどで、北東部が最もよく残る。埋土はほぼ純粋な白色粗砂で、除去後に床から曲線を描く305号溝の底付近が現れた。

出土遺物

石製品（図版58、第49図）　緑色片岩製打製石斧残片。図上端は折損、下端は本来の形状のようであるが非常に薄く、剥離しているかも知れない。

土器等（図版59、第53図）　1は土師器高台付椀の1/4強の残片。胎土精良、黄白色～灰黄色となる。器表は全体に摩滅していて、高台も端部が残存しているか判然としない。2は陶器擂鉢。胎土は灰黄色緻密なもので、本遺跡の他の唐津焼擂鉢とは違和感がある。調整は丁寧になされ、体部内外面に灰茶褐色の釉が掛かる。底部外面の調整痕は見えないが、非常に滑らかになっている。3は体部下位で強く彎曲して中位以上が直立する陶器椀。灰色の精良緻密な胎土をもち、釉は口縁部などの薄い部分は暗茶褐色、、底部などの厚くなる部分は黒色となり、青白色となるところもある。器壁が薄く、畳付の釉を掻き取るほかは総釉。4は体部から口縁部にかけて緩く内彎する染付椀。外面に後ろ足から後方を、続けて頭部や前足を内面に置き、内外面で1尾の龍を描く。畳付だけが露胎となる。他にガラス片などが出土している。

302号土坑（図版20、第52図）　301号土坑の南側で重複し、この土坑が先行する。また、303号溝を切っている。土坑は直径1.1mの円形を呈し、深さは0.3mほどである。

出土遺物

土器等（第53図）　体部の彎曲が弱い小型の陶器椀。灰黄色の精良堅致な胎土をもち、釉は透明に近い。体部下位の一部に灰緑褐色といった発色をする文様が残る。体部下端に水平になる削りがあって、その上位から下が露胎だが、そこにも一部釉が垂れている。内面は無文。

303・304号土坑（図版20、第52図）　調査区東端近く、やや南よりに位置する土坑で、2基が重複する。初めに西側の303号土坑の発掘を行っていて、こちらが後出する。小礫が若干混入するが、炭・焼土といった顕著な堆積はない。直径1.1mほどの円形を呈し、深さは0.4mほどである。

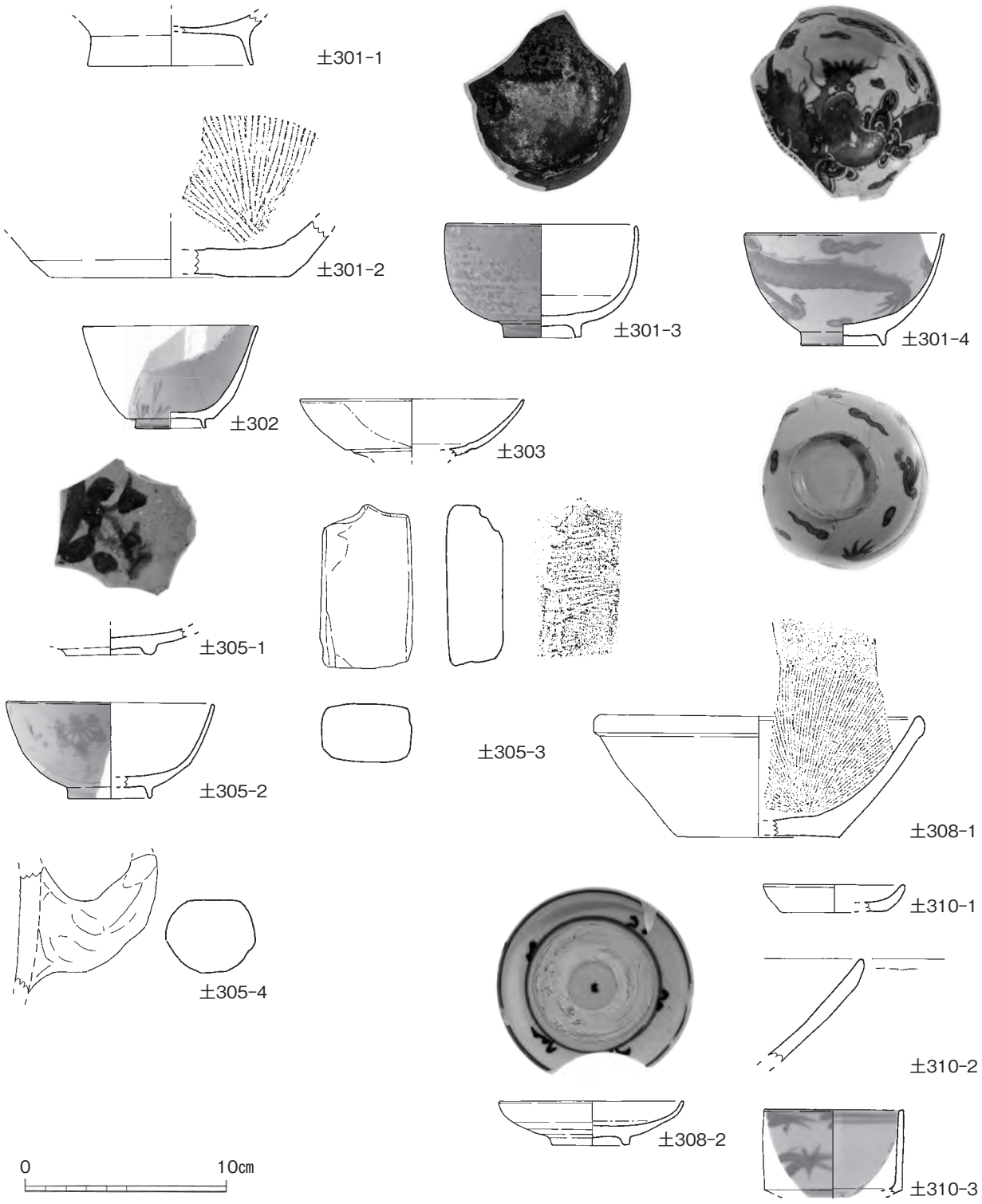
304号土坑は303号土坑の南東部に張り出す形で検出したもので、長軸0.7m以上、短軸0.7mを検出した長円形の土坑で、深さは0.2m弱である。

出土遺物

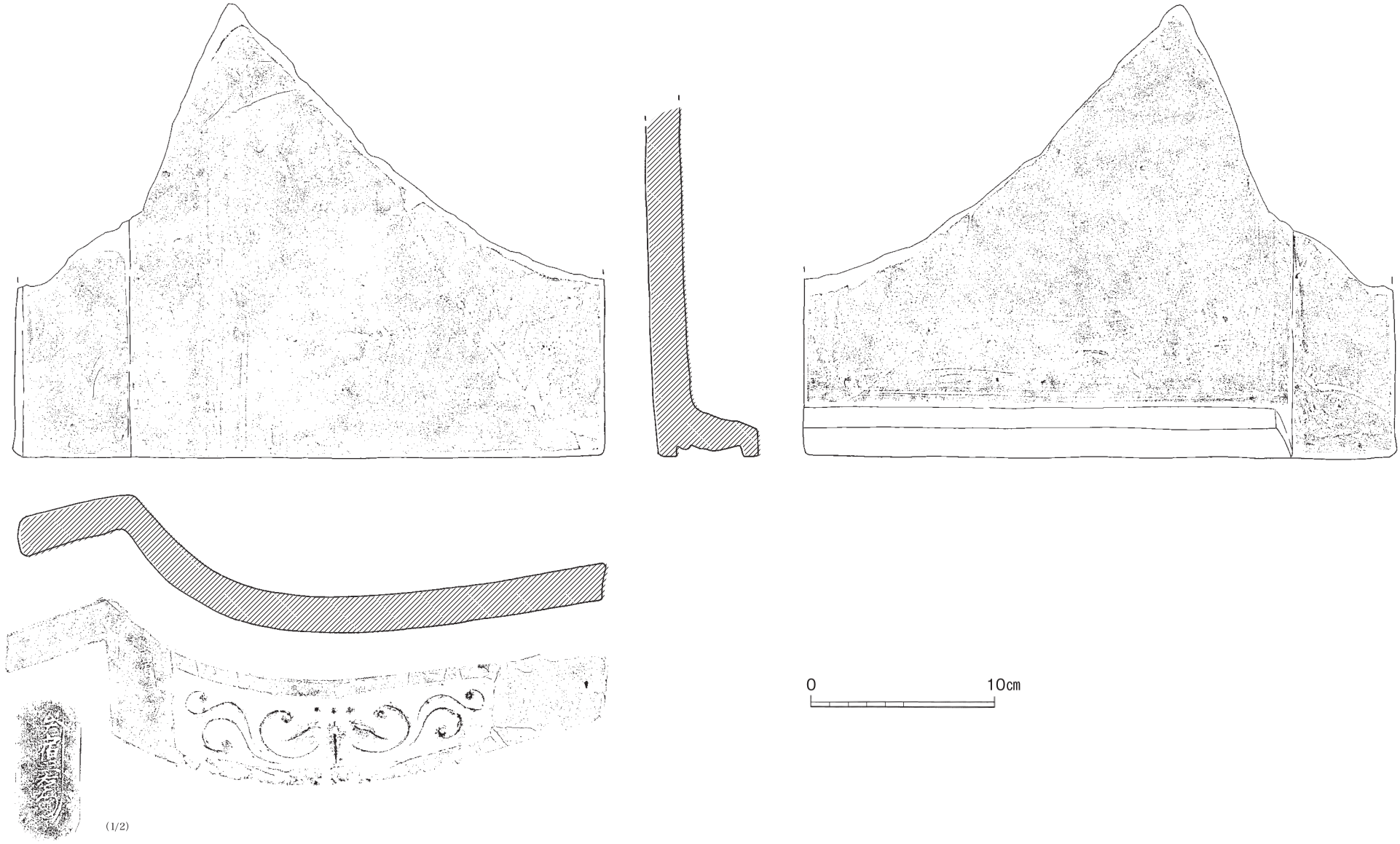
石製品（図版58、第49図4）　「303号土坑下層」出土の緑色片岩製打製石斧である。図示した面は両側縁・刃部の剥離調整を除いて全面が研磨されているのに比して、背面も凸部は研磨されるがその割合は全体のごく一部で表裏の仕上げが極端に異なる。また、縦断面を見ると、図下端の刃部とした部位が欠損しているとしても基部の鋭利さは際立っている。193.4ｇを測る。

土器等（第53図）　唐津焼青緑釉陶器片。灰白色精良緻密な胎土で、調整も丁寧な横撫でを施す。外面下位の沈線状の表現は横撫でによるものである。見込の釉を蛇の目に掻き取り、外面は施釉・無釉の部分がある。濃い灰緑色となる釉は、厚い部位では青味を帯びる。「土303」と注記があるが、厳密な帰属は不明。

305号土坑（図版20、第52図）　304号土坑の南東に近接する、直径0.7m、深さ0.3mの柱穴様の小型円形土坑。床面は傾斜していて、内部で検出した礫や土器類も乱雑かつ高さが不揃いであ



第53図　3区出土遺物実測図1（301～310号土坑、1/3）



第54図　3区出土遺物実測図2（308号土坑瓦、1/3・1/2）

り、意図的なものとは認められない。

出土遺物

土器等（図版59、第53図）　1は所謂古伊万里の皿であろう。やや不整形となる高台は低く、畳付の釉を掻き取っている。それ以外は総釉で、高台内に砂目が付着する。見込に大振りの文様を鉄絵で描き、ほぼ黒色に発色する。2は染付椀。文様は外面上位の三方にコンニャク印判らしき桐の花を置くだけの単純なものである。内面は無文。畳付は露胎。3は方柱状の土師質土製品。微砂粒を含むが胎土は精良といってよく、焼成も良好。器表は灰褐色となるが、胎土は黄褐色。図上下両端は欠損するが、上端では加工の途中のような削り痕が残る。上面・側面などにも縦位・横位の傷が無数にあるが、意味はわからない。4は古墳時代甑の把手。

306・307号土坑（図版19、第52図）　305号土坑の南に近接する土坑で、306号土坑が新しく、307号土坑が古い。306号土坑は一辺長0.7mほどのやや歪んだ隅丸方形で、深さは0.1mに満たない浅いものである。307号土坑は直径1.2mほどの円形に近い形状で、深さは最大で0.4m、検出面から0.2m弱の付近で壁の傾斜が変わる。

308号土坑（図版21、第52図）　306号土坑の西側、301号溝とした南北溝を挟んで位置する。軸長1.6～1.8mの不整円形に近い形状となり、深さは最大で0.2m余りの浅い土坑である。埋土は茶褐色の粗砂であった。

出土遺物

土器等（図版59、第53・54図）　1は口縁部をわずかに肥厚させるだけの変化に乏しい陶器の小型擂鉢。灰赤褐色の胎土は1㎜ほどの砂粒を交え、堅致なものとはいえない。内面から底部外周まで暗赤紫色といった色になる釉を掛け、底部の大部分は露胎、砂が付着する。2は染付の皿で、見込を蛇の目に釉剥ぎした後に黄白色となる化粧土を雑に塗っている。見込外周と口縁部内側に圏線を巡らせ、見込圏線に沿って意味不明の単純な文様が5個所に描かれる。青の発色は鮮やか。外面は無文で、畳付は釉を掻き取る。あるいは蓋とすべきか。

第54図は桟軒瓦。橘と思われる中心飾から左右対称に唐草文を置く。文様帯の左横に「今宿（現福岡市西区）三右衛門」銘のスタンプを入れている。胎土や燻した様は現在の瓦に近い。

309号土坑（図版21、第52図）　308号土坑の南東に近接する小型土坑。直径0.7～0.8mのやや歪んだ円形を呈し、深さは最大で0.25mで、中位付近に幅0.1mに満たない狭いテラスが巡る。東に偏して拳大の川原石が検出されたが、配列に意図的なものは見えない。

310号土坑（図版21、第52図）　309号土坑の南に近接する土坑。長軸1.4m、短軸1.1mの長円形を呈するが、床面は径0.6mほどの正円を描く。北西部にテラスが付設するが、この部分があるいは別の遺構が重複する可能性もある。テラスの深さは0.1mほど、最深部は0.3mほどとなる。

埋土中程以上に黄褐色土を含む灰褐色土、下位に暗灰色土が堆積するが特徴的なものではない。

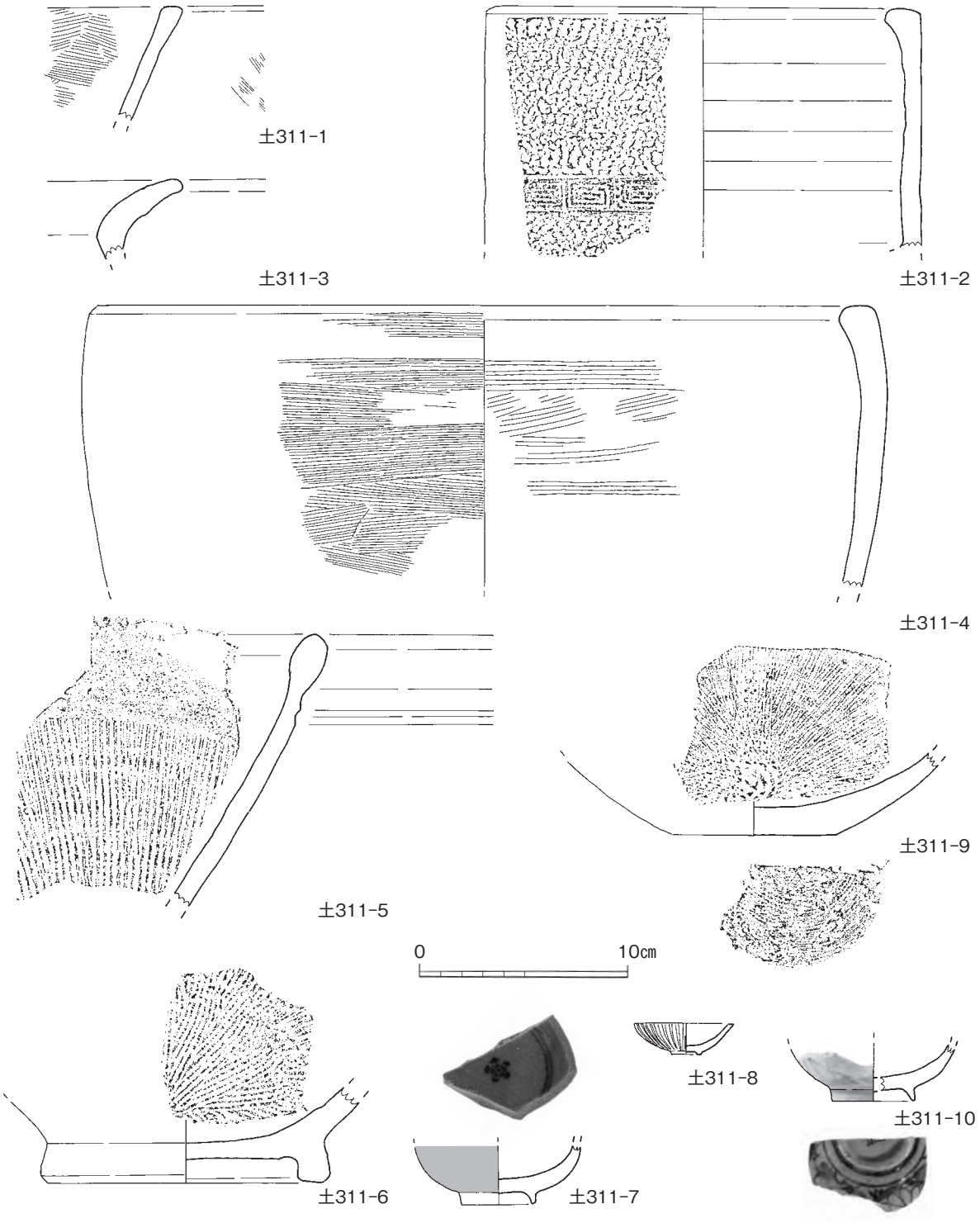
出土遺物

土器等（第53図）　1は土師器皿の小片。底部外面に回転糸切り痕を残す。2は胎土が灰赤褐色となる鍋あるいは鉢の小片。内面は細密な刷毛目で仕上げ、外面の調整技法はよくわからない。外面は暗褐色化して煤が付着する。3は体部が下端で折れて垂直に立ち上がる椀小片で、外面に笹

葉状の文様を描き、内面には２条の圏線を入れる。

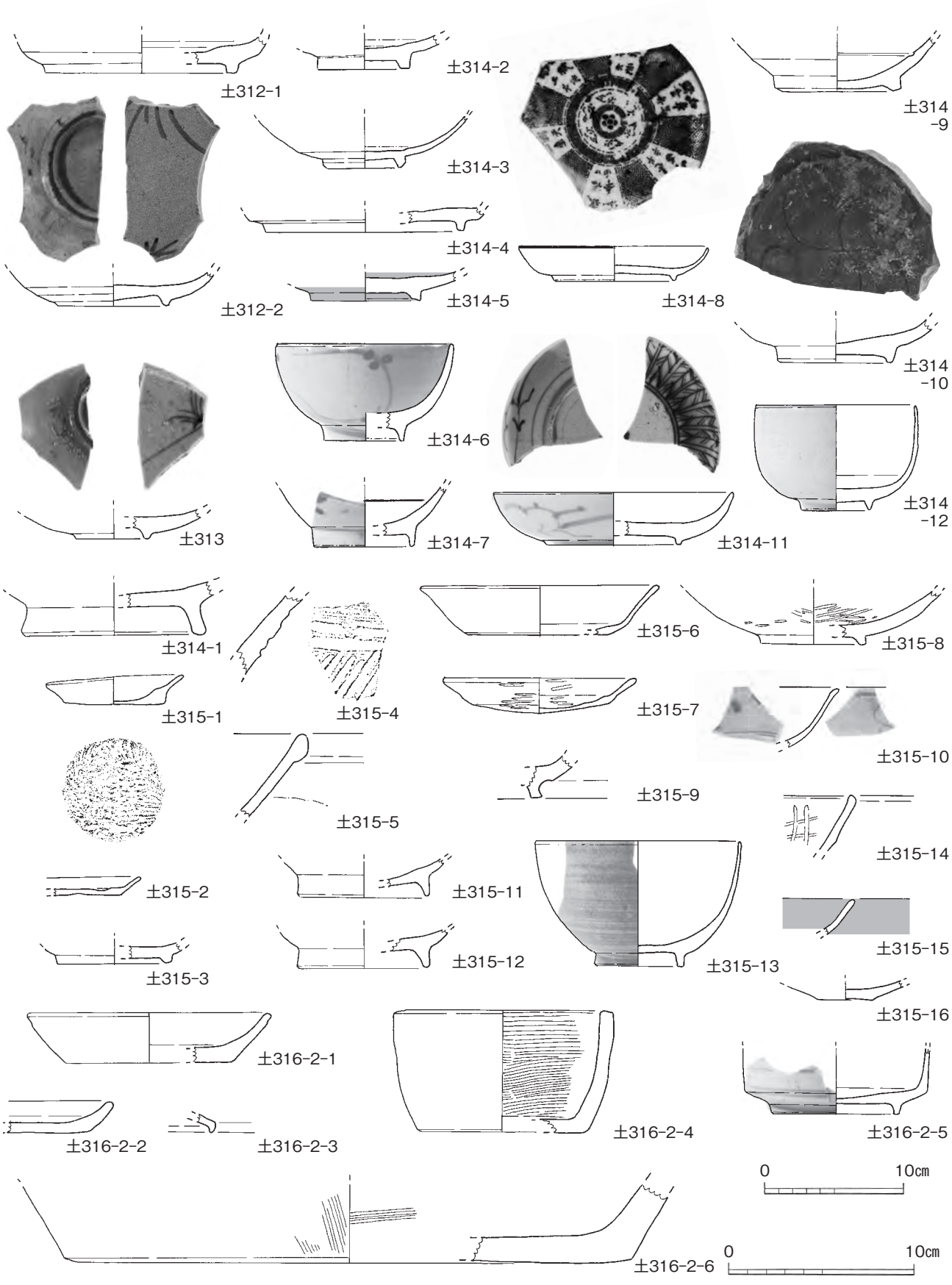
311号土坑（図版22、第52図）　310号土坑の西には301号溝とほぼ平行に走る302号溝があるが、さらにその西側に位置する。やはり略南北方向に走る308号溝をおよび土坑の北辺で重複する312号土坑を切っていた。

直径1.9～2.0mの正円に近い形状で、深さは2.2mほどまで掘り下げたが湧水があり、あるいは壁体の崩落が予想されたために完掘していない。検出面から0.5～0.7m付近までは直線的にすぼまり、一旦膨らんでからまたすぼまっていく。発掘を断念した付近では直径1.2mほどの大きさとなっていた。



第55図　3区出土遺物実測図3（311号土坑、1/3）

埋土は最上層に耕作土と思われる青灰色土が薄く被っていたが、その下位は粗砂に灰褐色砂・灰褐色土が混入したものであった。発掘した最下層付近からガラス片が出土していて、近代以降の新しい遺構であると思われる。



第56図　3区出土遺物実測図4（312～316-2号土坑、1/3・1/4）

出土遺物

石製品（図版58、第49図７）　「下層」出土の黄白色石英斑岩製砥石。図下端を大きく、上端左右を小さく欠損する。図上端面を除く４面を使用、使用面は非常に平滑となるが、手触りがざらついていて中砥であろうか。表面に小孔が多い。

土器等（第55図）　１～８が便宜的に分層した「上層」、９・10は「下層」と注記されている。１は口端部に面をもつ土師質の鉢で、微砂粒を多く交える胎土は灰黄褐色、器表は暗褐色となる。ただ、外面は煤により黒色となり、内面も使用のためか黒変する。内外ともに刷毛目で丁寧に調整するが、外面のそれは特に細かい。２は円筒形の体部をもち、口縁部を内側へ肥厚させるもの。１と同様の胎土で、内面は丁寧に横撫でで仕上げている。外面では下位に雷文のスタンプを巡らせ、その上下は規則性のない小さな凹凸で埋めている。雷文帯に乱れがないことからこれが最後に施文されたものであろう。体部外面と口縁部付近を除く内面は良く黒色化し、内側へ突出する付近の上面・内面は灰黄褐色で下面は黒変、口縁部上面の外側は灰黒色となる。３は微砂粒を交える灰黄色の胎土、器表内外がよく黒色化する大型の瓦質土器。内外面を刷毛目で仕上げる。５は灰黄色の胎土に暗茶褐色釉を全体に掛ける唐津焼擂鉢。口縁部を玉縁状とし、外面口縁部下ではわずかに間隔をあけた上下を強く横撫でして突帯状にする。６も唐津焼であろう。断面方形の大きな高台をもち、畳付の大部分が露胎となるがその内側には釉の掻き損じが連続する。内面には重ね焼きの際の熔着もみえる。胎土の赤味が５に比して強く、釉の発色は薄い。７は染付小椀。内面は灰味帯びる白濁釉、外面は淡い灰緑色となる外面青磁の椀。内面では見込外周に二重圏線を巡らせて、中心に五弁花文を置く。外面は無文、畳付以外は総釉である。８は直径4.9㎝の白磁紅皿。外面を露胎とし、釉は青味を帯びる。

９は灰黒色の精良緻密な胎土をもつ陶器擂鉢。内外面ともに丁寧な横撫でで仕上げ、底部には回転糸切り痕を残す。残存部全面に暗茶褐色となる釉を掛けている。10は高台を断面三角形とする染付椀。外面に菊花のような花文が見え、内面は無文。

312号土坑（図版22、第52図）　311号土坑の北西付近で重複し、これが先行する。残存部は長軸1.6m、短軸１m強、深さ0.2m余り。なお、網は灰の詰まった浅い落ち込みである。

出土遺物

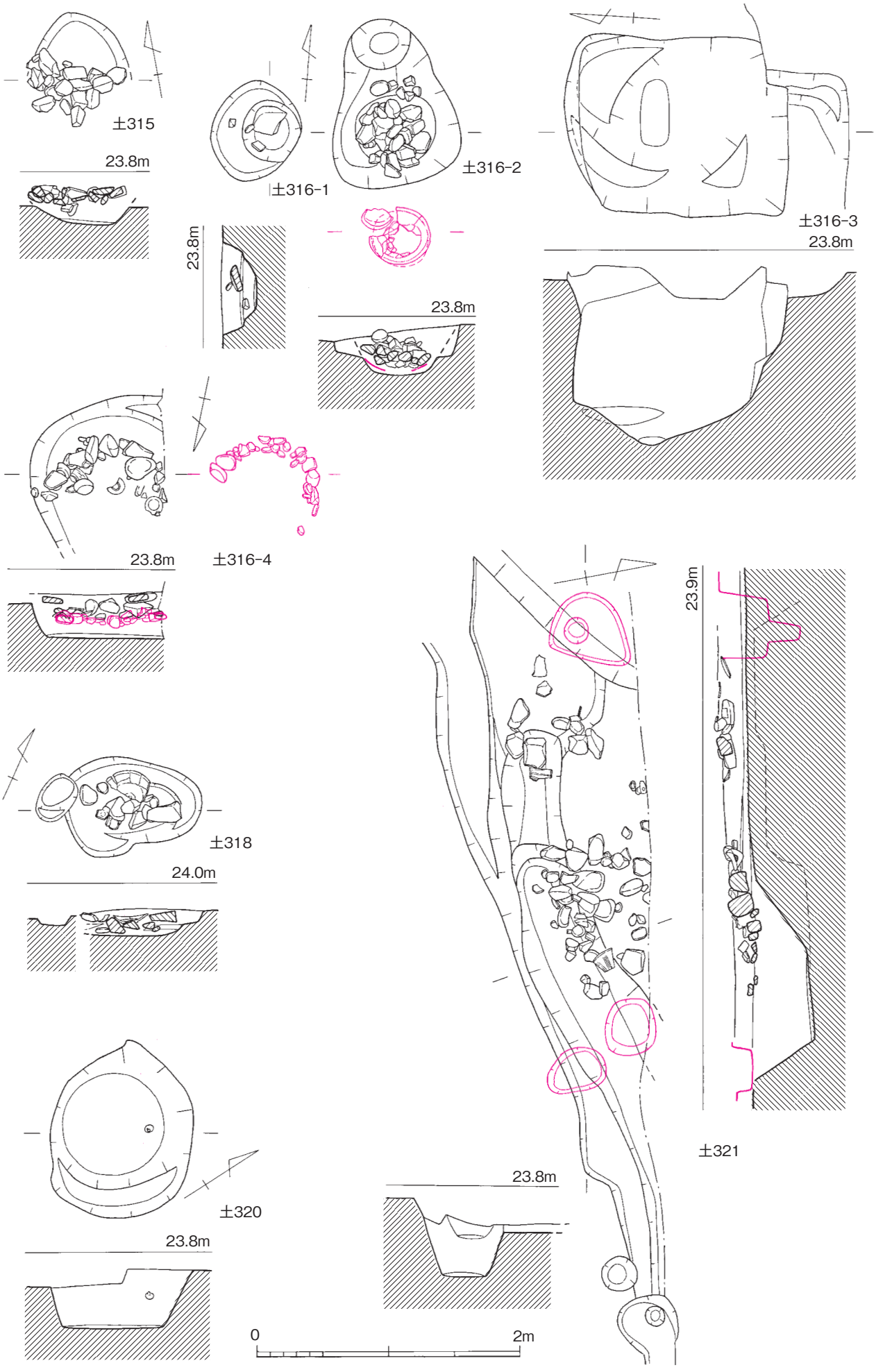
土器等（第56図）　１は須恵器高台付杯片で、体部外面が暗灰色となるほかはすべて灰白色となる焼成不良の土器である。２は畳付の釉を削り取る低い高台をもつ皿であるが、高台内は深く削り込んでいる。施文は灰青色、釉は灰味強く発色する。唐津焼であろう。

313号土坑（第４図）　調査区東端部の南より、305号土坑の東の落ち込みをこう呼称したが、明瞭な遺構とならない0.1mほどの浅い段落ちであったために欠番とする。

出土遺物

土器等（第56図）　径が小さく低い高台をもつ染付皿片。これも高台内を深く削り込んでいる。文様はやはり灰味強い青色に、釉は白濁する。畳付の釉を掻き取るほかは総釉で、露胎部は赤く発色、高台の内外に砂が付着する。

314号土坑（図版30、第４図）　調査区南西端付近、調査区を横断する303号溝の一部を覆う。南北幅約４m、東西幅４m以上の隅丸方形に近い範囲に鮮やかな白色粗砂と豆炭を多く含む土坑が



第57図　3区土坑実測図2（315・316・318・320・321号土坑、1/40）

広がっていた。明らかに新しい落ち込みであるが、これを314号土坑とした（図版30−２参照）。

出土遺物

土器等（図版59、第56図）　１～10が上層の「白色砂層」出土、11・12は「西端」出土とある。ただ、土坑自体の西端を把握できていないので、この２点の帰属は曖昧である。

１は底径10㎝と大型の高台付土師器椀で、高台も高く作られる。器表は全体に荒れているが、黄白色～灰白色となり、胎土は精良。２・３は唐津焼。２は見込を1.7㎝の幅で広く蛇の目釉剥ぎし、その内側は灰味帯びるとはいえほぼ透明の、外側は青緑色となる釉がわずかに見える。外面は体部下端までほぼ全体に釉が掛かり、高台にも部分的に垂れている。畳付から高台内は露胎。胎土は灰黄色緻密なものである。釉剥ぎの幅が広いためか、釉剥ぎ部の中央付近に掻き取れなかった釉が残る。３は高台側面を面取りして華奢なものとし、器壁がとても薄い。暗灰色で精良堅致な胎土をもつ。見込を蛇の目に釉剥ぎするが、その幅は1.1㎝である。釉は暗黄褐色に発色、外面下端を篦削りで仕上げ、それ以下は基本的に露胎とし、それ以上には薄く施釉される。

４は須恵器高台付杯片で、外面が灰被りする。５は畳付をわずかに匙面状に凹ませる緑釉陶器皿で、焼成は酸化炎陶器質である。黄白色精良堅致な胎土をもち、薄黄緑色の釉がペンキを塗ったように全面に掛かる。見込には三叉トチンの痕跡が残る。

６～９は染付。６はごく一般的な雪輪文をもつ椀で内面は無文。７は広東椀で、外面高台基部と見込外周に圏線を各１条入れ、外面の文様は一部が残存する。８は内面を印判手で埋めた皿。見込中央に五弁の花文を置いて放射状の線で囲み、さらにひよこ様の文様を置く。内外を圏線で挟む放射状の線を再び置いて、その外側に斜格子帯と文字帯を交互に置く。文様・文字は滲んだりかすれたりしていて、文字のすべては読めず、意味はわからない。外面は無文。９は見込に圏線を刻み、完周する白磁底部。外面は露胎、内面の釉は黄味を帯びる。10は片切彫劃花文を刻む龍泉窯系青磁椀の厚底となる底部。釉は灰味の強い黄緑色となる。釉は畳付から一部高台内にまで垂れている。

11は染付皿。体部内面に矢羽根文、見込にコンニャク印判が見え、外面には唐草文を描く。高台は断面三角形となり、畳付だけが露胎。丁寧に作られた感がある。12は陶器あるいは白磁というべきか。口縁端部だけを黒色化、内面では口縁部直下が、外面では体部上位部だけが光沢をもち、以下は白濁する。これも畳付だけが露胎。

315号土坑（図版22、第57図）　この土坑は調査区北西隅付近に位置する。315号土坑とその南側の316号土坑、西側の317号土坑は輪郭が曖昧で、同一遺構として掘り下げていって漸く316号土坑は316−１号～316−４号土坑として再確認できたが、その過程で317号土坑（暗灰色埋土）、315号土坑（灰褐色埋土）は307号溝と一体のものとして発掘、同溝の完堀後には姿を消し、判然としないままに終わった。

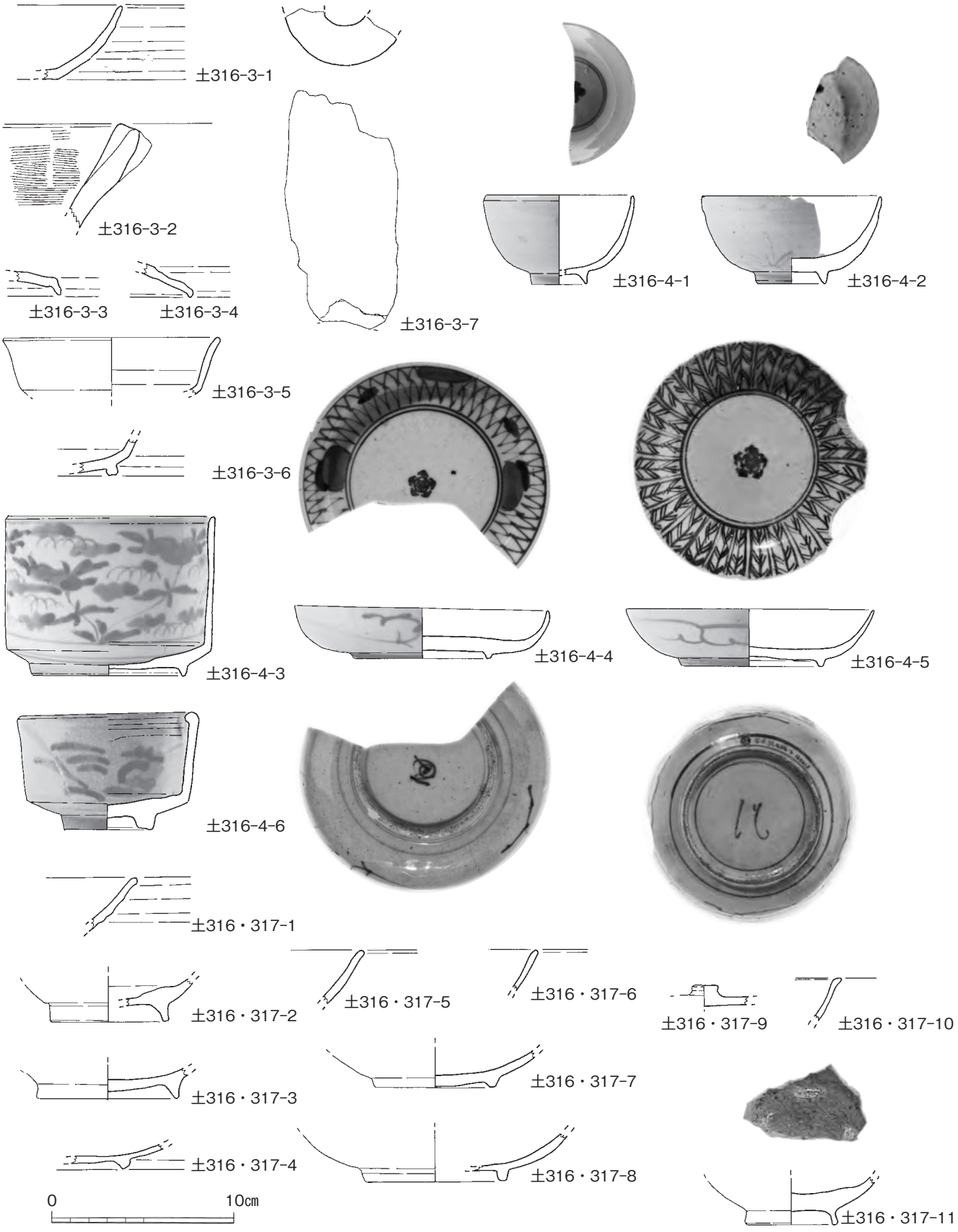
ただ、発掘の過程で川原石が集中する部分が現れ、その状態で図化を行った。仮に315号土坑と認識した遺構があったとすれば、この段階でもすでにある程度破壊した後である。307号溝の北壁土層には315号土坑のラインが現れていないものの、溝埋土に掘り込まれていた可能性は残る。

出土遺物

土器等（第56図）　１～５が「上層」、６～10は「上礫群」とあって判然としないが図化した礫の付近からの出土と思われる。11・12は「土315」、13～16は「土315北」とあって、後４点は礫群の北側、掘形が判然としないところからの出土で、帰属が曖昧である。

１～３は土師器。１は小皿で、口縁部の1/4を欠くほかは残存。口径7.5㎝、器高1.6㎝を測る。

胎土に特別なものはない。全体に黄褐色であるが、体部から底部にかけての外面の半分弱が黒色化するが、それは内面にはおよばない。また、内面中央が強くくぼみ、底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕が残るが、底部中央部では乱れて不明瞭となる。２は胎土良好な小皿でこれは小片。外面は灰黄褐色、内面の全体が灰黒色に近く変色するが、煤は見えない。３は断面三角形に近い高台を付



第58図　3区出土遺物実測図5（316–3～316・317号土坑、1/3）

す椀。胎土良好であるが、器面の調整痕は不明瞭。４は須恵器甕の口縁部片。これも胎土良好で、外面はカキ目調整の後にしっかりとした沈線、斜位の連続沈線（押捺）を刻む。５は白磁玉縁椀。

６は土師器皿。小片のため、復元口径には不安があるが、丁寧に作られている。底部外面の切り離し痕は見えない。７・８は瓦器。７は胎土精良な皿で、口縁部付近の内外面が灰黒色、その他は灰白色となる。全体に横撫でを多用し、内外面に疎らに篦磨きが見える。底部の切り離し痕は見えない。８も胎土精良で残存部は上端の一部を除いて全面が黒色化する。内外面に幅広い篦磨きが見える。高台は断面方形のしっかりとしたものである。９は須恵器高台付杯小片。10は口縁部の内側に面を付す染付皿小片。文様も一部が見えるだけでモチーフはわからない。

11・12は高台が高くしっかりとした土師器椀で、いずれも器表が荒れている。13は陶器椀。畳付の釉を掻き取るほかは総釉で、畳付は暗茶褐色となる。体部外面は所謂刷毛目文様で、白～灰緑色の細線が交互に重なる。内面も同様で底面では渦巻き状となっている。ただ、高台外側面から高台内にかけては灰色の単色である。胎土は暗灰色で精良緻密。

14は口端部をわずかに内側に肥厚させる瓦器椀で、灰白色となる内面に幅広い篦磨きが見える。灰黒色となる外面は横撫でで仕上げる。胎土は良好。15は緑釉陶器小片。胎土精良な須恵質の素地に灰緑色となる釉が全面に薄く掛けられている。16は白磁小片。外面は露胎で、内面に黄味が強い釉が掛かる。

316号土坑（図版23・24、第57図）　上記したような状況で、枝番を付した遺構を覆う0.1mほどの覆土を除去して漸く検出できた。枝番を付したが、相互に関連ある遺構とは考えていない。

316−１号土坑：長軸0.7～0.8mの扁円形プランをもち、内部は二段となって、最深部は0.2mほどの深さとなる。内部のやや大きい石材の上面はわずかに傾斜をもつ。

316−２号土坑：316−１号土坑の東に隣接する。長軸1.3m、短軸１mほどの不整円形を呈し、南側に拳大の礫が詰まったような状態で現れた。この礫を外すと一部を欠くが床面に貼り付いた状態の瓦質土器底部が出土した。なお、この土坑では北側にもわずかに低くなる部分があって、２基の遺構が重複している可能性が考えられる。

316−３号土坑：埋土が非常に弁別困難な土坑であった。小トレンチを設定し、わずかに濁った土を除去すると床が全面に礫層となった。あるいはこれが地山であろうかとも考えたが、鞴の羽口が礫層中に混入することに気付き、掘り下げた結果、図のような形状となった。上端は一辺長1.3×1.6mの整った矩形となり、壁の立ち上がりは本来ほぼ垂直であったものと思われる。上端から１mほど下位にテラスが付され、床面は北側に偏する長軸0.5m、短軸0.2mの長円形となり、深さは1.3mを測る。なお、床面直上は青灰色粘土が薄く堆積していた。

316−４号土坑：調査区西壁にかかり、全掘はしていない。307号溝と重複し、溝に後出するが検出時は溝と重複する部分を確認できなかった。検出した範囲から推測して、直径１m以上、1.5mに満たない円形プランをもつようで、残存する深さは0.35mほどである。

検出面付近にはやや大振りの川原石が陶磁器類とともにあって、それらを除去すると10㎝ほどの大きさの川原石を主体とする礫群が弧を描いて現れた。これを参考にすれば、上層の礫群も弧状となっていて、かつ下層礫群のほぼ真上に位置している。上下二段に弧状に礫を積んでいたようであるが、しっかりと組み上げたものではない。

土層観察の所見では礫の内側には黄褐色土系の埋土が、外側には灰黒色土系の埋土があったと記録する。円形の木枠あるいは桶が使用された可能性もあるが、未確認である。なお、その場合には

井戸をできるが、非常に浅い土坑で、水が湧くとは思えない。

出土遺物

土器等（第56・58図）

316−２号土坑：１～３は「北」、４・５は「南」と注記があり、６は出土状態を図示している。１・２は土師器皿。１は口縁部をわずかに外反させる。胎土良好で体部上半は内外面が赤味をもち、以下は灰黄褐色となる。底部外面は回転糸切り痕のようである。２は体部が直線的に立ち上がるが、口縁部を欠損。底部外面には回転糸切り痕が残る。３は口縁部が鳥嘴形となる須恵器蓋小片。４は瓦質の筒型となる鉢。胎土に砂粒は少なく、内面は黒色、外面も大部分が本来は黒色であったようだが特に下半部で色が落ち、器表の剥落が多く見られる。火熱に晒されたのであろう。内面には刷毛目が良く残り、外面の調整痕は不明。５は体部が直立する染付。外面に圏線が入るが、それ以外は無文。また、外面の釉は青味を以て発色するが、内面は青味が無く白色（透明）である。畳付の釉を掻き取っている。６は床面に正置して出土した瓦質土器の底部。復元底径は約41㎝である。外面はほぼ表面が剥離しているが、残存しているところは黒色化する。体部内面は細かい刷毛目が残り、底部は剥落・荒れて調整痕が見えない。胎土は良好。

316−３号土坑：いずれも「下層」と注記がある。１は土師器杯あるいは椀。体部外面は中位以下を回転篦削りで仕上げ、わずかに残る底部にも篦削り痕が見える。内面調整は横撫でが見えるのみ。胎土良好で、やや赤味をもって焼き上がる。２は酸化炎焼成されて黄白色に焼き上がる擂鉢で、片口の一部が残る。内面は細かい横刷毛、外面はやや粗い斜位の刷毛目が見えるが、器面が平滑化していない。３～６は須恵器。３は口端部を折曲げる杯蓋で、口縁部内面と天井部外面が暗灰色、天井部内面と器肉は灰赤褐色となる。４は口端部をわずかに下方へつまみ出す杯蓋で、天井部外面の調整は粗い。５は杯身口縁部片、６は高台をもつ底部小片。７は鞴羽口。外面は図下半が灰白色、上半が暗灰色で上端付近では器表が溶融発泡したようになる。内面は大部分が赤味帯びる黄褐色で、上端付近が灰黒色～灰褐色。器肉も中位以下で中心部付近が黒色化していて図上方が先端であったようである。

316−４号土坑：１～５は「土316−４号」、６は同「下層」とある。１は小振りの高台をもつ小椀で、外面を青磁とする。内面は見込外周の二重圏線の中にコンニャク判を押す。２は釉が緑味を帯びて発色、体部外面の花文も灰緑色となる椀。３は体部が直立し、口縁部内面をやや広く、外面では狭く釉を掻き取る。外面は２輪の花文を主文として同じ文様を３単位描く。４は内面に一重綱目文を描き、濃淡描き分けた楕円文を対称形になるように配する。見込には五弁花文を置く。外面では体部に唐草文、高台内に変形字を描く。５は体部内面に矢羽根文、見込に４に似るがやや大きな五弁花文を置き、外面には唐草文とこれも高台内に変形字を描く。これは焼成が甘いためか、外面に赤味をもつ部分が数箇所見られる。６は陶器火入。肉厚の高台をもち、体部は下位で屈曲して直立し、口縁部を内側へ肥厚させる。体部外面に２個所、意味を読み取れない文様が描かれるが、写真で示したものが大きく、反対側に描かれたものは大部分を欠失するが、文様としては小さいものである。口縁部上面から体部下位の屈曲部までの外面に施釉。口縁部内面付近には薄く垂れているが、基本的に内面は露胎である。釉は赤味を帯びる暗灰色、文様は暗茶褐色となる。なお、胎土は暗灰色緻密。

317号土坑（第４図）　315号土坑の南西に位置し、暗灰色埋土の部分をこのように呼称したが、315号土坑の項で記したように最終的に307号溝完堀とともに痕跡を失った。北壁の307号溝

断面にも現れず、これも有無も性格も不明なままで終わった。

出土遺物

土器等（第58図）　316・317号土坑を確認するために掘り下げた部分から出土したものを「土316・317号」として取り上げていて、それらを紹介する。

１～４は土師器。１は胎土精良な灰白色～黄白色となる椀。外面に横撫でによる凹凸が特徴的で、内面は篦磨きで仕上げるようである。２は断面三角形となる高い高台をもち、３は同様な低い高台をもつ椀。２は器表が荒れているが、いずれも胎土精良というべきで、３は仕上げもごく丁寧である。５～８は瓦器椀。５・６はよく似る。口縁部外面から内面にかけて黒色化し、それ以下の外面は灰白色となる。内面では単位が見えないが篦磨きが密に施されるようで、外面では疎に見える。７は図示部が完周するが器表が荒れていて調整痕等は残らない。内外面ともに暗灰色となる。８は小片でこれも器表が荒れる。外面が暗灰色、内面は黄白色となる。７はボタン状のつまみをもつ須恵器杯蓋片。10は白磁小片。11は断面方形となる高台をもつ朝鮮陶器。胎土は暗灰色だが緻密さを欠くようである。全体に施釉されていて、緑味を帯びる暗灰色に発色する。見込に３個の目跡が残り、畳付にもその痕跡が見える。

318号土坑（図版25、第57図）　316－１号土坑の南に近接する小型土坑。長軸１ｍ余、短軸0.6m余の長円形をなし、深さは最大で0.2mを測る。内部には無秩序に礫があって、その上から土器片が出土した。

出土遺物

土器等（第59図）　１～４は陶器。１は火入か。体部下位の屈曲部で折損し、残存部位は露胎である。底部内面も露胎であるが、釉が飛び散ったものか、光沢をもつ微少な斑点が無数に見られる。胎土は灰白色緻密で、一見磁器のように見える。２は口縁部を断面三角形とする備前焼擂鉢。外面は灰黒色、内面は濃い小豆色といった発色で、口縁端部からスリ目が入る。３は備前焼壺か。やや不整な高台は貼付のようにも見えるが、畳付に回転糸切り痕が残ることから削り出しであろうか。胎土は暗灰色～暗黄灰色となり、白色・茶褐色粒などを交える。内面は施釉されるようで濃い小豆色となり、外面は赤味を帯びる暗茶褐色となって自然釉の小さな斑点が高台内までおよぶ。４は大振りの高台から体部が内彎しつつ立ち上がり、口縁部が水平に折れて端部を断面三角形とする大皿。内面は暗茶褐色釉の上に黄白色釉を掛け、波状文風に釉を掻き取って赤褐色となる地肌も含めて３色とし、最後に暗緑色釉を２個所に掛ける。外面は上半に釉を薄く掛け、そこは灰茶褐色あるいは灰白色となる。胎土は明るい赤褐色で、露胎部も同色。体部外面下位から高台内にかけて篦削りの痕跡が明瞭で、見込には砂目の痕が４個見える。

５～７は染付。５は外面に雪輪文を描く小椀で、内面は無文。高台内にも単純な線を描く。６も雪輪文を描く椀で、これは高台内に「大明年製」を崩したと思われる文字風のものを置く。７は蛇の目凹形高台の皿。見込に花文と思われる文様を描き、外面では体部下端付近に３条の発色の薄い圏線を巡らせる。その上方にも施文の一部が見える。

319号土坑（図版19・30、第４図）　調査区南西隅付近にある314号土坑としたものはいかにも新しい大型の撹乱坑であるが、その南側には303号溝と平行するような約0.3mの段落ちが７ｍほどの長さまで確認できた。調査区中央南端付近には大小の撹乱坑が集中していて先の段落ちは一端不明となるが、撹乱坑の東端に南北方向の0.1ｍほどの段落ちが303号溝まで続く。この東西

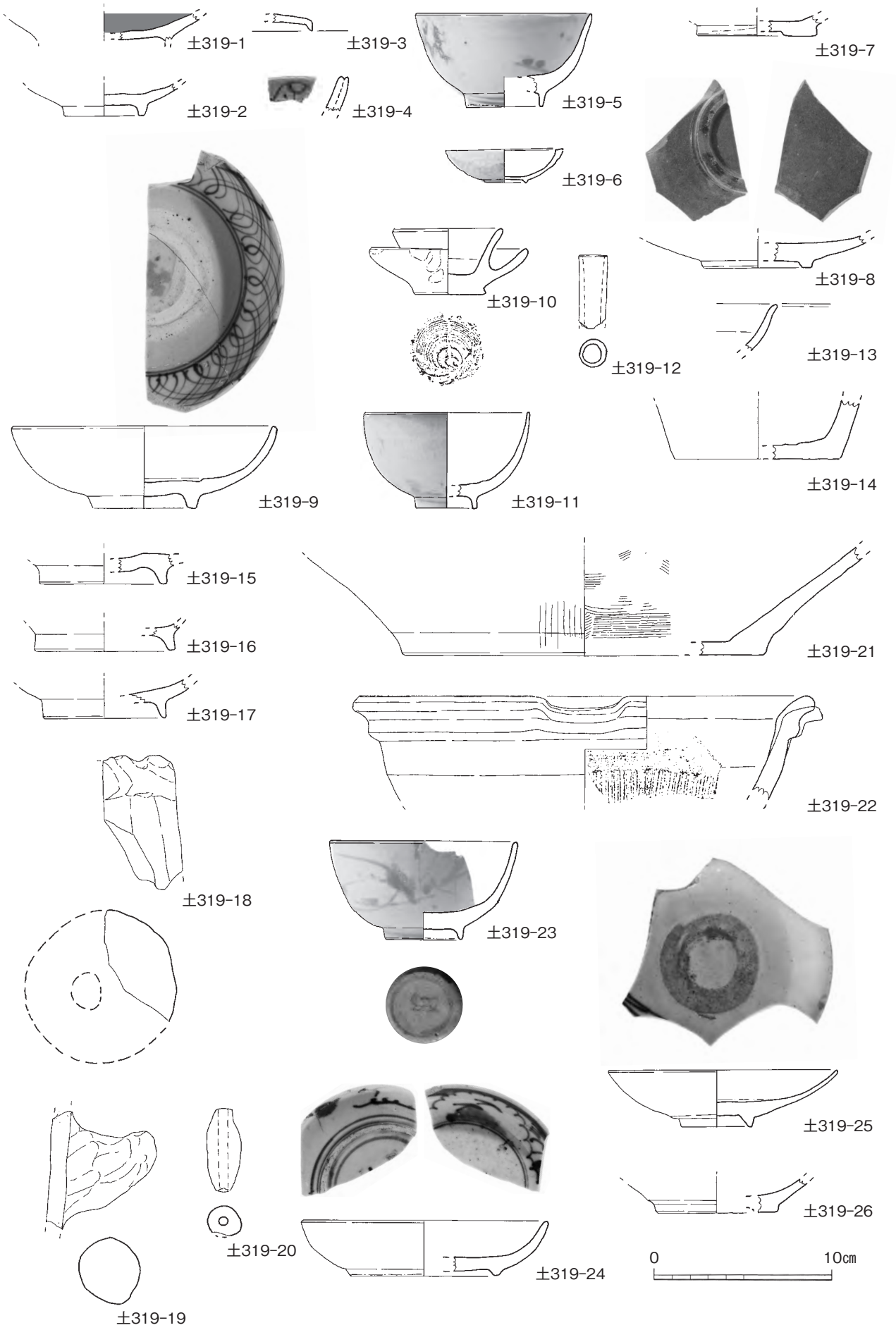
長約11m、南北長３mほどの落ち込みを319号土坑とした。単一の土坑としては大きすぎ、303号溝に伴うとすると調査区中程で終わる理由がわからない。ちなみに、床面の標高は南西端付近で23.36m、撹乱坑西側で23.47m、東端の23.52mとなり、全体に東から西側へ緩く下降する。303号溝と接する付近で23.63mを測る。

314号土坑が重複する西端付近の畦および畦と撹乱坑群の中間付近の２個所で土層図を作成した（第70図）。西端付近畦では中央に314号土坑とした撹乱が床面まで及んでいて、319号土坑と303号溝との関係はわからない。東側の土層では319号土坑の最深部は南壁下端に位置し、北へ向かって徐々に浅くなって北辺は明瞭な下端をもたないようである。一方、303号溝の南肩もはっきりと確認したものではないが、この溝と土坑を一連の遺構と考えることは困難であろう。

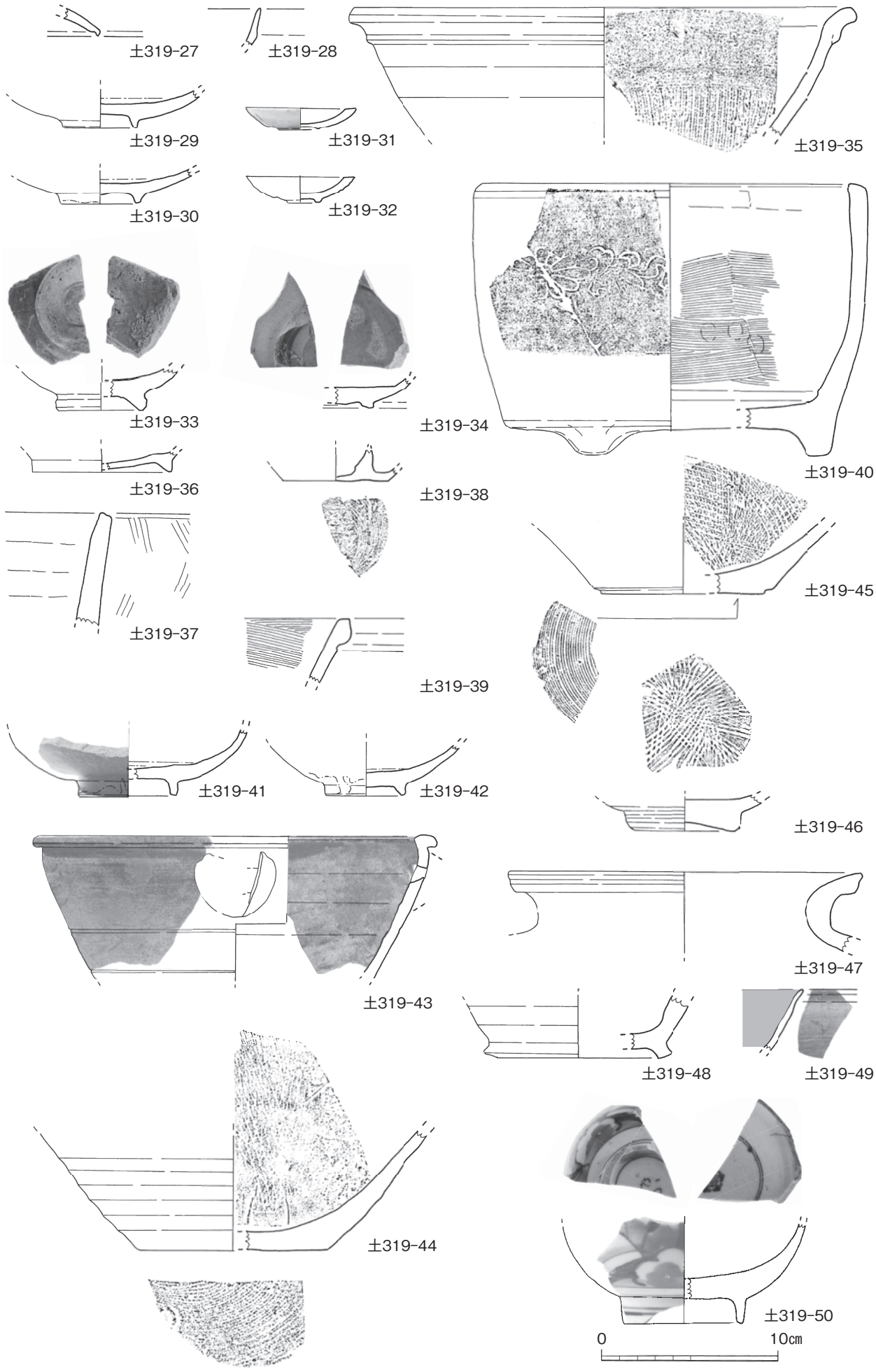
出土遺物

石製品（図版58、第49図14）　「319号土坑・303号溝上層」とあり、出土遺構を特定できないがここで紹介する。灰黄白色を呈する石英斑岩製の砥石で、図下端は折損する。ほぼ直方体とな

第59図　3区出土遺物実測図6（318号土坑、1/3）



第60図　3区出土遺物実測図7（319号土坑-1、1/3）



第61図　3区出土遺物実測図8（319号土坑-2、1/3）

り、図示した面では上端付近に横位の弱い稜が走り、下位に細くシャープな筋が数条刻まれる。図左側面では残存部中位付近が盛り上がる。図上端の面は未使用。石目は図左側面から右側面へかけて走り、図示した面はそれと平行の位置にある。仕上げ砥であろう。

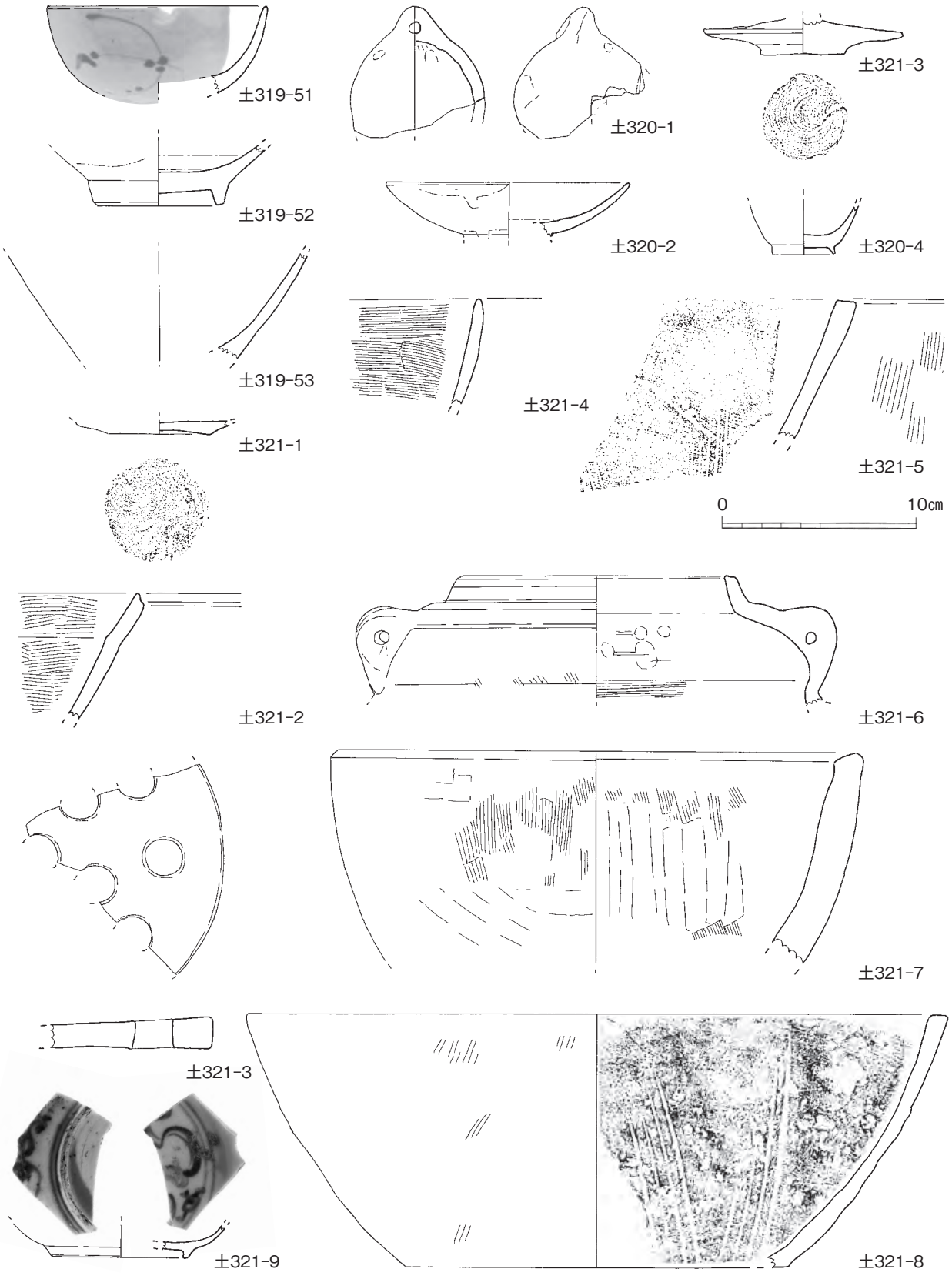
土器等（図版59、第60～62図）　1～8は「土319南東隅付近」、9～26は「杭7」の周辺出土で、遺構東端付近にあたる。27～34は遺構東端付近にある撹乱坑−314号土坑同様に黄色砂を埋土とする−からの出土で、35～53は土坑と一部重複する303号溝と帰属を弁別できなかった土器である。

1は内面が黒色、外面が黄褐色となる黒色土器であろうが、素地も灰黒色となっている。高台を欠損、器表も非常に荒れている。2は見込を蛇の目に釉剥ぎする唐津焼青緑釉陶器で、釉は灰緑色に発色する。外面は露胎で、灰黄色の緻密な胎土となる。3は須恵器杯蓋小片。4は2片が完全に熔着している染付。このような不良品がどういう経緯でもたらされたのか興味深い。5は染付椀。これも雪輪文か、内面は無文。6は外面を蛸唐草で埋める紅皿。内面だけに施釉であろうが、外面の一部に垂れて、焼け歪んでいる。7は定窯・邢窯系といわれる蛇の目高台の白磁。汚れのためか器肉は黄白色に近く、露胎部は灰白色に近い。また、高台露胎部には直線的な丁寧な篦削りの痕跡が見える。高台内も施釉していて、総釉の後に高台部を削ったようである。8は越州窯系青磁。器肉は暗灰色、釉は灰黄緑色に発色する。これも総釉であるが、畳付だけ釉を掻き取り、赤変する部分とそうでない部分があって目跡を示す。内面に目跡は見られない。

9は染付皿。見込に五弁花文を置き、その周囲を蛇の目に釉剥ぎ、見込外周に二重圏線を巡らせてその上に2本1単位で左右逆向きの弧線を連続して描く。弧線は緑味を帯びて濃く発色するが、五弁花文は淡い水色になる。外面は無文。10は陶器灯明皿。胎土・露胎部は灰赤褐色で、胎土は精良といってよいが緻密さを欠く。受皿内面から灯明皿にかけて全体に施釉、濃い暗灰茶褐色となる。底部外面は回転糸切り痕が明瞭で、受皿外面は横撫でで終わる。11は染付小椀で、体部下位に雪輪文と思われる文様の一部が残る。内面は無文。12は直径1.7㎝、長さ4㎝以上の円筒形の磁器で碍子であろう。13・14は須恵器。13は杯身小片。14は瓶類で、器表に石英粒が目立つが胎土は緻密で、底部外面には篦削りが見える。15～17は形状がそれぞれ異なるが、しっかりとした高台をもつ土師器椀片。また胎土は精良といってよく、器表が荒れている。18は鞴羽口の小片。図上端は先端部のようで黒色化あるいは一度溶融したような状況となる。19は甑把手で、外面はよく赤変する。20は土師質の土錘で、長さ4.7㎝、最大径2.0㎝。一部欠損するが重量は13ｇである。21は瓦質鉢・甕類の底部片で、外面は剥落が目立つ。胎土・器表ともに灰色で、刷毛目調整を多用する。22は暗赤褐色の胎土をもつ陶器擂鉢。口縁部を外反させ、その下位に甘い突帯を巡らせる。全体に茶色味を帯びる黒褐色といった発色をする釉が掛かる。23～25は染付。23は焼成不良のためか、全体に白濁していて文様も不鮮明な椀。高台内にも変形字が見え、畳付のほとんどを欠失する。内面は無文。24は体部の内外面に文様を置くが、内面のそれは意味がわからない。25は浅い皿で、見込を蛇の目に釉剥ぎし、灰緑褐色に発色する3本の線が残るが、文様の意味は不明。外面は体部下端付近が露胎となる。26は蛇の目高台をもつ越州窯系青磁。素地は灰黄色の緻密なもので、釉は灰黄緑色に発色する。全面に施釉し、高台畳付だけ釉を掻き取っている。そこに赤変するところとしないところがあり、目跡を示す。内面に目跡はない。

27・28は須恵器杯蓋、同杯身の小片。29は焼成不良の磁器か。器肉は灰黄色～灰赤色緻密なもので、釉は乳白色となる。見込を3㎝ほどの幅で広く蛇の目に釉剥ぎし、その上に黄白色の化粧土を塗る。高台脇に青く発色する釉が掛かった磁器の一部が熔着している。30は見込を蛇の目に釉

剥ぎ、その外側に二重の圏線を描くほかは無文。外面では高台外側面から内部にかけて露胎とするが、一部で釉が垂れている。青味強く発色。31は外面に蛸唐草を押捺するが浅くてほとんど見えない。32はしっかりとした蛸唐草が押捺されるが、口縁部幅が一定しない。またこの２点の白磁紅皿は高台径が大いに異なる。33は暗灰色緻密な胎土となる朝鮮陶器。大きな高台をもち、畳付を除いて総釉となる。釉は淡い灰青色で、見込に大きな目跡が２個残り、畳付の一部が剥がれてい



第62図　3区出土遺物実測図9（319-3～321号土坑、1/3）

る。34は低い高台をもつ越州窯系青磁で、器肉は暗灰色緻密。外面上端に施釉部が残るが、以下は高台内まで露胎とし、ごく丁寧に篦削りを行って高台内に段を作る。釉は淡い灰黄緑色で、畳付付近は暗茶褐色となる。見込に２個の目跡が残る。35は22と同一個体のようだが接合しない。

36は器表が荒れる土師器椀。37は甑口縁部である。38は受皿付灯明皿様の土師器。全体に黄褐色を呈し、煤等の付着はまったく見られない。39は口縁部を断面三角形とし、口端部に面をもつ土師質の鍋小片。灰褐色であるが、外面には煤が多く付着する。40は胎土が灰色、器表がよく黒色化する瓦質の鉢で、体部はわずかに内彎しつつ立ち上がって口縁部は変形しない。底部には三足が付くようである。底部外面は刷毛目で、同内面は横撫でで丁寧に仕上げている。体部内面は横刷毛、同外面は縦刷毛が観察できるが、全体にやや雑な篦磨きで仕上げている。口縁部下に花文を手描きするようである。41は微少な白色粒が目立つ緻密さを欠く暗灰色の素地に暗茶褐色となる釉を掛ける陶器椀。見込を蛇の目に釉剥ぎするが、その部分も光沢をもっていて、釉を掻き取って唯一露胎となる高台と発色が異なることから何かを塗るようである。唐津焼や染付のような明らかな化粧土ではない。42は唐津焼の青緑釉陶器椀。黄白色の緻密な素地に灰味強く発色する灰黄緑色釉が掛かる。見込は蛇の目に釉剥ぎしたままで、体部下位から高台にかけては露胎。43は灰赤褐色の緻密さを欠く胎土の水指。口縁部を小さく折り曲げて、体部外面はカキ目で覆う中に沈線を１条巡らせている。内面は横撫で、体部内外面に灰黄緑色となる釉を掛ける。口縁部上面は剥落して荒れているが茶褐色となっていて露胎である。44は備前焼擂鉢。赤味の強い素地で、破面を含めて煤が多く付着する。体部外面は横撫で、底部外面には回転糸切り痕を残す。スリ目は細くシャープ。45も備前焼擂鉢で、灰赤褐色～暗褐色となる非常に精緻な素地である。あまり使用されていない。46は磁器とすべきであるかも知れない。素地は精緻な暗灰色で、器表近くは灰赤褐色となり、露胎部も同様である。釉は体部外面に掛かり、灰黄緑色に発色する。内面には細くシャープなスリ目が刻まれ、厚い高台をもつ。底部外面は丁寧な篦削りか。47～48は須恵器。47は甕口縁部で胎土良好、調整は粗雑な感がある。口縁部下に大きな火膨れがある。48は瓶類の底部で、高台は接地部のほとんどを欠く。体部外面には回転篦削りが見える。49はごく精良な胎土をもつ緑釉陶器椀片で、須恵質の素地に薄く緑釉が掛かる。50は高台が高い染付椀。内面の装飾は見込外周の二重圏線と中央に置かれた五弁花文だけである。外面では体部に大柄な文様を、高台側面や高台内にも圏線を巡らせて文字のようなものを描く。畳付だけが露胎。51も染付椀で、内面は無文。52は見込を蛇の目に釉剥ぎする白磁椀で、釉は黄味強く発色し、雑な作りの感を受ける。53は越州窯系青磁椀であるが、体部片であるために傾き・復元口径等に不安がある。胎土は暗灰色精緻、釉は灰青緑色といった発色となる。

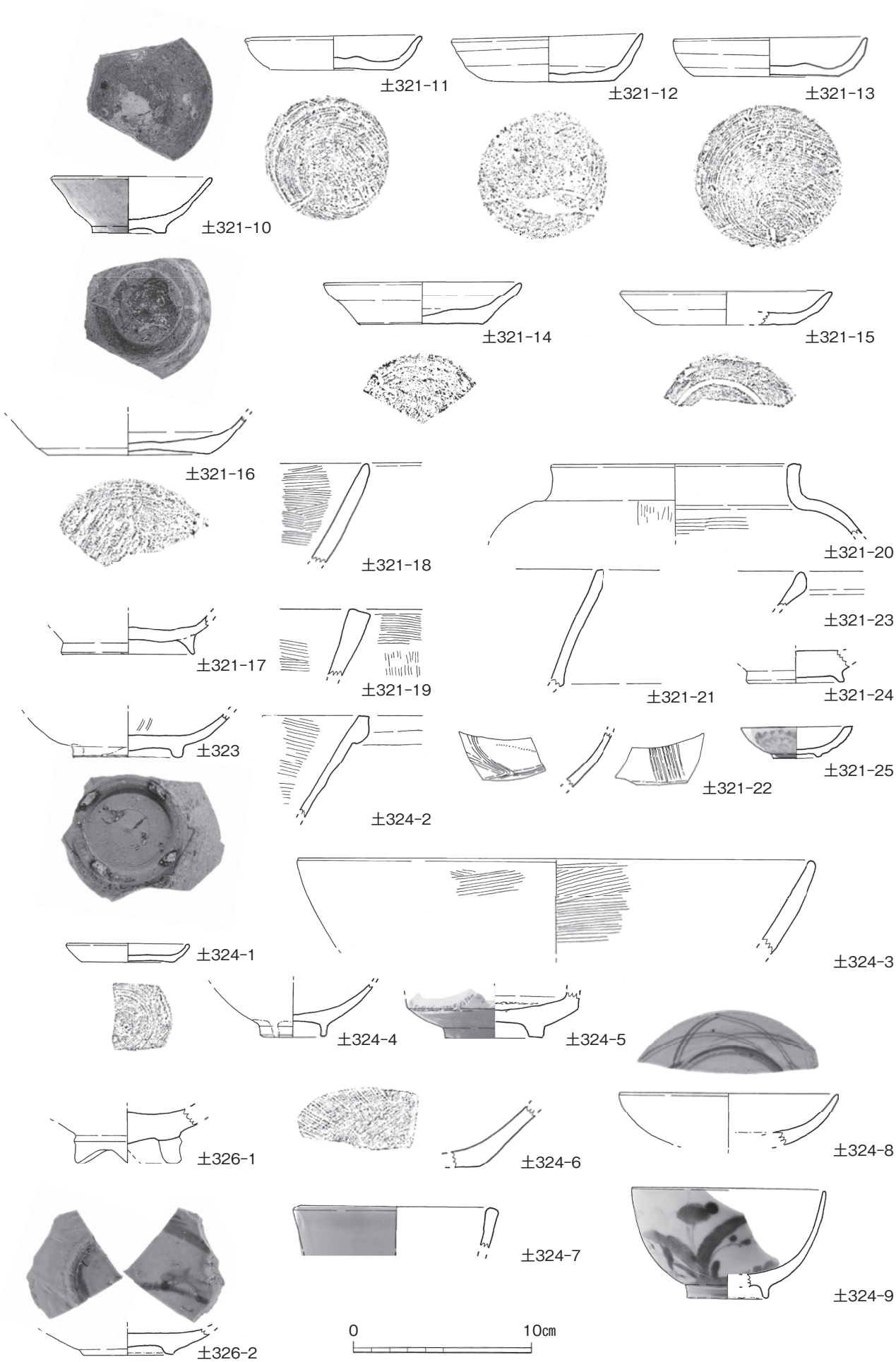
320号土坑（図版25、第57図）　316－３号土坑の東に近接する偏円形土坑で、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.45mを測る。東側には検出面から0.15mの深さでテラスがある。

検出面から0.3mほど掘り下げると、黄褐色粘質土と淡灰色粘質土が混ざる埋土に、鉄分・マンガンが沈着した暗灰色土が直径0.4～0.5mの円形に現れた。半裁してみると、円形の埋土は柱状に垂直に入るのではなく擂鉢状になっていて、床から数㎝浮いたところで止まっていた。

性格を判断しかねているが、検出面で先の土質の境のわずかに外側に位置するところから土師質の土鈴が出土している。

出土遺物

土器等（図版59、第62図）　１は最大幅7.0㎝、残存高6.7㎝を測る大型の土師質の土鈴。胎土



第63図　3区出土遺物実測図10（321−2〜326号土坑、1/3）

精良というわけではないが、表面に砂粒は浮いていない。手捏ねであろうが、外面は良く平滑化しており、内面では頂部付近に絞り痕、その下位には横撫で痕が見える。２は灰黄色の緻密な胎土をもつ唐津焼青緑釉陶器。見込を蛇の目に釉剥ぎし、内面では青味を帯びる灰黄緑色、外面では灰黄緑色に発色する。３はつまみを欠失する陶器蓋。灰褐色の緻密さを欠く胎土をもち、天井部のみ施釉して黒緑色に発色するが、斑に露胎部が残る。下面は灰褐色となって、口縁部から１㎝の付近に円形に目跡あるいは重ね焼きの痕跡が残る。４は磁器の小椀。釉は青味をもっていて青白磁というべきであろう。畳付だけが露胎となる。

321号土坑（図版25、第57図）　320号土坑の北、北辺に沿って落ち込みの一部を検出して321号土坑とした。検出面で礫群などがまとまっていたことから精査して確認したものである。発掘の結果は幅1.0～0.6mの溝状の遺構となった。西端部の深さは0.1mほどであるが、東へ向かって階段状となり、検出東端部では0.6mほどとなる。

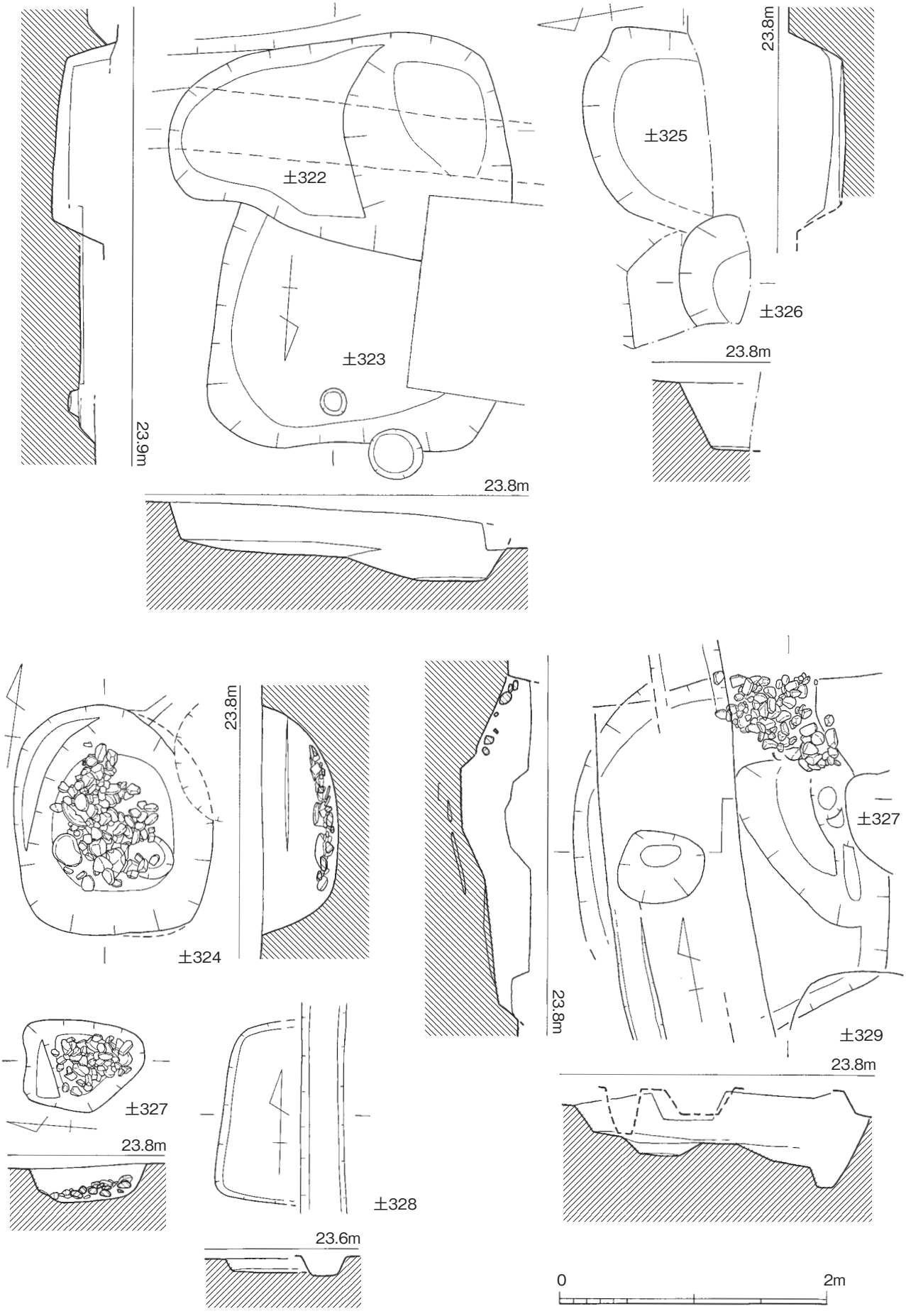
307号溝と重複する位置にあるが直接の切り合い関係を確認できていない。307号溝の南に並走する小溝304号溝は307号溝と一連の遺構と考えているが、この321号溝はその小溝を壊していることから、307号溝に後出する遺構であったと考えられる。

出土遺物

石製品（図版58、第49図２）　緑色片岩製打製石斧と思われるが、図上下ともに折損する。身が薄く、図示した面が非常に滑らかになっている。剥離後、砥石として使用されたものかも知れない。

土器等（図版59、第62・63図）　１～10は検出面付近から出土したもの、11～24は「下溝」の注記があって、下層出土である。

１はほぼ底部だけが残存する皿で、意図的に円盤状に加工されたことも考えられる。焼け歪んだものか立ち上がりが非常に浅い。２は鍋形の土師器で、内面に弱い稜線が走る。口縁部外面から内面にかけて黄褐色、外面の大部分は暗褐色～黒褐色となるが、これは火熱に掛けられたためであろう。３は精良緻密な胎土をもち、丁寧に作られた簀の子で、図示した面の中央に近い付近が白色化する。下面は全体が灰赤褐色となる。４は外面が異様に赤変する鍋形の土器で、内面調整が良く残るが外面は剥落し荒れる。土師器とすべきか。５は内面に部分的に灰黒色となる部位があるが、内外面ともに全体に赤味を帯びる灰黄褐色となる。これも火熱を受けたものであろう。胎土は芯が灰黒色でサンドイッチ状となり、本来は瓦質土器というべきであろう。スリ目の下の刷毛目が良く残る。６は暗灰色精良な胎土の瓦質茶釜。残存部下端が外側へ開いていて鍔に続いていたようである。吊手は幅広くしっかりしたもので、その上端付近に甘い沈線が刻まれる。外面は全体に撫でて仕上げるが、下端付近には刷毛目が残る。内面上半は指撫で、指頭痕が顕著に残り、それ以下は撫でと思われるが刷毛目状の痕跡が残る。器表は全体に灰黒色となる。７は肉厚粗製の瓦質土器。胎土に砂粒を多く交え、芯が暗灰色、内外の表面は灰黄褐色とサンドイッチ状となる。内面を篦削りと刷毛目で調整するが、器面の平滑化は意図していないようである。外面はやはり篦削りと刷毛目であるが、こちらは平滑化している。内面の残存する中位付近から下位は黒色、その上端が暗褐色化し、さらに上位は灰黄褐色となる。特殊な用途のための土器であろう。８は瓦質の擂鉢で、これも器肉はサンドイッチ状の色相となる。全体に灰褐色化していたようだが、内外面ともに下位の表面が剥落する。内面は平滑化して横位に近い刷毛目の上にスリ目を入れる。外面は指押さえで成形したものか、部分的に刷毛目が見えるが平滑化していない。９は明染付であろう。器壁が非常に薄く、総釉とした後に小振りな高台の畳付のみ削って露胎とする。10は朝鮮陶器小椀。胎土は暗褐



第64図　3区土坑実測図3（322～329号土坑、1/40）

色で、器表は砂粒による凹凸が著しい。釉は灰緑褐色で総釉とし、畳付に４個、見込に３個の目跡が残る。見込中央付近は白濁する。

11～18は土師器。11は体部が内彎し、口縁部が小さく外反する皿で、底部内面が円形に盛り上がる。口縁部の2/3が残存、復元口径は10.0㎝、器高は1.9㎝を測る。12は体部外面中位で緩く屈曲し、場所によっては屈曲が２段におよぶ。胎土は粗いといえる。完存に近く、口径10.8㎝、器高2.6㎝。13は12に似て体部外面に段をもつが、開きが小さい。内面の半分以上が黒変し、灯明皿として使用されたらしい。これも口縁部の3/4強が残存。口径11.0㎝、器高2.2㎝を測る。14は底部の1/3ほどが残存するが、口縁部はごく一部が残るのみである。体部下半が内彎する。15も底部は1/3ほど残存するが口縁部は小片。かつ、底部から体部へかけて丸く移行するために復元口径に不安がある。16は最も底径が大きくなるが、体部は薄く作られる。底部外面には回転糸切り痕とスダレ状の圧痕が残る。17は高台付椀で完周する。器表が荒れているが、高台内に篦切り痕が見える。18は土師質の鍋で、外面調整は見えないが厚く煤が付着する。胎土は灰赤褐色、器表は暗褐色となる。19は暗灰色精良な胎土の瓦質擂鉢。内面は刷毛目の後にスリ目を刻み、外面は口縁部下に横刷毛が残るが、それ以下は指押さえを主体とするようで、縦刷毛が薄く見える。20は瓦質の茶釜か。胎土は灰白色～黄白色で、器表はよく黒色化している。肩部外面付近は縦刷毛のように見えるが、器表の剥落が著しい。21は残存部下端付近で屈曲するようで、一見縄文土器を思わせる見慣れない器形である。ただ、口縁部内面は横撫で調整、それ以下は顕著な調整痕が見えず、外面は他の瓦質土器のように指撫で等で仕上げたような微妙な凹凸があることから瓦質土器とした。胎土は多くの砂粒を交えて粗い。22は同安窯系青磁椀片。黄味帯びる透明釉が掛かる。23は白磁玉縁椀の小片で、釉は黄味強く発色する。24は龍泉窯系青磁椀の底部片で、見込は無文。25は外面を蛸唐草で施文する白磁紅皿。破面を含めて全体に赤錆が付着する。

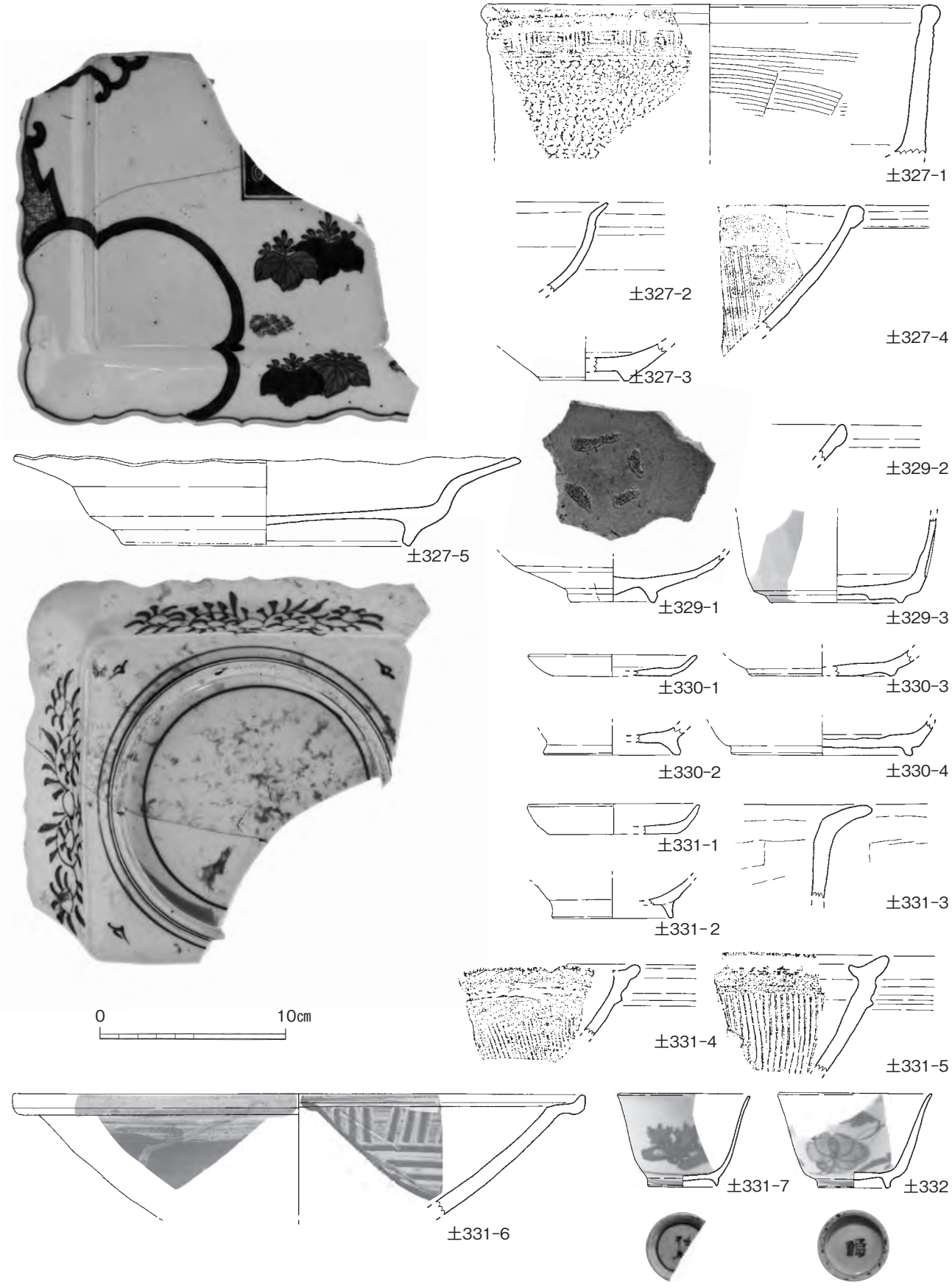
322号土坑（図版26、第64図）　320号土坑の東に近接する。西端を撹乱が覆っているが、撹乱より深い。長軸約2.5m、短軸1.7mの隅丸長方形としたいところであるが東端付近が丸味をもっている。東半部に大きなテラスが入り、その床面は不整といってよい。検出面からテラスまでの深さは0.3m、同じく床面は0.6mほどである。

埋土は耕作土に由来すると思われる青灰色土を主とし、中層付近以上に黄褐色土が混ざるいかにも新しそうな土であった。

323号土坑（図版26、第64図）　322号土坑の北に重複して位置し、この土坑が先行する。中央部を撹乱坑で壊されていて、東西長2.2m、南北長は1.7mのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。深さは0.1mほどで、遺構の規模に比して浅い。これも322号土坑同様の青灰色土が堆積していた。

出土遺物

土器等（図版60、第63図）　断面方形の高台は畳付外側を小さく削って面取りし、その内部もごく丁寧に篦削りで仕上げる。体部は浅く開き、内面に判然としないが２条の縦位の沈線が見える。見込外周にも細く浅い沈線を巡らせるようである。胎土は暗灰精良色緻密なもので、釉は黄味が強い黄緑色に発色する。体部外面下端付近は露胎で、畳付に目跡が４個残り、その周囲は赤変する。内面に目跡はない。焼成不良の越州窯系青磁と考えているが、そのまま当てはまる既往の形式分類がないようで、保留しておく。



第65図　3区出土遺物実測図11（327～332号土坑、1/3）

324号土坑（図版26、第64図）　322号土坑の東に位置する隅丸方形の土坑で、一辺長1.5～1.7mほどの規模である。深さは0.5m余り。埋土はやはり青灰色土を主体とし、黄褐色土がブロック状に混入する。壁の立ち上がりは緩やかである。

床面付近で石臼や土器類とともに掌大ほどの川原石が多く検出された。敷き詰めたとは言えないが、同一方向から投棄したというような状況でもなく比較的分散している。

出土遺物

石製品（図版60、第75図１）　直径32㎝ほどに復元できる石臼である。上縁幅3.5㎝、高さ1.9㎝ほどを測る。くぼみの方形孔は中心から大きく偏しているので「ものいれ」であろう。「ものいれ」に最も近い位置に挽き手孔の一部が残存する。臼面は大きく片減りし、目は幅広くしっかりと刻まれている。また、臼面の表面も手触りが滑らかとなっている。石材は礫岩。

土器等（図版60、第63図）　１は土師器小皿で、小片のため復元口径に不安がある。２は口縁部を折り返して断面三角形とする土師質の鍋で、胎土は赤味帯びる灰黄褐色、器表は褐色となる。内面は横刷毛がよく残るが、外面は指押さえ等で十分平滑化していない。また、外面には厚く煤が付着。３も土師質の鍋であろうか。内外面に刷毛目が見え、外面ではその下位の調整痕がよくわからないがこれは平滑化している。外面下端付近に煤が付着して黒色化するが、内面に変色はない。これも小片のために復元口径には不安がある。４～６は陶器。４は灰黄色の精良緻密な胎土をもつ椀で、高台は細く高い。調整も丁寧になされ、外面体部下端から高台にかけて露胎とし、施釉部は暗灰黄褐色となる。５は火入か。低く厚みのある高台から浅く開き、さらに直立する体部となる。胎土は暗灰色で、露胎部は暗茶褐色となる。外面屈曲部以上に施釉するようで、釉は白濁する。内面は露胎。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。６はよく使用された陶器擂鉢。胎土は灰赤色の精良なもので、底部外面を除いて施釉、灰茶褐色となる。７は青白磁の火入あるいは香炉。素地は白色で外面から口縁部内面にかけて淡い灰青色の釉が厚く掛かる。８は染付皿で、見込を蛇の目に釉剥ぎして内面に二本線で斜格子を描く。９は染付椀で、外面に草花文を大きく描き、その左下には蟋蟀のようなものを添えている。畳付が露胎、高台内にも圏線を描き、内面は無文。

325号土坑（図版19、第64図）　調査区南西隅に位置する。319号土坑の延長となる段落ちとの先後関係は確認できていない。東西長1.6mをわずかに上回るようで、南北長は１m以上、深さは0.4mほどを測る。

326号土坑（図版19、第64図）　これも調査区南西隅にあって、調査区境の壁に現れていたものを一部拡張したものである。東西0.8m以上、南北0.5m以上、深さ0.5mを測る。円形あるいは隅丸方形となろうか。ここには黒色系の埋土が入っていた。

出土遺物

土器等（第63図）　１は大きな高台の３個所に刳り込みを入れた陶器。高台の整形も無骨な感があり、底部も肉厚となる。残存部はすべて露胎で、胎土は灰黒色～灰赤褐色で精良といってよい。器表は黄褐色～灰赤褐色となる。焼成不良か。２は低い高台をもつ染付皿で、畳付だけ釉を掻き取る。見込の文様は発色が不明瞭で、外面体部下端付近は釉に斑があって襞ができている。

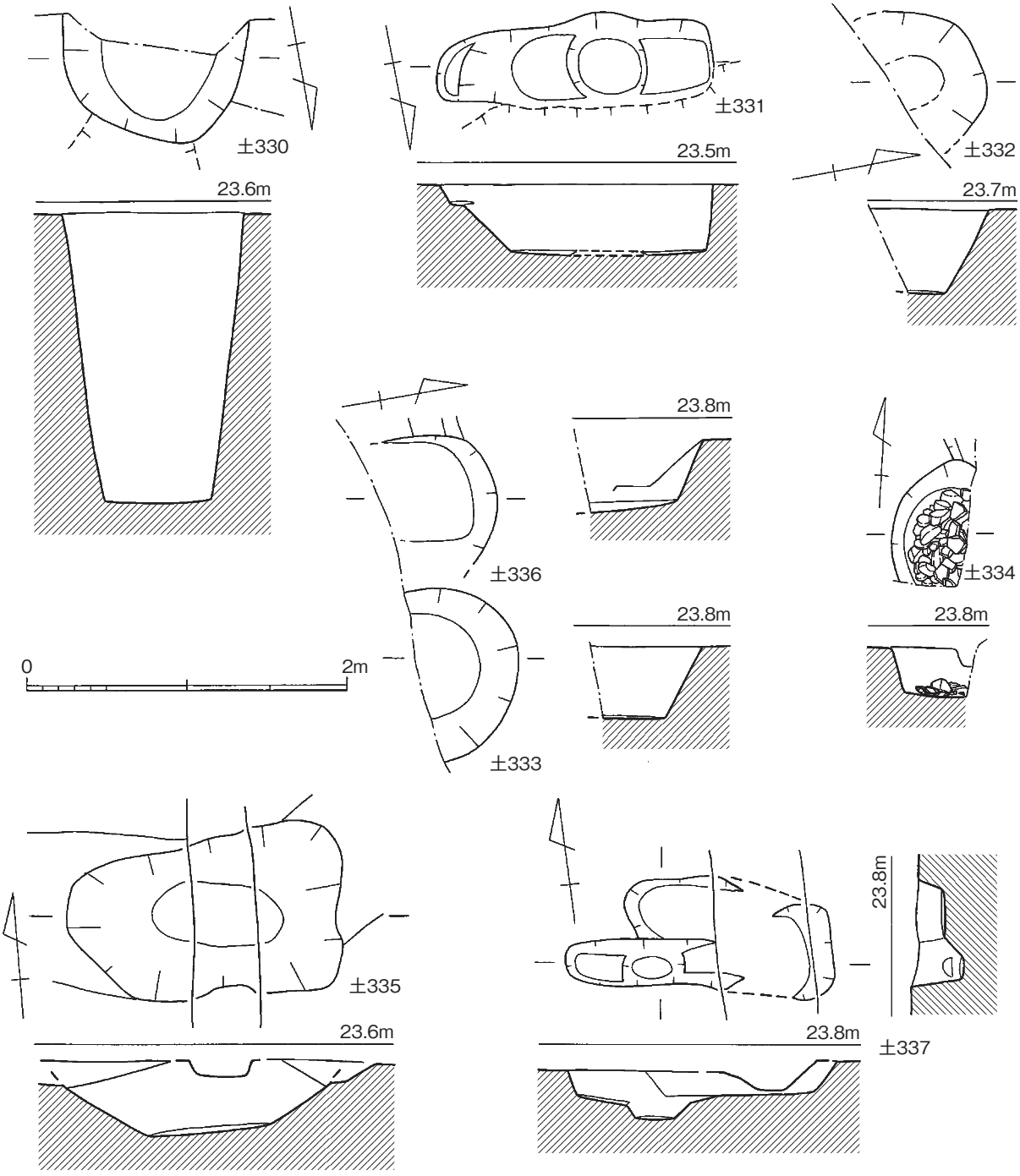
327号土坑（図版27、第64図）　調査区東端近く、308号土坑の北に近接する。後述する329号土坑は小礫が多く露出するものの輪郭の確認が非常に困難な遺構であったが、その東端で重複する

この327号土坑は直ぐに判別できた。検出面では桟瓦と染付皿が検出面に現れていて整った長方形であったが、発掘後は南辺が乱れた。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.3mの規模である。

埋土は暗褐色粗砂で、床面ではほぼ全面に拳大前後の川原石が現れたがこれも敷き詰めたというような状況ではなかった。

出土遺物

土器等（第65図）　1は口縁部を玉縁とする瓦質の小型鉢。胎土は灰黄色～灰赤色で、微砂粒を交えるが良好、器表の内外面がよく黒色化する。内面は横位の刷毛目で仕上げ、外面は口縁部下に雷文を連続してスタンプし、その下は刺突様の不規則な圧痕で全面を埋めている。２～４は陶器。２は内彎する体部から口縁部を外折させる浅い椀か。胎土は灰白色精良緻密なもので、釉はほ



第66図　3区土坑実測図4（330～337号土坑、1/40）

ぼ透明となる。３は暗灰茶褐色の精良な胎土をもち、碁笥底風となる。体部外面下位から高台にかけては露胎、また見込も蛇の目に釉を掻き取っている。釉は緑味を帯びる灰白色に発色、釉を掻き取った部分およびその内側に砂目が残る。唐津焼であろう。４は灰黒色の緻密な胎土となり、口縁部を玉縁とする擂鉢。スリ目は細くシャープなもので、内外面に暗茶褐色となる釉を掛けるが、口縁部付近はより濃く発色する。５は口端部に変化を加える染付の方形皿。中央に方形の区画を置き、唯一残る隅部も弧線で大きく区画するもののその中は無文、その上は区画内を四方襷文で埋める。中央下には濃淡２単位をセットとした桐文を二段に配し、その周囲に区画のない四方襷文を置いている。外面は変形の唐草文を主文様とし、各隅部にも単純な文様を置く。内傾する畳付の釉を掻き取る以外は総釉である。高台は円形で、図左下隅の区画文の付近では同心円の横撫で痕が見えることから当初は丸く作っていたことがわかる。

328号土坑（図版19、第64図）　301号土坑の西に近接する。南北方向の301号溝に切られ、交差して東西方向に走る305号溝を切っていた。南北長1.4m、東西長は301号溝の東に現れていないことから0.7m前後となろう。深さは0.1mほどの浅いもので、特記すべきことはない。

329号土坑（図版27・28、第64図）　308号土坑の北西、327号土坑の西にあって両土坑に切られる。先述したように、検出面で多くの川原石が露出していて検出が困難な遺構で、南西部はわからないままで終わった。

南北長2.6mまで確認できるが、隅丸方形に近い形状から判断してこれ以上はさほど大きくならないであろうと思われる。東西長は2.3m、深さは掘り込みのない部分で0.2～0.3m、東辺中央の掘り込みの最深部は0.7mである。北東隅付近に土器類も若干交えて小礫が集中する部分があるが、これも規則性といったものは見えない。303号溝との先後が未確認であるが、後出するものとの印象を持つ。

出土遺物

土器等（図版60、第65図）　１は灰黄色の精良な胎土をもち、明灰色に発色する釉が掛かる唐津焼。体部下端の篦削りは縦位に縞状の痕跡を残す。釉は体部下端付近まで施釉、部分的に高台内まで垂れている。見込に目跡が４個付着、高台にはない。２は玉縁が扁平で小振りとなる白磁椀。３は底部が蛇の目凹形高台となる青白磁香炉。内面は露胎で底面に微少な付着物が多く、外面底部にも砂が付着する。釉は青味強く発色、体部外面に幅広い凹部が斜位に刻まれる。

330号土坑（図版28、第66図）　調査区中央西よりの南端で円形の井戸状の土坑を検出した。ほぼ1/2が調査区内にあり、検出面での直径1.2m、床面での直径は0.8mほどである。埋土上層に大小の礫を多く含んでいた。土層図を作成していないが、当時のメモでは中央に深くU字形に黒色系埋土の落ち込みがあり、その両側にやや明るい灰褐色系の埋土が取り巻くように見られた。1.8mほど掘り下げたところで砂礫質の土質となり地山と判断した。床面に特別な構造物はなかった。

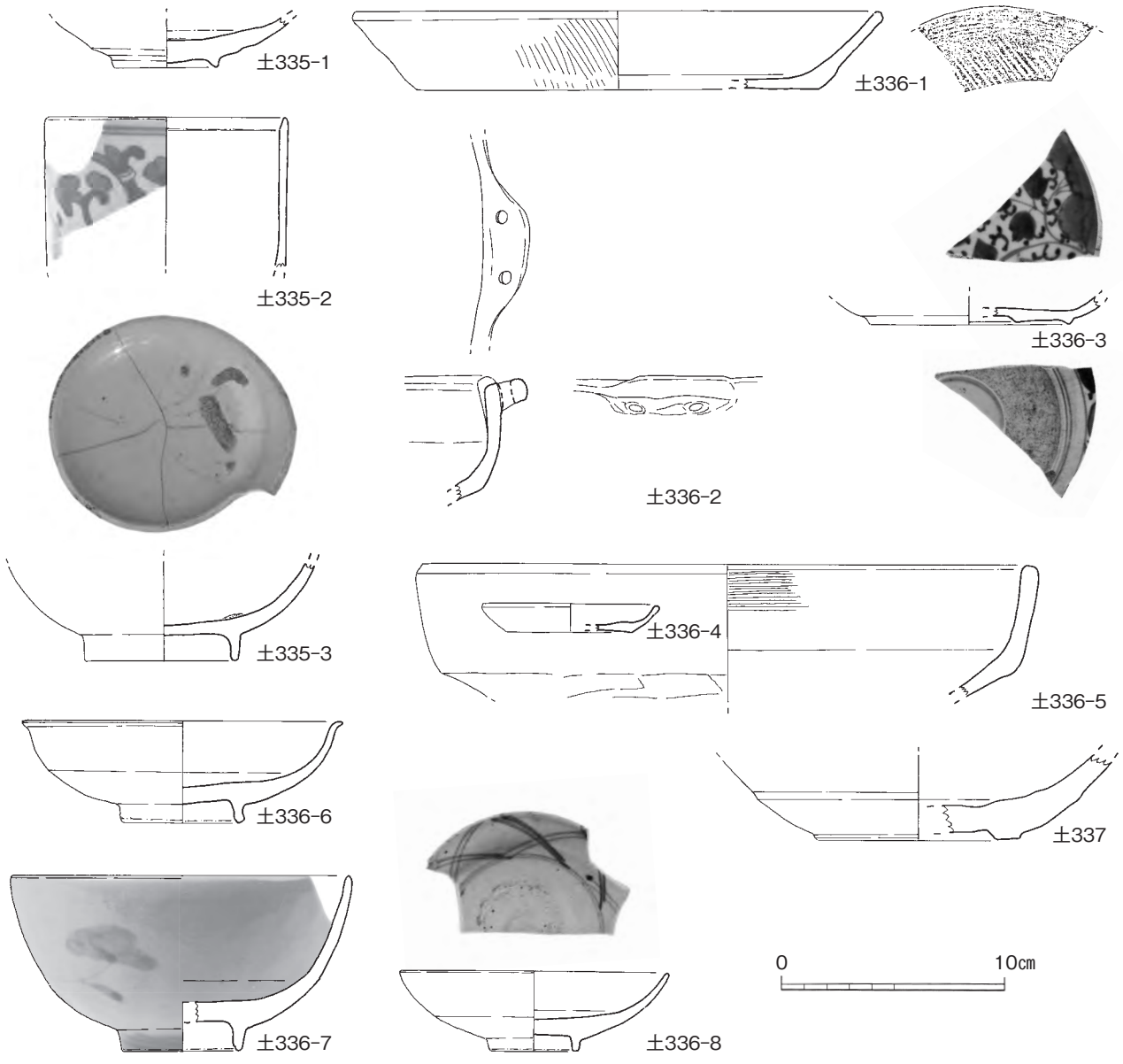
出土遺物

土器等（第65図）　１は小片のため復元口径に不安がある土師器小皿。丁寧に作られていて、器表が荒れるが底部外面には板状圧痕が残る。２は高台がしっかりと外方に踏ん張る土師器椀の底部片。胎土は特別なものではない。３は低い高台をもつ瓦器椀小片で、これは胎土良好。４も低く小振りな高台をもつ須恵器杯身。

331号土坑（図版29、第66図）　330号土坑の東に位置し、撹乱306に一部を切られていた。長軸1.7m、最大幅0.6mの長方形土坑で、東小口には検出面から0.1m下位、床面から0.3mの高さで狭いテラスが見られ、床面は西によって幅0.4m、1.2mの長さを確認した。なお、床中央で円形の落ち込みを認めたが、掘り下げると浅いところで礫が露出したことから誤認あるいは本来はごく浅い落ち込みであったと考えている。

出土遺物

土器等（第65図）　1～3は土師器。1は灰白色となる小皿小片で、これも復元口径に不安がある。底部外面には回転糸切り痕が残る。2は灰白色～黄白色の椀小片で、これも口径に不安がある。3は甕の小片で、器表が荒れている。4～6は陶器。4は小型薄手の擂鉢で、口縁部を内外に匙面状に拡張し、外面には低い断面三角突帯を巡らせる。微砂粒を多く交える灰赤褐色の脆そうな胎土に濃い小豆色に発色する釉を全体に掛けている。5は口縁部の形状や三角突帯の使用など4に似た器形であるが、スリ目が大きく、胎土は大振りの砂粒を多く含む暗灰色堅致なものでまったく別物に見える。全体に暗茶褐色となる釉が掛かる。6は口縁部を水平に折り返し、端部を上方へ肥厚させる大型の皿。灰赤褐色の精良緻密な胎土で、露胎部も同様の発色をする。体部内面に白色となる釉で線描あるいは塗りつぶしを行い、最後に口縁部の内外面に灰緑色～黄白色となる釉を掛



第67図　3区出土遺物実測図12（335～337号土坑、1/3）

け、その一部が内外面に垂れている。７は内面無文の染付小椀。相対する面に施文するようで、一方には流水に紅葉３葉を置く。反対側は横位のやや幅広い線が低い位置に残るだけであるが、流水文の端部と見えないこともなく、同じ文様を反復していたかも知れない。高台内に「大□年製」を表すと思われる異体字がある。

332号土坑（図版29、第66図）　調査区南東端付近でほぼ1/2を検出した。上端径0.8m強、下端径0.4m弱の小型円形に近い土坑で、深さは約0.5mを測る。灰褐色土・黄褐色土が混在する埋土が大部分で、床面付近のみ茶褐色土が薄く堆積、礫が若干混入していた。

出土遺物

土器等（第65図）　内面無文の染付小椀。大きな花文と周囲に流れるような葉を描いていて牡丹唐草文というべきか。高台内に「福」と描かれる。

333号土坑（図版29、第66図）　332号土坑の東近く、やはり半分ほどを検出した円形に近い土坑。上端径１m、下端径0.6m、深さ0.45mほどの規模である。上方に暗褐色土、下位に茶褐色土が堆積していた。

334号土坑（図版29、第66図）　調査区南東隅で検出し、これも発掘したのは半分以下。上端径１m前後、下端径0.6m前後の円形土坑で、深さが0.3mほどの規模である。埋土は黄褐色土の小ブロックを交える灰褐色土で、床面では拳大前後の川原石を敷き詰めたような状態で検出した。

335号土坑（図版19、第66図）　調査区東端中央付近、303号溝と301号溝が交差する付近で検出したが、両溝に切られている。土坑上端は本来隅丸長方形であったと思われ、東西長1.7m、南北長は最大で１mほどの規模となる。床面は長さ0.8m、幅0.4mの長円形となり、深さは0.5mほどとなる。床面付近に青灰色粘土が堆積していた。

出土遺物

土器等（第67図）　溝と重複するが、これらには「溝交点下層」と注記があって、土坑に伴うものとしてよかろう。１は唐津焼青緑釉陶器であろうが、青緑色は発色しておらず灰黄褐色というべきか。見込を２㎝ほどの幅で蛇の目に釉剥ぎし、露胎部は赤味を帯びる。体部外面下端付近は露胎で、殊に下端は１～２周の回転篦削りが施される。高台は華奢。胎土は灰黄色精良緻密である。２は染付で内面は無文、外面は大振りの唐草文のようである。口縁部付近の一部の釉を掻き取っている。３は高台が高く直立する白磁椀の底部で、図示部が完周。畳付だけが露胎。内外面ともに無文で、見込付近に大きな目土が付着する。釉は白濁するようである。

336号土坑（図版60、第66図）　調査区南東隅付近、332・333号土坑の間で両土坑に切られてその一部を検出したものである。結果的には二つの遺構が重複していたようであるが、検出時には判別できず、掘り進める中で東側に礫がより多く現れたが、途中での識別はできなかった。

東側の土坑は東西幅0.6m、南北長0.6m以上の長方形に近い床面をもつ。深さは0.4mほどとなる。西側の土坑は狭くて完堀できなかった。

出土遺物

石製品（図版58、第49図３）　緑色片岩製打製石斧の基部付近である。

土器等（図版60、第67図）　1～3は「上層」、4・5は「土336W」、6～8は「同E」とある。

1・2は瓦質の焙烙か。1の胎土は黄白色精良といってよく、外面は暗褐色、内面は灰黄褐色となる。外面は底部まで粗い刷毛目で仕上げ、内面は丁寧に撫でるようである。外面は底部・体部とも部分的に黒色化するが、明らかな煤の付着は見えない。2は全体に横撫でで仕上げるようだが、体部・底部界がシャープになっているので底部を篦削りで調整しているかも知れないが、小片のためよくわからない。外面は全体に煤が付着、内面の底部付近が部分的に褐色となる。胎土には微砂粒を比較的多く交え、器表ともに灰褐色となる。3は染付皿。内面は牡丹唐草文で埋め、外面は不明。蛇の目凹形高台とする。

4は土師器小皿で、復元口径に不安がある。5は瓦質の焙烙。内面は丁寧な横撫でで仕上げ、灰褐色となる。体部外面は指押さえのようで、刷毛目等は見えない。また、底部との境がしっかりしていていて、底部は篦削りか。外面に煤が付着する。6は微砂粒を多く交える灰黄褐色～灰白色となる胎土の浅い陶器椀。体部は内彎し、口縁部がわずかに外反する。総釉とした後に見込を蛇の目に釉剥ぎし、高台付近も掻き取っている。見込の露胎部に重ね焼きの痕が見え、畳付付近に砂が多く付着する。釉は口縁部付近で暗灰黄緑色、それ以外の部分で暗茶褐色となる。7は大型の染付椀。外面には簡素な草花を描き、内面では見込外周に2条の圏線を描いて中央に五弁花文の一部が見える。また、高台内にも圏線1条がある。文様は発色が悪く、薄い。8は皿で、体部内面に2条1単位で対向する斜線を描く。外面は無文。見込を蛇の目に釉剥ぎする。

337号土坑（図版19、第66図）　調査区東端近く、303・327号土坑の間に位置し、301号溝に切られる。溝の西側では2基の土坑が重複したような状況となり、南側の土坑は幅0.3mの細長い形状で、中央付近にさらに掘り込みがある。テラスまでの深さは0.2m、最深部は0.3mほどである。北側の土坑は幅0.4m、深さ0.2mほどの隅丸長方形となる。

溝の東側では一連の土坑となり、南北長0.6m、深さ0.25mを測る。一連の土坑であれば、東西の長さは1.6m余となる。黄褐色土・灰褐色土の各ブロックが混在していた。

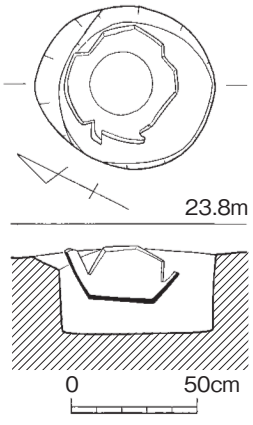
出土遺物

土器等（第67図）　灰赤褐色の精良な胎土をもつ鉢である。低くやや不整な高台をもち、体部外面下端を篦削りで仕上げる。外面の残存部は露胎、内面は灰白色となる釉が掛かるが、内面底部付近では磨ったため剥がれている。

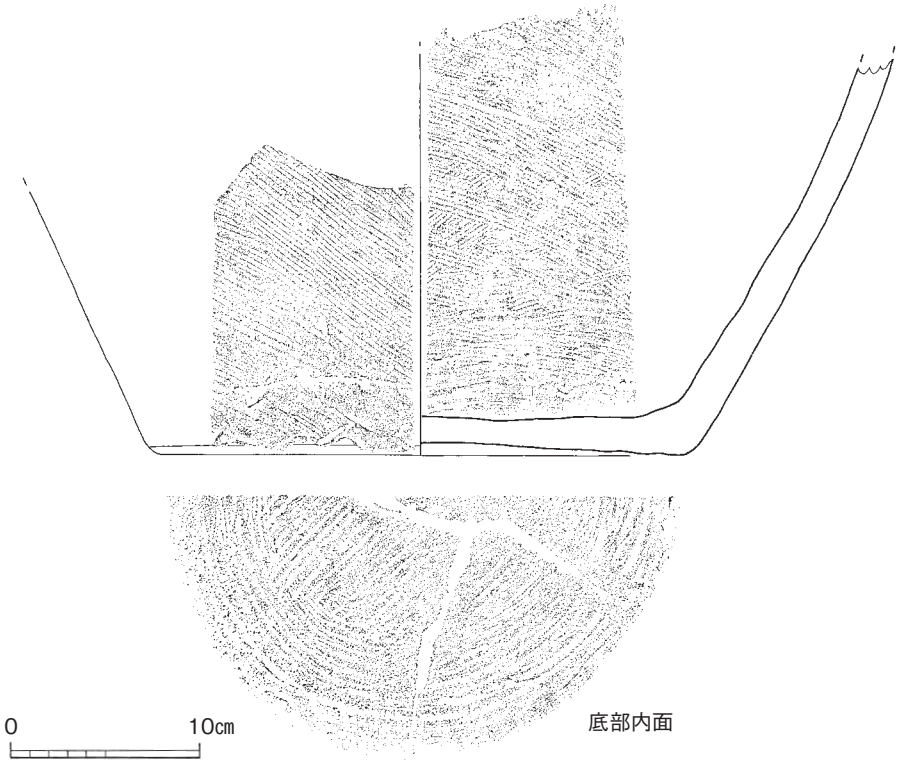
338号土坑（埋甕）（図版30、第68図）　調査区北東近く、302号溝の西にあって、半分ほどが306号溝の上に置かれた埋甕。底部はほぼ正置していて、本来の位置を動いていないのであろう。直径0.6mほどの円形掘形の中に置かれていて、砂で裏込めされていた。

出土遺物

土器等（第69図）　底径28㎝ほどの瓦質土器の底部で、図示部はほぼ完周。暗灰色となる胎土には3㎜以下の砂粒を多く含み、器表はよく黒色化する。ただ、底部の全面及び体部の半分強は器表が剥落。体部内面は左下がりの斜位の刷毛目の後に右下がり斜位の刷毛目を施し、底部は同心円状の刷毛目の後に中心部に広く同一方向に刷毛目を入れて終わる。体部外面は右下がりの斜位の刷毛目で仕上げ、下端の一部に篦削りを行うようである。



第68図　3区338号土坑（埋甕）実測図（1/30）



第69図　3区出土遺物実測図13（338号土坑、1/4）

2）　溝

おおむね東西方向、南北方向に走る溝を数条検出した。小溝はほぼ青灰色粘質土が堆積していて、新しい遺構との感があるが、307号溝は規模はもとより、方位も出土遺物も他の小溝と異なっていて重要な意味をもつと考えている。

301号溝（図版19、第4・70図）　調査区東端付近を略南北方向に直線的に走る溝で、重複する遺構をすべて切る。北端で幅0.3m、深さ0.15m、南端付近では幅0.45m、深さ0.2mほどの規模となる。埋土は細砂を多く交える青灰色粘質土で、底の標高は南北両端でほぼ同じである。

出土遺物

土器等（第71図）　1は断面方形となるしっかりとした高台をもち、内面だけを黒色とする黒色土器椀で、外面は赤味が強い。器表が荒れて調整痕は見えない。2は同安窯系青磁皿小片。底部外面だけが露胎。薄く掛けられた釉は灰青色に発色する。

302号溝（図版19、第４・70図）　301号溝の西側をほぼ並走するように検出した溝で、301号溝との間隔は北端で2.4m、南端付近で2.2mである。これも重複する遺構をすべて切っていて、溝の規模は北端で幅0.25m、深さ0.1m、南端で幅0.6m、深さ0.25mとなる。床面の標高は南端付近が５㎝ほど低くなるが、ほぼ同レベルとみてよいと思われる。北壁での土層観察では、灰褐色土を主体とする埋土の中位に最大10㎝ほどの炭層がU字形に挟まれていた。

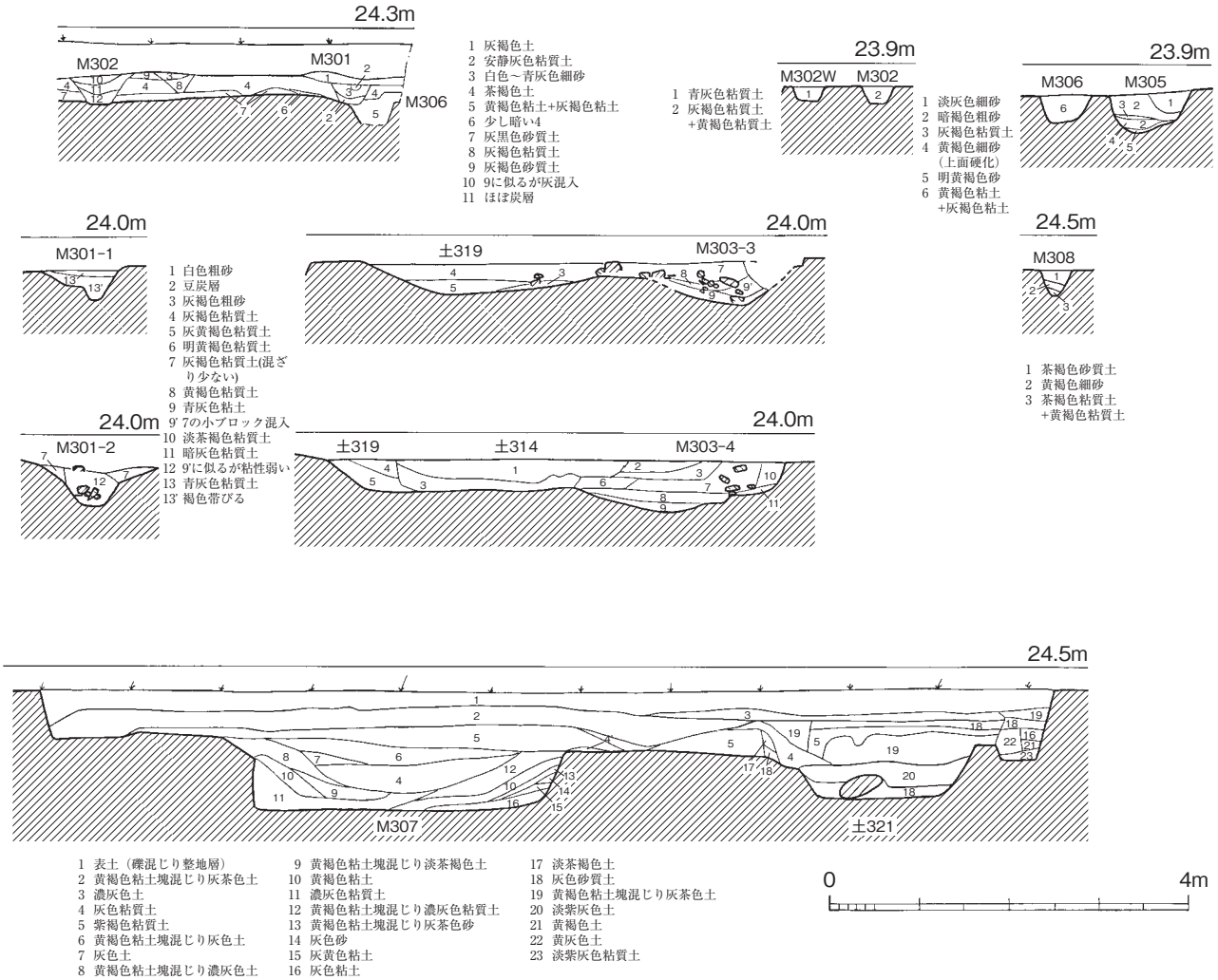
329号土坑と重複する付近は礫が多く、検出が困難で上手く発掘できなかったが、その付近で西側に弧状の小溝を検出している（302号溝W）。この溝も幅・深さともに0.3m前後の規模で、黄

褐色～灰褐色砂質土が堆積していたが、302号溝との厳密な関係は確認できていない。

出土遺物

土器等（第71図）　1は「南端」、2は「西端」とあるが溝が南北方向に走ることからこれは誤記であろう。3は「溝302中」とあって、やや意味不明であるが、「中央付近」と解しておきたい。4・5は「溝302W」、6～10は「溝302W南端」とある。

1は内面だけを黒色化する黒色土器椀で、内面を丁寧に篦磨きを施すようであるが、詳細は不明。外面は器表が荒れている。貼付けた高台がより赤味をもっていて、体部と異なる粘土を使用したようである。2は須恵質の緑釉陶器椀。全体に横撫でで仕上げ、釉は薄く掛かって灰黄緑色に発色する。3は陶器擂鉢。底部の安定化を図ったものか、外周に幅2㎝弱の粘土帯を貼付けているが、その接合部には6条前後の平行沈線を水平方向に巡らしている。素地は灰黄褐色～暗灰色で、精良緻密なものである。貼付けた底部外周では掻き取っているが、その他の部位には暗灰茶褐色の釉が厚く掛かる。また、底部内面の上2.5㎝ほどのところに重ね焼きの跡が残る。4・5は須恵器の杯蓋と杯身。蓋は端部にシャープさが無く丸味をもつ。身は小振りの高台が底部外周近くに付く。6は土師器甑把手で全体が摩滅。7～8は染付椀。7は焼成不良のようで、文様は青味を帯びる灰黒色に近く発色し、釉は白濁する。植物を主文様とする区画を弧線で画し、その周囲を手描きの円文で埋めている。相対する2単位を描くようである。内面は無文。高台内に四角で画した区画があるが、これは乱れて意味がわからない。8は見込外周の二重圏線上に波のような隆起を、その上方に葉・花を配する染付皿。見込中央の五弁花文は手描きか。体部外面にはシンプルな唐草文を



第70図　3区溝土層実測図（1/80）

描き、高台内には「大明年製」と記すようである。「大」字左下にハリ痕がある。９は越州窯系青磁椀。緻密な暗灰色の素地に灰緑色に発色する釉が掛かる。低い高台の畳付の釉を掻き取るが不十分で削り残しがある。見込・畳付に目跡が残る。

303号溝（図版19・30・31、第４・70図）　調査区中央付近を略東西方向に緩く蛇行して走るしっかりとした溝である。東端で302号土坑に切られるほか、交叉する301・302号溝にも切られる。中央付近で308号溝と交わるが、この溝が303号溝の北側には延びていないので、これは関連する遺構であるかも知れない。また、319号土坑とした大きな土坑と重複し、先後関係を平面的に確認できていないが、礫群の在り方から見てこの溝が後出するものであろう。

301・302号溝間では幅１m、深さ0.2mほどの規模であり、礫をかなり含むとはいえ中央付近以西に比べればまだ少ない。また、335号土坑の両側付近では溝底の北端に床幅0.1m、深さ0.1m弱の小溝が検出された。324号土坑の近く、調査区中央付近での規模は幅幅約1.2m、深さ0.4mほどとなり、この付近から西側には多くの礫が検出されたが、意図を持って積み上げた、あるいは並べた様子は看取できなかった。

調査区西端付近では白色粗砂が詰まった314号土坑が溝の一部を覆うが、最大で幅２m、深さ0.6mほどの規模となって、わずかに南へ弧を描いて終わるようである。なお、床面の標高は東端で23.45mほど、西端では23.12mほどで東高西低となる。

302号溝西、324号土坑南側付近、そして遺構配置図に図示した西端近くの２本の畦の４個所で土層を観察した。東端では通常の水平に近い堆積であるが、中央付近では両側に、西端畦では北側に裏込めかと思われる土層を確認でき、あるいは護岸のための板材を並べていた可能性も考えられる。335号土坑付近の小溝も傍証となろう。床面付近ではいずれも青灰色粘質土を確認した。

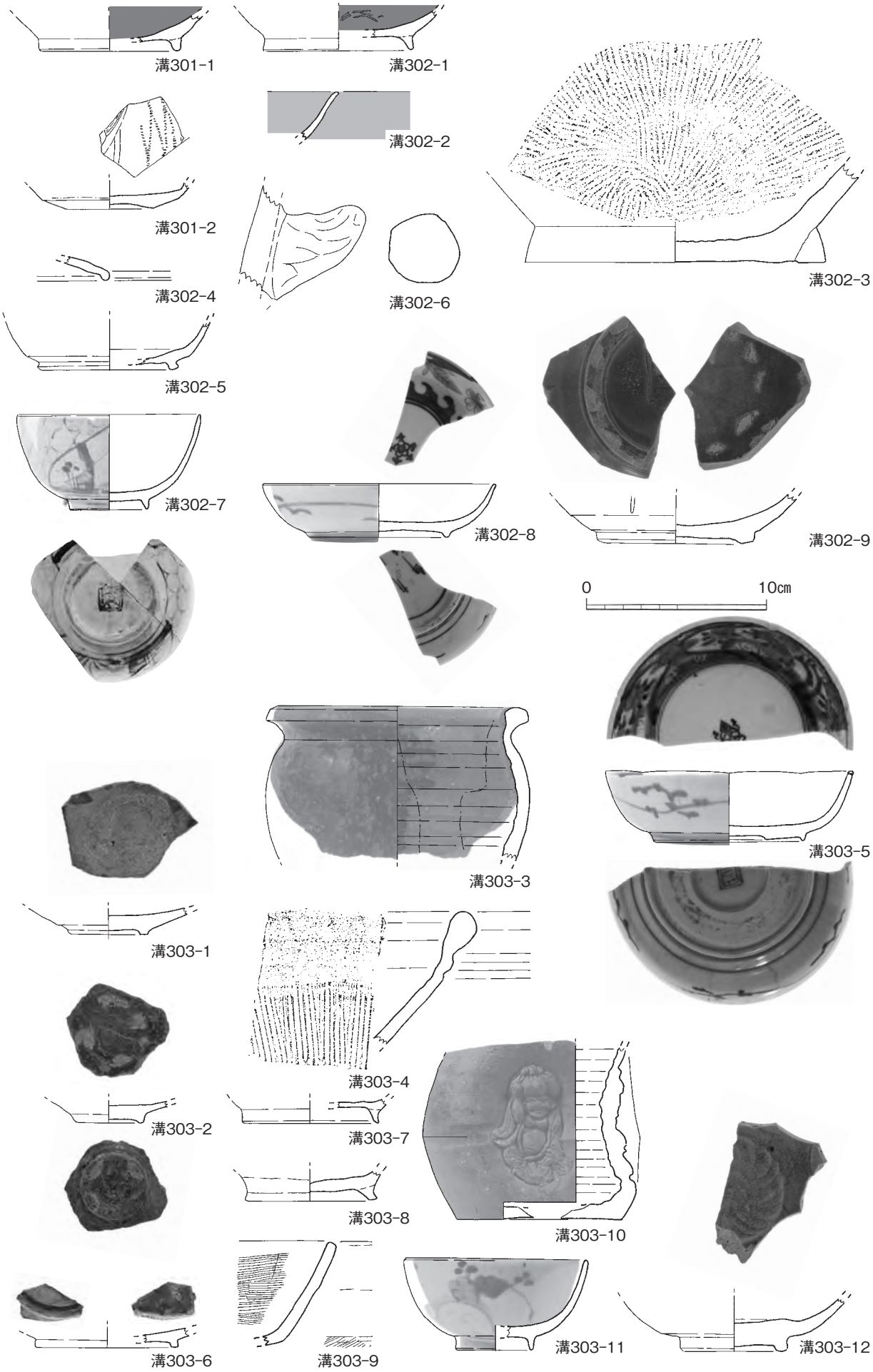
出土遺物

石製品（図版58、第49図15・16・第75図４）　いずれも砥石である。15は暗灰色となる砂岩製砥石で、これは中砥であろう。図上下両端を折損するが、残る４面を使用する。16は黄白色～灰黄色の石英斑岩製で、図示した面は仕上げ砥としてよく使用されている。背面で左よりが大きく凹んでいるが、左端は一部砥石として使用、右端でも縦位に段があって幅狭く使用されている。左側面およびそこから上端面へ続く部分に面取りがなされ、上端面の多くが剥離しているがこの３面はよく使用されている。また、右側面も大部分が剥離するが、本来の形状を留めるわずかな部分は他と同様に使用されるようで、剥離した部分にも使用の痕跡が見える。下端は欠損。

第75図４は茶臼あるいは石皿であろう。これも凝灰岩。

土器等（図版60、第71～73図）　１～３は「溝303西端（撹乱含む）」、４は「西端」、５・６は「西１畦」、７～12は「杭８東」、中でも９～12は「下層（粘土中）」とある。「杭８」は318号土坑横にある測量杭。13～19は「西２畦」とあって、この畦は「杭８」の東５mほどの位置にある。16・17以外は同「畦北端最上層」。20～27は「杭７・８間」とあり、「杭７」は「杭８」の東10mの位置にある。28～31は「杭７東」、32は「杭７付近下層粘土中」とある。

１は小振りの高台をもち、灰黄色の精良緻密な胎土となる唐津焼の椀あるいは皿底部。残存する外面は露胎、内面は施釉されて見込に連続的な大きな目跡が残り、釉は緑味帯びる灰白色となる。２は暗灰色の胎土をもち総釉となる朝鮮陶器で、高台は小振りで体部の器壁が薄い。釉は灰緑色に発色。見込・畳付に目跡が残る。３は口縁部を玉縁状に肥厚させる小型壺。胎土は灰黒色で砂粒が目立ち、口縁部外面以下に施釉、釉は暗茶褐色となるが、厚い部分は黒色化する。内面の一部にも



第71図　3区出土遺物実測図14（301～303号溝、1/3）

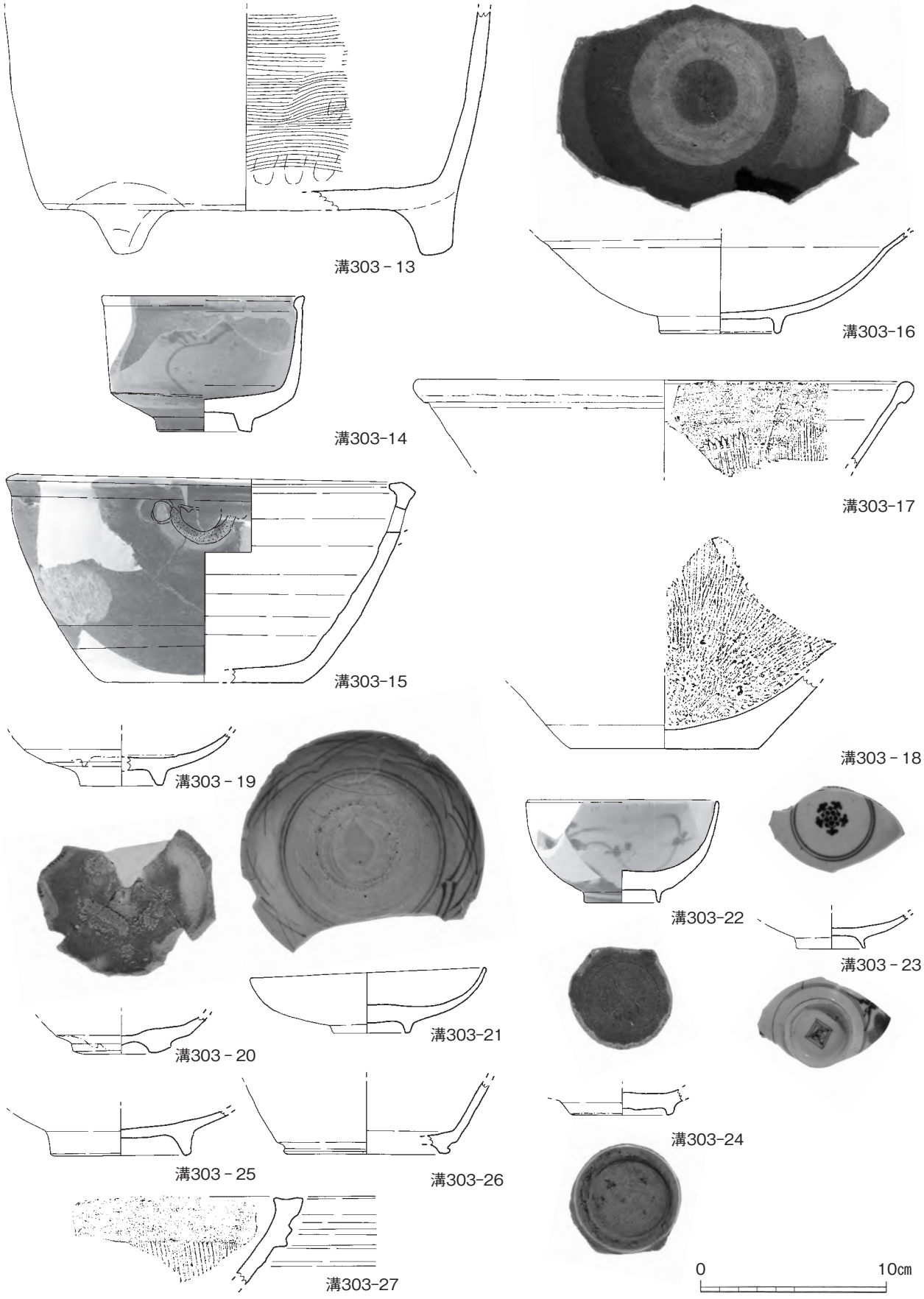
垂れているが、口縁部上面から内面にかけては本来露胎としたようである。口縁部上面に砂が多く付着する。造作は丁寧で、内面に水挽き痕が目立つ。

４は口縁部を玉縁状とする陶器擂鉢。微砂粒を含む灰黄褐色となる胎土で、斑があるが総釉とする。釉は灰茶褐色に発色するが、白色化する部分や白色の微少な斑点が多い。

５は染付皿。蛇の目凹形高台に重ね焼きの痕跡が残り、見込にも幅５㎜ほどの不整形に釉が剥離する部分がある。見込に宝文らしきを置き、体部内面を花をモチーフとする文様で埋める。同外面はシンプルな唐草文。高台内に変形字がある。６は灰釉陶器の底部片。灰色の精良な胎土をもち、内面に薄い灰緑色ガラス質の釉が掛かる。小振りの高台を含めて調整は丁寧で、底部外面の調整痕は判断が難しい。７・８は高台をもつ土師器椀の小片。８は赤味強く焼き上がる。９は瓦質の焙烙か。小片であるが胎土精良で、内面・底部外面に刷毛目が見える。体部外面は凹凸があって手捏ねに近いものか、そこに煤が付着する。10は灰赤褐色の精良緻密な胎土をもつ陶器瓶で、体部中位に袋を頭に載せた立体的な布袋像を置く。底部外面および内面の一部が露胎となるが、内面の大部分に施釉されていることから本来は底部外面以外は総釉を意図したものであろう。釉は焦茶色に発色。布袋像の中位付近に弱い稜線が走るが、その直上は強く横撫で、さらに上位はカキ目風に仕上げている。また、布袋像は一体であるが、それを含めた体部の四方を同様に凹めている。また、底部に焼成後に外側から叩いた1.0～1.5㎝の長円形に近い穿孔があるが、その破面は新しく見え、穿孔の新古は判断しがたい。11は染付小椀で、体部外面に雪輪文を描く。その他は無文。12は龍泉窯系青磁椀で、片切彫りで施文する。釉は薄い灰黄緑色に発色する。

13は土師質火鉢。胎土に微砂粒を比較的多く交え、胎土・器表とも全体に灰黄褐色となる。底部は型押しで、外面は未調整。体部との接合部内面に指頭痕が連続する。内面は全体に刷毛目、外面は丁寧に篦磨きで仕上げる。なお、内面の処々で黒変するが変色の程度も範囲もそれほどではない。２足が残存。14は口縁部を内側へ折り返して小さく肥厚させる陶器火入。胎土は暗灰色精良緻密なもので、外面屈曲部以下は露胎。内面も肥厚させた部分まで施釉し、その下は露胎で濃い小豆色といった発色となる。釉は青味を以て白濁する。口縁部外面に２条の圏線、体部の相対する２個所に呉須で施文するが主文様は欠損して不明。15は陶器片口。片口部付近と底部の一部を欠く。灰黄色の精良緻密な胎土をもち、底部外面だけが露胎。口縁部上面も部分的に掻き取っているようであるが徹底していない。釉は茶褐色に発色する。体部は横撫で調整、底部外面の調整痕は見えず、型押しであろう。片口部を挟んで左右に白色となる釉を厚く掛けてアクセントを加える。16は陶器椀で、灰白色～黄白色の精良な胎土をもつ。総釉で畳付付近の釉を掻き取り、見込も蛇の目に釉剥ぎする。釉は灰褐色となり、体部内面には別に茶黒色といった鉄釉が垂らされている。17は灰黒色の精良緻密な胎土をもつ陶器擂鉢片。玉縁とする口縁部付近の内外面のみに灰黒色となる釉を掛ける。露胎部は灰茶褐色。全体に横撫でで仕上げる。18は備前焼擂鉢。胎土は精良緻密で、体部は丁寧な横撫で調整、底部外面に回転糸切り痕が残る。底部付近の内外面は暗赤褐色、上方では暗赤褐色～暗赤紫色といった色相となる。19は白磁椀。体部外面下位から高台にかけて露胎、見込を蛇の目に釉剥ぎする。

20は灰黄色の精良緻密な胎土の唐津焼底部片。高台は幅が異なったり、２段となる部分があるなど粗雑な作りとなり、体部外面下位は基本的に露胎とする。釉の濃い部分は白濁、薄い部分は赤味をもつ灰白色というべきか。見込と高台および高台脇にも目跡が残る。21は染付皿。見込の釉を蛇の目に釉剥ぎした後に半透明となる釉薬（？）を塗っている。体部内面には二本線を単位としてＸ状の文様を繰り返す。外面は無文。22は染付椀。外面に雪輪文と思われる文様を１個所に置



第72図　3区出土遺物実測図15（303号溝-2、1/3）

く。内面は無文。23も染付椀で、見込に五弁花文を手描きするようである。外面の主文様は松竹梅か。高台内に変形字を置く。高台が非常に華奢で、器壁も薄いことから蓋とすべきか。24は龍泉窯系青磁底部で、見込に花文と圏線をスタンプする。高台は低く、畳付の2/3ほどは釉を掻き取り、高台内は露胎となる。釉は灰青色に発色。25は土師器椀底部で、高台がしっかりしている。器表は荒れる。26は小振りの高台をもつ須恵器杯身。27は赤味帯びる灰黄色の緻密さを欠く胎土をもつ陶器擂鉢。口縁部外面を肥厚、拡張して凹凸を刻む。全体に暗灰赤紫色といった発色をする釉が掛かる。

28は瓦質土器。精良とは言えないが灰黄色の胎土をもち、内外の器表も同色となる。内面は刷毛目で、外面は篦磨きで丁寧に仕上げている。また、外面には花文をスタンプする。29・30は須恵器。29は内面を受け口状とし、外面では屈曲部の上方に小さな段を付す口縁部片。内面と外面の屈曲部以上は灰を被って灰色となり、特に内面では全面に付着物があってザラザラとする。屈曲部以下は灰茶褐色となり、鋸歯文と思われる線刻がある。30は器台の脚部であろう。胎土は比較的良好。外面を繊細整美な櫛描波状文で飾り、その上下をこれは甘い凹線で画する。内面下位にはこれも繊細といってよい同心円当具痕が残る。31・32は染付。31は小型の浅い椀で、あるいは蓋とすべきか。高台内に「大明成化年製」、体部外面に植物文様を３種描く。内面は無文。32は内面を蛇の目に釉剥ぎし、そこが赤味をもって発色する。外面は植物文か。

304号溝（図版32、第４図）　調査区西北隅、307号溝の東側に接して並走するように検出した小溝を呼称したが、埋土が非常に硬くかつ多くの土器小片が混入していたことから道路跡であろうと考えている。幅0.5m、硬い「舗装」の厚さは５㎝前後である。

出土遺物

土器等（第73図）　１～３は土師器皿。１は1/4の残片で、復元口径7.7㎝、器高は1.5㎝を測る。底部外面に回転糸切り痕が残る。２・３は底部片のため復元図には不安がある。いずれも器表が荒れるが、３の底部外面には篦削りと思われる痕跡が残る。４は瓦器椀で、外面に疎というべき暗文が見え、内面にもわずかに見えるが、全体に雑な作りとの印象を覚える。外面全体と内面の上半が黒色化、ただし内面では口縁部下１～４㎝ほどと部位によって黒色化の範囲が随分異なる。５は古代の須恵器杯身。６は東播産須恵器擂鉢。口縁部が内外に小さくつまみ出され、その端面付近だけが黒色化し、内面に灰被りが見られる。７は鉢形の輸入陶器であろう。胎土は微砂粒を含むが良好精緻な灰色となり、口縁部内面から外面にかけて薄く施釉、わずかに緑味を帯びる灰色に発色する。なお、内傾する口縁部に目跡が残る。８は口縁部に変化を加えずに薄く終わらせる白磁椀で、体部内面に細い沈線を入れる。９は器形は龍泉窯系であるが、釉は同安窯系のように黄味が強い透明となる青磁椀。口縁部内面に沈線を刻む。

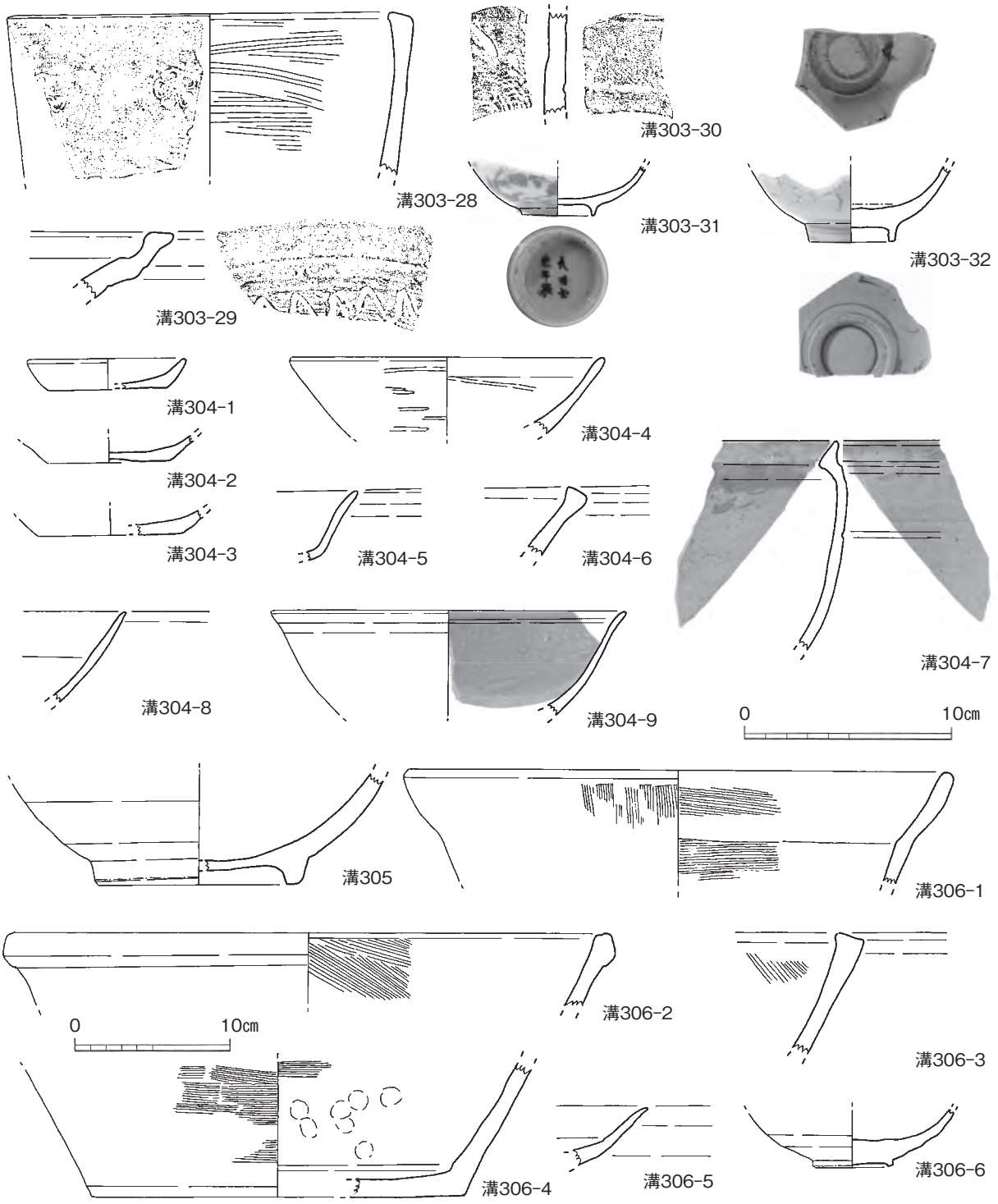
305号溝（図版19、第４図）　調査区北よりを東西方向に走る小溝のうち、南側の溝を称した。東端では301号土坑や301・302号溝に切られるが、301号土坑ではその床面にこの溝の床付近が残存していて、それによれば北東へ向かって大きく曲線を描く。また、西端は316号土坑とした複数の土坑群の東で終わり、この間の15mほどの長さを検出した。溝の規模は両端付近で0.8m、狭い部分で0.5mの幅をもち、深さは0.3mほどである。床面の標高は西端が0.2mほど高い。

303号溝と1.4～1.6mの間隔をもってほぼ並走し、東端が北へ曲がるところも共通するることから、おなじ意味をもつ新古の遺構であろう。

出土遺物

石製品（図版60、第75図３）　溝西端から出土した凝灰岩製石皿片。底部を厚く高台状とし、上面を浅くかつ口縁部付近では緩く彎曲させて受口状とする。内面は特に丁寧に研磨されていて、中央付近は煤けている。底部で復元すると底径20㎝ほど、口縁部では径27㎝となる。図示したように、現状で最大幅14㎝を測り、図左端はほぼ本来の中央付近に位置することから茶臼を想定することはできない。底部外面は成形時の痕跡を留めるとはいえ、高台側面から皿部にかけては比較的丁寧に仕上げているといってよい。

土器等（図版60、第73図）　灰赤褐色の胎土をもつ陶器で、内面は所謂刷毛目文様で飾り、外



第73図　3区出土遺物実測図16（303-3～306号溝、1/3・1/4）

面は露胎。体部外面下位は篦削りで調整、全体に丁寧に作られている。

306号溝（図版19、第4図）　305号溝の北に近接かつ並走するように走る小溝。これも重複するすべての遺構に切られている。西端の316−３号土坑との関係を発掘時に明らかにできなかったが、出土遺物から判断して土坑が先行すると考えている。

溝は中央付近が狭くなるが幅0.5〜0.8m、深さ0.2〜0.3mほどの規模で、床面は西端が0.2mほど高くなっている。西端の始点の位置や東端で北へ曲がる形状、規模などから判断して305号溝と同じ用途、意味をもつ溝であろう。ただ先後関係ははっきりしない。

出土遺物

土器等（図版60、第73図）　１・２は土師器。１は口縁部が外折して小さく内彎する鍋で、胎土・内面は赤味をもつ黄褐色となる。内面は細かい横刷毛で、外面は口縁部直下に細かな縦刷毛が見えるが、その他の部位の調整痕はよく見えない。外面には煤が厚く付着する部分があり、全体に黒色となる。２は口縁部を折り返して玉縁とする鉢で、これも内面は細かい横位の刷毛目で仕上げるが、外面の技法はよくわからない。指撫で・指押さえを多用か。胎土・器表は灰黄褐色であるが、内面は全面に黒褐色化、外面は玉縁下面と体部に煤が多く付着する。３は口縁部を断面方形とする瓦質の鉢。胎土は比較的良好で、芯が黒色、器表近くが灰黄褐色となる。内面は細かい刷毛目で仕上げ、外面は手捏ねに近いか。４は灰白色となる胎土をもち、外面は暗灰色、内面を黒色化した瓦質の大型土器で、復元底径は24㎝ほどとなる。器表は主として刷毛目で仕上げるが、内面では刷毛目もわずかに見えるが指押さえ、指撫で痕が目立つ。底部内面は同心円状の刷毛目、外面は未調整である。５は体部下位で屈曲し、釉が青味を以て発色する白磁。６は小さな高台をもち、本来体部下端付近から高台内にかけて露胎とする。釉は黄味を帯び、厚い部分は緑味も帯びている。体部外面下端の一部を回転篦削りで仕上げる。胎土は黄白色〜灰黄色の精良緻密なもので、白磁の焼成不良なものあるいは陶器とすべきか。高台内に墨書がある。X線スキャナーで見ると、四角の中は文字ではなく○のような線描で、記号のようである。

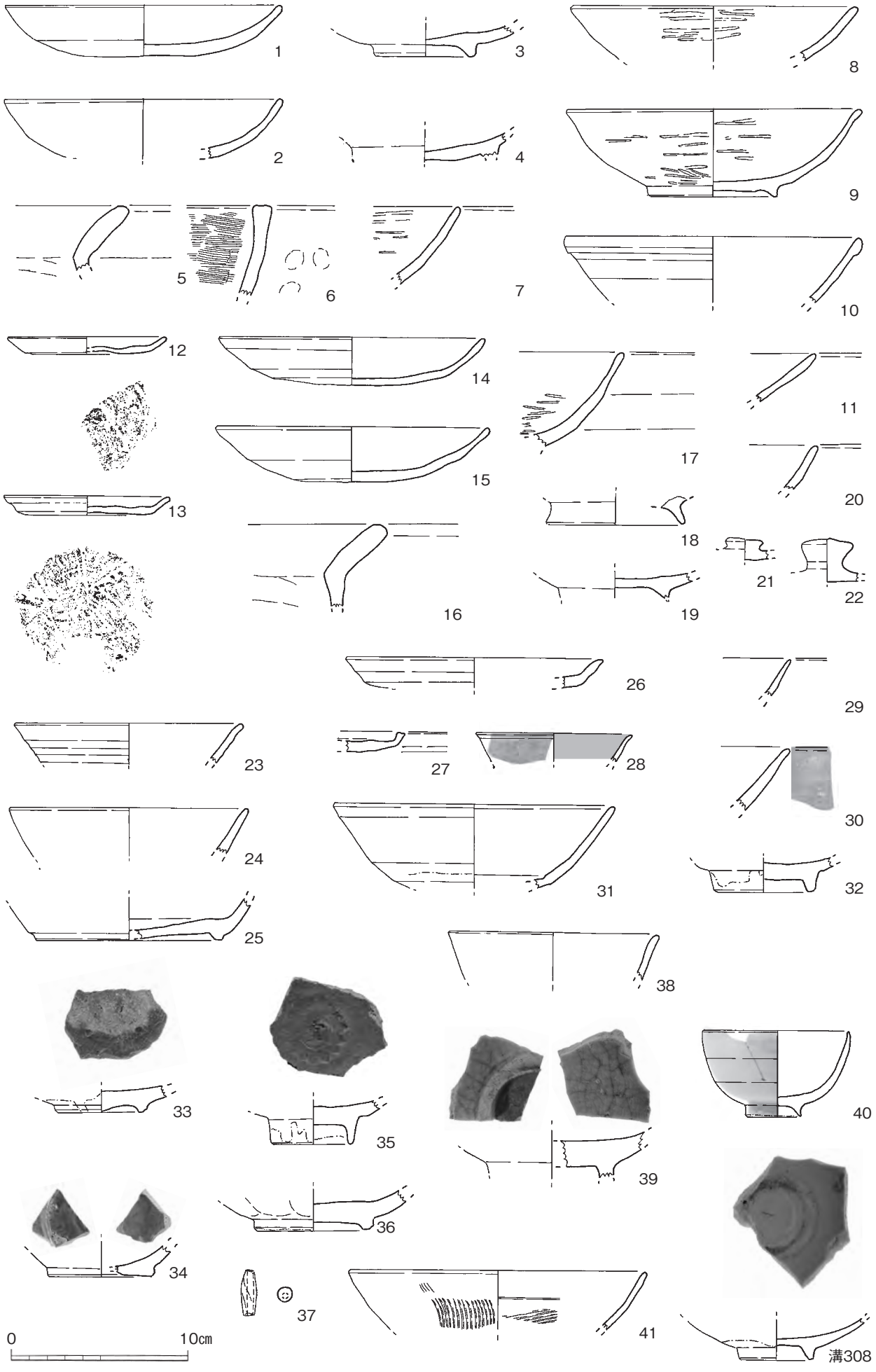
307号溝（図版32、第４・70図）　調査区北西隅付近で検出した、幅約３m、深さ0.6mほどの規模の溝である。検出した長さは６mほどであるが、この間は直線的に、かつ立ち上がりが垂直に近い急勾配で掘削されている。315・317号土坑はこの溝を確認する以前に設定した遺構であるが、結果的にはっきりとしないものであった。

第70図に土層図を示したが、これは調査区北壁のもので307号溝に対して斜位となっている。埋土に粘質土あるいは粘土が顕著で、長く湛水していたものと思われる。

出土遺物

土器等（図版60、第74図）　１〜11は「上層」、12〜32は「下層」の出土である。33〜37は「北西隅北辺拡張」とあり、307号溝から321号土坑にかけて一部拡張した部分からの出土、38〜41は「北西隅南北トレンチ」とあり、307号土坑の西端で南北に開けたトレンチからの出土で、316・317号土坑まで含む。33以降の遺物は必ずしも溝に伴うというものではないがここで紹介する。

１〜６は土師器、７〜９は瓦器、10・11は白磁である。１は口縁部の残存率が低いが、底部まで連続していて器形は窺える。底部が丸味をもつ浅い椀で、復元口径15.8㎝、器高は2.8㎝を測る。胎土は粗く、器壁が厚い。器表は非常に荒れている。２は口縁部の1/4弱が残存。これは胎土精良で器高が高い。口縁部付近が黒ずんでいて底部外面には煤も見える。復元口径16.0㎝を測



第74図　3区出土遺物実測図17（307・308号溝およびその周辺、1/3）

る。３・４は高台付椀。３は体部の開きが浅いもので、高台は図で見る以上に丸味をもつように感じられる。これも器表が荒れる。４は焼けたようで全体に赤味をもち、ほぼすべての高台・器表が剥落する。５は甕の小片。６は口縁部を断面方形とする鉢で、内面は細かい刷毛目で仕上げ、外面の明確な調整痕はよくわからないが指頭痕などが残る。胎土は黒色、器表のみが灰黄褐色となる。瓦質とすべきか。７は椀口縁部片で、残存部はすべて黒色化するが器表が荒れている。８は口縁部小片。口縁部外面と内面全体が黒色化、体部の多くは灰白色～暗灰色である。これも器表が荒れる。９は正置した状態で出土したもので、全体を窺える。高台は小振りながらも形状はしっかりとしており、体部は浅く開く。口縁部外面と内面全体が黒色化、外面は明灰色というべきか。内面は非常に見づらくなっているが、外面では体部下位のほうまで篦磨きがおよんでいて、内面の器面の平滑化から見てほぼ全体を篦磨きで仕上げていた可能性がある。これは胎土精良である。10は扁平な玉縁口縁をもつ椀で、釉は黄味を帯びて発色。11は輸入陶器か。胎土は灰色精緻で、内外面に灰黄色不透明のザラザラとする釉が掛かる。

12～19は土師器、20は瓦器、21～27は須恵器、28は緑釉陶器、29・30は越州窯系青磁、31・32は白磁である。12は体部が直線的に浅く開く皿で、1/4弱の残片で復元口径に不安がある。底部外面の調整痕はよくわからないが、板状圧痕が見える。13は体部が外彎する皿で、底部がほぼ完周、口縁部の1/2が残存する。口径は9.4㎝に復元でき、器高は1.1㎝を測る。内面の大部分が暗褐色に変色していて、灯明皿として使用されたようである。14・15は丸底となる同巧の皿で、底部外面に篦切り痕を残す。14は口縁部の1/2弱が残存し、復元口径は15.1㎝、器高は2.7㎝である。これは胎土良好。15は底部付近は完周するが、口縁部の1/4弱が残存。15.6㎝となる復元口径に不安があるが、器高は3.2㎝で14に比べて高い。これは大きな砂粒を交える。16は５に似る小片で、これは器表が非常に荒れている。17は椀小片で、内面下部が暗灰色となってここだけ器表の残りがよいが、他の部位は非常に荒れる。あるいは黒色土器か。18・19は椀の高台小片。20も小片で器表が荒れるが、内面がおおむね暗灰色、外面が灰黒色～暗灰色となることから瓦器と判断した。23・24は小片であり復元口径に不安がある。25は1/3ほどの底部片で、底部外縁近くに低い高台を付し、高台内は篦切り未調整のようである。26は皿小片。27も小片で、高杯であろう。28も小片であるが、緑釉陶器小型椀である。胎土は精良堅致で灰黄色～暗灰色の須恵質となり、淡い黄緑色の釉が薄く掛かる。越州窯系青磁はいずれも直線的に開く口縁部片。29は薄手となる小片で、灰黄緑色といった発色となる。30は肉厚で、端部外面をわずかに外反させ、これは灰黄褐色といった発色となる。31は見込外周に段をつけ、体部はわずかに内彎して開きそのままに終わる。外面下位は露胎で篦削り痕が見え、雑な感がある。釉は黄味帯びて発色、全体に貫入が目立つ。32は底部片で、これも見込外周にしっかりとした沈線を刻む。

33は焼成が甘いのか、胎土が暗灰色～灰黄褐色となる唐津焼。高台の形状も不整となる。内面の釉は灰褐色となり、目跡２個が残る見込付近は白濁、外面は釉が垂れるが露胎である。34は蛇の目高台をもつ総釉の越州窯系青磁小片。釉は灰黄緑色となり、高台外縁に目跡が残る。35は高い高台をもつ龍泉窯系青磁椀底部で、見込に花弁の中央に「堂」と刻んだスタンプを押す。不明瞭な部分があるが「宜」ではない。体部下端まで掛けられた釉が垂れて部分的に高台内におよび、灰黄褐色に発色する。素地は灰黄色の陶器質に思えるが、これは焼成不良のためであろう。36は底部が肉厚となる龍泉窯系青磁椀で、蓮弁文を刻むようである。釉は灰緑色。37は土師質の土錘で、重量２ｇの小型品。全体にベンガラを塗ったように赤味を帯びるが、顔料を塗るとは思えないので土質によるものであろう。

38は須恵器杯小片。39は龍泉窯系青磁椀で、厚く掛かる釉は濃い水色といった発色となり、貫入が目立つ。畳付を欠くが、高台内側側面まで施釉、高台内の底部外面だけが露胎で灰赤褐色となる。40は染付小椀で、外面を青磁とする。内面は通常の白色釉で、見込に２重圏線とコンニャク判と思われる五弁花文を置く。41は釉が緑味帯びる暗灰色となる同安窯系青磁椀。

308号溝（図版19、第４図）　調査区の中央のやや東側で、303号溝とＴ字状に交わる小溝で、303号溝の北側にないことから一連の遺構である可能性が考えられる。重複する311・322号土坑などに先行するが、調査区南辺に沿う309号溝との先後関係は未確認。

幅0.4～0.5m、深さ0.15（北端）～0.3（南端）mの規模で、南北７mほどの距離を置いて0.15mほど南端の床面が低くなっている。

出土遺物

土器等（第74図42）　見込を蛇の目に釉剥ぎし、その外方に文様の一部が見える染付。外面は体部下位から高台にかけて露胎とし、釉は青味を帯びる。今まで紹介してきた肥前磁器がほぼ総釉とした後で畳付・見込の釉を掻き取るものであったが、これは部分施釉である。

309号溝（図版19、第４図）　調査区南辺に沿うように走る小溝で、気付くのが遅れたため、先後関係を確認できていないが、330号土坑は古代の遺構と考えられるためにこれには後出するものと思われる。308号溝とは未確認、調査着手当初に発掘した302号溝が後出するように図示しているが、これも厳密なものではない。

西端で幅0.2m、深さ0.1m余、東端で幅0.5m、深さ0.1m弱となり、床面の標高は東端が数㎝高くなる。青灰色粘質土を埋土とする。

３）　その他の遺構と遺物

ここでは柱穴や遺構検出作業中の出土遺物および不手際から出土地が不明となった遺物などに説明を加える。

石製品（図版58、第49図15・16・18・第75図２）　15は北西隅付近を拡張した際に出土したもので、遺構に伴うものではない。黄白色・黄褐色に発色する部位が縞状となる石英斑岩を用いた砥石。図示した面と背面の２面のみを使用し、側縁となる部分は未使用である。また、使用面は傾きをもつ。仕上げ砥であろう。18は調査区中程北よりの322号土坑の西端を壊す撹乱坑301出土の石英斑岩製砥石である。図下端は折損、４面を使用する。図右側面はとても滑らかで仕上げ砥として使用されている。図示した面は使用が少ないものか右側面に比して粗く、図左下は傾斜する小さな面となる。左側面は図示した面と同様の使用であるが、手斧で叩いたような横方向の傷が目立つ。背面も図示した面と同様の使用であるが、上半は表面が剥がれていて未使用の状態となる。19は詳細な出土地不明の粘板岩製砥石で、淡灰色～灰黄色を呈する。図示した面には縦位の微細な擦痕と斜位の短く鋭い擦痕、そして右上には幅をもって緩やかに蛇行する浅い擦痕が見える。なお、その付近では斜めに折損した破面も部分的に使用されている。背面は半分強で若干使用の痕跡が残るが、残余は敲打して粗成形したような状況である。左側面は図示した面同様によく使用されている。仕上げ砥であろう。

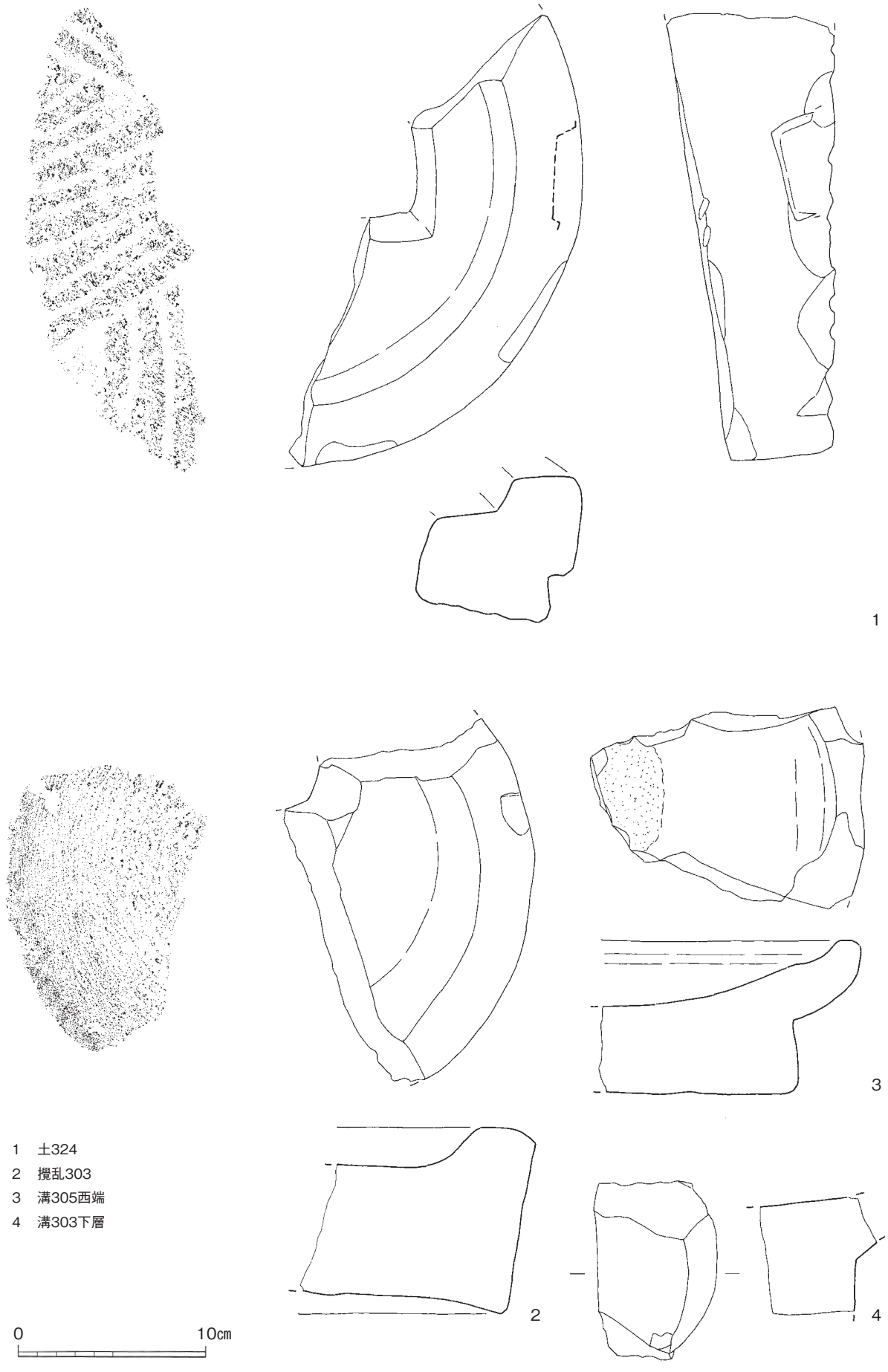
第75図２は礫岩製石臼。直径27㎝ほどに復元できる。臼面は拓影に見るように目がまったく見えず、手触りが滑らかとなっている。319号土坑内の南より、撹乱303からの出土。

土器等（図版60、第76図）　１～８は調査区南西部の撹乱から出土したもので319号土坑内といってよい。９～11は「溝302・308間」と注記があるが、「溝302・303間」の誤記と考えている。12以下はラベルが読めなくなって出土地の手掛かりがない遺物である。

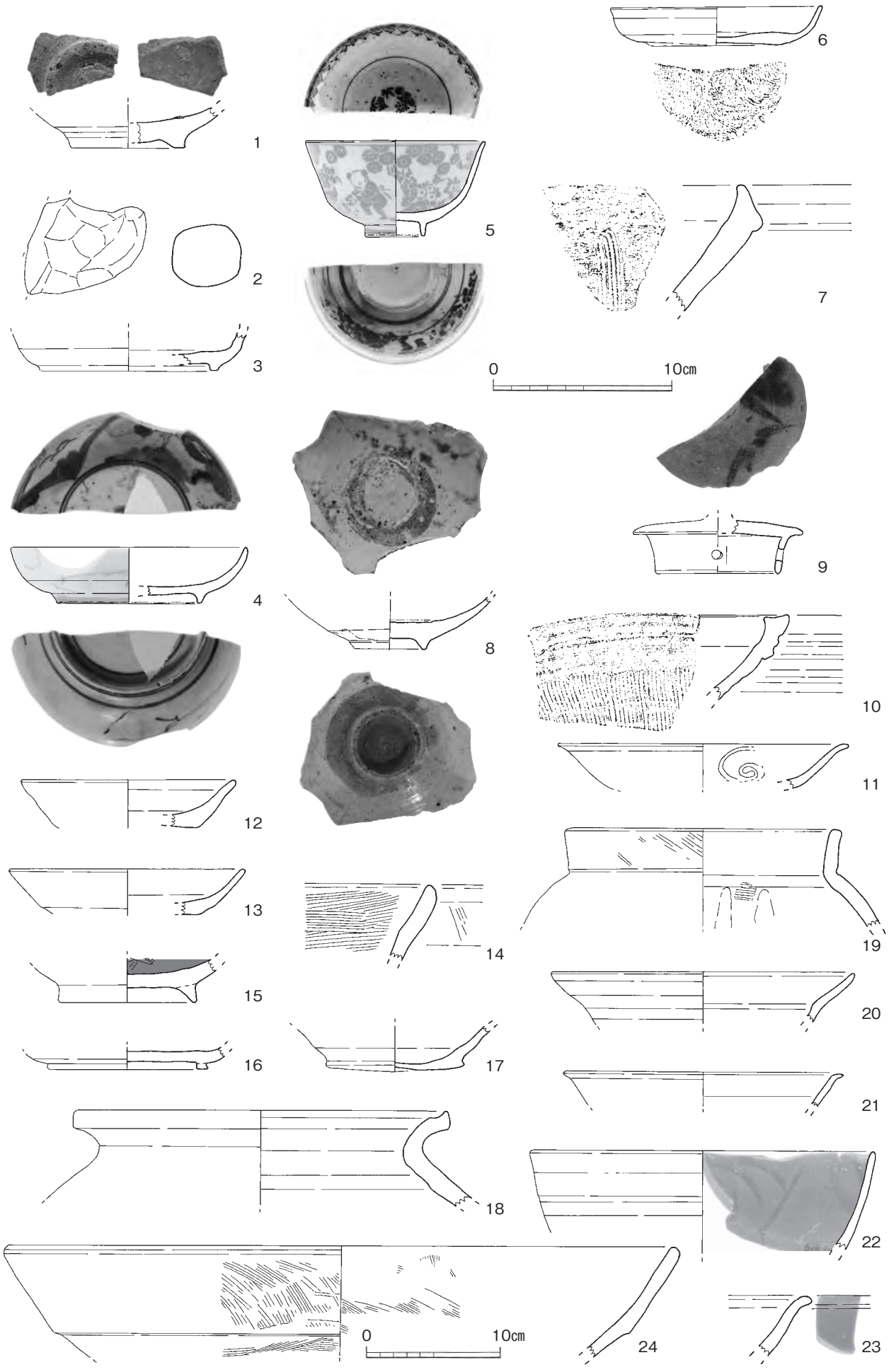
１は精良であるが緻密さを欠く灰色の胎土をもつ朝鮮陶器で、しっかりとした逆台形の高台をもつ。淡い灰緑色となる釉を全面に施釉し、畳付の一部を欠失するとともに見込に目跡が残る。強く横撫でしたものか、体部下端が小さく凹む。２は土師器甑の把手、３は須恵器高台付杯。４は染付皿で、見込中央に五弁花文と思われる文様を配し、外周に二重圏線、体部内面を文様で埋めるがそのモチーフはわからない。体部外面には簡略化した唐草文を描き、体部下端付近・高台内に１条の、高台外側側面に２条の圏線を巡らせる。畳付だけ釉を掻き取っている。５も染付椀で、口縁部内面に小さな輪宝文を連続させ、見込中央に円内に収めた植物文（松竹梅か）、そして見込外周に圏線を巡らせる。外面では草木と唐子を描き、特に口縁部近くに花文を多く配する。印判手であろう。６は底部の1/2が残存する土師器皿である。体部が非常に低く開き、どこを底部とするか形状からの判断が難しい。復元口径は12.0㎝である。内外の全面が暗灰褐色となり、これは本来の色相であろう。７は口縁部を断面三角形に近くする備前焼擂鉢片。微砂粒を多く含む灰赤褐色となる胎土で、内外の器表も同色であるが口縁部付近だけが灰黒色に近くなる。

９はつまみを欠失する陶器蓋。灰黄褐色の精良緻密な胎土をもち、天井部だけ灰黄緑色釉を掛けてその上に鉄釉、緑青釉を少し落としている。口縁部に焼成前の小円孔があり、内側全体に黒色系の付着物がある。10は口縁部を幅広く肥厚させて沈線で加飾する陶器擂鉢。微砂粒を多く交える灰黄褐色の胎土に灰赤紫色といった発色となる釉を内外面に掛けている。11は青磁皿。素地は灰白色で、厚く掛けられた釉は水色に発色する。体部内面に大きな渦文が浮き彫りにされていて、その左側にも小さな文様がやはり浮き彫りされているがその詳細はわからない。外面は無文。

12は土師器皿小片で、器表が荒れる。胎土に微砂粒を多く交え、体部外面全体が灰褐色に塗られたようになり、同底部は灰黒色に近い。内面では煤けたようなところもあるが、おおむね灰黄褐色。13は口縁部の1/4ほどが残存。14は胎土・内面が灰赤褐色、外面は暗褐色で煤が付着する。外面調整は判然としない。15は内面が黒い黒色土器椀。胎土は特別なものではなく、外面は赤味をもつ。器表が荒れているが、内面は全面を篦磨きで仕上げるようである。16は須恵器杯底部片で、1/3ほどが残存。17も須恵器で、底部外縁が小さく突出する点に特徴がある。京都篠産であろう。この２点は底部に篦削り痕が残る。18は頸部が短い須恵器甕で、口縁部を受け口状にする。肩部には叩き痕が残るが、残存部内面は横撫でである。19は暗灰色精良な胎土をもつ瓦質土器。体部の張りが弱く、口縁部を直立させる。口縁部外面は斜位の繊細な刷毛目が残り、同内面は横撫で。体部外面は丁寧な横撫でで終わり、内面は指撫での後に弱い刷毛目で仕上げるようである。器表全体が灰黒色となる。20は唐津焼であろう。全体に灰白色の釉が掛かる。21は体部内面中位に沈線が入る白磁。22・23は龍泉窯系青磁。22は内面に片切り彫りの文様が入り、釉は淡い灰緑色となる。龍泉窯系としたが、器形に加えて通常の片切彫りでの施文パターンとは違っている。23は口縁部を外反させて、厚く施釉する青磁椀。深みのある灰緑色となる。24は瓦質の焙烙か。外面は粗い刷毛目を残し、全体に煤ける。内面には細かい刷毛目が見えるが、その後に横撫でを施して消す部分がある。胎土は暗灰色。



第75図　3区出土石製品実測図（石臼等、1/3）



第76図　3区出土遺物実測図18（その他の出土遺物、1/3）

4）　一次調査小結

以上が都市計画道路現人橋乙金線建設に係る宮ノ前遺跡第一次調査（1〜3区）の内容である。遺構としてはほとんどが江戸期でもその後半から近現代に至る時期の所産と思われ、性格や用途などはほとんどわからない。個々の遺構・遺物の時期比定は困難であるが、唐津焼青緑釉陶器や見込に五弁花文を置く肥前磁器が目立ち、これらは1690〜1780年代に盛行するとされる。また、底部を蛇の目凹形高台とする形態も上記の頃から以降に長く使用されるものという[註1]。

（1）　遺構について

いくつかの主要な遺構について説明を加える。

・1号溝の埋没の始まりを示唆する遺物は北端の溝底に近い礫上から出土した染付（第30図53）であり、やはり同溝出土の図柄・器形がよく似る皿（第29図50）も同巧である。小振りの高台を有し、体部中位で屈曲する特徴をもつ。『柴田コレクション総目録[註2]』「0075　染付牡丹花文小皿」の見込の牡丹花の表現はこれらに非常によく似ていて、器形が異なっているものの、同書では「寛永年間1630〜1640年代」に比定されている。また、小樽2号窯出土品に体部中位で二段に屈曲するよく似た器形の皿が紹介されていて、それも「1620〜1640年代頃」とされる[註3]。一方、付近から出土した唐津焼擂鉢は大橋氏のいうⅠ期（1580〜1600年代）、砂目を残す唐津焼皿類も18世紀以降の新しい要素は見られない。したがって1号溝は、17世紀中頃には埋没が始まったものと思われ、当然のこととして開削はさらに遡るが、それを知る手立てはない。溝の完全な埋没は「敵国降伏」銘土師器皿であろうが、出土状態の詳細が不明である。皿の年代も知りえないが、筥崎宮が「官幣大社」に位置づけられたのは大正3（1914）〜昭和21年（1946）の間である。「敵国降伏」の意味合いを汲み取れば、対中戦争や第二次世界大戦などが想起され、出征する兵士のために使用された杯であったものと思われる。ただ、溝からの出土遺物には小型ガラスビン片が1点あるとはいえ、明らかに近代以降の遺物が一定程度出土したというものでもなく、むしろ、図示した遺物を含めて多くは江戸期以前に属し、この土器は特異な存在である。かつてここにあった旧家の建物の詳細を知らないが、その一部と思われる3号溝とした礫の詰まった布掘基礎は、方位が1号溝を意識するような配置となることから家屋建設の頃は1号溝の存在が認識されていた可能性がある。ここでは、1号溝の完全な埋没が戦前期まで下る可能性があるということに留めておく。

この溝の性格についても、調査区内のわずか10数mの距離を置いて規模・形状や埋土の状況がまったく異なることから推測が困難であるが、この溝の位置を1/2,500都市計画図に落としてみると（第2図）、溝は全体に現人神社西側の略南北方向の道路の方位に近く、かつ略測でその道路から100m余りの位置にあることがわかる。1号溝の全体的な方位と100m余という数値を考慮すれば、条里地割の中に組み込まれていた溝の可能性も考えられる。しかし、溝西辺が調査区南端近くで急に西側へ開いた結果として全体が条里方向に近くなったのであって、調査区以南での溝の方位がわからないため、条里地割との関係はあくまでも憶測にすぎない。ただ、この付近の地山は砂層であり、大量の礫が埋没していたことは河川に直結していたことを窺わせ、この遺跡が立置する自然堤防を南から西へ迂回するように流れる城ノ谷川（あるいは古河川[註4]）という小河川に続いていたものと思われる。この川は神功皇后が開削したと伝承される「裂田溝（さくたのうなで）」から分かれていて、本流はさらに北流して本調査地の北1.2キロほどの地点で再び那珂川に合流するという。「裂田溝」は第

3図左下付近の山田地区に所在する一の井手を通じて那珂川から取水し、再び合流するまでの間に谷を塞ぐような位置にある安徳台の南北で250haの耕地を灌漑したという重要な用水路である。この「裂田溝」から分かれた城ノ谷川は、安徳台以北の「裂田溝」による受益地のほぼ中央に流路をもって、その東半（上流）付近では小さく蛇行するとはいえ、大きく見れば現人神社前の道路とほぼ同じ方位をとることから、本来は条里に規制されて開削されたものと思われる。現在は護岸された幅5mほどの河川であるが、第112図に示した日野尚志氏による条里復元図では城ノ谷川南東端付近は条里に合致する。条里に沿って開削されたと推測される城ノ谷川に接続する溝であれば、やはり条里地割との関連は無視できないであろうが、1号溝が接続可能な流路はすでに条里地割を逸脱した後の水路であり、その意味では条里との関係は云々すべきでないかも知れない。それにしても、南壁に見えない大量の礫が、特に北半部に埋没していたことの意味については推測がおよばない。また、溝北東端の組み上げたような礫群についても、同様である。

・206号土坑から「御即位記念」・「大正四年十一月十日」銘のある土師器が出土した。大正天皇は大正元年（明治45年：1912）7月30日に践祚し、即位の礼は大正4年（1914）11月10日に京都御所で行われた。この慶事を記念する焼き物であるが、「飯塚町」（現飯塚市か？明治22：1889ー昭和7年：1932の間町制）で作られた型押しの「かわらけ」であり、それほど大切にされていたとも思えない。廃棄の年代は特定できないが、大正4年からそれほどの年代差を考える必要はないのではなかろうか。そして、同時に廃棄された食器類も大正4年に近い時期に使用されていたと想定できる。ガラス製品や金属製品を提示していないが、いわば「大正前期の一括遺物」といえる。

・307号溝の出土遺物には良好な状態の「丸底杯」や瓦器椀がある。ここで出土した「丸底杯」は、「（12世紀中ごろ）丸底杯aは急激に減少する」[註5]とされ、この溝は12世紀中頃を中心とする時期に埋没したものと思われる。検出した延長が短いが、直線的に掘削され、かつ立ち上がりも急角度であって灌漑などといった流水を想定したものではなく、土地を区画するためのものであろう。307号溝と一体的関係にあると想定している道路状遺構304号溝から出土した白磁椀や黄褐色透明釉が掛かる龍泉窯系青磁椀などはいわば「舗装材」として混入したと想定しているが、その出土遺物も12世紀中頃～後半の標識的な輸入磁器とされていて、機能した時間が短かったということであろうか。ただ注意すべきは、この溝の軸が北から東へ約40度ほど振れていることである。この地区では現人神社前あるいは周辺の道路などから推して、北から25～30度ほど西へ，東へは60～65度振れる方位に平行・直交する区画が明治35年大日本帝国陸地測量部作製の地図以来現在に至るまで痕跡を留め、条里制の痕跡とされる。307号溝の方位は周辺に残っていない。この点についてはⅣ章で再度取り上げる。

（2）　出土遺物について

今回の調査では縄文後期の土器・石器も少なからず見られ、特に剥片類の点数はかなりにのぼる。ただ、遺構は皆無で、土器も小片が僅かに出土するだけであり、狩り場のような位置にあったものであろう。弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器もわずかながら見られたが、今回の調査区内での活動はほとんど認められないといってよいであろう。

出土遺物で量的に増えるのは8世紀後半の須恵器で、調査区全域から出土する。器種は杯蓋・高台付杯身・高杯・瓶・甕などであるが、これもほとんどが小片である。とはいえ、土師器高台付杯

（第40図土203−2）や図示しなかった土器片も含めて一定の存在感があり、摩滅もそれほど進行していないことから卑近な位置に該期の遺構が存在する可能性が高いと思われる。

そして、3区では緑釉陶器・越州窯系青磁が少なからず出土し、確認できたのはそれぞれ1点だけであるが灰釉陶器（溝303−6）、邢窯・定窯系白磁（土319−7）もあった。緑釉陶器は平安時代の所産であり、素地には須恵質、酸化炎焼成陶器質などがあるが時期や産地は明らかにし難い。だが、ここから出土した越州窯系青磁はその特徴から8世紀中葉に現れ、9世紀後半から10世紀中ごろに多く出土するという。白磁は8世紀末から9世紀前半に比定されている[註6]。これらの初期貿易陶磁や緑釉・灰釉陶器などは今でも一般集落遺跡からの出土は希少で、官衙や寺院といった特殊な遺跡から出土することが多い。本遺跡のように一定程度の量が出土する場合は、古代の重要な遺跡の存在を疑うべきであろう。ただ、調査時の所見および出土遺物から見て、古代に遡る確たる遺構は心許ない。しかし、越州窯系青磁や緑釉陶器などを出土した319号土坑およびその周辺の撹乱などは、中世初期の307号溝という人為的な遺構にも近い。これは古代の遺跡ががさらに北西側へ広がることを思わせる。ちなみに、過去の市内の調査では初期輸入磁器は皆無に近いという。

中世前半に一般的な龍泉窯系青磁・同安窯系青磁や玉縁口縁の白磁椀なども一定量が出土し、中世後半の龍泉窯系細蓮弁文椀や2点であるが明染付（P217・321号土坑）も見られた。

近世になると肥前陶磁器（唐津焼・有田焼）の出土が目立つようになる。

こうしてみると、この地区は8世紀後半以降、長くヒトの活動する場所として使用されてきたことが窺える。特に古代の初期貿易陶磁は律令時代の重要な機関が付近に存在したことを思わせる。律令時代の「那珂郡」は福岡市東区（志賀島・西戸崎・馬出など）、博多区（吉塚・堅粕・那珂・板付など）、南区（寺塚・皿山・花畑・屋形原など）、春日市全域、大野城市北西部（雑餉隈・錦町など）、那珂川市全域に及んでいた。『和名抄』では那珂郡に「田来、曰佐（おさ）、那珂、良人、海部（あま）、中島、屯倉、山口、板曳」の9郷が記され、また『万葉集』に「伊知郷」が見えるという。このうちの「那珂郷」は現在の福岡市博多区那珂付近に比定され、3本柱の囲繞施設に囲まれた倉庫群などが調査されて「那津官家（なのつのみやけ）」推定地としても有力視されている。大宰府−水城東門−西海道、同−水城西門−鴻臚館を繋ぐ官道はいずれも郡内を縦断するとされ、そのルート上に国郡の各種施設を配置することは当然であろう。一方、「仲村　按に此村の名仲村と字音に唱ふれとも、いにしへは那珂村と呼しなるへし。しかるに、近古中嶋郷を略して那珂村と呼来りしかは同郡中に二ツの那珂村ありて紛らハしきゆゑに・・」、「中」と表記をして音読とし、さらに「仲」としたと地誌にある[註7]。これが事実であれば、当地が本来の郡名を負う地域であったこととなる。だが、郡の政治的中心にしては南に偏しているし、大宰府へ通じる官道から遠く離れた当地へ郡の中枢施設を置く理由は考えつかない。

註1　大橋康二『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニューサイエンス社、1993

註2　佐賀県立九州陶磁文化館『柴田コレクション総目録』2003

註3　野上建紀「磁器の編年（色絵以外）　1．碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」（九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』、2000）

註4　那珂川市作製の地図では両河川名が見られるが、現地の小橋には「古河」とある。

註5　山本信夫「第3編第6章第2節　中世の土器・陶磁器」（『太宰府市史』考古資料編、1992）

註6　横田賢道「観世音寺境内出土の中国陶磁器について」（九州歴史資料館『観世音寺−考察編−』2007）

註7　青柳種信『筑前国続風土記拾遺』1818〜1830

４　４区の調査

３区の西側に位置する４区では、土坑47基・溝28条・ピットなどを検出した。主な遺構の時期は近世であるが、調査区東端のみ３区検出の307号溝と関連する中世期の溝を検出した。土層は上から表土（黄灰色砂質土）20cm、黒茶色土10cm、茶褐色土などの昭和～現代にかけての層10cm、ゴミを含む茶褐色土、褐灰色土30cmが堆積し、GLから約70cm下に黄灰色砂質土(地山)がある（第84図参照）。

４区の遺構の大多数は、近代～現代にかけてのゴミ穴などの攪乱であったが、近世の遺物が混入したことから、土坑・溝・ピットとして遺構番号を付した。調査は撹乱の掘削と反転に時間がかかり、４区だけで約４ヶ月の時間を要した。

１）　土坑

４区の土坑は47基検出したが、土坑の大部分は近代以降のゴミ穴であったたため、ここでは掲載していない。混入品ではあるが、状態の良い402・406～408号土坑のみ出土遺物を掲載している。

401号土坑（図版35、第77図）　調査区西壁隅際で検出した土坑で、周囲を402号溝に囲まれている。西壁際で約１/３検出した状況から、残存長3.5m以上で、短軸1.9m、深さ0.5mを測る。形状は長円形状で、埋土からはパンケース２箱分の近世陶磁器・瓦片が出土することから、遺構の時期は近世と思われる。

出土遺物

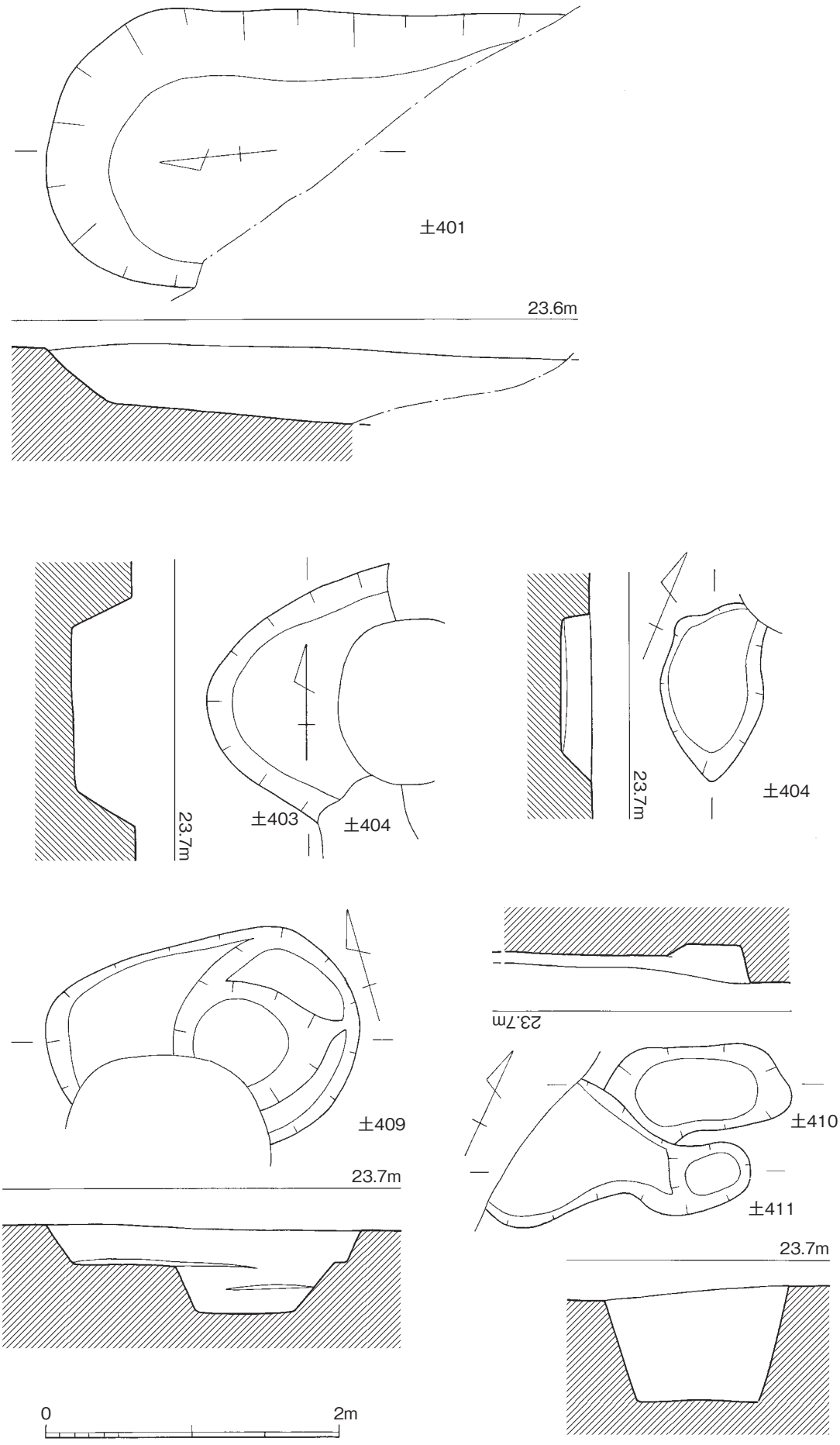
土器等（図版61、第78図）　１は橙色を呈す瓦質火鉢で、内外面は刷毛目と撫でを施す。長円形の皿の片側を穿孔を施した半円形状の側面を付設する。２は陶器蓋で、中央にやや崩れた球状のつまみがつく。外面は白化粧土を塗り、鉄釉で５区画に分けた線内に緑釉で玉を描き、その上に透明釉を施す。３は染付椀で、外面に草花文と圏線２条を描く。18世紀前半～中頃のくらわんか椀である。４～６は染付皿である。４は外面に簡略された唐草と高台付近には圏線４条、高台内にも文字、内面には花唐草と２条の圏線、見込みに五弁花文を描く。見込み内には砂が多く付着する。18世紀代か。５は外面に何も描かず、内面は菊唐草の下に２条の圏線を描く。見込みは蛇の目釉剥ぎである。６の口縁は輪花状で、口錆である。高台内は蛇の目釉剥ぎを施す。見込みは遠山、岩、東屋、網干、水などの風景を描く。なお、３～５の畳付は露胎とする。

402号土坑出土遺物

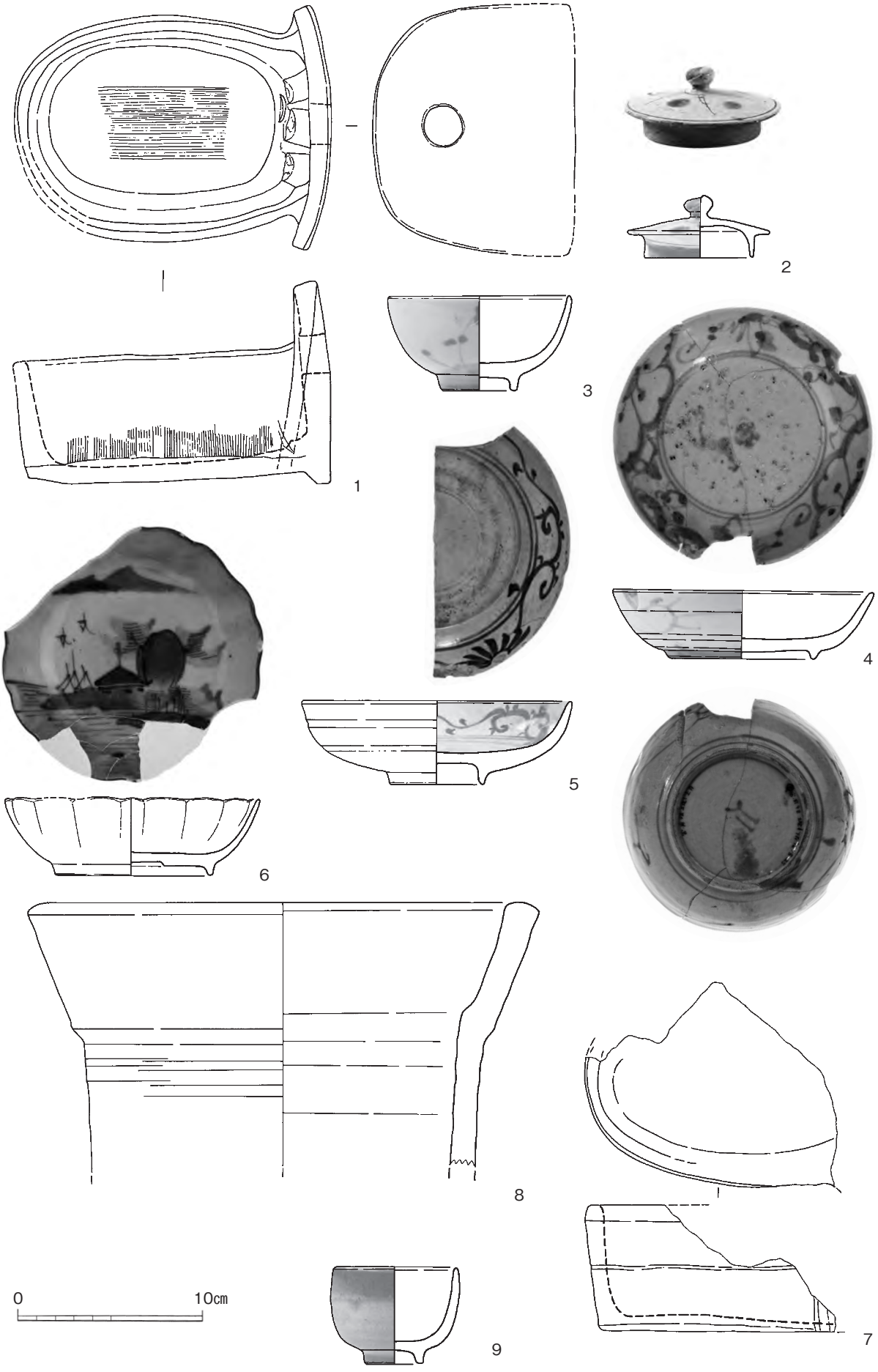
土器等（第78図）　７は瓦質火鉢片で、１と同形状のものか。内外面は撫で調整であるが、内面は粗い撫でである。８は陶製の土管上部片で、内外面は黒茶色の鉄釉を施釉する。煤が内面に付着している。

403号土坑（図版35、第77図）　401号土坑の約７m北東側で、404号土坑など複数の遺構に切られているため、半円形状の１/３程しか残っていない。残存している部分で長さ1.5m、深さ0.4mを測る。近世陶磁器・瓦片が出土していることから、遺構の時期は近世か。

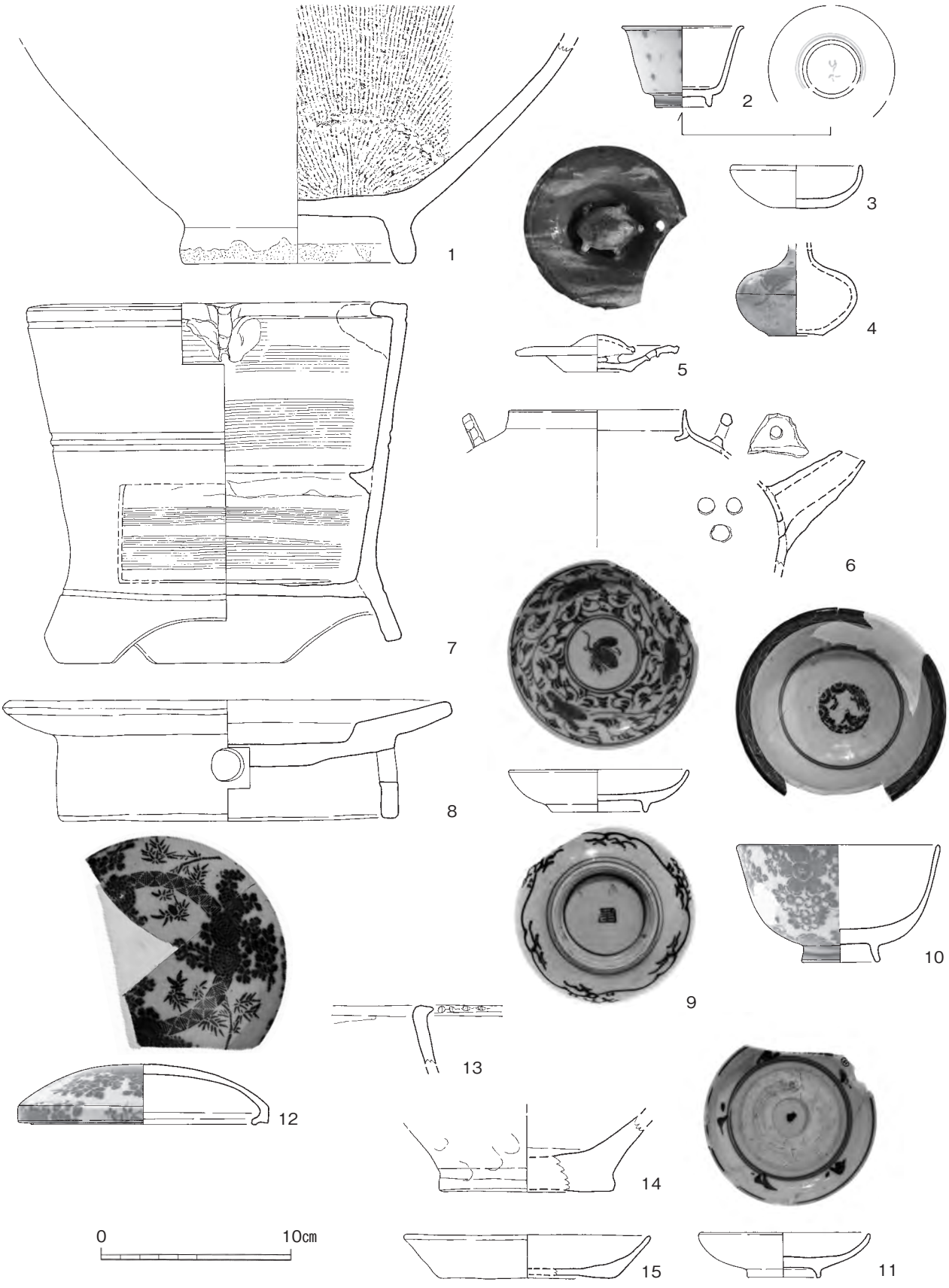
出土遺物



第 77 図　4 区土坑実測図 1（401・403・404・409 ～ 411 号土坑、1/40）



第 78 図　4 区出土遺物実測図 1（401 ～ 403 号土坑、1/3）



第 79 図　4 区出土遺物実測図 2（406 ～ 408・411 号土坑、1/3）

土器等（第78図）　９は京焼風の陶器椀である。釉調は黄灰色で、口縁部のみ青灰色を呈す。畳付のみ露胎とする。

404号土坑（図版35、第77図）　403号土坑の南側で、403号土坑を切る形で検出した土坑である。形状は不整形で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。埋土から陶器の鉢片などが出土することから、遺構の時期は近世か。

406～408号土坑出土遺物

土器等（図版61、第79図）　１・２は406号、３～11は407号、12は408号土坑出土である。１は陶器擂鉢である。内外面は黒茶色の鉄釉を施す。高台内外には砂が付着する。２は染付椀で、外面と高台内にも文字を描くか。３は土師器小皿で、薄手で丁寧な撫でと外底は糸切りである。４は京焼風の小壺で、口頸部は欠損する。外面体部上半のみ黄灰色に施釉し、鉄釉で花、緑釉の玉をいくつも描く。５は灰白色で施釉された陶器蓋で１箇所穿孔し、天井中央のつまみは亀の形状になる。内面は露胎とする。６は京焼風の土瓶で、口縁と注ぎ口のみ残存し、把手と注ぎ口は穿孔される。７は第42図土206-5によく似た瓦質火鉢である。内面口縁部は突起で、体部下位は空気孔がある。内面は刷毛目で、外面は撫でである。８は橙色を呈す瓦質の鉢で、厚手な作りである。内底は一段下がる形状で、高台には径2㎝以下の穿孔を施す。９～12は染付皿である。９の外面は唐草文、内面には牡丹唐草と圏線４条、見込みに蝶と圏線２条を描く。高台内に「朱」の変形文字か。10の外面は型紙摺りの花文と圏線である。内面口縁付近は雷文、見込みに圏線２条と環状の菊などの文様が巡る。11の内面は文字と圏線３条を描く。見込みは蛇の目釉剥ぎで、中央に崩れた点を描く。12は蓋である。外面は型紙刷りで、笹と菊、雷文を描く。２・９・10・11の畳付は露胎とする。

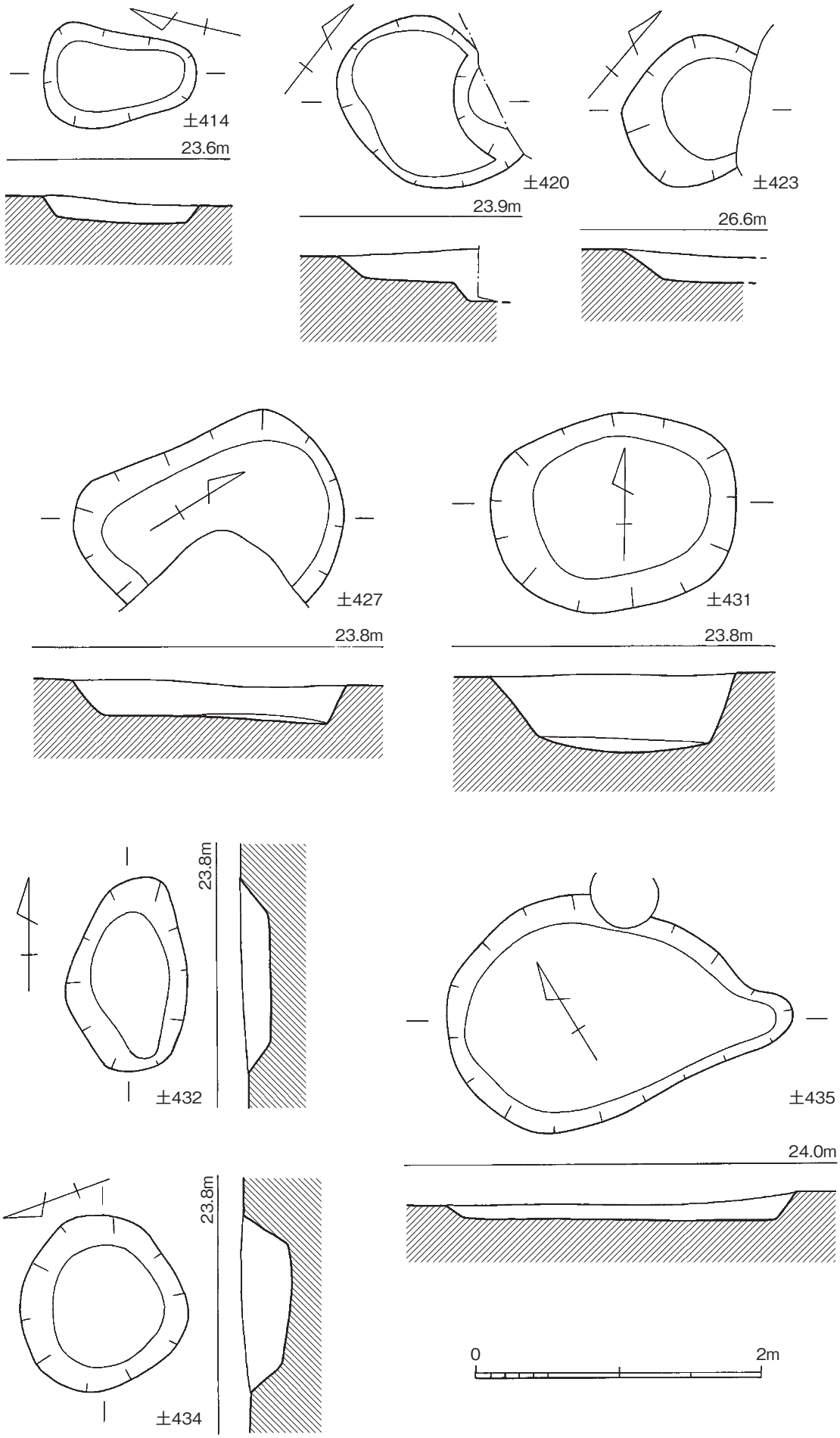
409号土坑（図版35、第77図）　調査区中央やや西より付近に位置する土坑で、415号溝を切る形で検出する。形状は長円形状で、長軸2.1m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。東側が径1.4m前後の円形状に一段下がる状況から、本来は別々の遺構の可能性がある。埋土からは弥生土器片が出土するが、周囲の状況からは弥生時代の遺構ではなく、単に遺物が混入したものか。

410・411号土坑（図版36、第77図）　409号土坑の約6.5m南側に位置する土坑である。410号土坑は南側を411号土坑に切られる形で検出する。形状は隅丸長方形状で、長軸1.3m、短軸0.6m、深さ0.8mを測る。411号土坑は西側を416号溝に切られる形で検出する。形状は不整形で、東側は一段下がり、長軸1.7m、短軸0.45～0.9m、深さ0.1～0.25mを測る。埋土からは土師器片又は土師質土器片が出土することから、遺構の時期は近世か。

出土遺物

土器等（第79図）　13・14は弥生土器である。13は弥生時代前期の甕口縁部片で、端部は刻目である。14は平底の底部片で、外面は指圧痕が明瞭に残る。15は土師器の皿で、調整は摩滅しているが、外底は糸切りである。復元口径13.0㎝を測る。

414号土坑（図版36、第80図）　411号土坑の南側で検出した土坑である。長軸1.1m、短軸0.5～0.75m、深さ0.15mを測る。形状はやや崩れた長円形状で、断面は逆台形状である。埋土か



第 80 図　4 区土坑実測図 2

（414・420・423・427・431・432・434・435 号土坑、1/40）

らは近世陶磁器が出土する。

420号土坑（図版36、第80図）　調査区中央の北壁際で検出した土坑である。形状は長円形状で、長軸1.25m以上、短軸1.2m、深さ約0.2～0.35mを測る。西側は一段深く、掘削する。埋土からは土師質土器片、近世陶磁器が出土する。

422号土坑出土遺物

土器等（図版61、第82図）　1は陶製の湯たんぽである。上部には2.5㎝の円形の口が付く。上部は黒茶色、側面は緑灰色で施釉し、底部は露胎とする。内外面には撫での痕跡が明瞭に巡る。2は型紙刷りの湯呑椀で、外面は草花文や青海波と櫛歯、内面は雨降文である。復元口径6.9㎝を測る。

423号土坑（図版36、第80図）　20号土坑の西側で検出した土坑で、東側は大型のゴミ捨て穴に切られている。やや崩れた長円形で、長軸1.05m、短軸0.8m以上、深さ0.2mを測る。埋土から磁器が出土する。

出土遺物

土器等（図版61、第82図）　3は磁器の椀で、高台は3㎜程と低く畳付は露胎とする。完形品で口径11.5㎝を測る。釉調は灰緑色を呈し、無文である。

427号土坑（図版37、第81図）　調査区西側で24号溝の北側で検出した土坑で、東側1/3以下は他の遺構に切られている。やや崩れた長円形状で長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.25mを測る。埋土からは近世陶磁器が出土する。

431号土坑（第81図）　427号土坑の南側で検出した土坑で、これも424号溝の北側に位置する。長楕円形状で長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.55m以下を測る。底面中央に向かって深くなる。

432号土坑（図版37、第81図）　427号土坑の東側で検出した土坑である。上面では確認できなかったが、周辺を1段以上掘り下げて検出できた遺構である。長円形状で、長軸1.4m、短軸0.85m、深さ0.2m以下を測る。

434号土坑（図版37、第81図）　432号土坑の南西で検出した土坑である。形状は円形で径1.25m、深さ0.35mを測る。埋土からは瓦質土器や近世陶磁器が出土したことから、遺構の時期は近世か。

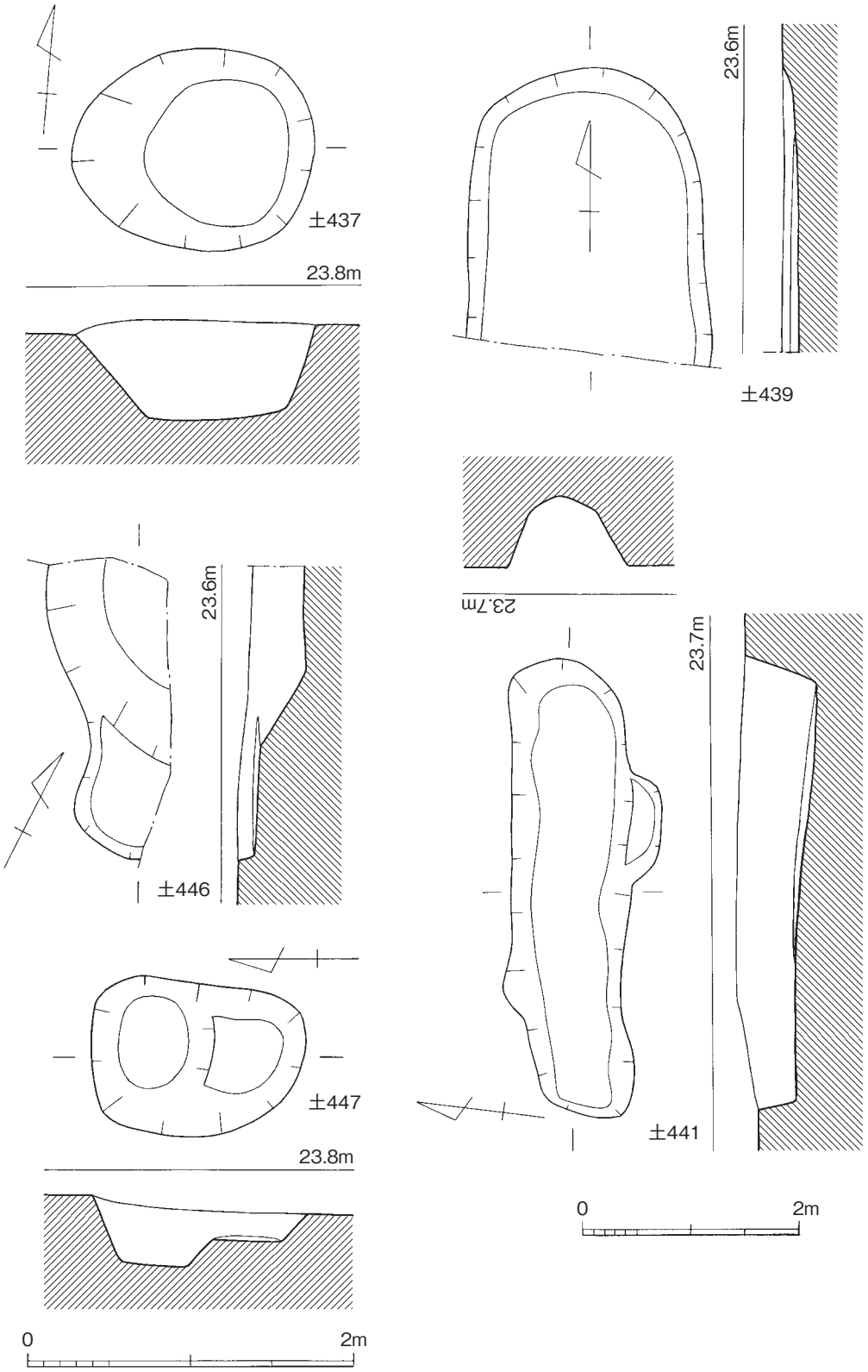
435号土坑（第81図）　調査区東側で検出した土坑である。やや崩れた長円形状で西側に向かって窄まる。長軸約2.4m、短軸1.65m、深さ0.2mと浅い。埋土からは土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器が出土することから、遺構の時期は近世か。

436号土坑（第87図）　調査区東側の435号土坑西側で検出した土坑である。443号土坑と同様の素掘りの井戸と思われ、人力で可能な深さ1.8m下まで掘削した。やや崩れた長円形状で断面中

位でオーバーハングする。長軸約2.5m、短軸2.05m、深さ約1.8mを測る。埋土からは近世陶磁器片が僅かに出土することから、遺構の時期は近世か。

出土遺物

土器等（第82図）　4は染付の椀で、口縁内面付近には連続した円文、外面は花唐草を描く。畳付は露胎とする。



第81図　4区土坑実測図3（437・439・441・446・447号土坑、1/40・1/60）

437号土坑（図版37、第81図）　調査区の西側より南壁際で検出した土坑である。形状は長円形状で、長軸1.5m、短軸1.25m、深さ0.6mを測る。掘り方は西側でやや傾斜が緩く広がり、底面中央に向かって凹んでいる。埋土からは近世陶磁器、鉄器片が出土する。

出土遺物

土器等（図版62、第82図）　5は染付の仏飯器片で、外面は菊花散らしを描く。18世紀後半以降か。6は染付皿である。底部は肉厚で、高台は低い。内面は花唐草文、見込みは蛇の目釉剥ぎを施し、中央にはコンニャク印判の五弁花文である。復元口径14.0㎝を測る。18世紀中頃から末か。

439号土坑（第81図）　437号土坑の東側で検出した土坑である。形状は長円形状で、南側は調査区外へ延び長軸1.75m、短軸1.5mを測る。深さは0.1mと浅い。埋土からは土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器が出土することから遺構の時期は近世頃か。

出土遺物

土器等（図版62、第82図）　7は磁器椀で、外面には丸文が描かれる。復元口径7.2㎝を測る。8は磁器の紅皿で、外面は型押し成形で蛸唐草文が巡る。口径7.1㎝を測る。9は陶器の火入で、黒茶色で施釉する。外面は刷毛目模様である。17世紀後半か。

441号土坑（図版38、第81図）　437号土坑の北側で検出した土坑で、所々他の遺構に切られている。長さ4.1mと他の土坑より長いため、本来は溝とすべき遺構と思われる。溝は幅1.1m、深さ0.6mを測り、底面は平坦ではなく、中央に向かって尖る。

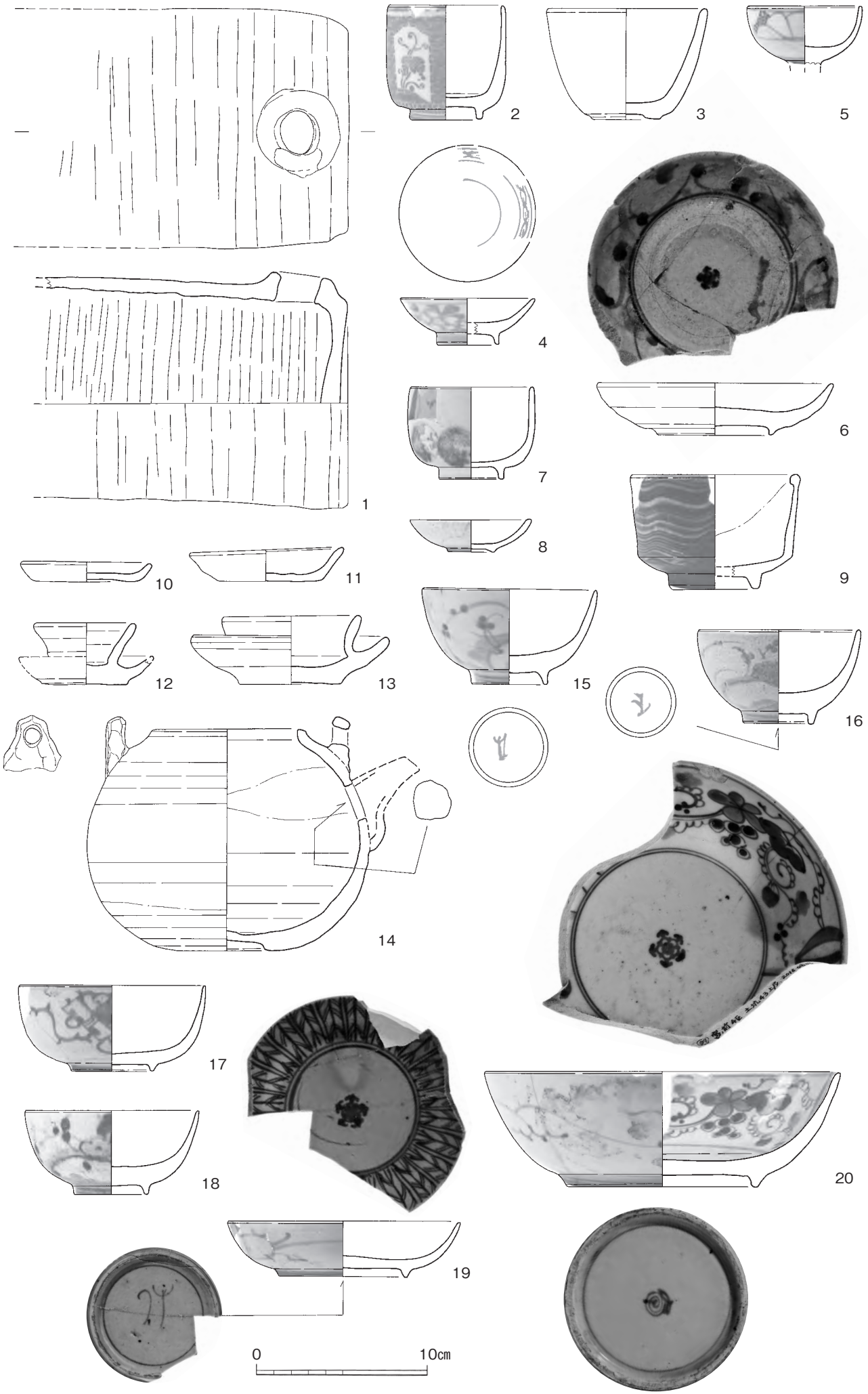
出土遺物

土器等（図版62、第83図）　1は瓦質火鉢である。外面体部上位には龍がスタンプされ、把手は鱗をかたどっている。内面は明瞭な刷毛目を施す。2は白磁皿で、口縁端部に向って大きく開く。畳付けは露胎とする。

443号土坑（図版38、第87図）　調査区東端で検出した土坑で、3区検出の307号溝と関連する428号溝を切る形で検出した遺構である。径2.2m、深さ2.2mを測り、内部は下層に行くにつれて掘り窄まっていく。さらに掘削可能と思われたが、危険なため残りはバックホーによる掘削を行い、更に約1.8m掘れることを確認した。出土遺物に磁器・瓦があることから、時期は近世か。

出土遺物

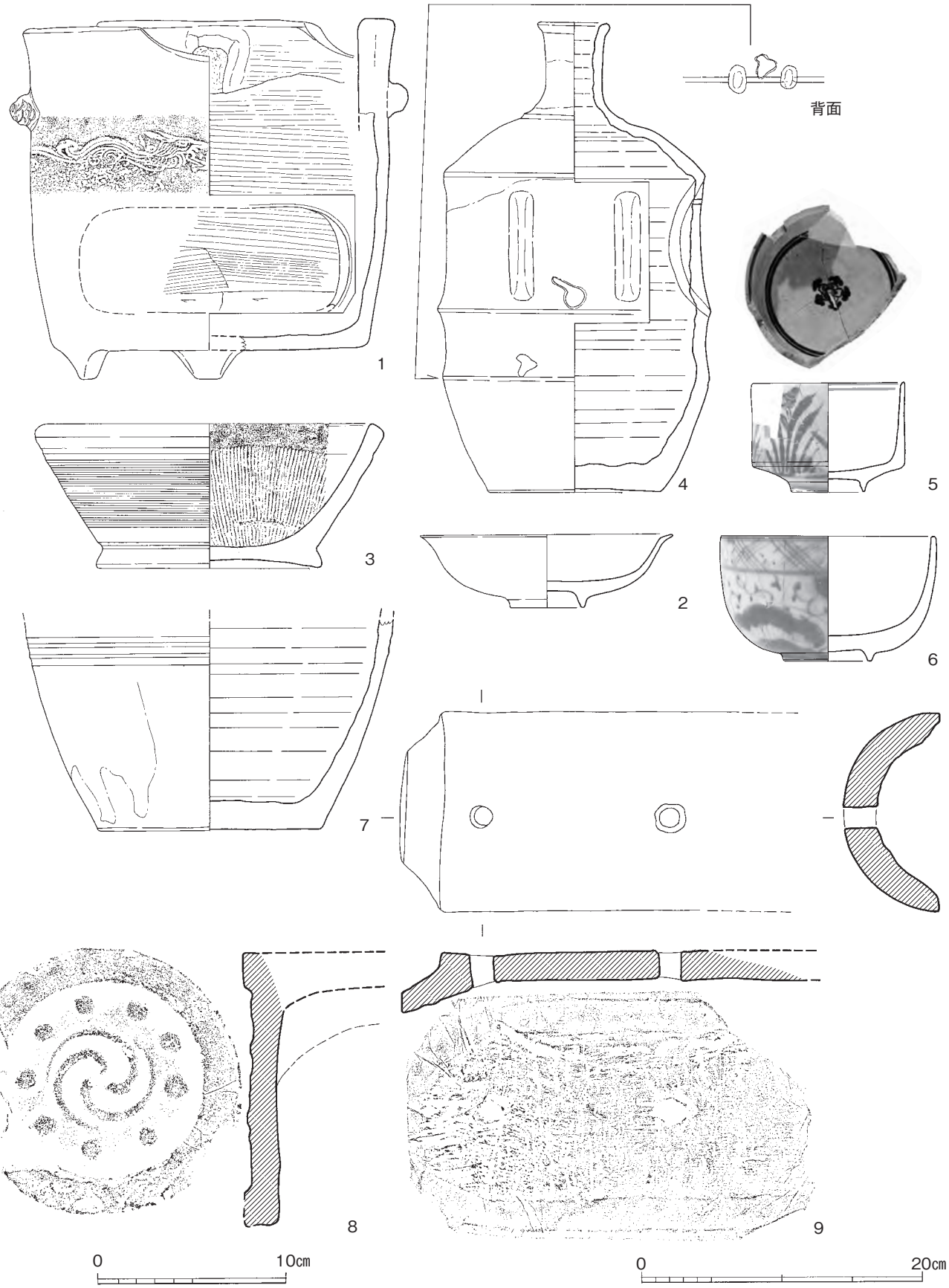
土器等（図版62、第82図）　10と11は土師器皿で、復元口径は7.7、9.1㎝を測る。12と13は陶製の灯明皿で、鉄釉を施す。13の内面には別個体が付着する。14は京焼風の土瓶で、黄灰色釉の外面に草花文を描く。10～13の外底は糸切りである。15～20は染付である。15・16・18は18世紀中頃のくらわんか椀で、外面は同じ絵柄で梅花を描く。15・16は高台内に文様がある。17は丸形椀で、宝（蕉葉・巻物）を描く。19は染付皿である。内面は矢羽根文と二条の圏線、見込みはコンニャク印判による五弁花文、高台内にも圏線と文字を描く。20は大型の皿で、畳付に砂が付着する。外面は簡略した唐草文、内面に花唐草文と見込みにコンニャク印判による五弁花文、高台内に花卉を描く。83図8は軒丸瓦の瓦当部分である。三つ巴文で、9個の珠文が巡る。色調は灰色で、焼成は良好である。



第 82 図　4 区出土遺物実測図 3（422・423・436・437・439・443 号土坑、1/3）

445号土坑出土遺物

土器等（図版62、第83図）　3は陶器擂鉢で、底部は外に広がる高台である。内面にはスリ目があり、外面は細かい沈線を施す。釉は黒茶色を呈する鉄釉で、外面底部のみ露胎とする。

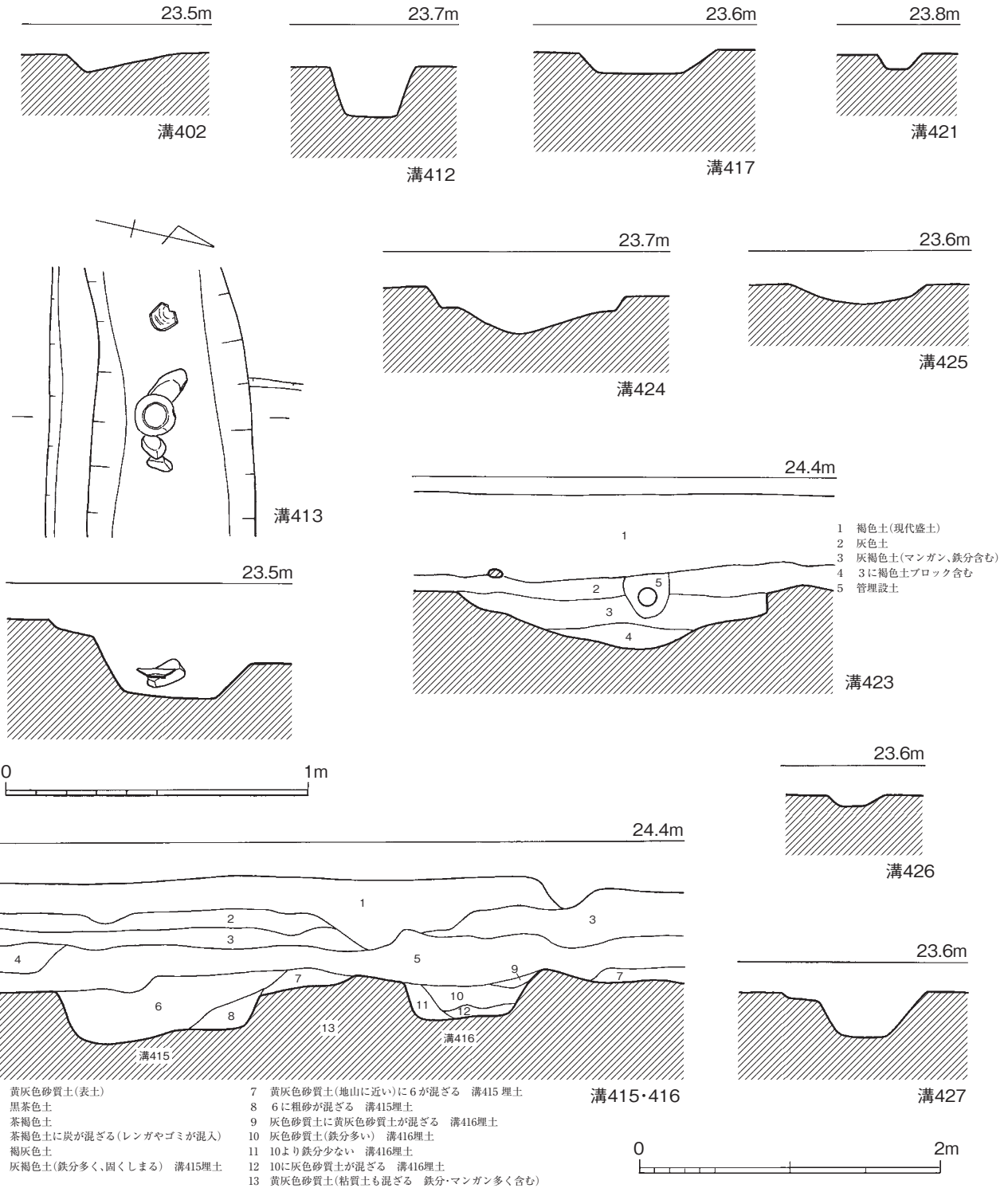


第83図　4区出土遺物実測図4（441・443・445・446号土坑・416号溝、1/3、9は1/4）

446号土坑（図版38、第81図）　調査区西壁際で検出した土坑である。壁際で検出したため、1/2以上は検出できでいない。残存長1.8m以上、深さ0.35mを測る。北側に向かって1段下がっている。埋土からは土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器が出土することから遺構の時期は近世か。

出土遺物

土器等（図版62、第83図）　4は平底の陶器壺である。口縁は細長く窄まっているが、体部は寸胴状で3箇所に突帯がある。突帯付近には縦方向の凹みとボタン状のものがつく。口縁～体部上位には鉄釉を施す。5と6は染付の筒形椀と丸形椀である。外面は5に草花文と圏線4条、6



第84図　4区溝実測図（402・412・413・415～417・421・423～427号溝、1/20・1/40）

に四方襷、唐草、菊花、圏線などを描く。５の見込みはコンニャク印判による五弁花文で、内面口縁と体部との境に圏線を２条巡らせる。18世紀後半頃か。７は陶器壺の底部片で、外面底部を除いて、鉄釉を施す。内面には指撫でによる凹凸が明瞭に残る。

447号土坑（第81図）　35号土坑の北側で検出した土坑である。形状はや崩れた長円形状で、長軸1.35m、短軸0.95m、深さ0.4mを測る。北側に向かって１段下っている。埋土からは土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器が出土することから遺構の時期は近世か。

２）　溝およびその他の遺構と遺物

溝は28条検出した。近代～現代にかけての溝は掲載していないが、405号溝は遺物のみ掲載している。

402号溝（第84図）　調査区西壁際で１号溝を巡るように検出したL字状の溝である。約８m検出し、幅0.8m以下、深さ0.2m以下を測る。

405号溝出土遺物

土器等（図版63、第85図）　１は土師器小皿で、口縁端部の油煙の痕跡から灯明皿である。外底は糸切りで、他は撫で調整である。

412号溝（第84図）　調査区西側で検出した東西方向に延びる溝である。西側の一部を切られるが、長さ約3.4m、幅0.6m以下、深さ0.2m以下を測る。

413号溝（図版39、第84図）　412号溝の南側で検出した東西方向に直線上に延びる溝である。上面は別の新しい溝に切られているが、長さ3.9m、幅0.5m前後、深さは0.3mを測る。埋土は灰色土で、中から肥前産の染付と0.2m以下の礫石などが出土する。

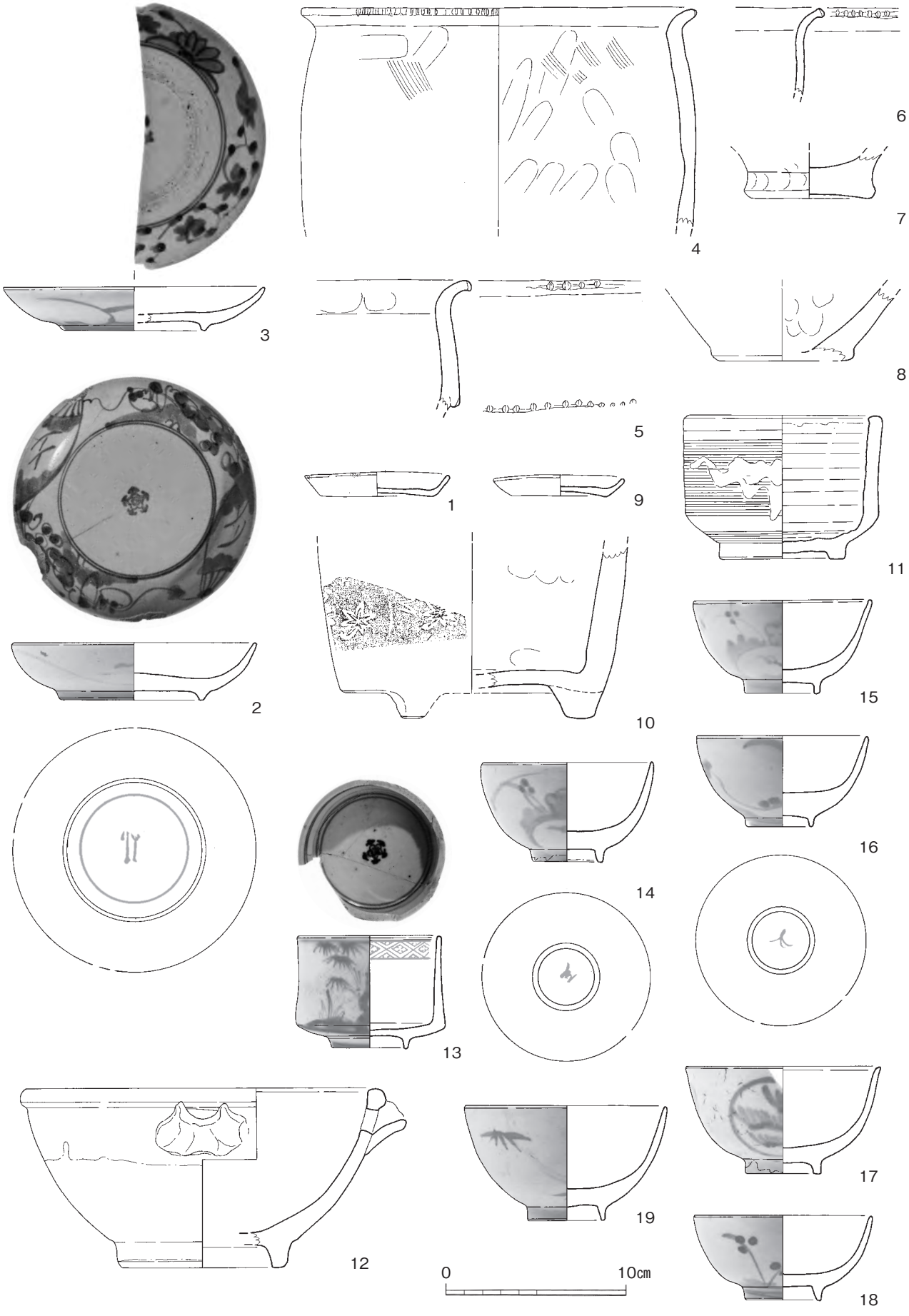
出土遺物

土器等（図版63、第85図）　２・３は染付皿で、畳付は露胎とする。２・３は外面に簡略された唐草文、内面は２に銀杏や草花、３に菊や花唐草で、見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。共に中央に五弁花文である。２のみ高台内にも文様がある。口径13.6、14.6㎝を測る。

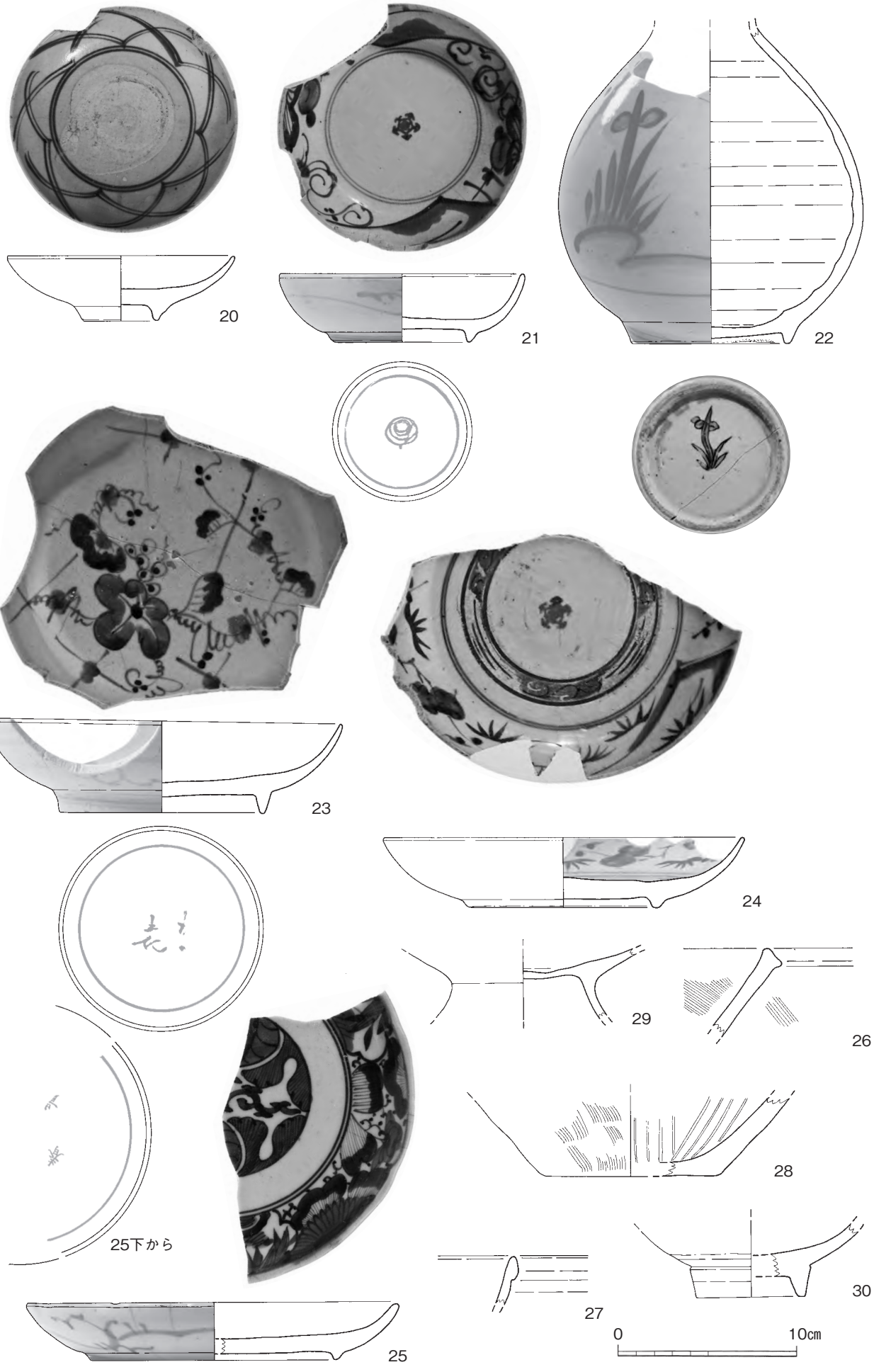
415号溝（図版39・40、第84図）　409号土坑など複数の遺構に切られる南北方向に延びる溝である。南側は窄まっているが、北側に向けて一段下がっていき、幅も徐々に広がっていく。調査区外へ延びているが長さ約８m、幅0.5～1.9m、深さ0.4m以下を測る。断面は逆台形状で、埋土は固く締まった灰褐色土が堆積し、底面には粗砂が堆積している。北壁際では弥生土器片が集中して出土した。

出土遺物

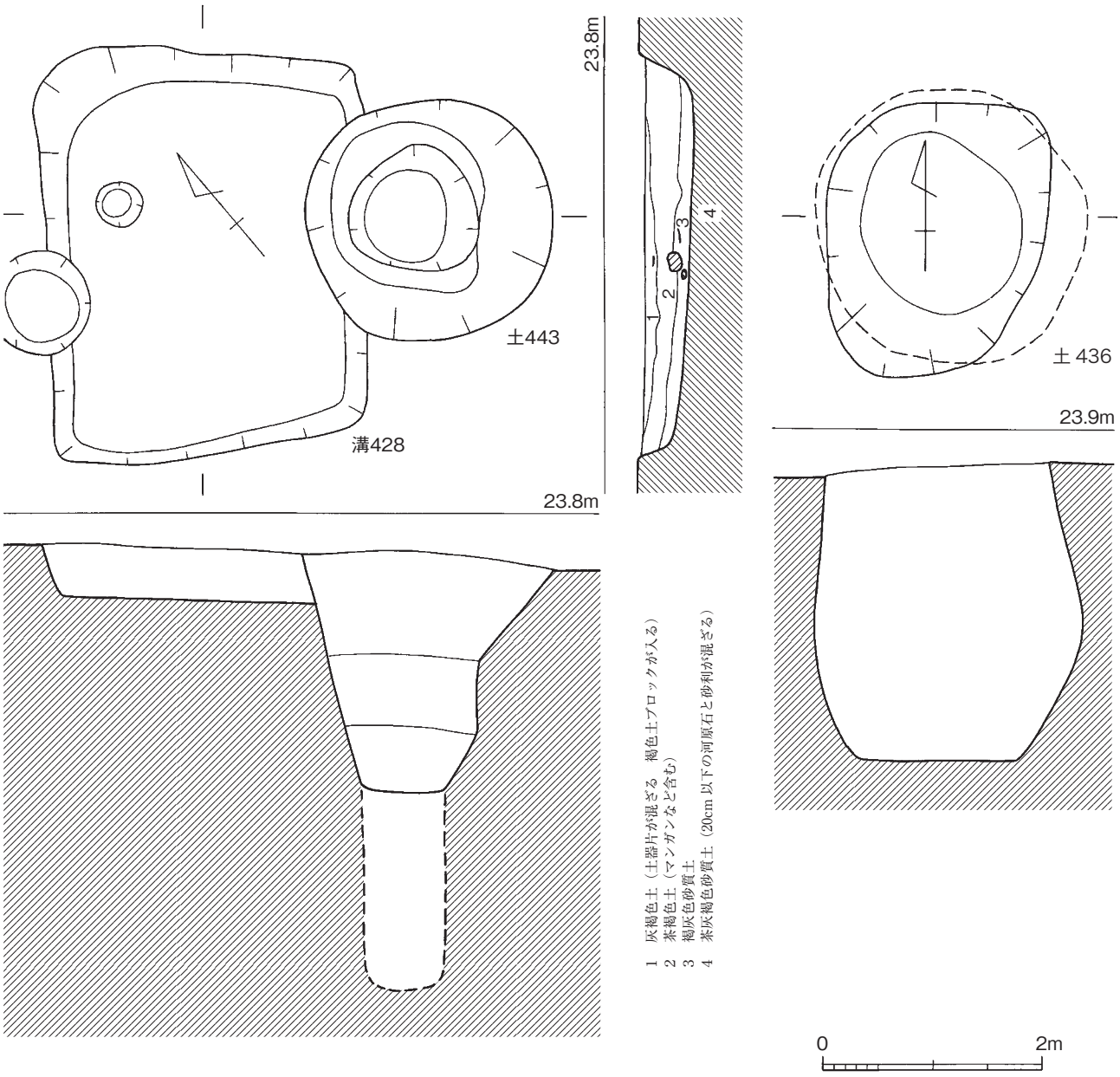
土器等（図版63、第85図）　４～８は弥生土器甕又は壺片である。内外面は撫でや刷毛目である。刻目は４・６は口縁端部と５のみ体部上位にも施す。４は復元口径22.0㎝を測る。７・８は底部片で指圧痕が明瞭に残る。８は大きく開くことから壺の底部分か。



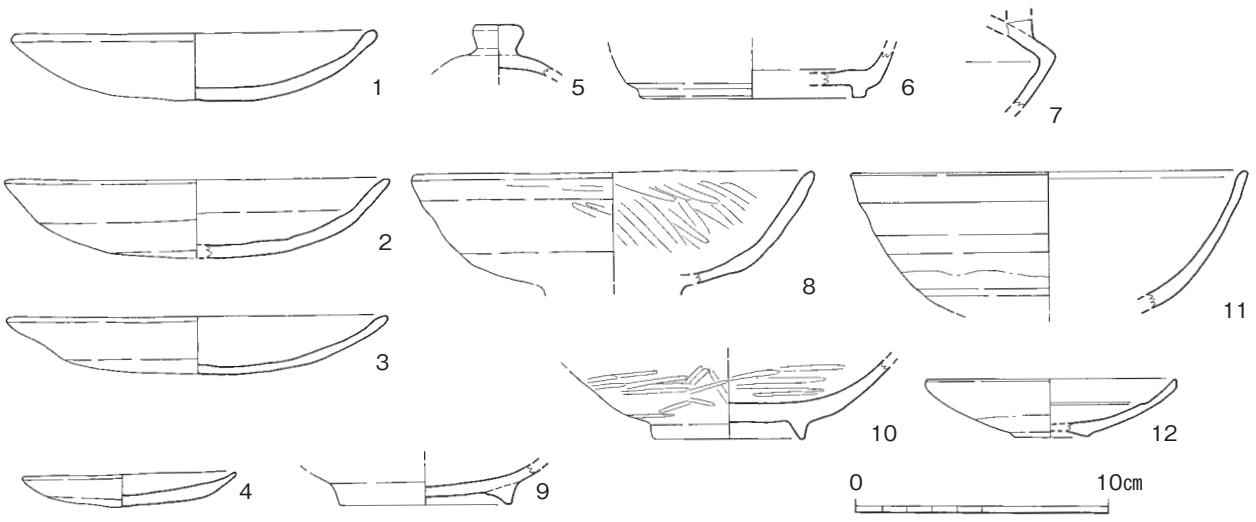
第 85 図　4 区出土遺物実測図 5（405・413・415・416 号溝、1/3）



第 86 図　4 区出土遺物実測図 6（416・423・424 号溝、1/3）



第 87 図　4 区 436・443 号土坑・428 号溝実測図（1/60）



第 88 図　4 区出土遺物実測図 7（溝、1/3）

416号溝（図版39・40、第84図）　15号溝の東側で、415号溝と併行して調査区外まで南北方向に直線上に延びる溝である。長さ12m以上、幅0.9～1.3m、深さ0.4m以下を測る。区画や排水を意識した近世頃の溝で、埋土に灰色砂質土が堆積している。

出土遺物

土器等（図版63、第85・86図）　9は土師器小皿で、内面と外面体部に油煙が付着することから灯明皿として使用する。口径13.2㎝を測る。10は瓦質火鉢の底部片である。内外面は撫でで、外面体部には銀杏のスタンプを施す。11は陶器の火入で、口縁付近に深緑色で施釉し、その下に白化粧土が垂れている。内面は露胎としている。12は片口の陶器鉢で、外面は刷毛目模様である。黒茶色釉と白化粧土で塗られ、復元口径20.4㎝を測る。18世紀前半か。13は筒形椀で、外面に笹、草花などと圏線５条、内面は四方襷、見込みに圏線２条と中央に五弁花文を描く。18世紀後半か。14～19は染付椀で、畳付は露胎とする。外面は14～16・18は梅花文、17は丸文、19は笹である。14と16の高台内には文様がある。14～16・18は18世紀前半以降で、高台が厚手のくらわんか椀である。86図22は染付壺である。体部や高台内には水仙と緑釉の花卉を描く。21・23～25は染付皿で、畳付は露胎とする。20は内面に二重格子を描く波佐見焼か。18世紀中～末頃か。21・23・25は外面に唐草文、21の内面には唐草状のものと見込みにコンニャク印判の五弁花文を描く。23は見込みに草花文、25は内面に菊などを描く大皿である。24のみ内面に笹、見込みの蛇の目釉剥ぎとの境を赤絵で色付けする。高台内には21は渦状の文様、23は右側に２文字で左1文字は「花」か。25は「冨貴長春」の「貴春」文字と目土跡が残る。83図９は丸瓦片で、２箇所に穿孔を施す。外面は篦削りで丁寧に仕上げるが、内面は吊り紐の痕跡である。

417号溝（第84図）　３号土坑の東側で複数のピットに切られた南北方向に延びる溝である。調査区外まで延びるため、残存長２m以上だが、壁際で窄まっている。断面は逆台形状で幅0.8m以下、深さ0.2m以下を測る。

421号溝（図版37、第84図）　27号土坑の北東側で検出した溝である。調査区外に延びているため、残存長1.2m以上、幅0.3m以下、深さ0.1m以下を測る。

423号溝下層出土遺物

土器等（第86図）　26は土師質鉢の口縁部片で、内外面に刷毛目を施す。27は須恵器鉢の口縁部片で、玉縁状になる。28は瓦質擂鉢の底部片で、内面に４条単位のスリ目がある。

424号溝（第86図）

調査区東側でL字状に延びる溝で、複数の遺構に切られている。４区では長さ幅ともに最大規模で、長さ15.5m以上、幅1.4m以下、深さ0.4m以下を測る。断面形状はほぼ直立するが、底面は中央に向かって窪む。埋土は灰褐色土で、底面付近は灰褐色土に褐色土が混ざっている。

出土遺物

土器等（第86図）　29は土師器椀の高台片である。端部は欠損するが、高い高台が外に向かって大きく開く。内外面は摩滅していて調整不明である。30は白磁椀の体部片で、内外面に釉を施す。

425号溝（図版38、第84図）　424号溝に切られる形で、南側で検出した溝である。緩やかな

弧を描きながら、L字状に延びる溝である。長さ7.5m、幅0.8m以下、深さ0.2m以下を測る。屈曲部では441号土坑など他の遺構に切られている。

426号溝（第84図）　404号溝の北側で検出した東西方向に延びる短い溝である。長さ1.5m、幅0.4m、深さ0.1m以下を測る。西側は別の遺構に切られている。

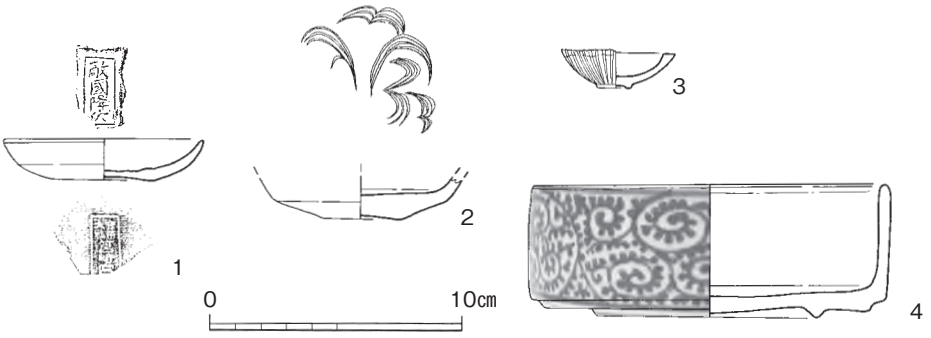
427号溝（第84図）　424号溝と425号溝を繋ぐような位置で検出した溝で、南側で幅広くなる。長さ1.8m、幅0.4～１m、深さ0.3m以下を測る。

428号溝（３区307号溝関連）（図版40、第87図）　４区西側に位置し、素掘りの井戸と思われる443号土坑やピットに切られた状態で検出した遺構である。長さ2.4～2.6m、深さ0.4mを測り、方形状で検出したたため竪穴住居跡と検出当初は判断したが、３区307号溝の延長上に位置することから関連する溝の可能性が高い。土層は大きく３層に分けられ、水平に堆積している。特に上面から瓦器椀片が出土するなど、４区検出遺構の中でも唯一の中世の遺構になる。

出土遺物

土器等（第88図）　１～４は土師器皿である。１～３の底部は丸底で、外面は篦切りである。４は摩滅した小皿で、外底に板状圧痕が残る。５～７は須恵器である。５は蓋のつまみ、６は須恵器椀片、７は平瓶の肩部片で、共に内外面は横撫でである。８～10は瓦器椀片である。調整は摩滅していて不鮮明だが、いずれも内外面に磨きの痕跡が残る。８は底部を欠損する。９・10は高台片で、高台の形状は９は三角形、10は細く丸みをもつ三角形状である。11は青磁椀片である。12は陶器皿で、外面体部下位以下は露胎とする。

遺構検出出土遺物（図版63、第89図）　１は土師器皿片で、底部中央には外面「官弊大社筥崎宮」、内面「敵国降伏」がスタンプされている。２は龍泉窯系の青磁皿片で、見込みは櫛描文を描いている。３は外面に貝の文様をかたどる型押し成形の白磁紅皿である。４は染付段重で、外面は蛸唐草が描かれ、外底は露胎とする。口縁端部は口禿げ、外面体部との境は露胎としている。18世紀後半以降か。



第 89 図　４区出土遺物実測図８（遺構検出、1/3）

5　5区の調査

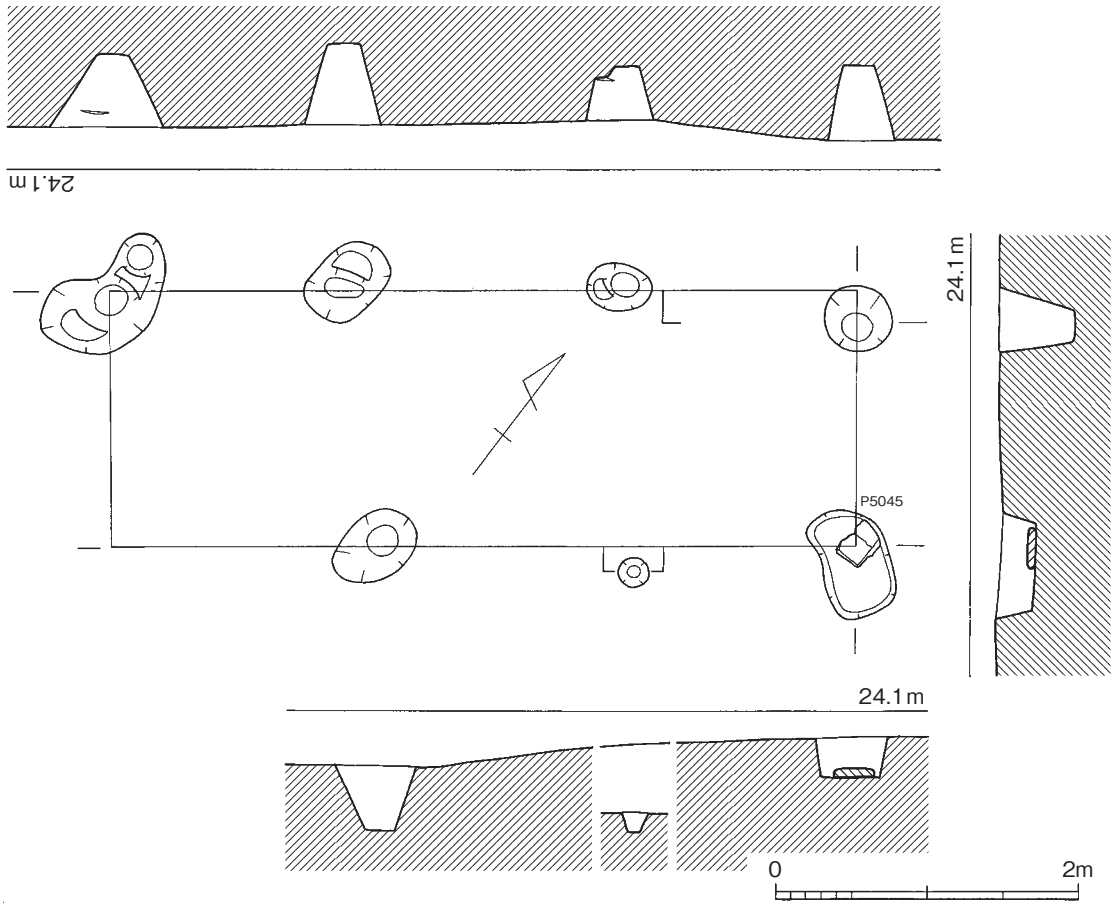
4区の調査終了後、諸条件が整わず5区の調査は9月から開始した。5区は4区の遺構の時期と異なり、中世の溝やピットが集中していた。ただ工事の関係上、本来の表土上に約60㎝の真砂土で盛土されていたため排土の置き場に苦慮し、4回に渡る反転に時間を費やしてしまった。本来は表土直下で遺構が検出できる非常に残りが良い場所である。5区では土坑13基、溝11条、ピット多数を検出した。

4区と5区調査では、縄文時代～近代までの土器・石器・鉄器など含めて、パンケースで51箱の遺物が出土した。

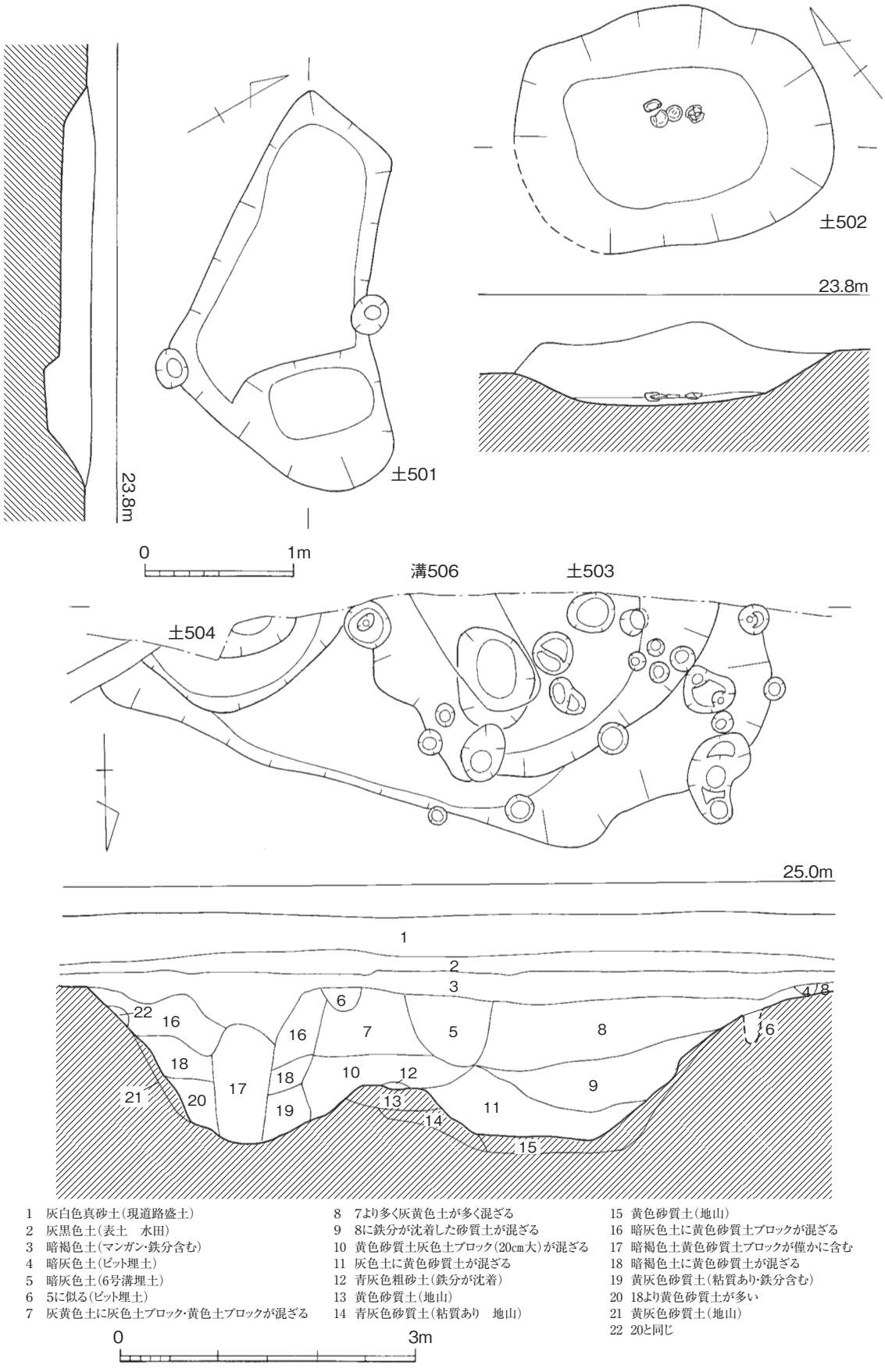
1）建物跡

建物跡の柱穴と思われるものは調査中確認できたのは、1棟のみである。報告書作成中に他の建物跡を検討したが、確認はできなかった。

501号堀立柱建物跡（図版43、第89図）　調査南側で、507号溝・503・504号土坑を切る形で検出した遺構である。504号溝の南側で並列するように建てられている。23.9m以下で検出し、柱穴の深さは40㎝前後を測る。507号溝などの上面の掘られているため、所々で掘りすぎている。南列の柱穴はほとんど検出できていないことから、調査区外へ延びる建物の可能性もある。



第90図　5区501号堀立柱建物跡実測図（1/50）



1　灰白色真砂土(現道路盛土)
2　灰黒色土(表土　水田)
3　暗褐色土(マンガン・鉄分含む)
4　暗灰色土(ピット埋土)
5　暗灰色土(6号溝埋土)
6　5に似る(ピット埋土)
7　灰黄色土に灰色土ブロック・黄色土ブロックが混ざる
8　7より多く灰黄色土が多く混ざる
9　8に鉄分が沈着した砂質土が混ざる
10　黄色砂質土灰色土ブロック(20㎝大)が混ざる
11　灰色土に黄色砂質土が混ざる
12　青灰色粗砂土(鉄分が沈着)
13　黄色砂質土(地山)
14　青灰色砂質土(粘質あり　地山)
15　黄色砂質土(地山)
16　暗灰色土に黄色砂質土ブロックが混ざる
17　暗褐色土黄色砂質土ブロックが僅かに含む
18　暗褐色土に黄色砂質土が混ざる
19　黄灰色砂質土(粘質あり・鉄分含む)
20　18より黄色砂質土が多い
21　黄灰色砂質土(地山)
22　20と同じ

第91図　5区土坑実測図1(501～504号土坑、1/40・1/60)

２）　土坑

土坑は501～504・507～510号の８基を報告している。なお、505・506号土坑については、土坑として報告する内容がないことから除外している。

501号土坑（図版43、第90図）　調査区中央からやや東側に位置する。形状は不整で、東側に一段下がる。長軸2.7m、短軸0.5～1.35m、深さ0.2～0.3mを測る。

502号土坑（図版44、第90図）　501号溝の北側で検出した土坑で、長軸2.15m、短軸1.65m、深さ0.5mを測る。形状はやや崩れた隅丸長円形状で、西壁面が他よりも0.2m程高く残る。底面から土師器皿が出土した。

出土遺物

土器等（図版63、第93図）　１～５は土師器皿、外底は糸切りである。１・２は復元口径7.8㎝の小皿である。２は内面中位で段があり、外に開く。口径は３で11.6㎝、４は12.4㎝を測る。５は底部片である。６～７は土師質鉢片である。内外面の調整は刷毛目又は撫でである。７・８のみ内面にスリ目があるので擂鉢か。９は瓦質湯釜の把手片で、調整は撫でである、側面の中程を穿孔している。10は瓦器椀の高台片で、内外面は摩滅している。高台は緩やかな三角形状になる。11は青磁椀の高台片である。釉は全体的にムラがあるが、高台内のみ露胎とする。

503・504号土坑（図版44、第90図）　503・504号土坑は、南側壁際で507号溝を切る幅７mの掘り方内に二つの土坑が掘り込む状況で検出した。503号土坑は長さ3.5m、深さ1.4mを測る。さらに径0.8～１m、深さ0.3mの長円形状の掘り込みを確認し、その底面からは木製品の櫛２点が出土した。湧水することから素掘りの井戸の可能性がある。東側は506号溝で切られているが、504号土坑とは土層の堆積状況が異なり、大きく３層が堆積する。上層は灰黄色土、下層には灰色土に地山である黄色砂質土が堆積する。504号土坑は503号土坑東側で検出した不整形の土坑で、長さ2.3m、深さ1.6mを測る。土層の状況から中央部分には上面で1.1m、底面で0.4mの掘削の痕跡が残る。なお土層の堆積状況から503号を埋戻した跡、504号を新たに井戸として掘り直したものか。

出土遺物

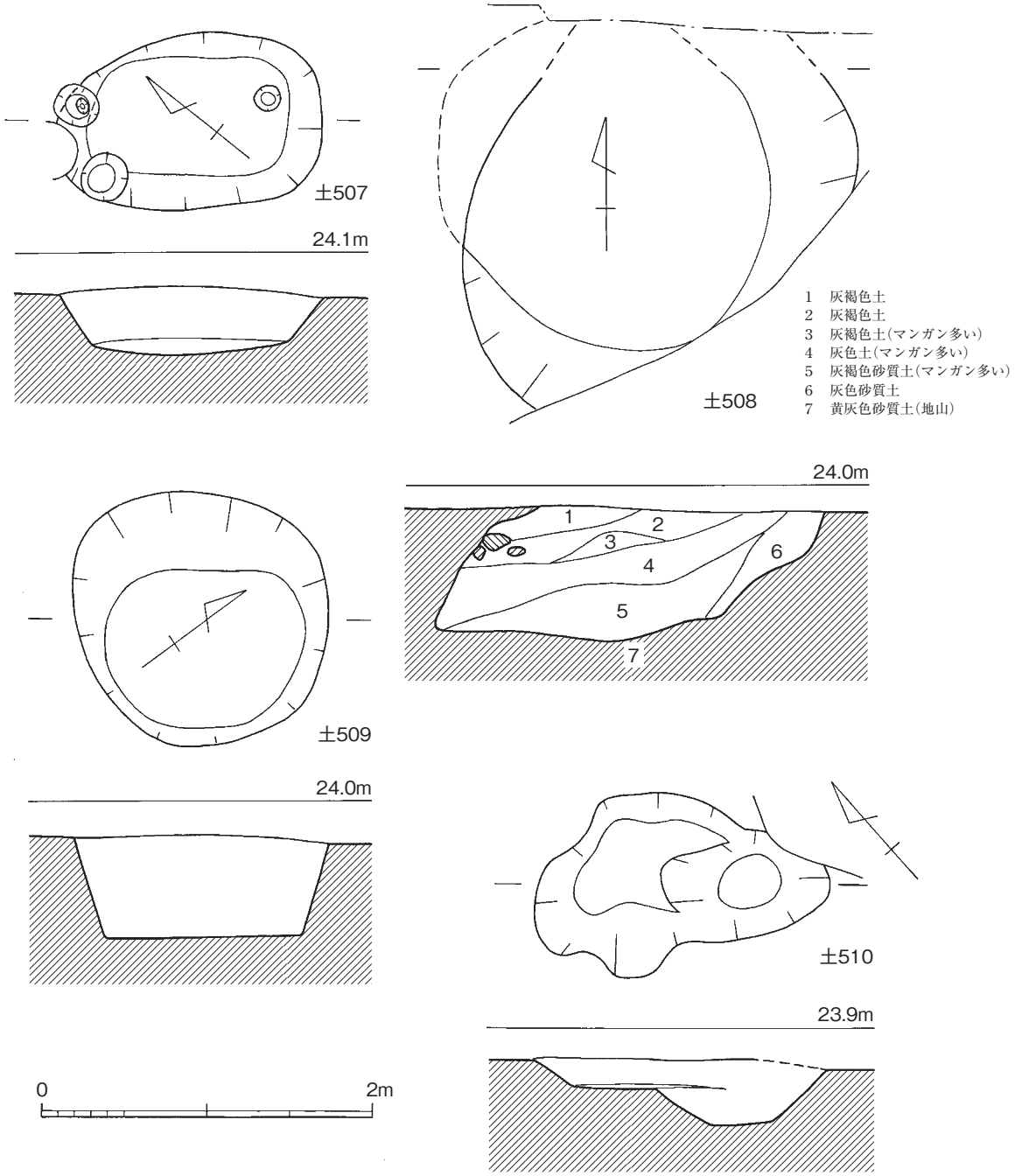
土器等（図版63、第93・111図）　12・13は土師器の小皿である。共に外底は糸切りであるが、13の底部は厚手になる。14は瓦器椀の高台片で、摩滅しているため磨きの痕跡はない。15・16は白磁椀片である。15は口縁端部片で、端部は玉縁状になる。16は底部片で、内面に櫛描文を描く。17は白磁椀の口縁部片で、口縁端部で屈曲し外に開く。内面は櫛描文である。18～22は土師器皿で、外底は糸切りである。18～20は口縁が欠損する小皿で、18は体部と底部の境が角張る。20は内底が盛り上がる。21は口縁端部を欠損している。内面は強い撫でのため、底面の中央が厚くなる。22は底面が欠損するが、口縁端部に向かって外に大きく開く。182頁は図化していないが、木製の櫛２点になる。１・２の櫛は縦5.1㎝・52㎝、幅6.2㎝・8.9㎝、厚さ１㎝以下を測る。１は1/2以下しか残っておらず、櫛歯は太い。２は細かい櫛歯で、75本もある。報告書の刊行に間に合わず、２点とも樹種同定は行っていない。

507号土坑（図版44、第91図）　512号溝の西側に位置し、北西側はピットに切られている。形状は隅丸長円形状で、長軸1.6m、短軸1.05m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形状で、埋土は暗灰色土の単一層である。

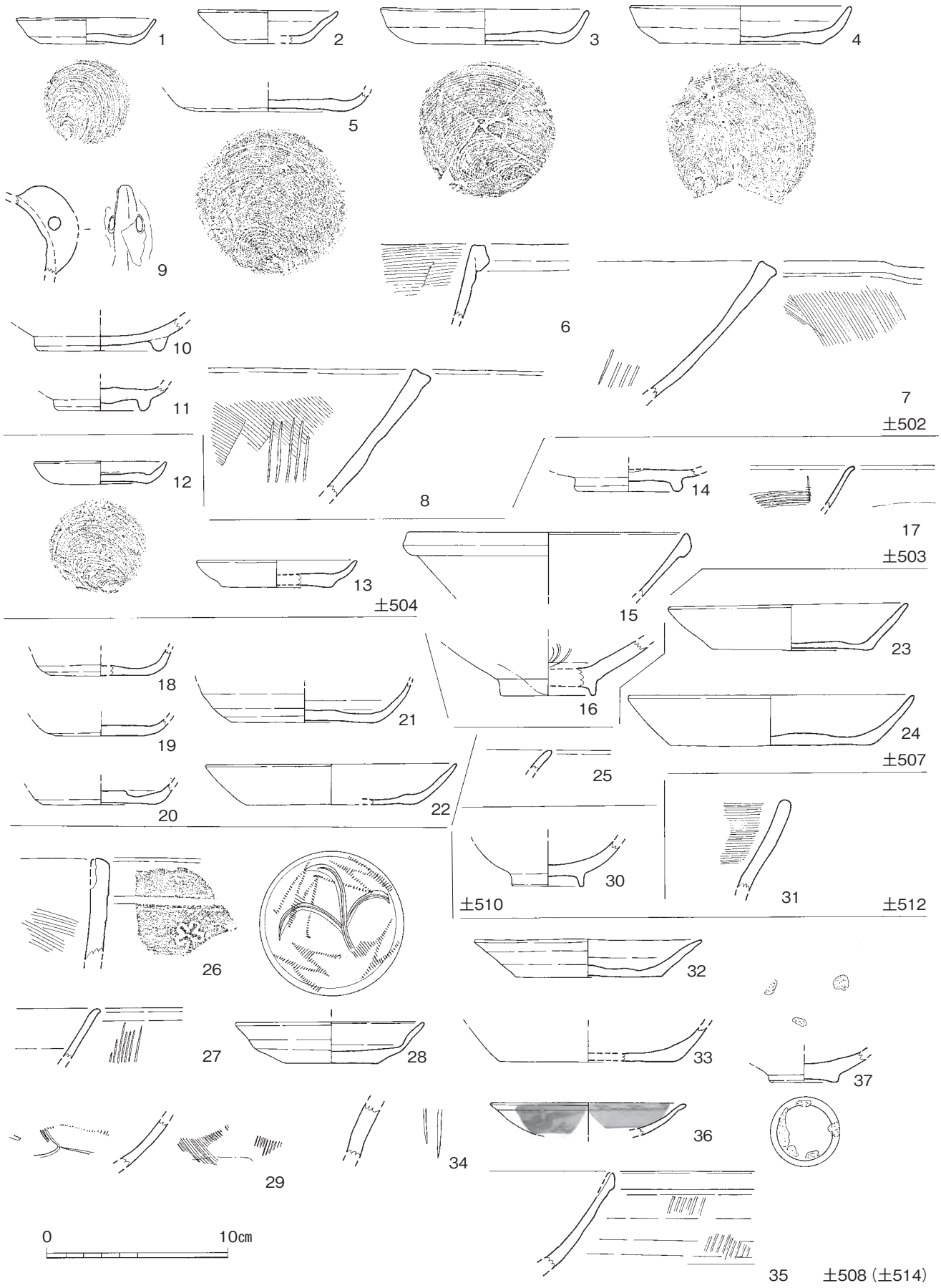
出土遺物

土器等（図版63、第93図）　23・24は器高が３㎝未満と低く、口縁端部に向かって大きく外に開く同形状の土師器皿である。復元口径は23で13.4㎝、24で16㎝を測る。外底は共に糸切りである。25は白磁椀の口縁部片である。

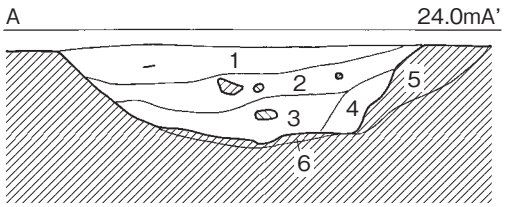
508（514）号土坑（図版45、第91図）　調査区西側の北壁際で検出し、南東側は511号溝に切られている。西側にオーバーハングし、土層は底面西側に向かって斜めに堆積している。形状



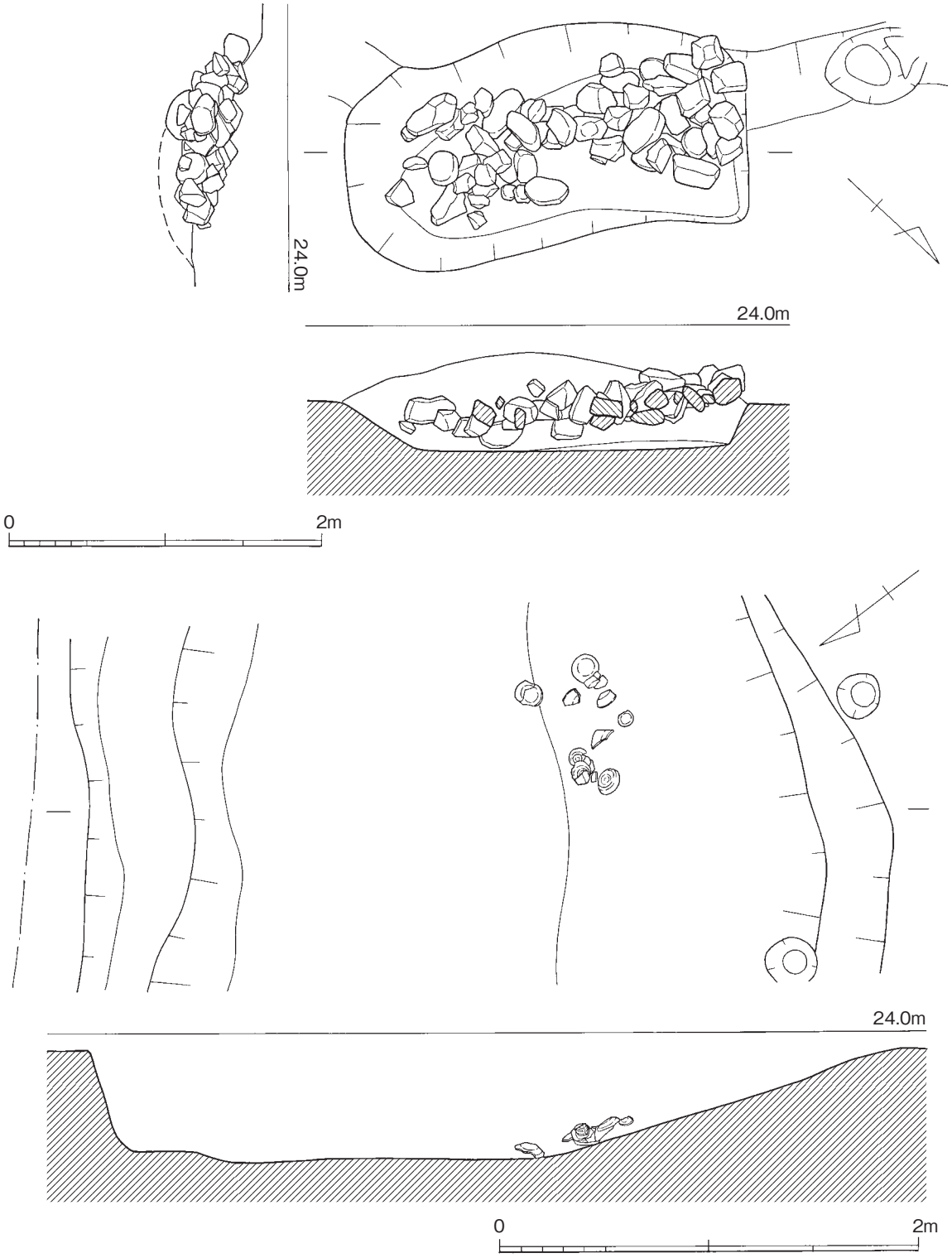
第 92 図　５区土坑実測図２（507 ～ 510 号土坑、1/40）



第 93 図　5 区出土遺物実測図 1（502 ～ 504・507・508・511・512 号土坑、1/3）



1　灰色土（503・504 号溝 1 層と同じ）
2　灰色土と黄灰色土が混ざる（石を多く含む）
3　濃灰色粘砂土
4　灰黄褐色土に炭やマンガンが多く混ざる（504 号溝 4 層と同じ）
5　黄灰色砂質土（地山）
6　灰色粗砂質土（地山）



第 94 図　5 区 501 号溝実測図（1/30・1/40）

は円形で、径2.55m、深さ0.8mを測る。遺構名については反転する際に508号と514号両方の番号を誤って付してしまったため、本報告では先につけた508号土坑として報告する。

出土遺物

土器等（図版63、第93図）　26は瓦質火鉢片である。外面口縁部の沈線下には五弁花文のスタンプが巡り、内面は刷毛目である。27は白磁椀の口縁部片である。口縁端部は嘴状になり、外に開く。外面は櫛描文である。28は同安窯系青磁皿で、内底は篦による文様と櫛描文を有する。29も同安窯系青磁椀の体部片である。外面は櫛描文、内面は篦による文様と櫛描文である。32・33は土師器皿片である。32は口縁端部に向かって外に開き、内底の中央に向かって器壁が厚くなる。33は口縁と底面を欠損する破片である。外底は共に糸切りである。34は白磁壺の把手片で、外面に２条の窪みがある。35は白磁椀片で、口縁は玉縁状である。36は磁器皿で、外面は龍を描き、内面は蕨手状の文様と圏線２条を描かれている。37は陶器椀の底部片か。内底と高台畳付には砂目が付着する。被熱のためか釉が溶けている。

509号土坑（図版45、第91図）　調査区西側に位置し、511号溝の中央部分で切られている。形状は楕円形状で、径1.5～1.6m、深さ0.3mを測り、断面は逆台形状である。

510号土坑（図版46、第91図）　調査区西側に位置し、510号土坑は一部511号土坑に切られている。510号土坑は不整形で、長軸1.75m、短軸1.1m、深さ0.2～0.4mを測る。南東側は一段下がっている。

出土遺物

土器等（図版、第93図）　30は口縁～体部上位を欠損する白磁椀である。高台は低く、外に開く。

512号土坑出土土器

土器等（図版、第93図）　31は土師質鉢の口縁部片で、口縁端部は厚手である。内面には刷毛目が密に残る。

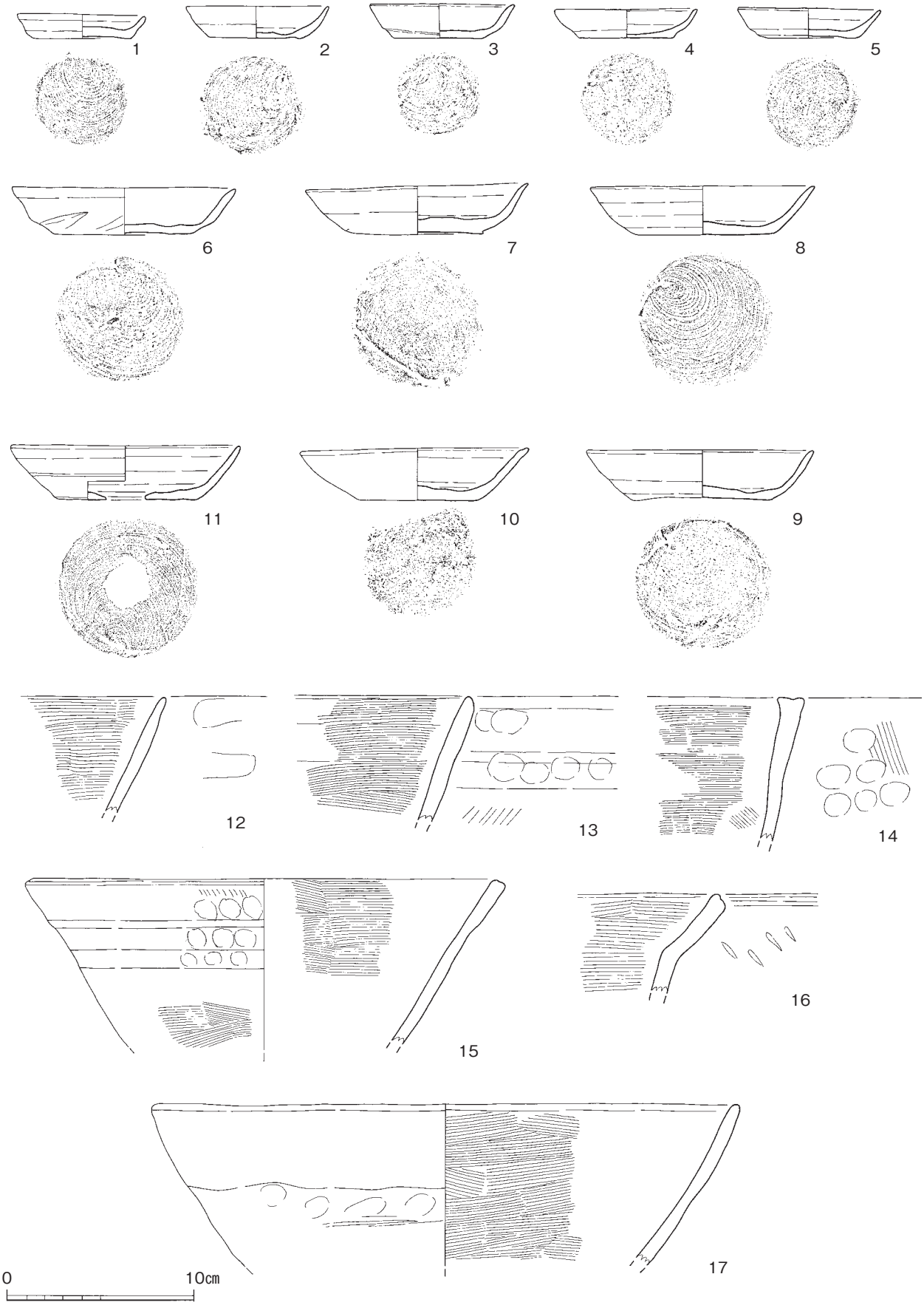
３）　溝

５区の溝は13条検出したが、調査区西端で検出した513号溝は攪乱であるため除外する。

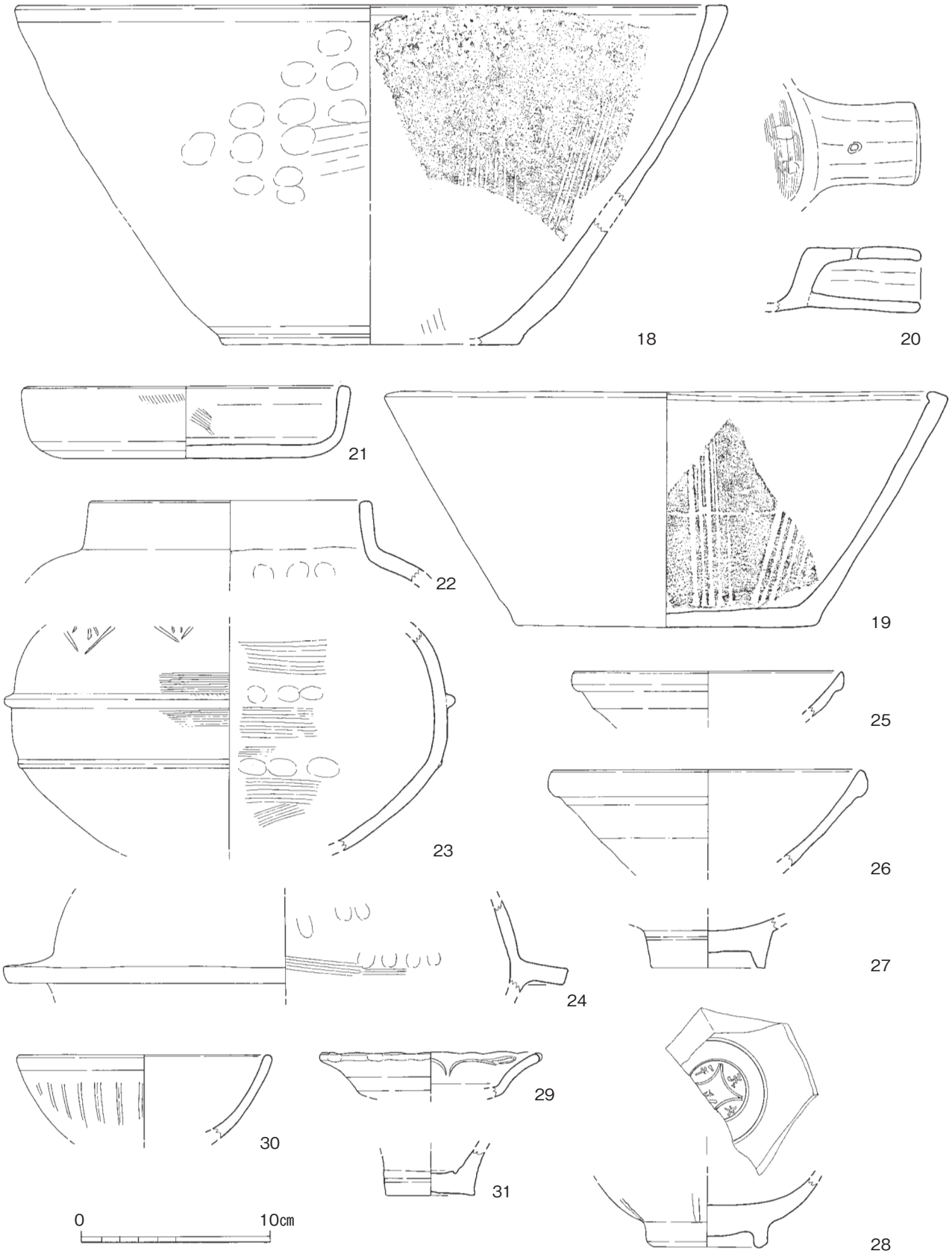
501号溝（図版46・47、第93図）　５区西側に北西～南東方向に延びる溝である。南北は調査区で区切られ、検出長21m以上を測る。幅1.3～３mと南側に向かって狭くなる。深さ0.5m前後を測る。溝の北側では、長さ2.5×1.5m、深さ0.3～0.6mを測る長方形状の窪みがある。この土坑状の窪みから径30㎝ほどの礫石が集中して検出した。溝中央で西側底面付近から、土師器皿が集中して出土する。なお、北側では503・504号溝の２つに分岐しているが、同一溝である。

出土遺物

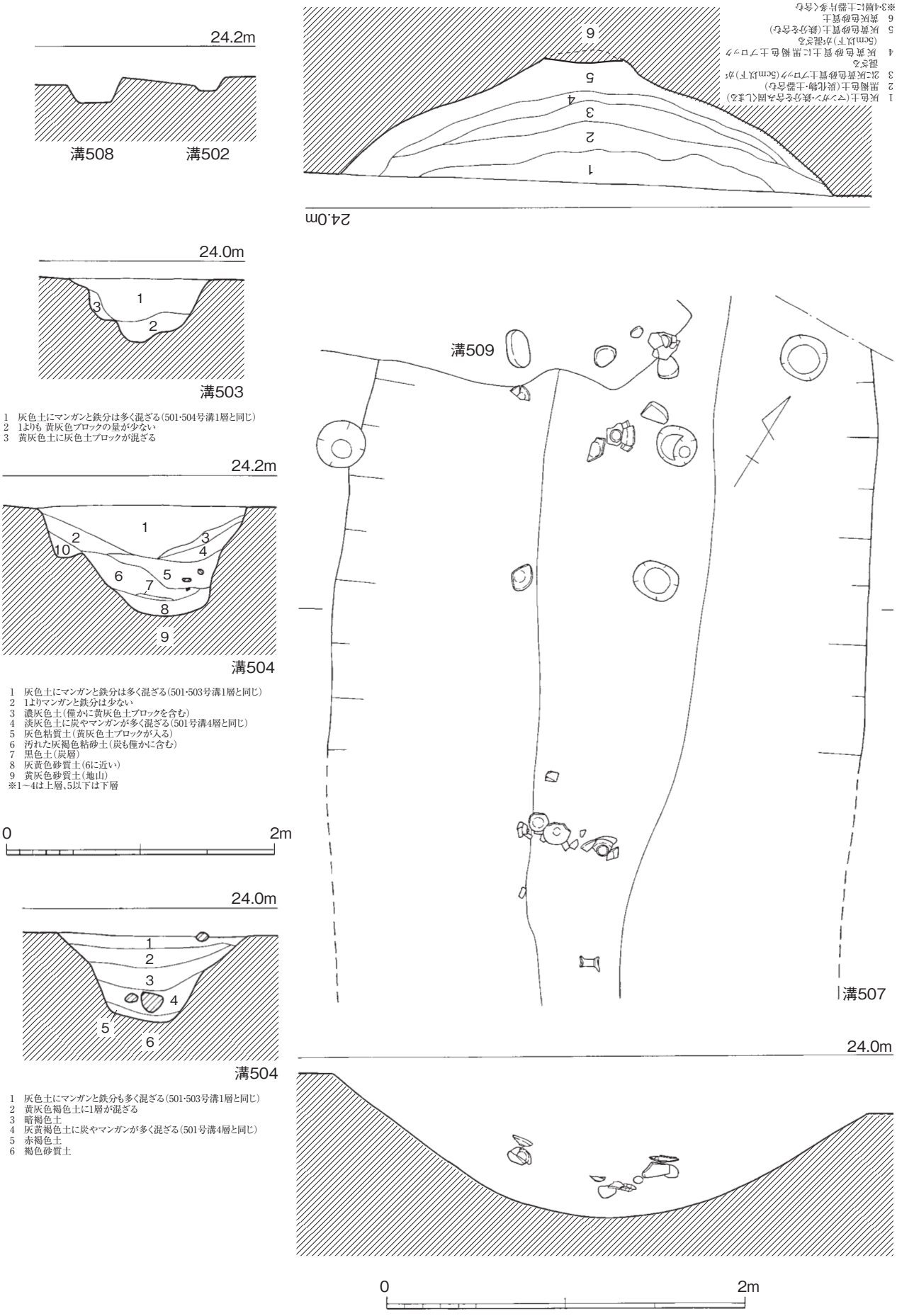
土器等（図版64、第95・96図）　１～５は土師器小皿である。１は全体的に厚手で、器高は1.3㎝と低い。２は内面の形状は凸凹しており、やや粗雑な感がする。４は全体的に器壁は薄い。復元口径は７、7.7、7.8、7.8、7.9㎝を測る。６～11は土師器皿である。６は篦状の痕跡によるものか、外面体部下位に痕跡がある。７は底部が厚手であるが、口縁～体部にかけては薄手な作



第 95 図　5 区出土遺物実測図 2（501 号溝、1/3）



第 96 図　5 区出土遺物実測図 3（501 号溝−2、1/3）



第 97 図　5 区 502 ～ 504・507 号溝実測図 (1/30・1/40)

りとなる。10は内面に比べて、外面は丁寧な撫でで仕上げている。11の底面中央には約2㎝の円形に穿孔されている。復元口径は6～8が12㎝、９が12.2㎝、10・11が12.4㎝を測る。１～11の外底は糸切りである。12～19は土師質又は瓦質鉢である。内面は刷毛目で、外面僅かに刷毛目であるが撫での痕跡も明瞭に残る。15のみ口縁下で屈曲して窄まっている。16～18は瓦質鉢で16の外面には工具痕が残る。18は接合はしなかったが、同一と思われる破片で図上で復元する。18・19は内面にスリ目があるので擂鉢か。19は口縁端部が三角形状になる。15・17～19の復元口径は25.8、31.6、37.8、30.0㎝を測る。20は瓦質鍋の把手片で、内面は撫でと刷毛目である。内面は空洞で、上面には穿孔がある。21は瓦質火鉢片で器高3.8㎝と浅く、底部から口縁に向かって直立する。外底は糸切りで、復元口径17.5㎝を測る。22・23は瓦質湯釜片である。22は口縁～頸部片で、内外面は撫でである。復元口径で15.2㎝を測る。23は体部片で、外面には煤が付着する。内外面は刷毛目と撫でであるが、外面上半のみ文様が不明なスタンプを施す。24も湯釜の体部片である。25～27は白磁椀片である。25・26は口縁端部は玉縁状で、復元口径14.3、17㎝を測る。27は器高が約2㎝と高い高台で露胎とする。28～31は青磁片である。28は厚手な高台片で、内底に「天下□平」の文様を刻む。29は龍泉窯系青磁皿片である。口縁は輪花状で、内面口縁部は飛雲文を櫛で入れる。15世紀後半頃か。30の外面は焼成不良で釉の発色がわるく見づらいが蓮弁か。復元口径13.7㎝を測る。31は青磁壺の底部片で、外底は露胎とする。

502号溝（第96図）　501号溝の西側に位置し、504・505号土坑に切られているが検出長５ｍを測る。溝断面は逆台形状で、幅0.2～0.3m、深さ0.1ｍを測る。504・509号溝と同方向の北東～南東方向へ延びるが、２つの溝とは異なり、細く浅い。

出土遺物

土器等（第97図）　１・２は白磁椀の口縁部片である。１は玉縁状、２は嘴状で、復元口径16.4㎝を測る。

503・505号溝（図版47、第96図）　501号溝北側で直角に南東方向へ折れ曲がり、507号溝を切る形で検出した溝である。長さ８ｍ、幅0.4～1.7m、深さ0.5mを測る。501号溝と接する部分は一段高いことから別の溝として判断し、番号を付した。

505号溝は503号溝に切られるような形で「く」の字状に検出した溝である。長さ３m以下、幅0.5m前後、深さ0.1ｍを測る。503号溝も同方向に曲がっており、一連の溝で掘り直されたものか。

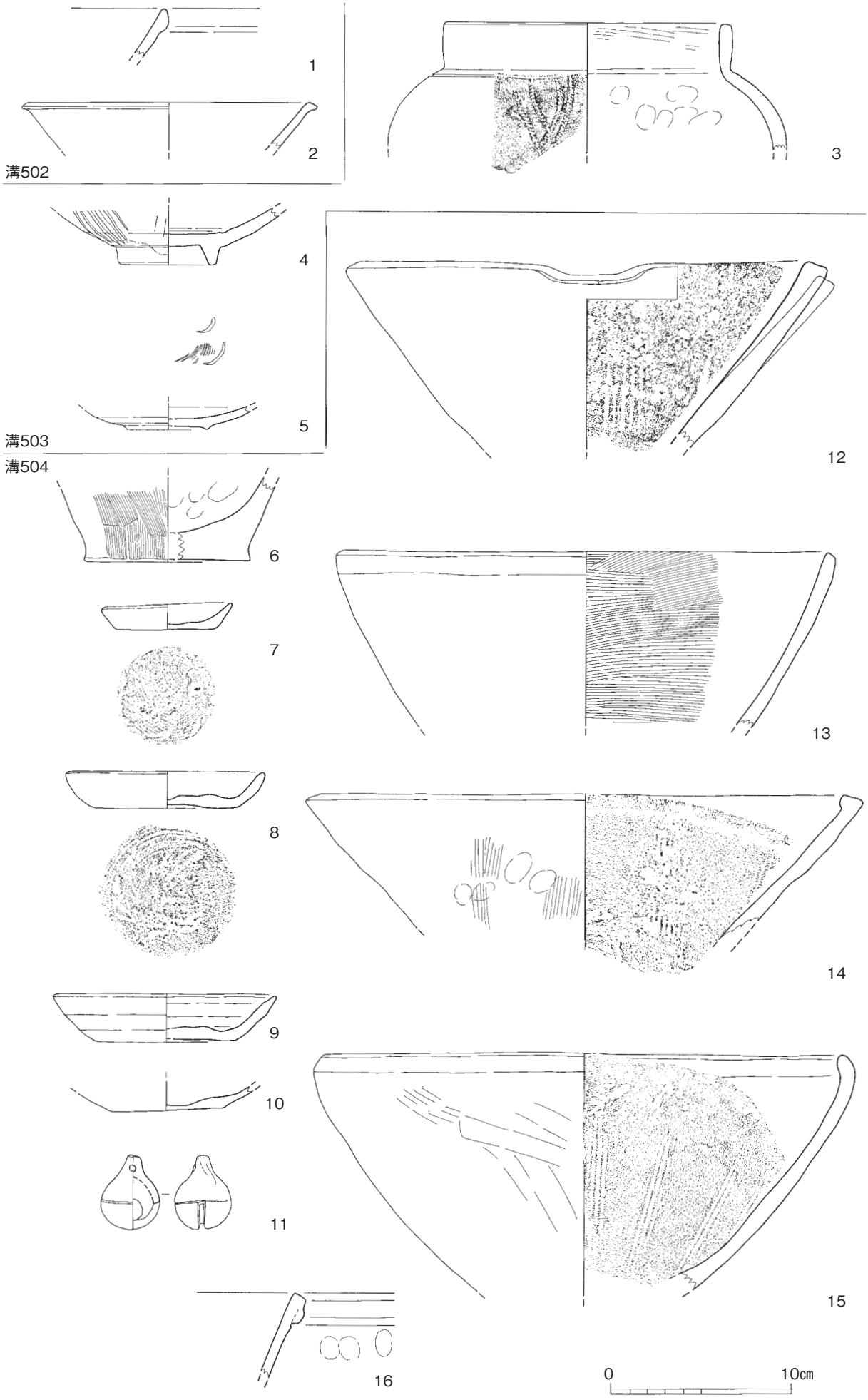
出土遺物

土器等（第98図）　３は瓦質湯釜片で、頸部以下を欠損する。内面は口縁に刷毛目、頸部に指圧痕がある。外面には貝殻文状の文様がつく。４は青磁椀の高台片で、外面には櫛描文を施す。５は白磁皿片で、内底に櫛描文を描く。いずれも503号溝出土である。

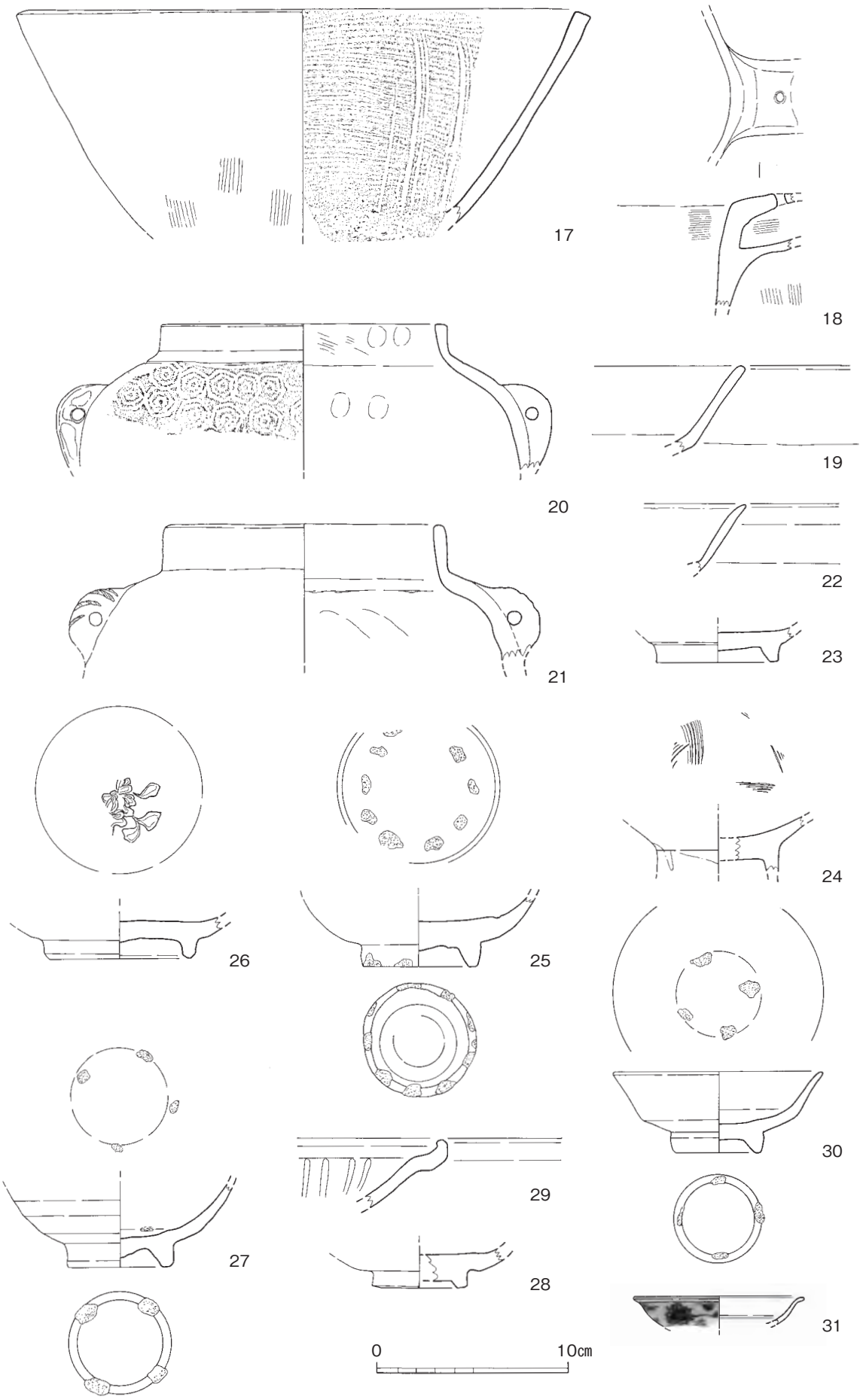
504号溝（図版47・48・50、第96図）　503号溝と同様に501号溝から直角に折れ曲がった502号土坑より西側部分を504号溝とした。こちらも507号溝を切る形で検出している。長さ25m、幅1.2～2.1m、深さ0.8mを測る。

出土遺物

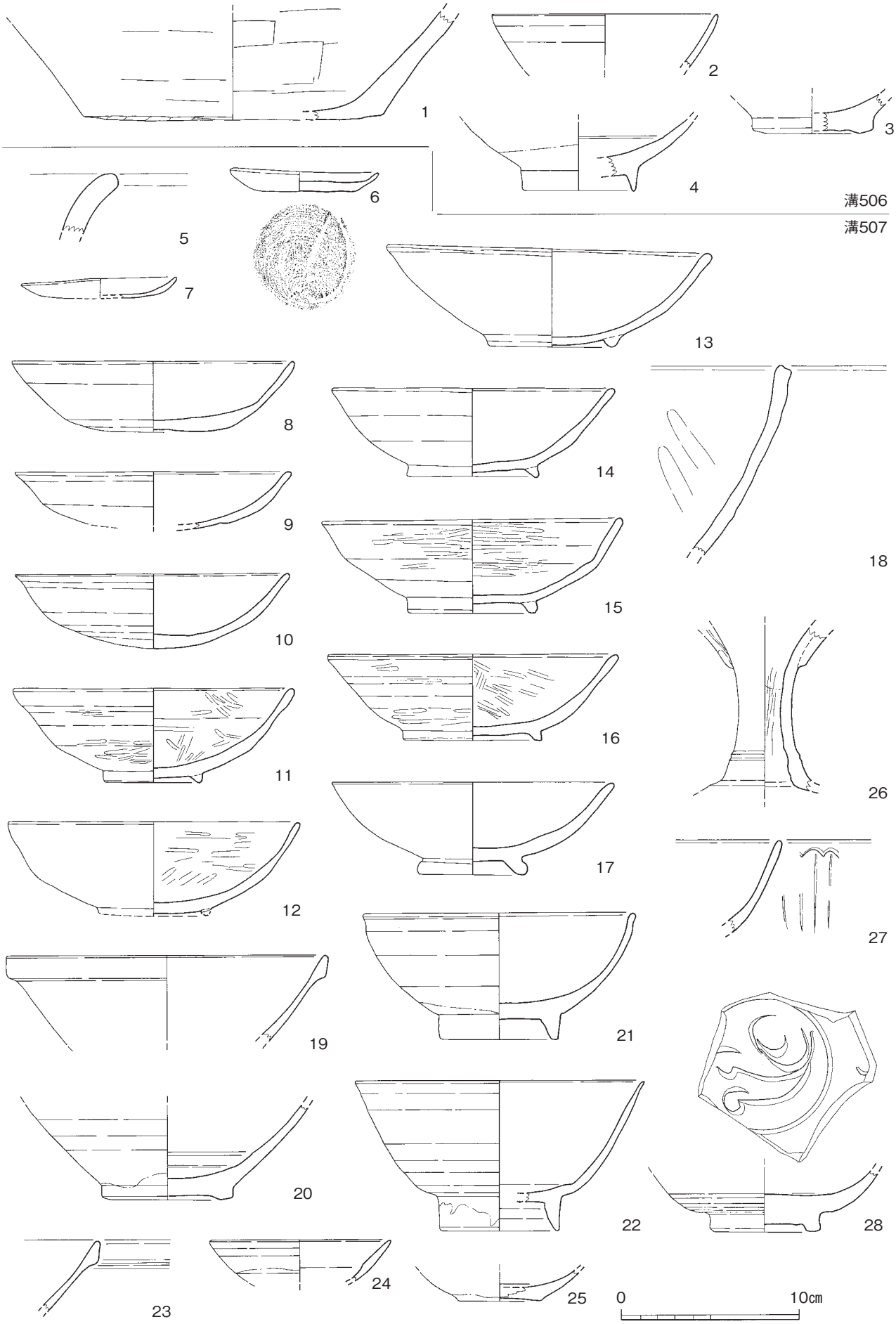
土器等（図版64、第98・99図）　６は弥生土器の甕底部片で、外面は刷毛目、内面は撫でである。７～10は土師器皿である。７は小皿である。８の調整はやや粗雑な撫でである。９は外面



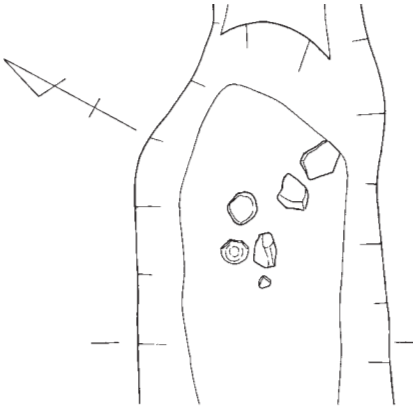
第 98 図　5 区出土遺物実測図 4（502 ～ 504 号溝、1/3）



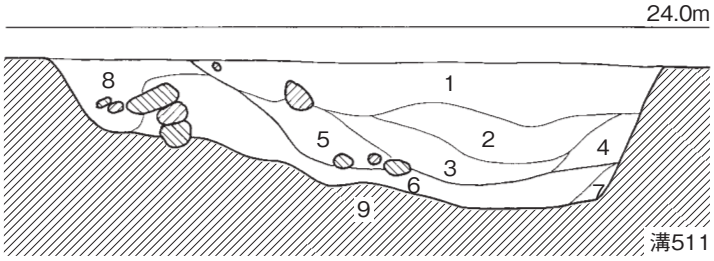
第 99 図　5 区出土遺物実測図 5（504 号溝、1/3）



第 100 図　5 区出土遺物実測図 6（506・507 号溝、1/3）

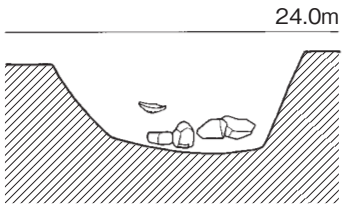


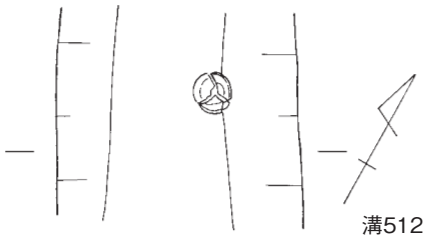
溝509



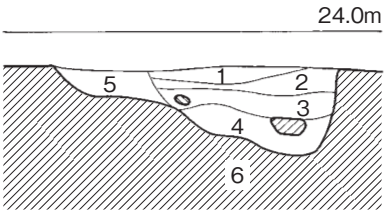
溝511

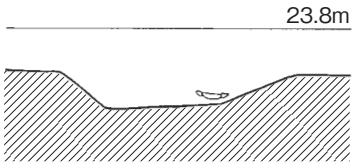
1　褐色土と灰褐色土が混ざる（固くしまる）
2　1に比べて灰褐色土が多い
3　灰褐色土（鉄分を含む）
4　灰色土（鉄分を含む）
5　3に比べて礫石を多く混ざる
6　黄灰色砂質土
7　灰褐色砂質土
8　灰色砂質土に炭が混ざる
9　黄灰色砂質土（地山）



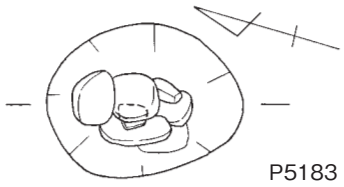


溝512

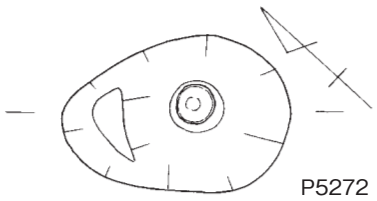




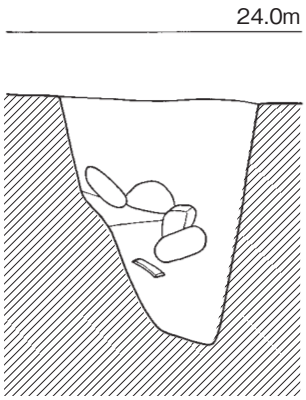
1　灰褐色土
2　1より橙色土ブロックが混ざる
3　灰褐色土（マンガン・鉄分を含む）
4　灰色土
5　濃灰色土（土器・鉄分含む）
6　黄色土（地山）

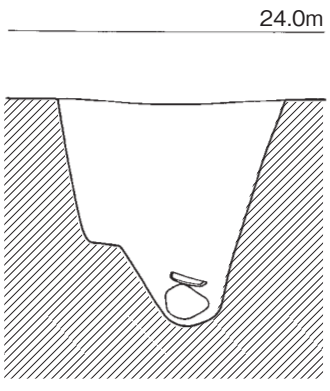


P5183

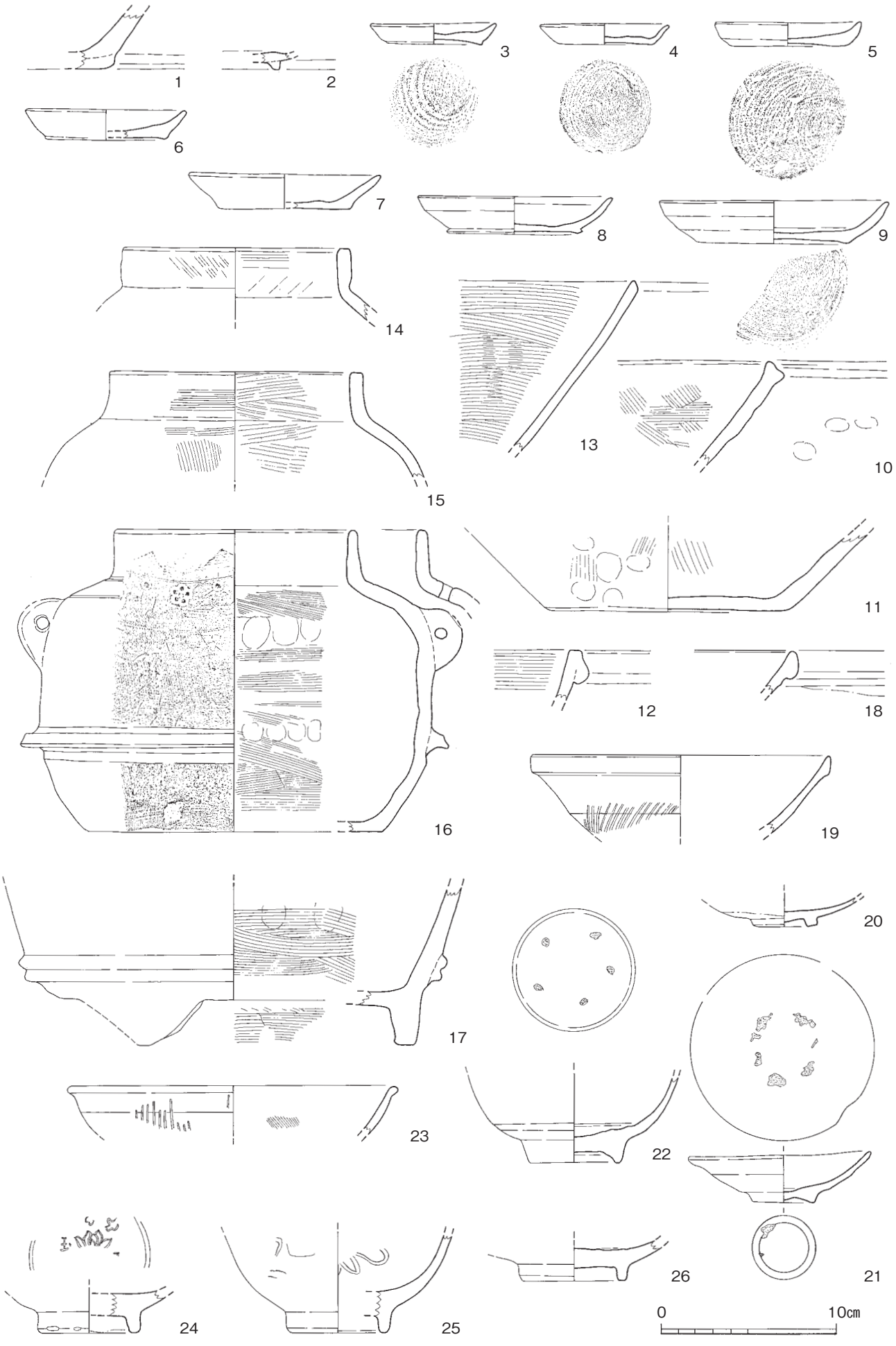


P5272





第 101 図　5 区 509・511・512 号溝・ピット実測図（1/20・1/30・1/40）



第 102 図　5 区出土遺物実測図 7（509 号溝、1/3）

に煤が付着する。10は口縁を一部欠損するが、復元口径は12.4㎝を測る。外底は共に糸切りである。11は土鈴である。12～17は土師質又は瓦質鉢で、16を除く復元口径は27、27.8、31.0、29.0、30㎝を測る。調整は外面に撫で、内面は刷毛目を施す。12・14・15・17は内面にスリ目があり、12の外面には煤が付着し、片口である。口縁部の形状は各々異なり、14は三角形状で、15は端部がやや肥厚し、内側に反る。16は角張り、肥厚する。15～17は焼成から瓦質である。18は瓦質鍋の把手片で、上面に穿孔がある。内外面は刷毛目と撫でを施す。19も瓦質鉢片で、煤が外面に付着する。20・21は瓦質湯釜の口縁～体部上位片である。20のみ外面に亀甲文状のスタンプがつき、内外面は撫でである。21の把手は線上に削り，その痕跡を文様にする。22～25は白磁椀片で、22は口縁～体部片である。23～25は高台片で、23のみ外面は露胎とする。24は見込みに櫛で花文を描く。25は内外面に砂目が付着する。26～29は青磁である。26は椀の底部片で、見込みに花を櫛で描く。27は内外面に胎土目が付着する。28は高台片である。29は受け口状の口縁部となる。内面は浅く不明瞭な縦位の波線を間隔をあけて連続する。形状から盤片か。30は唐津産の肥前陶器で、内外面に砂目が残る。31は青花皿片である。外面に花唐草、内面は圏線を描く。中国産か。25・27・29～31は近世の遺物か。

506号溝（図版48、第96図）　503・504号土坑の上面で、土坑を切る形で検出した溝である。検出長1.5m、幅0.7m、深さ0.5mを測る。

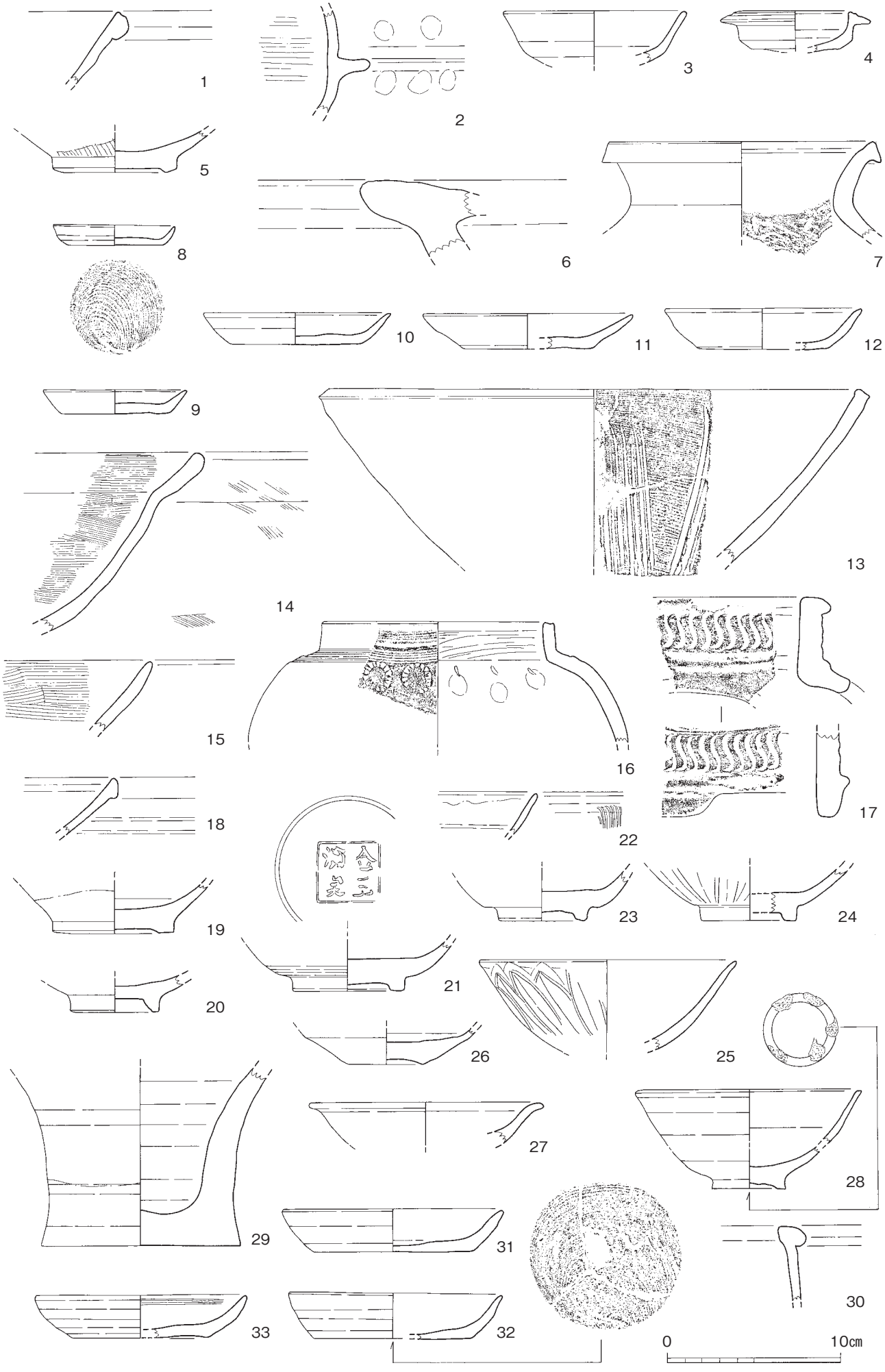
出土遺物

土器等（第100図）　1は須恵器鉢底部片である。内面は板撫でで、外面体部は横撫で、底部は静止削りである。2は白磁椀の体部下位以下を欠損する破片で、復元口径12.8㎝を測る。3と4は白磁の高台片である。畳付は3で太く低いが、4は細く高い。

507号溝（図版49・50、第96図）　503・504・509号溝に切られ、北北西～南南東へ延びる溝である。溝断面はゆるやかな三角形状である。土層は灰黄色砂質土が主に堆積していて、地山の黄灰色砂質土との境が判別が難しく、本来は4層までが溝の埋土で、5層は掘りすぎているのかもしれない。検出長15m、幅2.5～3.1m、深さ0.8mを測る。溝の北側では、瓦器椀7点がかなり良好な状態で出土した。

出土遺物

土器等（図版64、第100図）　5は弥生土器口縁部片である。6と7は土師器小皿である。6は底部が厚く糸切りである。7は全体的に器壁が薄く、器形は歪になる。8～10は土師器皿である。底部の形状が2つに分けられ、8は平底であるが、9・10は丸底になる。復元口径は16.0、15.7、15.5㎝を測る。11～17は瓦器椀である。11・12器壁は体部上位で凹んで薄くなるが、それ以下は厚手である。13は口縁部片のみ厚手で、それ以下は薄手である。14・16は体部下位で厚手になるが、15は均一な作りで、体部中位で窪んで屈曲する。高台は12のみ欠損している。11・14～17の高台は外に開くが、13のみ直立する。11・12・15・16の調整は磨きである。17は全体的に厚手な作りで、焼成から土師器に近い。口径は16.0、16.5、18.3、16.0、17.0、16.4、16.0㎝を測る。18は須恵器鉢片で、内面に撫での痕跡がある。19～23は白磁椀である。19と23は玉縁状口縁である。21の口縁端部は外に開く。22は端部に向かって細くなる。共に薄手な作りで、高台も高い。24・25は白磁皿で、24は底部、25は口縁を欠損する。26は白磁壺の頸部片である。27・28は青磁椀片である。27は外面に細蓮弁文がわずかに見える。28は高台片で、見込みに



第 103 図　5 区出土遺物実測図 8（510 ～ 512 号溝、1/3）

片切彫りで花文を描く龍泉窯系青磁椀。

508号溝（第96図）　507号溝を切る形で、502号溝と同方向に延びる溝である。溝は長さ2.5m、幅0.4m前後、深さ0.1mと溝は他の溝と比べて浅く、断面は逆台形状である。

509・510号溝（図版50、第100図）　調査区中央付近に位置し、504号溝と並列して北東から南東へと徐々に深くなっていく溝である。溝の途中では2.4mと拡幅し、その部分のみ20～40㎝の礫石が密集していた。さらに南側では二股に別れる西側を510号溝とした。なお南壁際は拡幅して、東から西に向けて浅くなっている。509号溝は検出長22.3m、幅0.6～2.4m、深さ0.2～0.7mを測る。510号溝は509号溝の一部を切って二股に別れる浅い溝状部分で、検出長2.9m、幅0.4m前後、深さ0.1m以下を測る。

出土遺物

土器等（図版66、第102・103図）　102図１～25は509号溝出土である。１は弥生土器の底部片である。２は須恵器杯の高台片である。３～９は土師器皿である。４の小皿は薄手な作りである。８の皿は底部が外に尖る。３～９の外底は糸切りで、内外面は横撫でである。復元口径は7.2、7.4、8.4、9.2、11、11.2、13.2㎝を測る。10～13は土師質又は瓦質の鉢片で、内外面ともに刷毛目又は指圧痕がある。11は薄手の平底片で、外底は撫でである。14～16は瓦質湯釜である。16のみ全体の形状が認識できる程度残存する。肩部には五弁花のスタンプと穿孔された把手が付いている。体部下位には突帯が巡る。17は瓦質火鉢の底部片で、内面は刷毛目である。18～22は白磁椀片である。18と19は玉縁状口縁である。19は体部下位に刷毛目が残る。20は口縁を欠損する皿か。21と22も白磁で、内面に胎土目又は砂目が付着する。23～26は青磁椀片である。23は端部が丸みをもつ口縁部片で、外面には縦の櫛描文を施す。破片なためやや不安な感がするが、復元口径19.0㎝を測る。24～26は体部下位以下片で、24は内底に花文、25は内外面に文様を施す。

103図１～５は510号溝出土である。１は土師質鉢の口縁部片で、端部は玉縁状になる。２は瓦質湯釜の体部片で、外面に指圧痕がある。３は陶器皿片で、体部下位は欠損する。４は蓋片で、中央の把手部分は欠損する。外面には鉄釉が付着するが、内面は露胎とする。５は白磁椀の高台片である。

511号溝（図版51、第101図）　調査区西側で、緩やかに蛇行して８・９号土坑を切る溝である。溝は調査区内をL字状に検出し、検出長約20m、幅2.4～3.3m、深さ0.8mを測る。溝断面は逆台形状で東側から西側へ段々と深くなるが、東側も同じように深くなる。

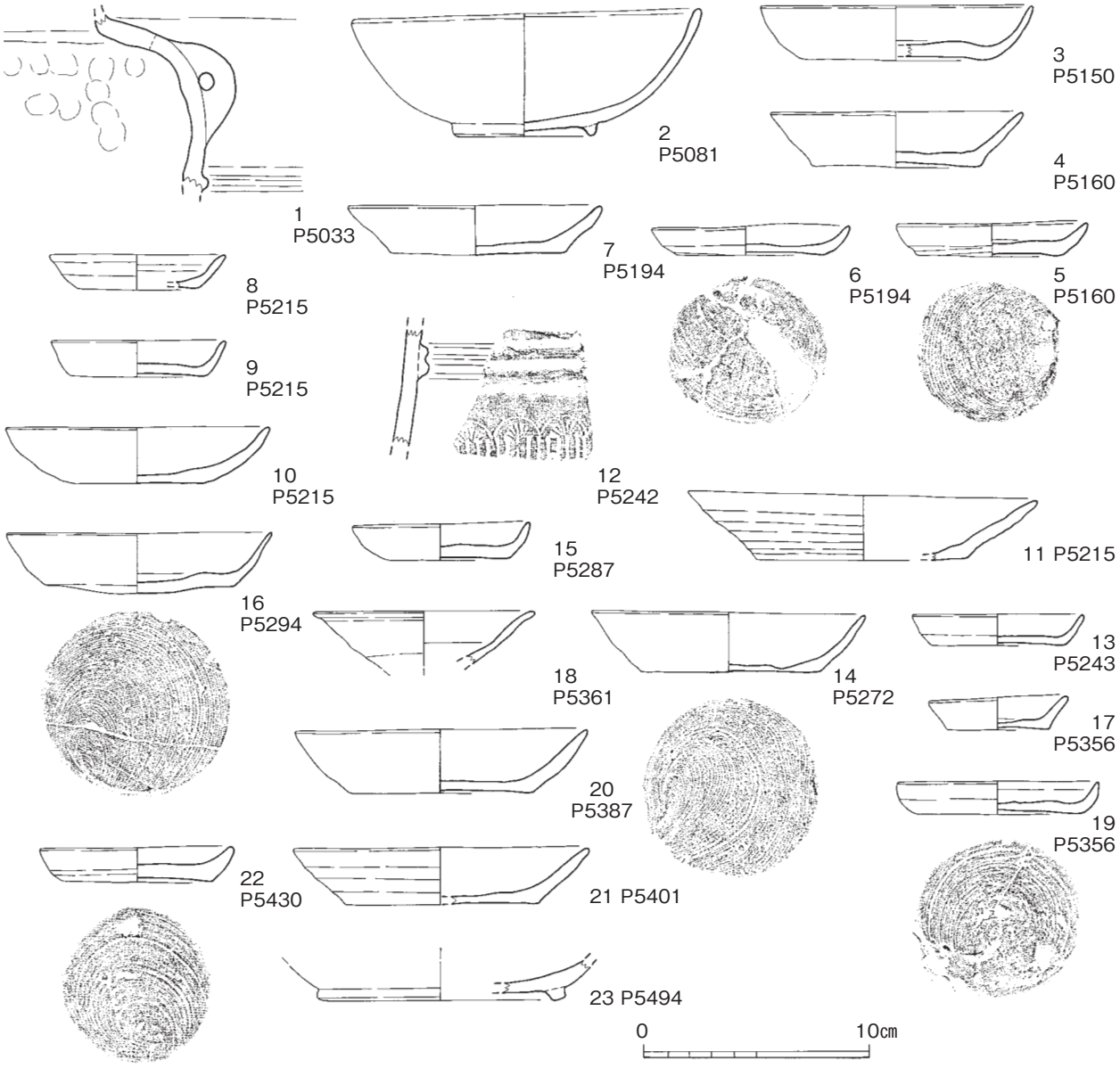
出土遺物

土器等（図版67、第103図）　６は弥生の甕棺片である。７は須恵器甕片で、内面頸部に青海波文が僅かに残る。８～12は土師器の皿である。いずれも内外面は撫でで、外底は糸切りである。11は底部を欠損しているが、他と比べて大きく外に開く。復元口径は7.1、8.3、10.9、12.2、11.4㎝を測る。13の内面にはスリ目があるので、擂鉢である。復元口径で32㎝を測る。14と15も鉢片である。14は口縁下で屈曲して内彎し、外に開く。13～15の調整は刷毛目と撫でである。16は瓦質湯釜で、外面肩部に菊花文のスタンプが巡る。口縁内面には刷毛目、頸部には指圧痕が明瞭に残る。17は瓦質火鉢片の同一個体で、口縁部と高台片である。いずれも突帯付近にS

状の文様が巡る。18～20は白磁椀片である。18は玉縁状口縁で、19と20は高台片である。21～25は青磁椀片である。21の見込みは「金玉満堂」である。22は皿の破片か。外面は細い縦の櫛描文を施す。24・25の外面の蓮弁文から、龍泉窯系。26は青磁皿の底部片で、外底は露胎とする。27も皿片で、口縁端部は水平に外に延びる。復元口径は25で15.0㎝、27は13.6㎝を測る。28は陶器椀で、接合はしなかったが、同一破片である。外面高台には砂目が付着するので、近世か。29は陶器壺の底部片で厚さ２㎝と厚手である。底部は絞られ細いが、上に向かって外に大きく開く。30は陶器壺の口縁部片で、内面は露胎とする。口縁端部は肥厚する。

512号溝（図版51・52、第101図）　511号溝の東側で、やや北北西方向に延びる溝である。検出長13m、幅0.6～1.2m、深さ0.2mを測る。南端で溝は途切れてしまうが、本来は509号溝に直交する方向に延びていることから、関連があるのかもしれない。埋土は暗褐色土の単一層で、底面付近には土師器皿１点が出土した。

出土遺物

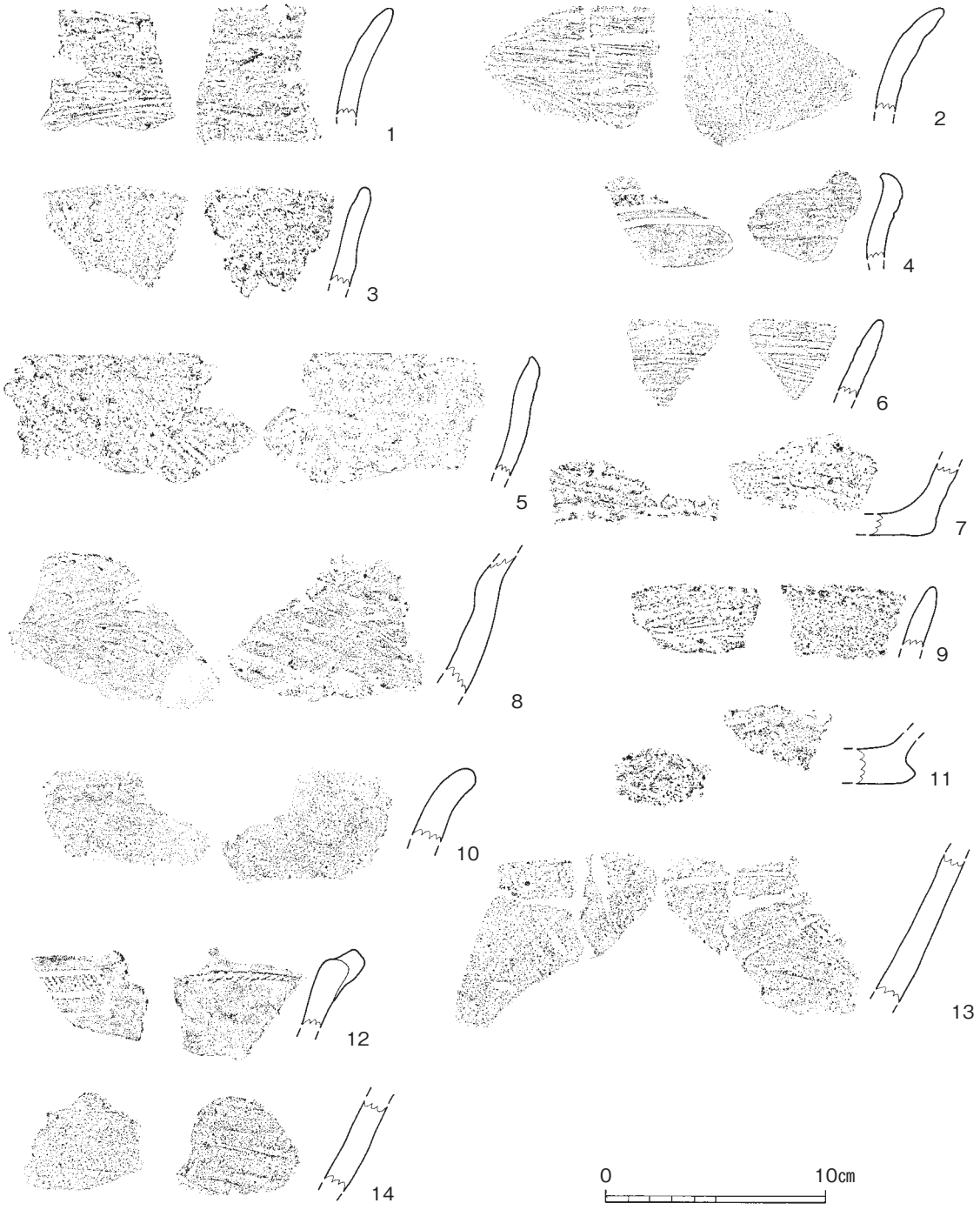


第 104 図　５区出土遺物実測図９（ピット、1/3）

土器等（図版66、第102図）　31～33は土師器皿で、ほぼ同じ形状の作りである。いずれも外底は糸切りで、内外面は撫でである。33のみ口縁内面は刷毛目である。復元口径12.9、12.4、12.3㎝を測る。

4）その他の遺構と遺物

ピット出土遺物（図版52、第103図）　1は瓦質湯釜の肩部片である。内外面は撫でで、内面には指圧痕が明瞭に残る。2は瓦器椀で、作りは全体的に均一で、高台は低く細かい。復元口径15.6㎝を測る。3～11・13・16・17・19～22は土師器皿と小皿で、内外面は撫でと外底は糸切

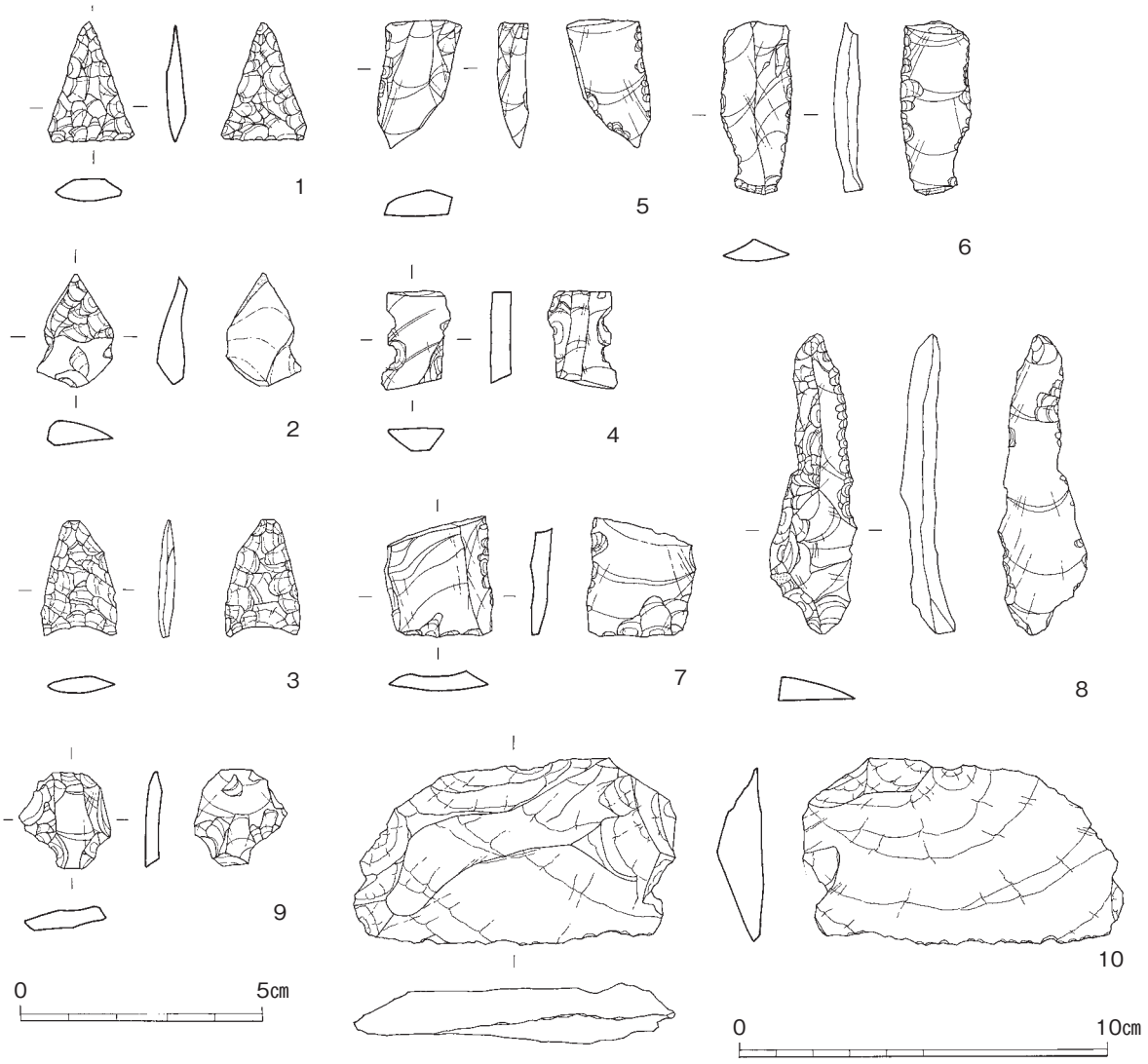


第105図　4・5区出土縄文土器実測図（1/3）

りである。11・21は外面の撫で調整が強く稜が明瞭に残る。復元口径は12.2、11.3、8.6、8.9、11.4、7.8、7.8、11.8、15.6、7.6、12.3、8.0、11.8、9.0、13.0、13.2、8.6㎝を測る。12は瓦質火鉢の体部片で、外面に二条の突帯と半菊状と縦線のスタンプを施す。18は白磁の小皿片である。23は須恵器椀の小片で、内外面とも横撫でである。

縄文土器（図版67、第105図）明確な遺構はなく、各遺構に混入されていたので、ここで別に記す。

いずれも深鉢又は浅鉢片である。１～３は５区504号土坑出土である。１・２は晩期の深鉢の口縁部片である。調整は１で内外面に条痕、２は外面に板状原体の撫で、内面は条痕である。３は口縁部片で内外面撫でである。４・５は口縁部片で、端部で外湾する。調整は内外面は条痕である。６は口縁部片で、内外面は条痕である。７は浅鉢の体部片で、内外面は板状原体による撫でか。８は平底片で、内面に撫での痕跡がある。４～８は５区508（514）号土坑出土である。９・10は507号溝出土である。11～13は513号溝出土である。11は平底片で、内外面とも撫でである。12は、外面に磨消縄文を施す後期の浅鉢口縁部片か。なお、口縁端部にも縄文を施す。13は体部片で、外面は撫で、内面には擦過痕がある。14は体部片で、内外面とも板状原体による撫

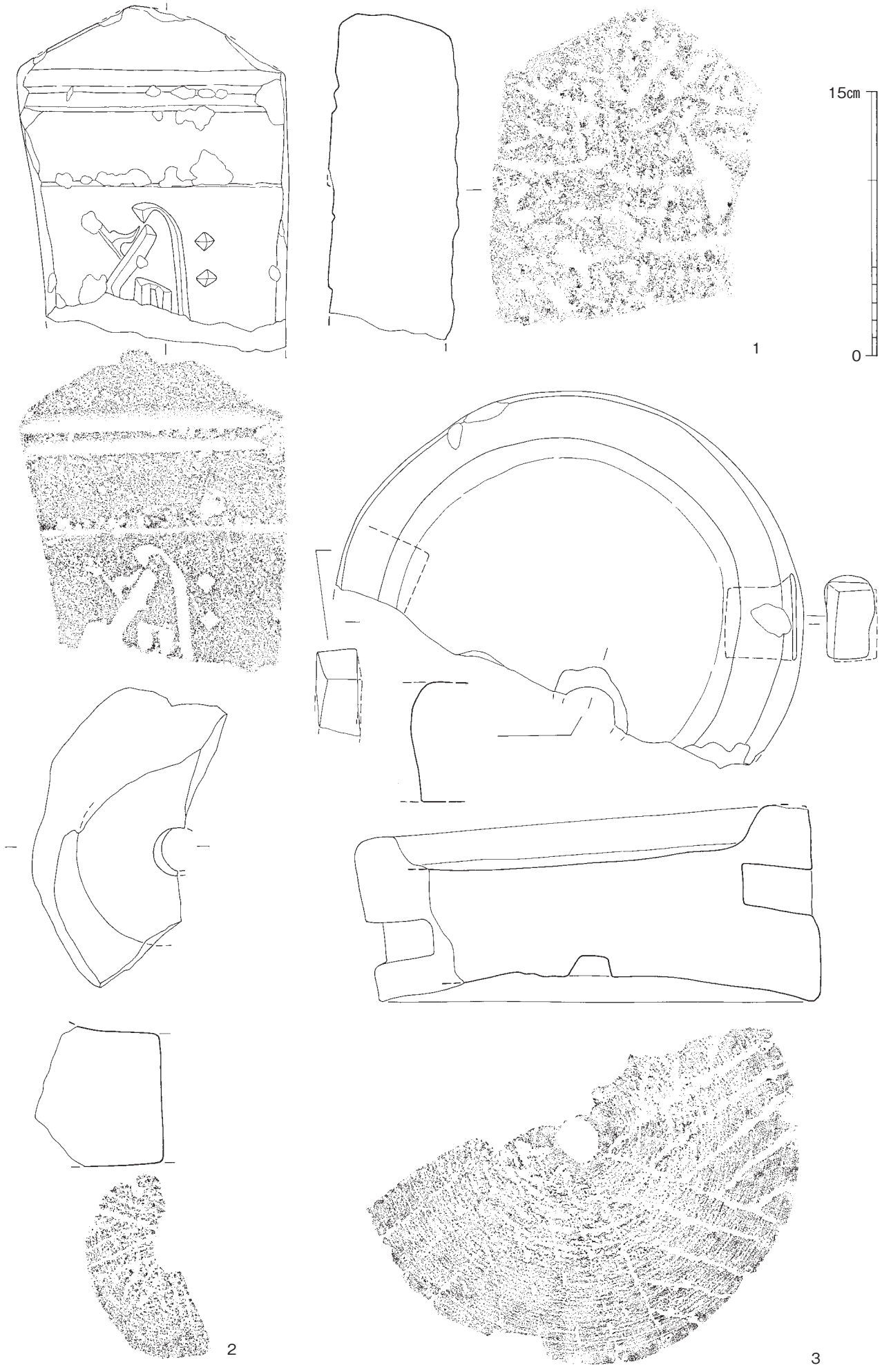


第 106 図　4・5 区出土打製石器実測図（6・8・10 は 1/2・2/3）

でを施す。P5292出土である。

石器（図版67、第106図）１・２・４～９は腰岳産の黒曜石製、３・10は安山岩製である。１～３は石鏃で、１は４区403号溝出土の平基式、２は４区416号溝の未成品で、全体的に風化し

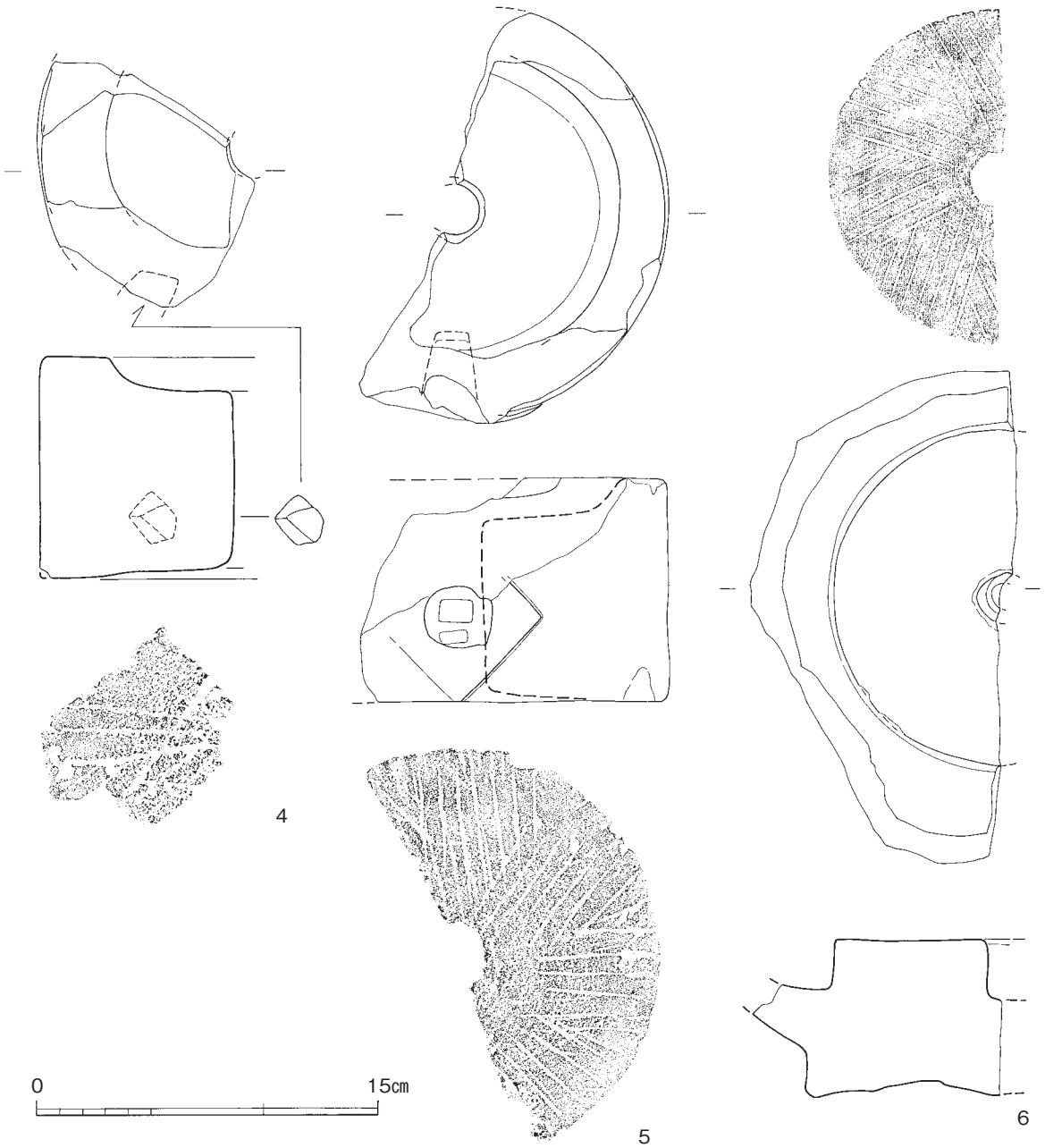
第 107 図　4・5 区出土石製品実測図1（1/3）



第 108 図　5 区出土石製品実測図2（1/3）

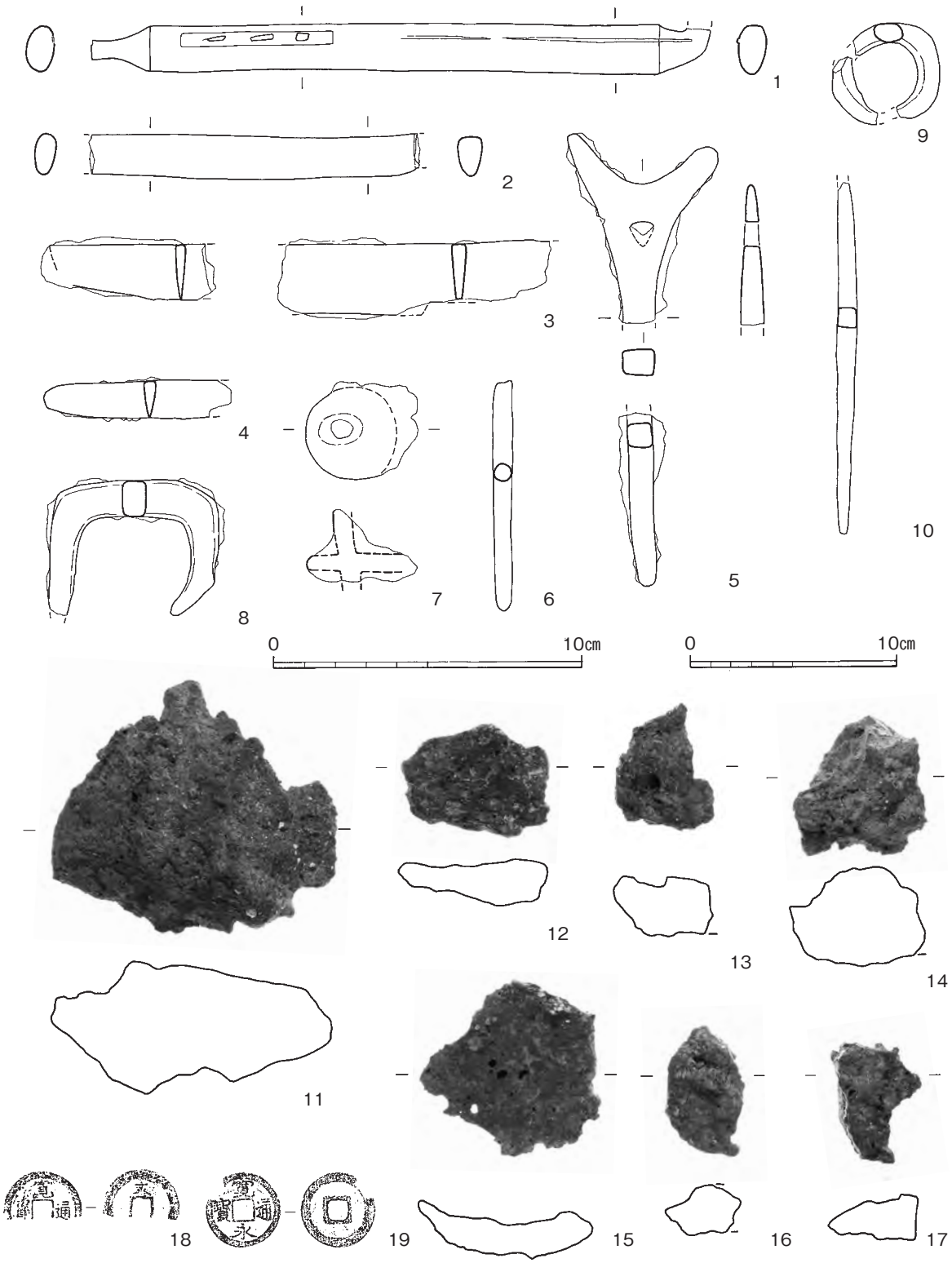
ている。３は５区Ｐ5123出土で、僅かに抉りが入る。４は413号土坑に混入していた石鋸片で、左側面に鋸歯状の抉りがある。５・６は縦長剥片の折損品で、５は４区411号土坑出土で、左側面には使用痕が残る。６は４区435号土坑出土で、刃器として使用したものか。末端部は横方向に負荷がかかり折損している。７は右側壁に使用痕がある剥片で、下端部は二次加工を施している。８はクレステッドフレイクで、両側面に使用痕、上面にはパルプがある。９はつまみ形石器、末端部に抉りを入れて、折り取る。７～９は５区遺構検出出土である。10は５区513号土坑の混入品で、石匙の未成品か。末端部には使用痕が残ることからスクレイパーとして使用か。縦長剥片が剥離したような痕跡である。

石製品（図版68、第107～109図）１は５区504号溝出土の磨製石斧の刃部片である。玄武岩製の太形蛤刃で、上部は欠損し、刃部のみ残る。２～５は滑石製である。２は5区504号土坑で、半円形状に残ることから、紡錘車片の可能性がある。３は５区507号溝上層で、断面三角形状の鍔



第 109 図　５区出土石製品実測図3（1/3）

状になることから蓋片か。内面には煤が付着する。４は５区509号溝出土の石鍋底部片で、内外面は剥離しているが、外面底部には削りの痕跡と煤が付着している。５は５区511号溝出土で、石鍋の突帯部分を削って作られた加工品か。内外面には縦と横の削りの痕跡がある。６～13は砥石である。６は灰黄褐色の砂岩製で、４面を砥石として使用する。５区502号土坑出土である。７は灰褐色の砂岩製で、上下面は剥離しているが左右側面は滑らかで使用痕が残る。５区508号土坑出土である。８は灰褐色砂岩製で、５区501号溝出土である。明瞭な使用痕は見えないが、



第 110 図　４区出土銅製品・鉄製品・銭実測図（11 ～ 17 は 1/3、他は 1/2）

上面は滑らかである。９は暗灰色の泥岩製で、上面の一部や下面は剥離している。上面と左右側面を使用か。５区510号溝出土である。10～13は５区511号溝出土である。10は灰褐色砂岩製で、表面がザラザラすることから粗砥石か。3面を砥石して使用するが、下端部や左右側面は黒変している。11は石英斑岩製の仕上げ砥石で、裏面は未使用である。12は砂岩製の砥石で、表裏面を使用する。13は暗灰色粘板岩製の砥石か。４面が滑らかであるが、顕著な使用痕は見えないことから砥石ではない可能性がある。14は５区Ｐ5367出土で、不明石製品である。上面は砥石のように滑らかで、下端部には横方向の細線が巡る。下端部には暗灰色砂岩製である。15は４区408号土坑出土の硯で、中央に向かって凹んでいて、海部を欠損する。輝縁凝灰岩製である。

107図１は、板碑の上部片である。上部は山形で、二条線を施し、その下に段を付けている。段より下には梵字で「𑖪キリーク」を線刻し、「阿弥陀如来　千手観音　如意輪観音」を表している。裏面は荒削りの状態である。２・４は５区504号溝出土の石臼で、一部のみ残存する。３は5区514号溝出土で石臼である。差し込み口は２箇所あり、4.5×2.5cmの長方形で、深さ4cmを測る。下面の擦り目が消えかかっており、使用頻度が高かったことが分かる。５は５区509号溝出土の石臼で１/２残存する。差し込み口は、３×2.5cmの長方形で、深さ4cmを測る。径18cm程度の小さめな砥石か。６は５区P5388出土の茶臼の下臼片である。下面は荒削りのままであるが、受け皿や擦り目は丁寧に作られている。

銅製品・鉄製品（図版68、第109図）１は４区406号土坑出土の銅製煙管である。全体的に1.5㎝幅で横長に延びるが、吸い口部分は6～７㎜程度に細くなる。２も形状から１と同様な銅製煙管片か。３・４鉄製刀子で、３は５区507号溝出土・４は５区510号溝出土である。刃部先端部に向かって、厚く土錆が付着するので目釘穴は見えない。４は刃部先端部、持ち手部分は朽ちている。５は雁股鏃で、厚く錆膨れている。６は鉄釘で、両端は折れている。７は鉄製紡錘車で、錆膨れしていて形状は見えにくい。約３㎝の円形で中央部分は折損しているが、上下に延びる。８は鎹で、左側は折損する。長さ５×4.4㎝、厚さ８㎜を測る。４～８は５区507号溝出土である。９は５区510号溝出土の鉄環で、径3.5㎝、厚さ７～8㎜を測る。左側と先端部は欠損する。10は511号溝出土の未使用の角釘である。長さ11.3㎝、厚さ６㎜を測り、上下は欠損する。

11～17は鉄滓である。11は比較的大きな椀形滓になる。11・12は５区501号溝、13～16は５区504号溝、17は５区509号溝出土である。それぞれの重さは769.4、120.5、146.2、236.4、162.9、62.0、73.3ｇである。18と19は４区遺構検出の「寛永通宝」である。18は「文銭」、19は古寛永である。

５）　二次調査小結

・４区について

４区では、主に江戸時代の遺構を検出した。弥生時代前期頃の土器が409号土坑と415号溝のみから集中して出土した。特に415号溝では溝底面付近の粗砂から出土したことから、流れ込みの可能性がある。これ以外の古墳・奈良・平安の各時代の遺構は検出されなかった。

鎌倉時代では、３区307号溝の延長と考えられる溝がこの時期に該当する。溝は長さ2.5m前後、深さ0.4mの逆台形状になる。溝の上面からは、須恵器椀片や壺片、瓦器椀片、青磁椀が出土することからこの時期の可能性がある。ただ、当初繋がると思われた溝が、両端で途切れている

ことから、一連の溝ではなく、不連続の溝でその一部を検出したと思われる。

江戸時代では４区で報告したほとんどの遺構が、この時代に該当する。土坑では401・403・404・409～411・414・420・422・423・427・431・432・434～437・439・441・443・446・447号土坑と402・413・415～417・421・424～427号溝になる。土坑の性格は廃棄土坑のものが大部分だが、436・443号土坑は他と比べて、円形で深さ約２m以上の井戸である。なお、424号溝のみ土師器椀片、白磁椀片が出土する。混入の可能性が高いが、他の溝と時期が若干異なる可能性もある。これらの遺構から出土した染付の中には、85図14～16・18のくらわんか椀、83図5・6の筒形椀、丸形椀、88図４の染付段重などの18世紀以降の遺物が主に出土することから、遺構もおそらくこの時期のものが多いと考えられる。この時期より古い染付や陶器類の出土は４区では出土していないことから、検出した遺構が18世紀以降の集落に伴うものと考えられる。

・５区について

５区では４区に比べて、主に鎌倉時代から江戸時代までの遺構が集中して検出する。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、黒曜石製の剥片、サヌカイト製の石鏃、石匙の未成品などが出土している。縄文土器では後期・晩期の浅鉢や深鉢片が出土する。弥生時代の遺構も同様で、遺構は検出されなかったが、504・509・511号溝に混入した前期の遺物が出土する。なお縄文・弥生時代の遺物がピット内からも出土することから、明確には判断できなかったが建物や住居などに伴うピットの可能性もある。

古墳時代から平安時代の遺構は５区でも検出されなかった。

鎌倉時代～戦国時代の遺構は502～504・507・508・510号土坑、501・503～505・509・510号溝がこの時期になる。この中で鎌倉時代の遺構は507・510号土坑と507号溝である。507・510号土坑は出土遺物は少ないが、白磁椀の口縁部片が出土する。素掘りの井戸である503・504号土坑と503・504・506号溝の溝に切られて検出した507号溝は、出土遺物に瓦器椀、白磁椀など12世紀後半頃の遺物が主に出土することから、他の溝より時期が古く異なる。さらに溝は他の溝と比べて幅広いことから、区画を意識したような形状である。なお、４区検出の溝とほぼ同時期の遺構であり、その関係はまとめで指摘している。

第 111 図　5区503号土坑出土櫛

鎌倉時代以降の新しい時期では、93図９瓦質湯釜把手片を出土する502号土坑と508号土坑の93図37の砂目が付着する陶器椀など比較的新しい遺物が出土する土坑である。溝では、501号溝と西へ分岐する503～505号溝の一連の溝と504・509・510・511号溝の出土遺物からも瓦質土器片、15世紀後半頃の青磁椀片が出土する。

なお、504号溝と509号溝の間は他と比べて、極端にピットの数も少なくなることから、検出長24.5m、幅1.5～2.2m通路の可能性もあることも付け加えたい。さらに溝と並行する向きになる501号建物跡もこの時期の可能性がある。

５区周辺では道路を挟んだ東側で、過去に那珂川町（現那珂川市）教育委員会の調査が行われているが、西側にかけてはあまり調査はされておらず、今後の発掘調査による遺跡の解明に期待したい。

Ⅳ　おわりに

那珂川市仲(ちゅう)所在の宮ノ前遺跡の報告を終えるに当たって、この遺跡の位置づけについて今一度考えてみたい。

1）307 号溝の西端について

3 区西端で検出した幅約 3 m、深さ 0.6 mほどの規模で、直線的に延びてかつ壁が急角度で立ち上がる 307 号溝について、3 区西側の私道を撤去しても連続的な溝の延長を確認することができなかった。ただ、溝の南西方向、延長線上からやや南東へ偏した位置で北西–南東幅 2.9 ～ 3.0 m、それと直交する方向で幅 3.5 ～ 3.8 mの規模の平面矩形の遺構（428 号溝）を検出した。深さは 0.5 mほどであるが、床面の標高は 23.1 m前後と 307 号溝西端の床面と同じ数値となり、各辺の方位も同溝と平行・直交するといってよい。出土遺物を見るとやはり口径 15㎝前後、器高 3㎝前後の土師器丸底杯や、口径 15㎝前後、器高 5㎝ほどの瓦器椀などがあって、不連続であるがこの土坑は 307 号溝と一連の遺構と見てよいであろう。また、4 区北東隅にわずかに現れた 446 号土坑からは近世染付が出土しているが、これは二つの遺構が重複しているようで、最深部の床面標高が先の 2 遺構と同じであることから、これを 307 号溝の南西端と見て間違いないであろう。したがって、第 4 図のように 307 号溝を復元できる。307 号溝と 428 号溝との間は約 2 mの間隔が開いていて、さらに南西では 2 ～ 4 mの空間があるものの、ここには溝の延長は現れていない。

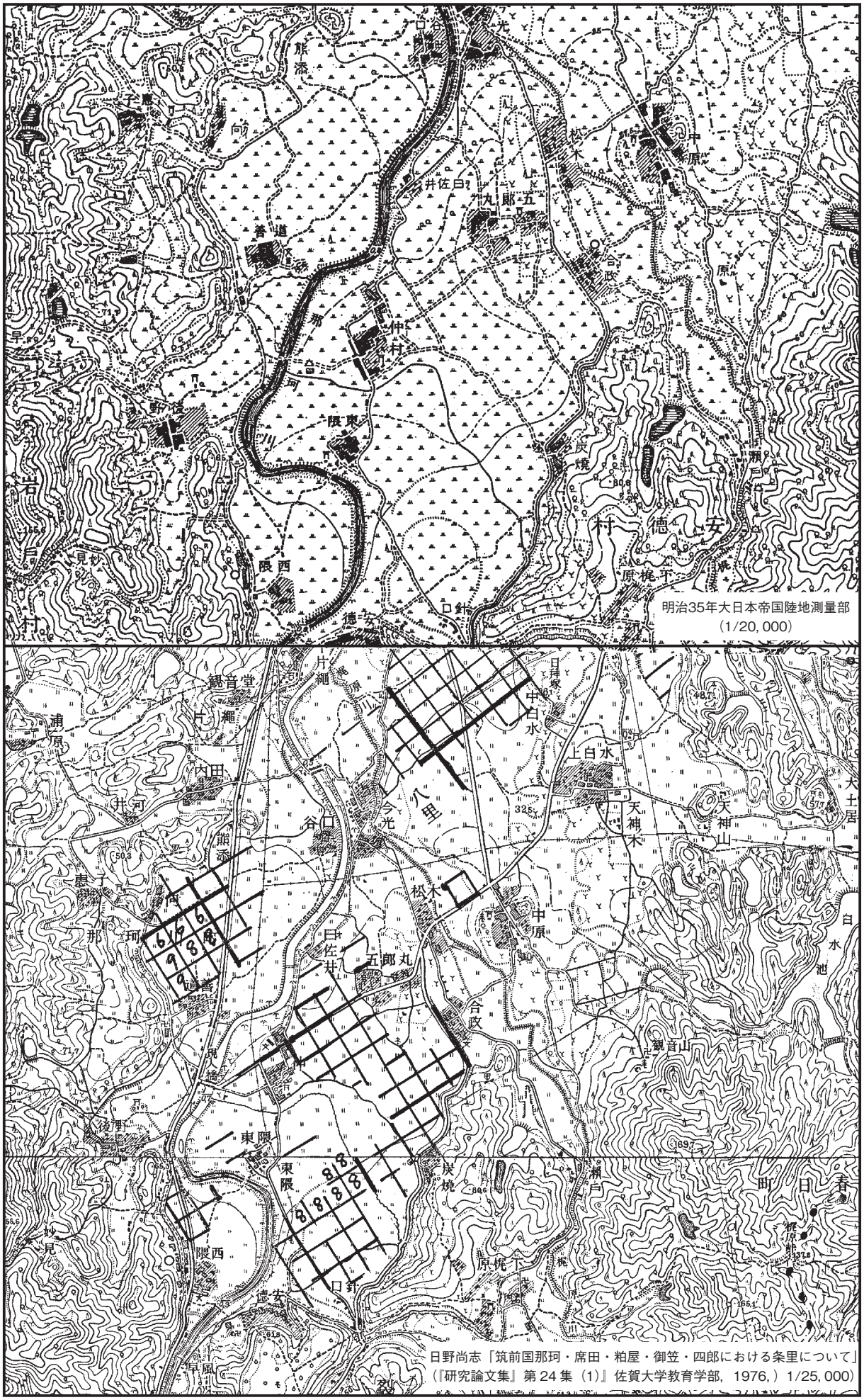
307 号溝の土層図で見るように、遺構検出面から現地表まで 0.4 ～ 0.6 mの厚さがある。本来の溝の深さがどれほどであったかは知るべくもないが、障子堀のように溝底に高低差があったと考えるよりは、本来的に溝が途切れて陸橋となっていたと想定するのが妥当であろう。将来の隣接地の発掘調査を待ちたい。

2）307 号溝・507 号溝について

北部九州を中心に精力的に歴史地理学的論考を発表してきた日野尚志氏は，「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」（『研究論文集』第 24 集（Ⅰ） 佐賀大学教育学部、1976）の中で，「那珂川を中心にしてその左岸と右岸にN 38.5 度Wの土地割をもつ条里が検出される。東端は旧梶原川の流路の左岸まで・・・(略)。また、この条里区が『倭名類聚抄』に記す良人(あらひと)郷の範囲であることは確実である。」として「道善・安徳条里区」を設定された（第 112 図下）。ただ、氏が示した図で計測するとおよそ「N 31 度W」、「N 58 度E」となるので、以下ではこの数値を使用して続ける。

今回の調査では、507 号溝および 307 号溝で丸底杯やそれと同様の体部をもつ瓦器椀が比較的まとまって出土し、それぞれから出土した土器は器形・法量ともにほぼ同一で、同じ時期、12 世紀中葉前後に埋没したものと思われる。

507 号溝は幅 2.5 ～ 3.1 m、深さが 0.5（北端）～ 0.9（南端）の規模で直線的に掘削されていて、調査区を横切って 16 mの長さを確認した。溝底は 23.1 mほどの標高でほぼ水平となっている。



第 112 図　宮ノ前遺跡周辺古地図等（1/20,000・1/25,000）

ちなみに、この標高は307号溝の溝底とも一致する。断面形状は土層図を作成したところでは勾配の緩いV字形となり、ほかの大部分で溝底幅0.4～1mの勾配の緩い梯形断面となる。また、中・下層の埋土は砂質土であって、1号溝のような洪水によると思われる大量の礫あるいは滞水を示す粘土層などを確認していない。そして、およそN 30度Wの方位をとっていて、これは日野氏が復元した条里の方位に一致するといってよく、東南方向へ延長すれば「裂田溝」から分かれる城ノ谷川（あるいは古河川）の上流部にほぼ合致する。現人神社西の道路からの距離はほぼ180mを測るが、もっとも日野氏の復元条里に現人神社西の道路は含まれておらず、507号溝の東側に近接する市道と城ノ谷川を結ぶラインが復元されている。いずれにしても、直線的な平面形状や条里地割にのっていることなどから、人為的に開削された溝であったとしてよかろう。一般に条里地割は古代に施行されたと漠然と考えられているが、筆者はかつて、7世紀末創建の垂水廃寺を取り込み、良好に条里地割が残存するといわれていた福岡県築上郡新吉富村（現上毛町）正ノ坪遺跡で、12世紀後半～13世紀前半の遺物を交える大小の浅い不整形土坑を水田下で調査し、開墾の痕跡ではないかと推測したことがある[註1]。つまり条里施工時期を示すと考えた。また、条里地割が残る福岡市早良平野でも、「近年、条里地割に沿った水路が多く発掘され、それらのほとんどは造営されたのが平安時代末以降で、奈良時代に遡るものではない」ことがわかった[註2]という。ただ、溝という遺構の性格上、入念に管理されていたとすれば出土遺物から掘削時期を知ることはほぼ不可能であり、埋没時期がわかるのみである。507号溝からは1点であるが、釘彫り細蓮弁文の龍泉窯系青磁椀片が「下層」から出土している（第100図27）。本報告書で提示していないが「上層」と注記のあるパンケース1箱近くの土器を見てみると、中世後期～近世の遺物は無く、ほぼ図示した土器群と同じ内容であり、しかも大型片も一定量を含んでいる。したがって、細蓮弁文青磁椀は重複する504号溝の下層に存した遺物が混入したものと思われる。以上のように507号溝の出土遺物は上層・下層ともに時期差を認めることができないような土器群であり、開削の時期は不明ながらも条里地割の下で計画的に開削され、12世紀中葉前後に管理が放棄されて短期間で埋没したものと思われる。

307号溝は検出した長さが短いけれども、直線的で壁が急角度で立ち上がるなど流水を考慮外に掘削された遺構であると考えられる。幅約3m、深さ0.6mの規模で、この数値は507号溝に合致するが、断面形状は本来的に箱形に近い。また、溝底両側、そして中央部にもU字形に粘（質）土が堆積し、深さ0.7mの溝中央付近ではその厚さが0.5mにも及ぶ。両溝の埋土の違いから溝開削の目的やその機能が異なっていたことは明白である。加えて、この307号溝はおよそN 40度Eの方位をとっていて、日野氏が復元した条里の方位とは大きく異なっている。通常、条里施工後にその範囲内で一定程度の規模の面積を区画する場合は、条里地割に合致するはずであるという仮説に立てば、この307号溝は条里施工以前の区画溝であるということができる。307号溝もそのものからの出土遺物で開削時期を確認することはできないが、304号溝が付属的な遺構（道路跡）と考えた結果、その存続期間は長くはなかったであろうと先に報告した。しかし、仮に付属的な遺構であると認めても、溝の廃絶時期に近い短期間の付属遺構ということも十分ありうることなので、304号溝の出土遺物をもって307号溝の存続期間を推測することは不可というべきであろう。そこで、307号・507号両溝の堆積状況を見た場合、明確な根拠を示しえないが、粘（質）土（307号溝）のほうが砂質土（507号溝）に比べて、堆積により長期間を要するのではないかという素朴な時間感覚がある。その場合も、浚渫などの管理の程度によって大きく左右されるであろうから憶測に過ぎないとはいえ、条理地割と異なる方位の区画溝である307号溝が条里地割に沿って開削

された 507 号溝に先行する可能性は十分成立しうると考えているが、結論は将来に委ねたい。

上記のように、規模や深さといった数値を除いて多くの面で異なる内容をもつ２条の溝が、12 世紀中葉頃に相次いで遺棄、埋没した背景は何であろうか。12 世紀の当地に関わる歴史的事件として以下のような記録がある。

・治承３年（1179)、日宋貿易の拠点を博多に求めた平清盛に抗した筑前一宮住吉神社神官佐伯氏が伊豆等に配流された[註3]。「元宮」と伝承される現人(あらひと)神社も住吉神社に連座して何らかの処置を受けたのではないかと推測できるが、当時の両社の関係がはっきりとしない。ただ、現人神社は次に記す原田氏膝下の大社であることから、原田氏の対処が大きく影響したことと思われる。

・「岩門(いわと)小卿」と呼ばれた筑前の名族、大蔵氏系原田種直がこの地を領していて、安徳天皇を招いた居館跡が安徳台として伝承されている（この点に関して、考古学的な徴証は未確認。)。現在の糸島市に本拠を置いた原田氏は筑前最有力の平家与力で、当時、種直は大宰少弐に任官されて栄華を誇ったが、寿永４年（1185）の平氏滅亡とともに没落した。安徳台は現人神社の南 1㎞余りの独立丘陵にその遺称を残している。

原田氏の没落や平氏滅亡が 307・507 号溝の廃絶に関わりをもつとすると大変興味深いストーリーとなるが、伝承によるところが大きく関連を裏付けるにはさらなる資料の蓄積を要する。

第 112 図で見るように、調査地付近にはおよそ 200 m四方の区画が容易に認められる。そして、その区画の中に現人神社という当地第一の神社が鎮座し、いかにも古くから重要な一画を形成していたかのような趣がある。先の日野氏論文の引用の中で、氏は「良人郷」を「あらひと」と読んだ。「あらひと」は一般的な用語ではなく、現人神社を意識しての読みであろう。ただ、その場合には、『筑前国続風土記拾遺』の記載（136 頁）と大きく矛盾することとなる。この現人神社は、筑前一宮住吉神社（福岡市）と祭神を一にし、その元宮であると伝承されるが[註4]、天正 15 年（1587）の島津軍の進入による兵火により記録などを焼失したといい、筑前住吉神社との歴史的な関係ははっきりしないようである。この現人神社は近傍の「岩戸河内 12 ヵ村」の産土神として信仰され、12 ヵ村で造立した正徳４年(1714)銘の石造鳥居が市指定文化財となっている。「岩戸河内 12 ヵ村」の「岩戸」は「岩門(いわと)小卿」の「岩門(いわと)」と同一とされている。

この宮ノ前遺跡での初めての発掘調査の結果、古地図に現れた区画に相応する 507 号溝と、独立した方位をもつ 307 号溝が平安後期に埋没した遺構と確認された。それ以前に属する初期輸入磁器や緑釉陶器などの存在は確かに古代の重要な遺跡の存在を暗示している。今後の周辺での調査に大いに期待したい。

註１　新吉富村教育委員会「垂水廃寺Ⅱ　宇野地区遺跡群Ⅰ」(『新吉富村文化財調査報告書』第 12 集、1999)

註２　佐藤一郎「福岡の瓦経」福岡市博物館、2007

註３「住吉神社」(竹内理三編『角川日本地名大辞典　福岡県』1988)

註４　青柳種信『筑前国続風土記拾遺』1818 ～ 1830

図　　版

1　調査地全景
（西北から）

2　調査地全景
（南東から）

図版 2

1　1 区西半
（上空から）

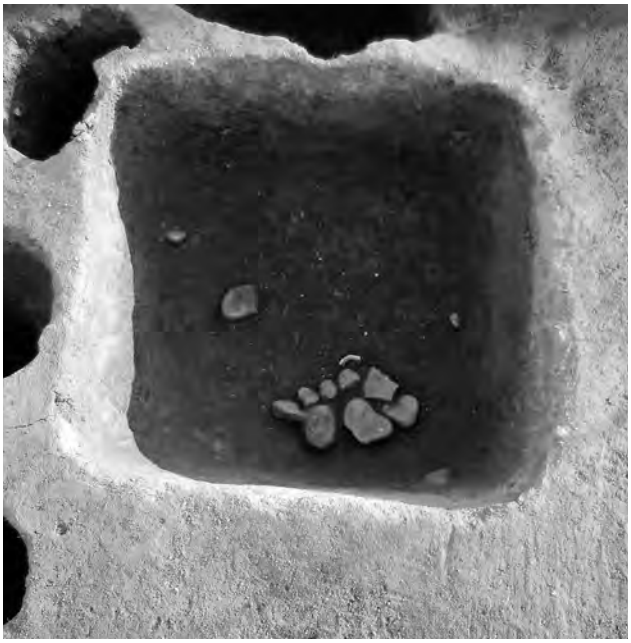
2　1 区西半
（西から）

3　1 区西半
（東から）

1　1 区東半
（西から）

2　1 区東半
（東から）

3　1 号土坑（北から）



4　1 号土坑（北から）

図版４

1　２～４号土坑

2　７～10 号土坑

3　11・15 号土坑（東から）

4　11・15 号土坑（北から）

1　12 ～ 14 号土坑
（南東から）

2　13・14 号土坑
（北西から）

3　16・19・22・23 号
土坑（北東から）

図版 6

1　16・19・22・23 号
土坑（南西から）

2　18 号土坑
（北から）

3　30・28 号土坑・
2 号溝（南東から）

1　21 号土坑
（北から）

2　22 号土坑
（東から）

3　24・25・27 号土坑
（東から）

図版 8

1　26 号土坑
（東から）

2　29 号土坑
（北から）

3　33−2 号土坑床面
（北東から）

1　35 号土坑土層
（東から）

2　35 号土坑
（南西から）

3　37 号土坑周辺
（北東から）

図版 10

1　38 号土坑土層
（北西から）

2　39– 3 号土坑
（北西から）

3　45 号土坑
（北から）

1　1 号溝
（北から）

2　1 号溝南壁土層
（北から）

3　1 号溝中央畦土層
（南東から）

図版 12

1　1 号溝北壁土層
（南東から）

2　1 号溝北壁土層
（南東から）

3　1 号溝南半礫群
（北から）

1　1 号溝中央畦北礫群
（北西から）

2　1 号溝北端石組
（北西から）

3　1 号溝北端石組
（北から）

図版 14

1　1 号溝北端遺物
出土状況（北から）

2　1 号溝中央畦北遺物
出土状況（北東から）

3　6 号溝（北から）

4　P 90（北東から）

1　1W区全景
（西から）

2　2E区全景
（西から）

3　2E区全景
（東から）

図版 16

1　２W区西半
（南から）

2　２W区東半
（南西から）

3　２W区南半
（北東から）

1　202・203・205 号
土坑（北東から）

2　204 号土坑
（南東から）

3　206 号土坑堆積状況（西から）

4　同完堀後（東から）

図版 18

1　208 号土坑
（南西から）

2　209 号土坑
（南から）

3　209 号土坑床面
（南から）

1　201 号溝検出状況
（北西から）

2　201 号溝
（南から）

3　3 区全景
（上空から）

図版 20

1　301・302 号土坑
（西から）

2　303 号土坑
（北から）

3　305 号土坑
（東から）

1　308 号土坑
（北東から）

2　309 号土坑
（東から）

3　310 号土坑
（東から）

図版 22

1　311・312 号土坑
（東から）

2　311 号土坑
（北東から）

3　315 号土坑
（南東から）

1　316−1（左）・2号土坑（南から）

2　316−2号土坑下層（東から）

3　316−3号土坑（南から）

図版 24

1　316−３号土坑床
付近（南から）

2　316−４号土坑上層
（東から）

3　316−４号土坑下層
（東から）

1　318 号土坑床付近
（南から）

2　320 号土坑上層
（東から）

3　321 号土坑検出
状態（南西から）

図版 26

1　322（左）・323 号
土坑（南から）

2　324 号土坑
（東から）

3　324 号土坑床面付近
（東から）

1　327 号土坑検出状態
（東から）

2　327 号土坑
（東から）

3　329 号土坑
（西から）

図版 28

1　329 号土坑細部
（西から）

2　330 号土坑
（北から）

3　330 号土坑
（北から）

1　331 号土坑
（西から）

2　332 号土坑
（北西から）

3　333（右）・334 号
土坑（北から）

図版 30

1　338 号土坑
（南東から）

2　303 号溝西半
（北東から）

3　303 号溝東半
（南西から）

1　303 号溝中央付近
（東から）

2　303 号溝中央付近
土層（西から）

3　303 号溝西側遺物
出土状況（北から）

図版 32

1　304（右）・307 号
溝全景（南西から）

2　307 号溝全景
（北東から）

3　307 号溝北壁土層
（南西から）

1　4区遠景
（東上から）

2　4区全景
（真上から）

図版 34

1　4区東側全景1
（東から）

2　4区東側全景2
（東から）

3　4区東側全景3
（西から）

1　401 号土坑・
402 号溝（南から）

2　403・404 号土坑
（北から）

3　409 号土坑
（南から）

図版 36

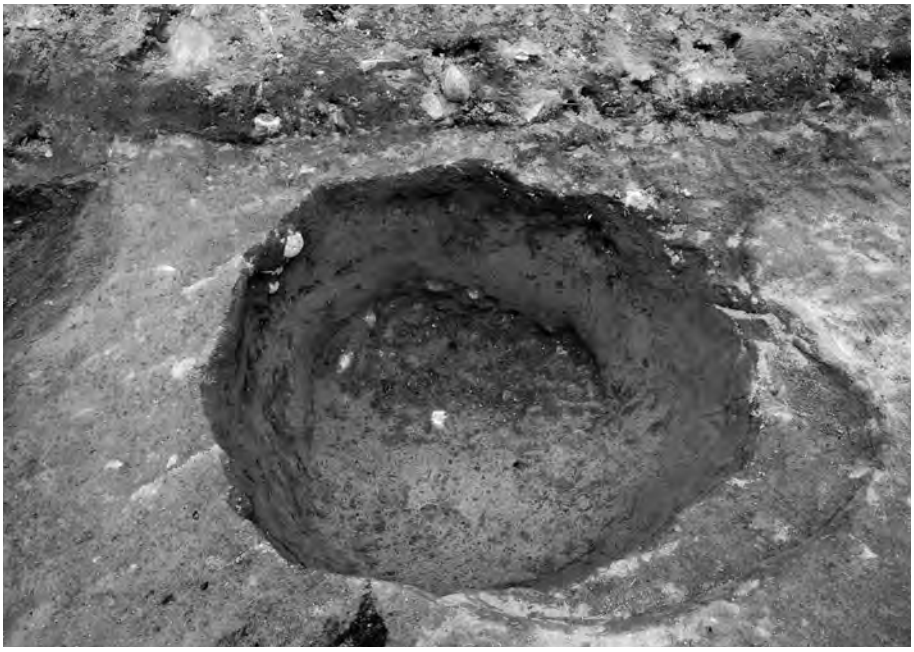
1　410・411・
414 号土坑（東から）

2　420 号土坑
（南から）

3　423 号土坑
（南から）

1　427・432 号土坑・
422 号溝　（南から）

2　434 号土坑
（南から）



3　437 号土坑
（北から）

図版 38

1　441 号土坑・
425 号溝（南から）

2　443 号土坑
（南から）

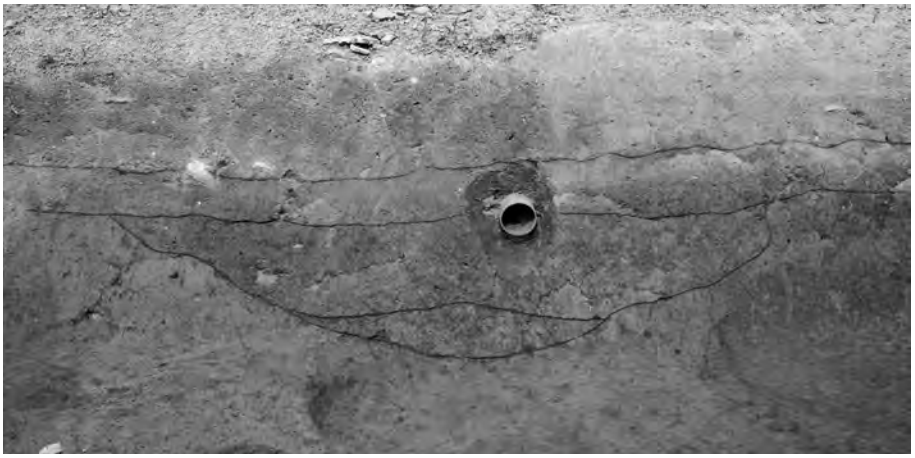
3　441・445・
446 号土坑　（西から）

1　413 号溝
（東から）

2　415・416 号溝
（南から）

図版 40

1　415・416 号溝土層
（東から）



2　423 号溝土層
（西から）

3　428 号溝
（東から）

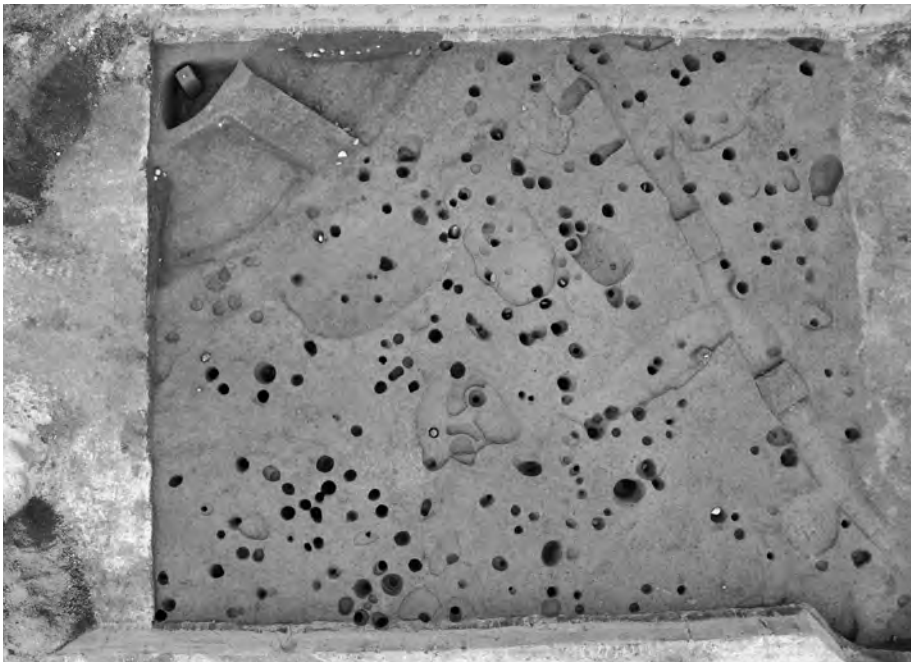
4　3 区 307 号溝
（南から）

1　5区全景合成写真
（真上から）

図版 42

1　5区東側1
（真上から）

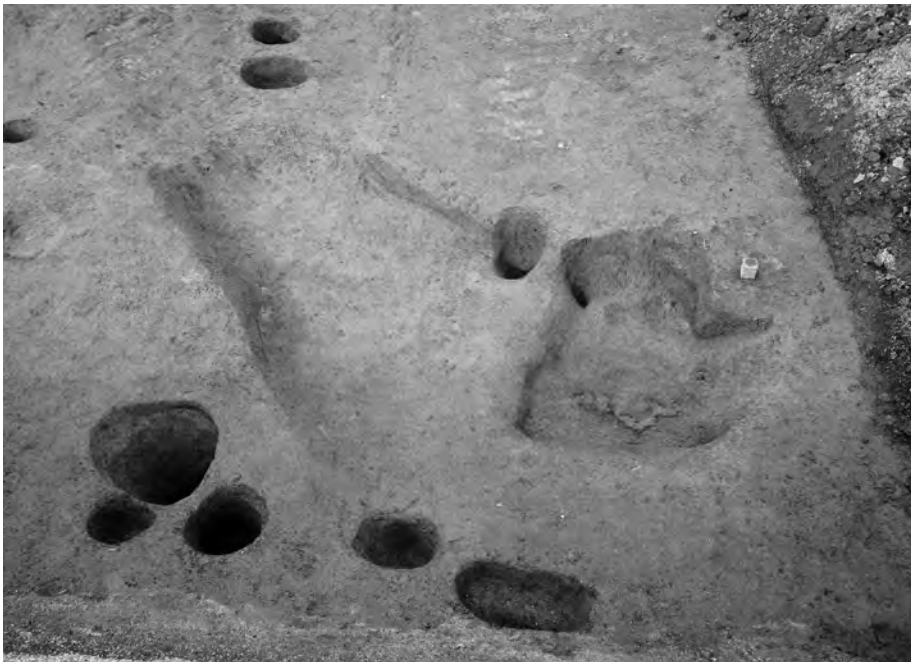
2　5区東側2
（真上から）



3　5区西側1
（真上から）

1　5区西側２
（真上から）

2　501 号堀立柱建物跡
（南から）



3　501 号土坑
（南から）

図版 44

1　502 号土坑
（東から）

2　503・504 号土坑
（北東から）

3　507 号土坑
（南から）

1　508（514）号土坑
（西から）

2　508（514）号土坑
土層（南から）

3　509 号土坑
（南から）

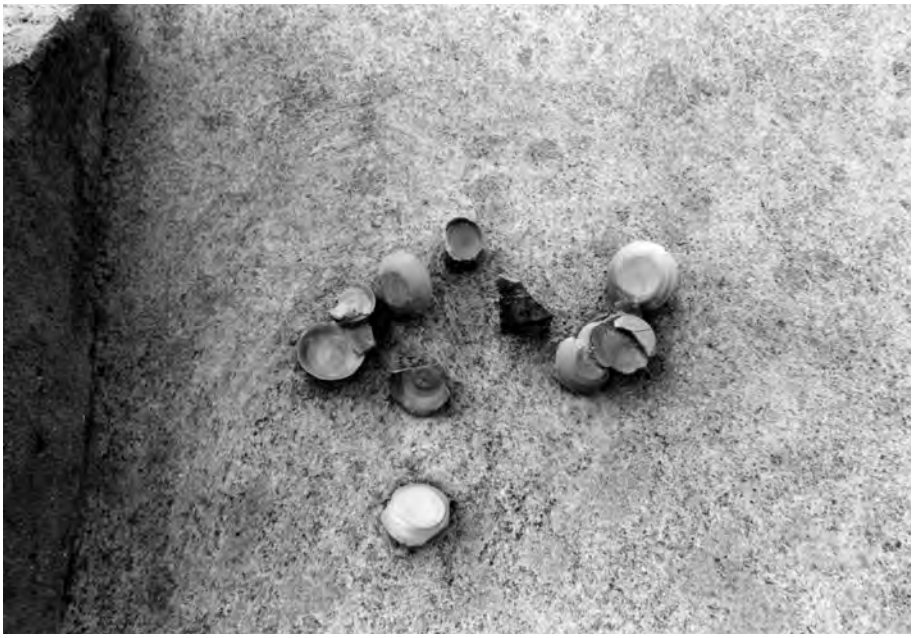
図版 46

1　510・511 号土坑
（西から）

2　501 号溝
（南から）

3　501 号溝土層
（南から）

1　501 号溝礫石
検出状況（南から）



2　501 号溝土器
出土状況（北から）

3　503・504 号溝
（東から）

図版 48

1　504 号溝土層（東から）

2　504 号溝（南から）

3　506 号溝（北から）

4　507 号溝土器出土状況（北から）

1　507 号溝
（北から）

2　507 号溝
（南から）

3　507 号溝土層
（南から）

図版 50

1　504・509・510 号溝土層（南西から）

2　509 号溝礫石検出状況（南から）

3　509 号溝土層（西から）

4　512 号溝土層（南から）

1　511 号溝土層
（北東から）

2　511 号溝
（南から）

3　512 号溝
（東から）

図版 52

1　P5045
（西から）

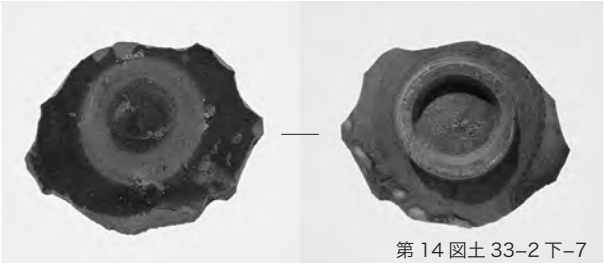
2　P5183
（西から）

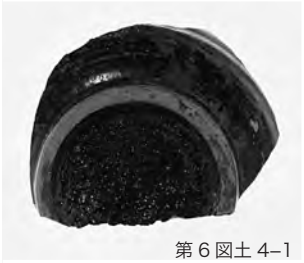
3　P5272
（東から）

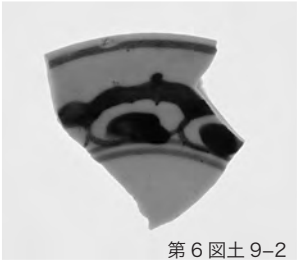
4　調査終了後
（西から）

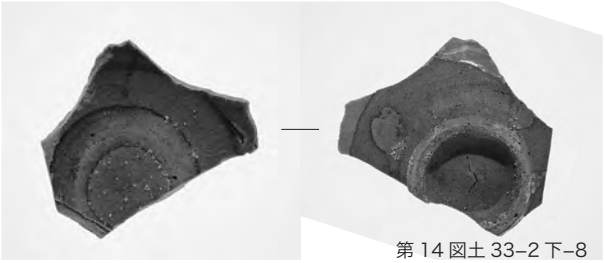
第 6 図土 1–2

第 6 図土 2

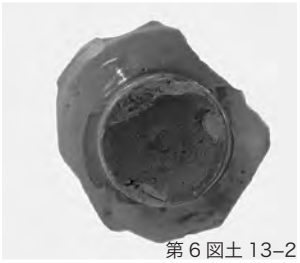

第 14 図土 33–2 下–7

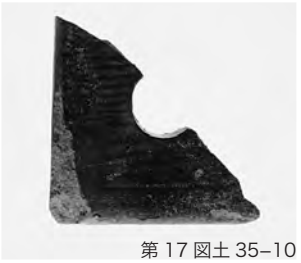

第 6 図土 4–1

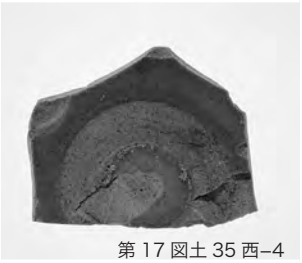

第 6 図土 9–2

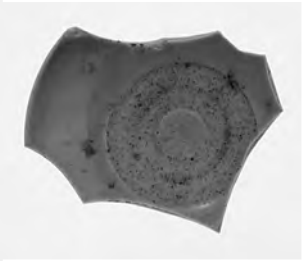

第 14 図土 33–2 下–8

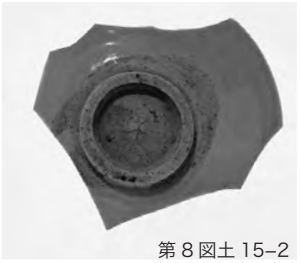
第 6 図土 9–3


第 6 図土 13–2


第 17 図土 35–10


第 17 図土 35 西–4




第 8 図土 15–2

第 18 図土 35–1

第 18 図土 35–4

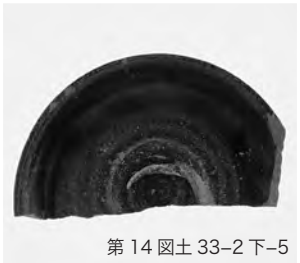
第 10 図土 24・25–2

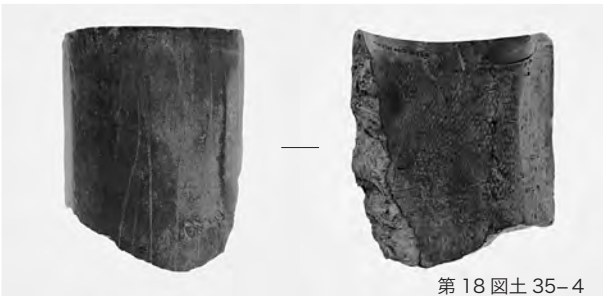
第 18 図土 35–2

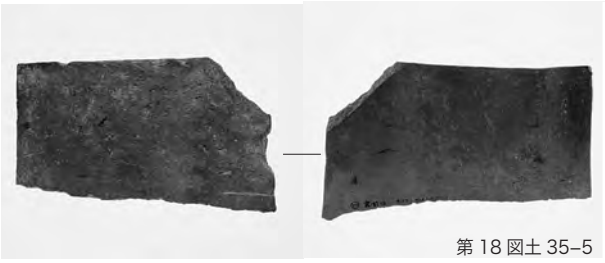
第 14 図土 33–2 下–3

第 18 図土 35–3

第 14 図土 33–2 下–4


第 14 図土 33–2 下–5

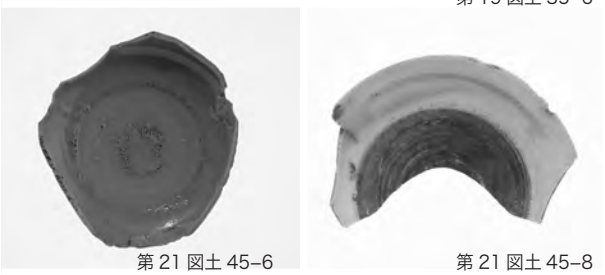

第 18 図土 35–4

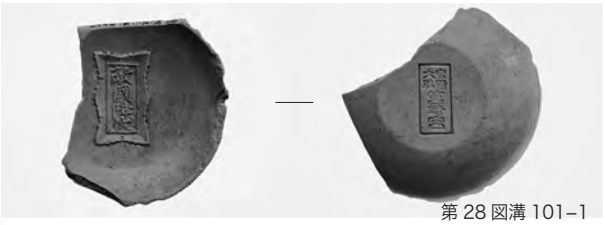

第 18 図土 35–5

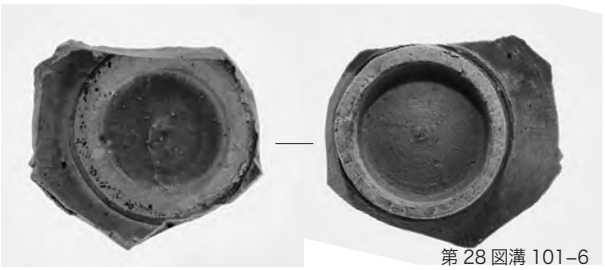
第 19 図土 35–2

第 19 図土 35–3　第 19 図土 35–4

第 19 図土 35–6

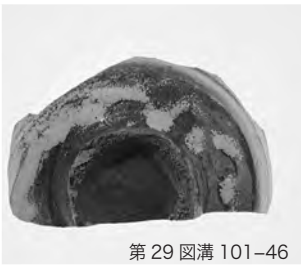

第 21 図土 45–6　第 21 図土 45–8

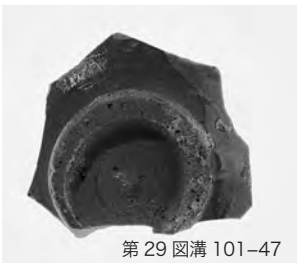

第 28 図溝 101–1

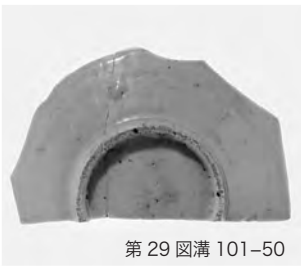

第 28 図溝 101–6

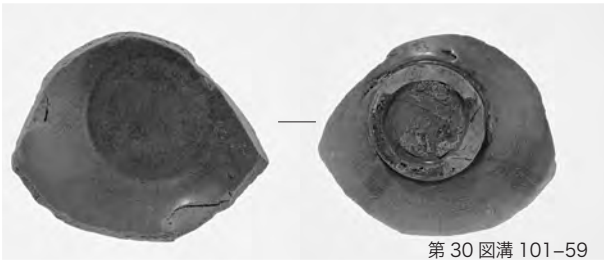
第 29 図溝 101–32

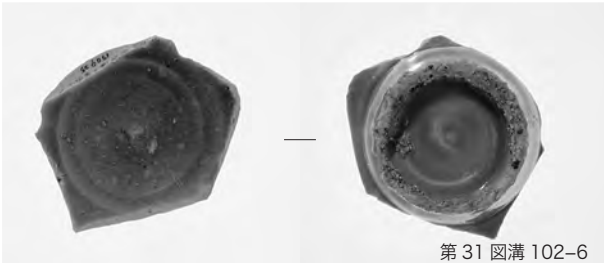
第 29 図溝 101–45


第 29 図溝 101–46

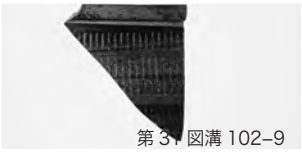

第 29 図溝 101–47


第 29 図溝 101–50


第 30 図溝 101–59


第 31 図溝 102–6

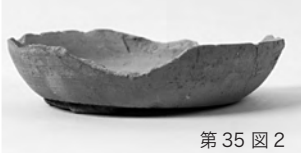
第 31 図溝 102–8


第 31 図溝 102–9

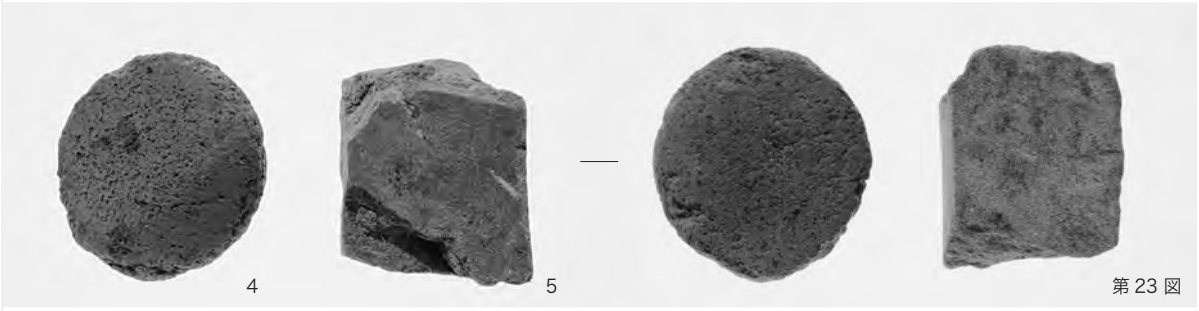
第 34 図 P137

第 34 図 P103

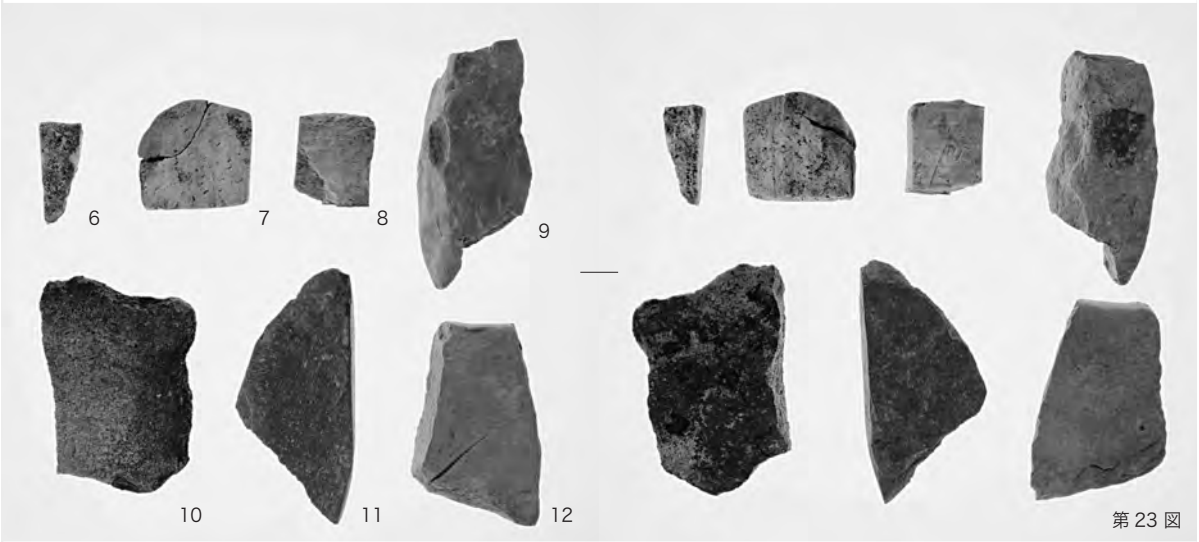
第 34 図 10


第 35 図 2

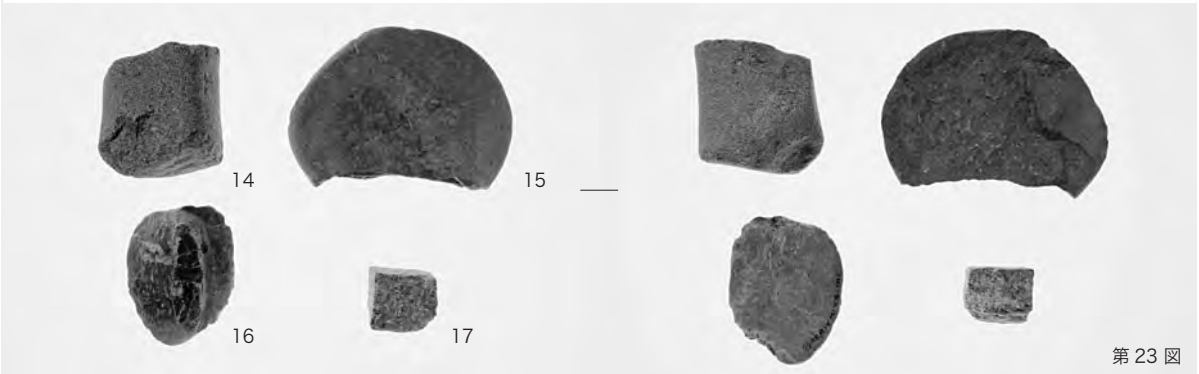
第 23 図



第 23 図



第 23 図

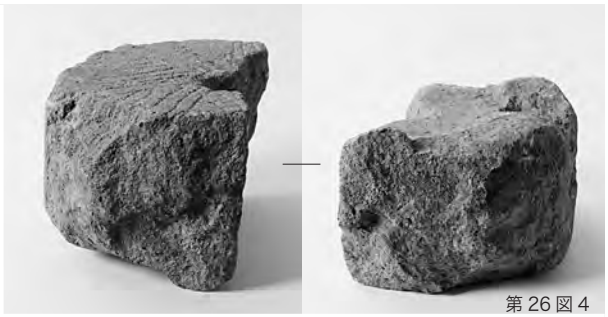


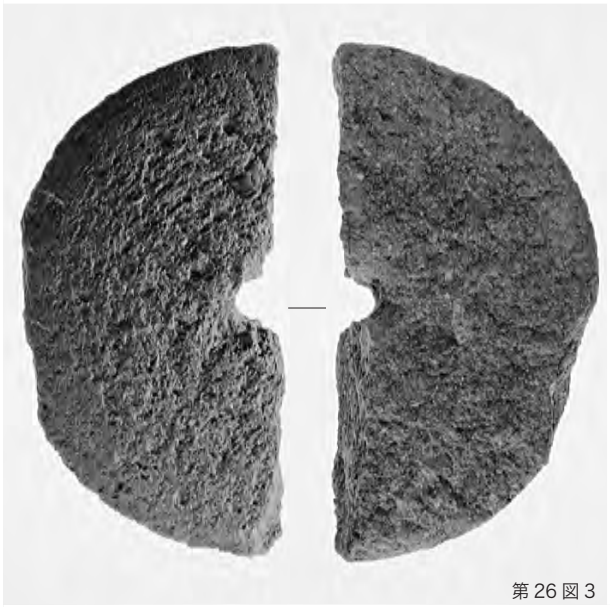
第 23 図

第 26 図

図版 56

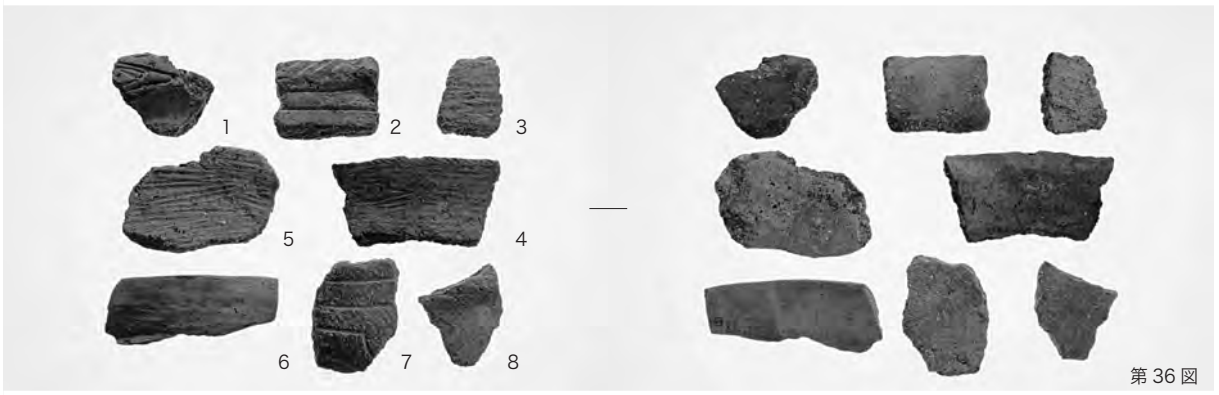
第 26 図 2


第 26 図 4

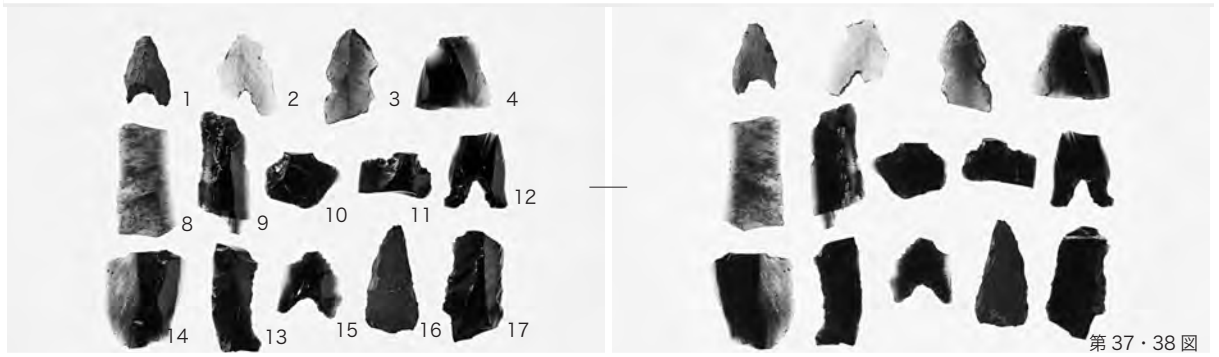

第 26 図 3

第 27 図

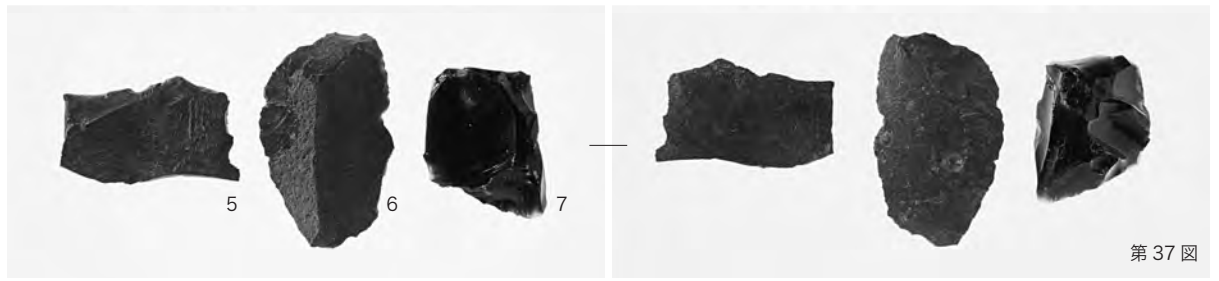
第 33 図



第 36 図



第 37・38 図



第 37 図

第 42 図土 206–2

第 44 図土 206–11

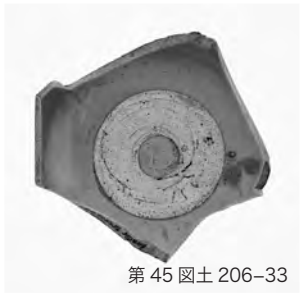
第 44 図土 206–12

第 44 図土 206–17

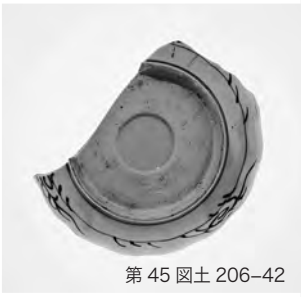
第 42 図土 206–5

第 45 図土 206–21

第 43 図土 206–8



第 45 図土 206–33



第 45 図土 206–42

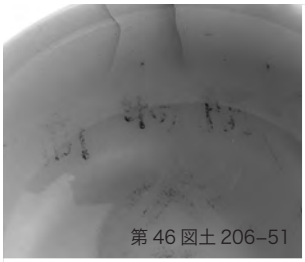
第 43 図土 206–9

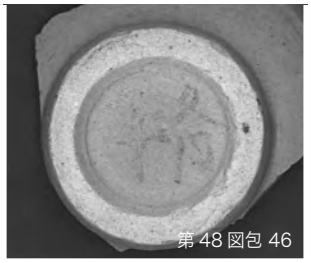
第 46 図土 206–48

第 45 図土 206–49

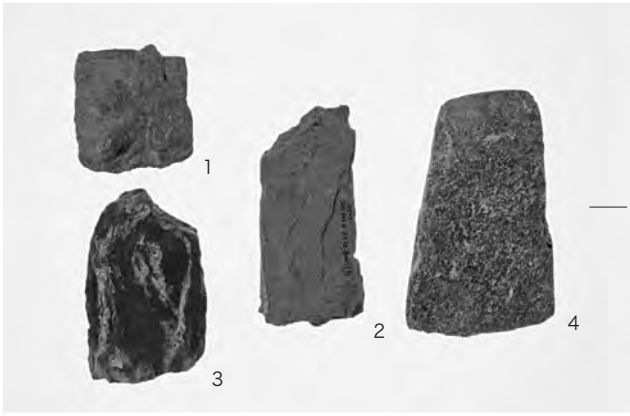
第 45 図土 206–50

図版 58


第 46 図土 206–51

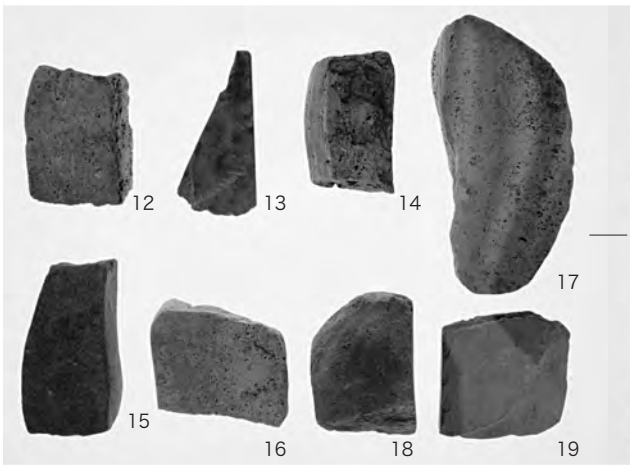

第 48 図包 46

第 48 図土 210–5



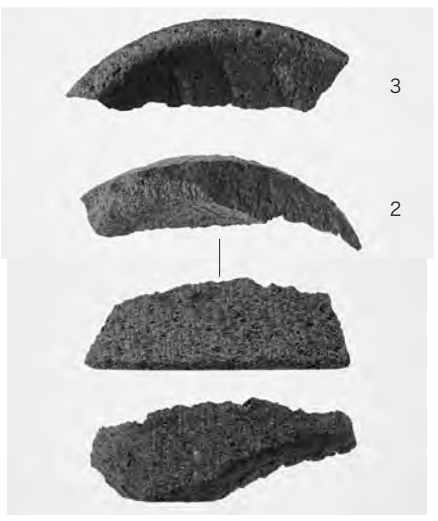
第 49 図

第 49 図



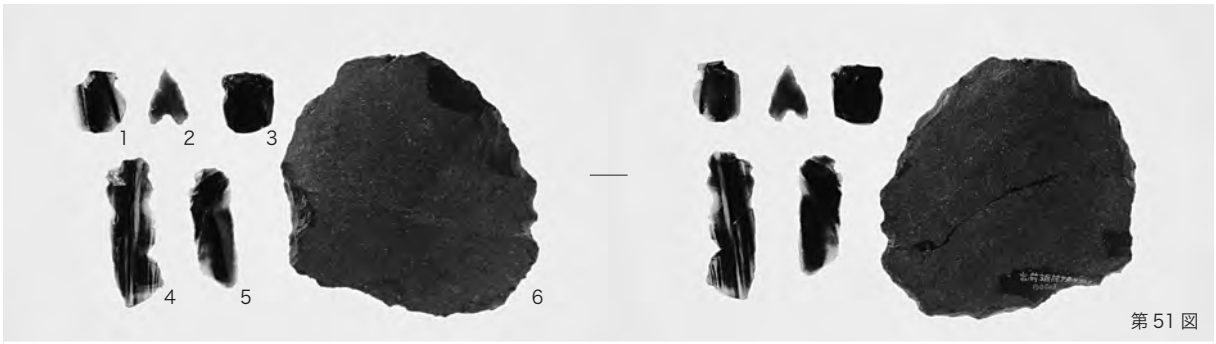
第 49 図

第 50 図

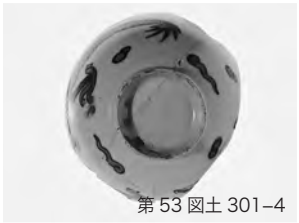


第 50 図

2 区出土遺物 2



第 51 図

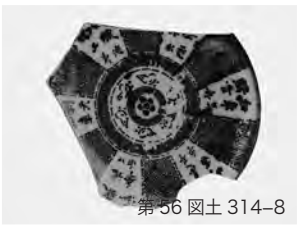

第 53 図土 301–4

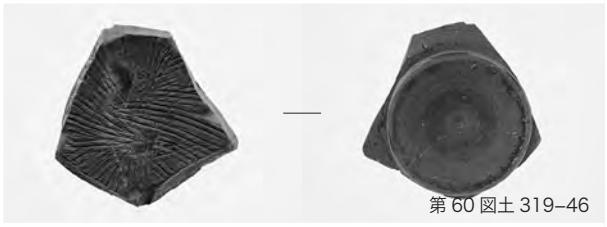
第 53 図土 303–3

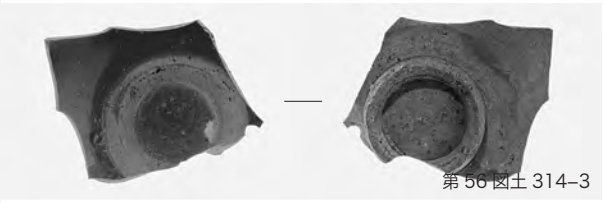
第 61 図土 319–40

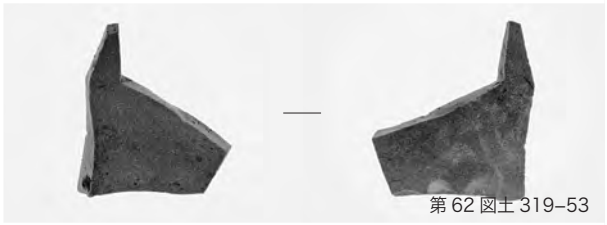
第 54 図土 308

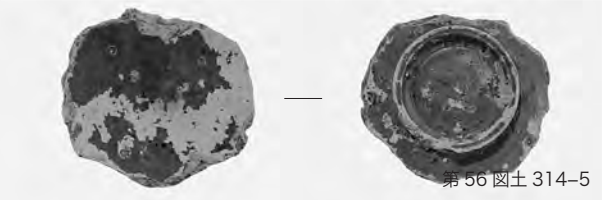
第 54 図土 308 細部


第 56 図土 314–8

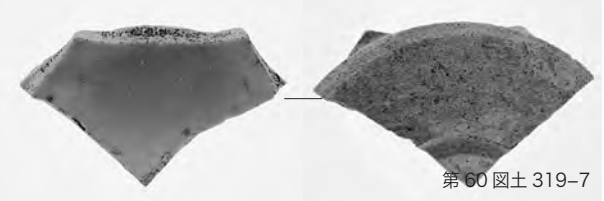

第 60 図土 319–46

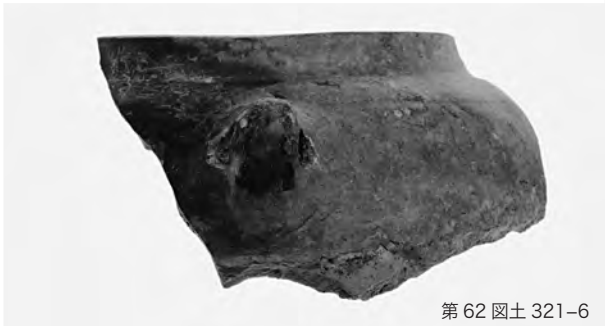

第 56 図土 314–3

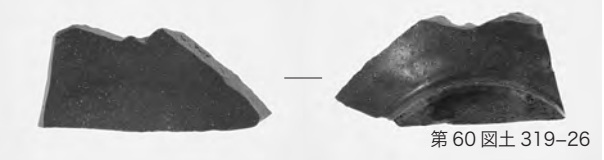

第 62 図土 319–53


第 56 図土 314–5

第 62 図土 320–1

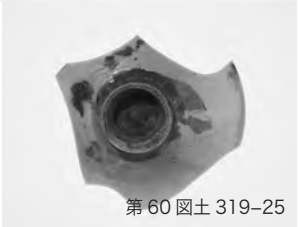

第 60 図土 319–7


第 62 図土 321–6


第 60 図土 319–26

第 63 図土 321–11

第 60 図土 319–10

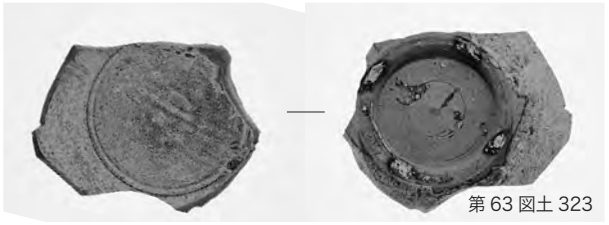

第 60 図土 319–25

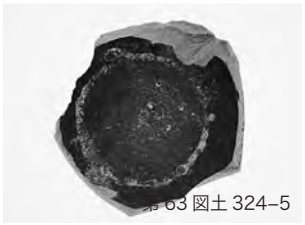
第 63 図土 321–12

2 区出土遺物 3 ・ 3 区出土遺物 1

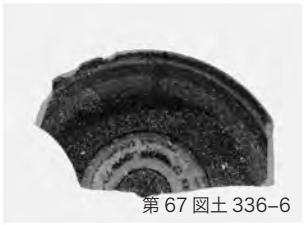
図版 60

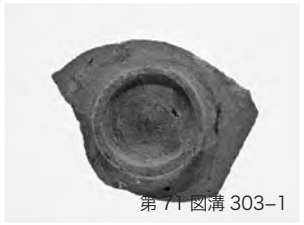
第 63 図土 321–13


第 63 図土 323

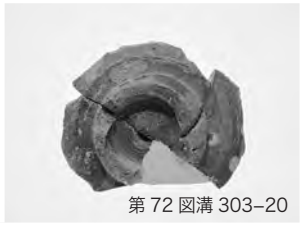

第 63 図土 324–5

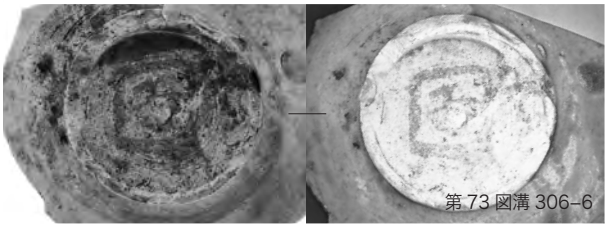
第 65 図土 329–1


第 67 図土 336–6


第 71 図溝 303–1

第 72 図溝 303–16


第 72 図溝 303–20


第 73 図溝 306–6

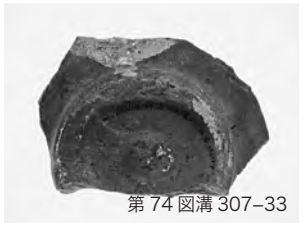
第 73 図溝 305

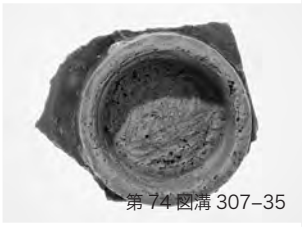
第 74 図溝 307–9

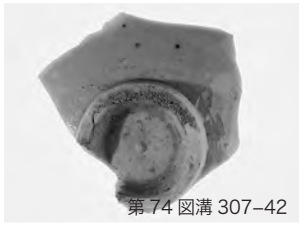
第 74 図溝 307–13

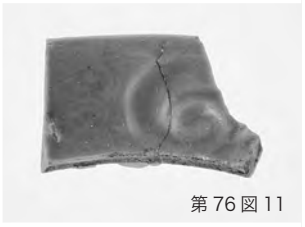
第 74 図溝 307–14

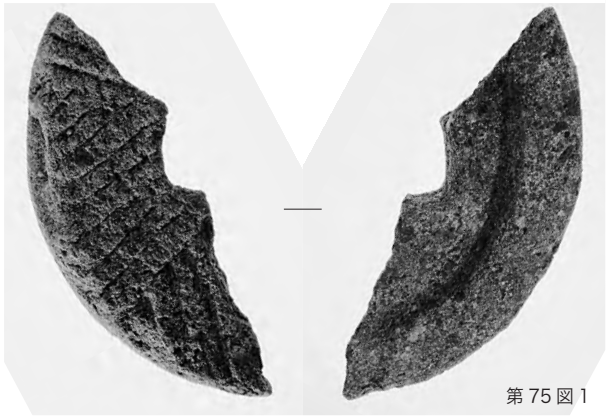
第 74 図溝 307–15

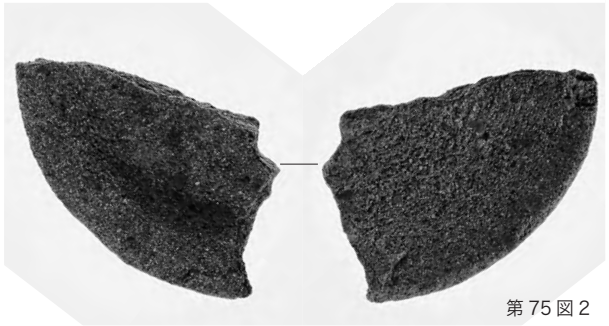

第 74 図溝 307–33


第 74 図溝 307–35


第 74 図溝 307–42


第 76 図 11


第 75 図 1


第 75 図 2

第 75 図 3

第 75 図 4

第 78 図 1

第 78 図 2

第 78 図 4

第 78 図 6

第 79 図 3

第 79 図 7

第 79 図 9

第 79 図 11

第 79 図 12

第 82 図 1

第 82 図 3

第 82 図 13

図版 62

第 82 図 14

第 82 図 6

第 82 図 8

第 82 図 11

第 83 図 3

第 83 図 4

第 83 図 1

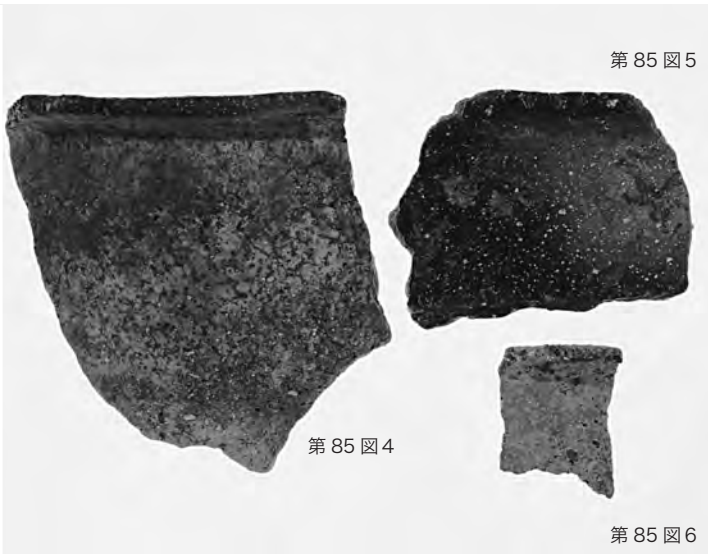
第 83 図 9

第 83 図 8

第 85 図 1

第 85 図 2

第 85 図 9


第 85 図 5
第 85 図 4
第 85 図 6

第 85 図 11

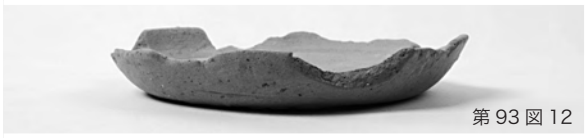
第 86 図 20

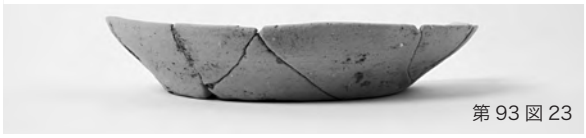
第 86 図 22

第 89 図 3

第 93 図 3

第 93 図 4


第 93 図 12


第 93 図 23

第 93 図 24

第 93 図 28

第 93 図 32

4 区出土遺物 3 ・ 5 区出土遺物 1

図版 64

第 95 図 1

第 95 図 2

第 95 図 3

第 95 図 4

第 95 図 6

第 95 図 8

第 95 図 17

第 96 図 3

第 96 図 28

第 98 図 6

第 98 図 7

第 99 図 25

第 99 図 26

第 99 図 27

第 99 図 30

第 100 図 6

第 100 図 9

第 100 図 10

第 100 図 11

第 100 図 12

第 100 図 13

第 100 図 14

第 100 図 15

第 100 図 16

第 100 図 16

第 100 図 21

図版 66

第 100 図 26

第 102 図 16

第 100 図 27

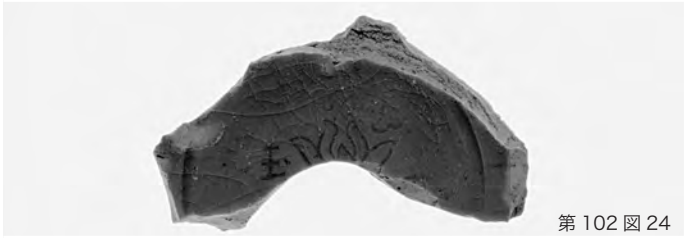
第 102 図 21

第 102 図 4

第 102 図 5

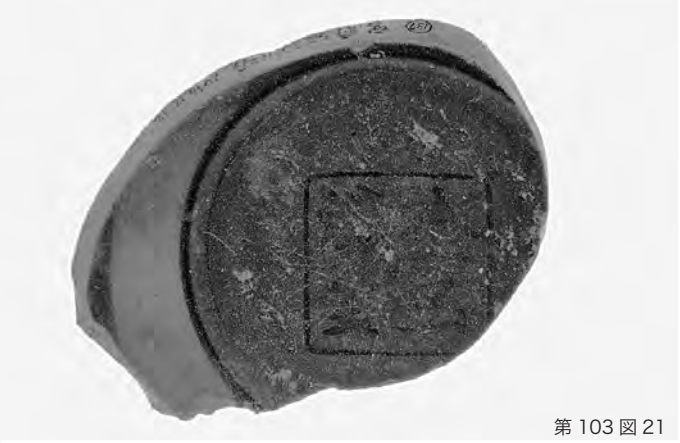
第 102 図 5

第 102 図 22


第 102 図 24

第 103 図 8

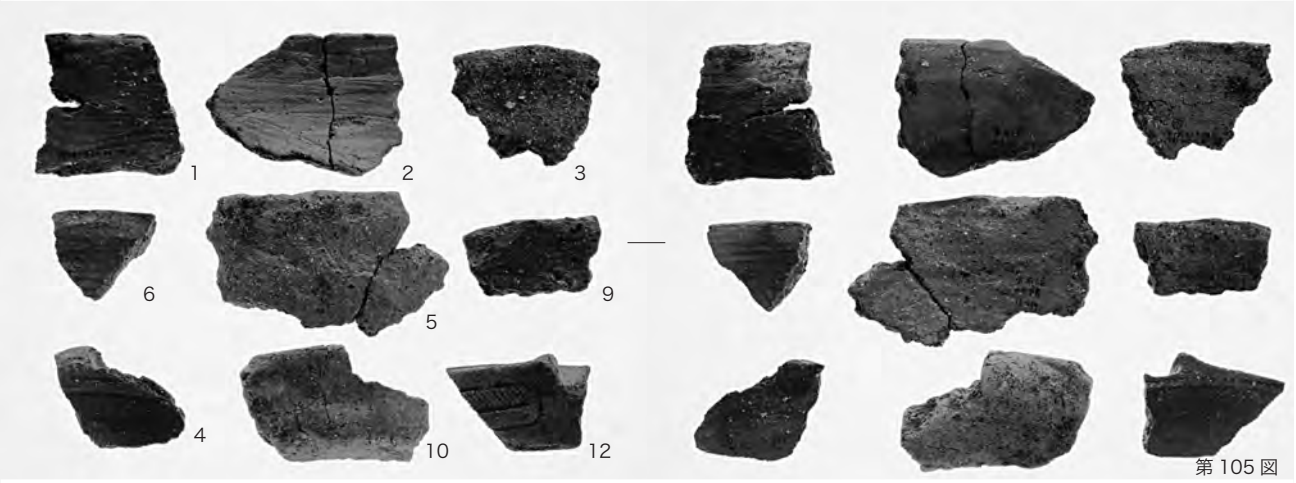
第 103 図 32



第 103 図 21

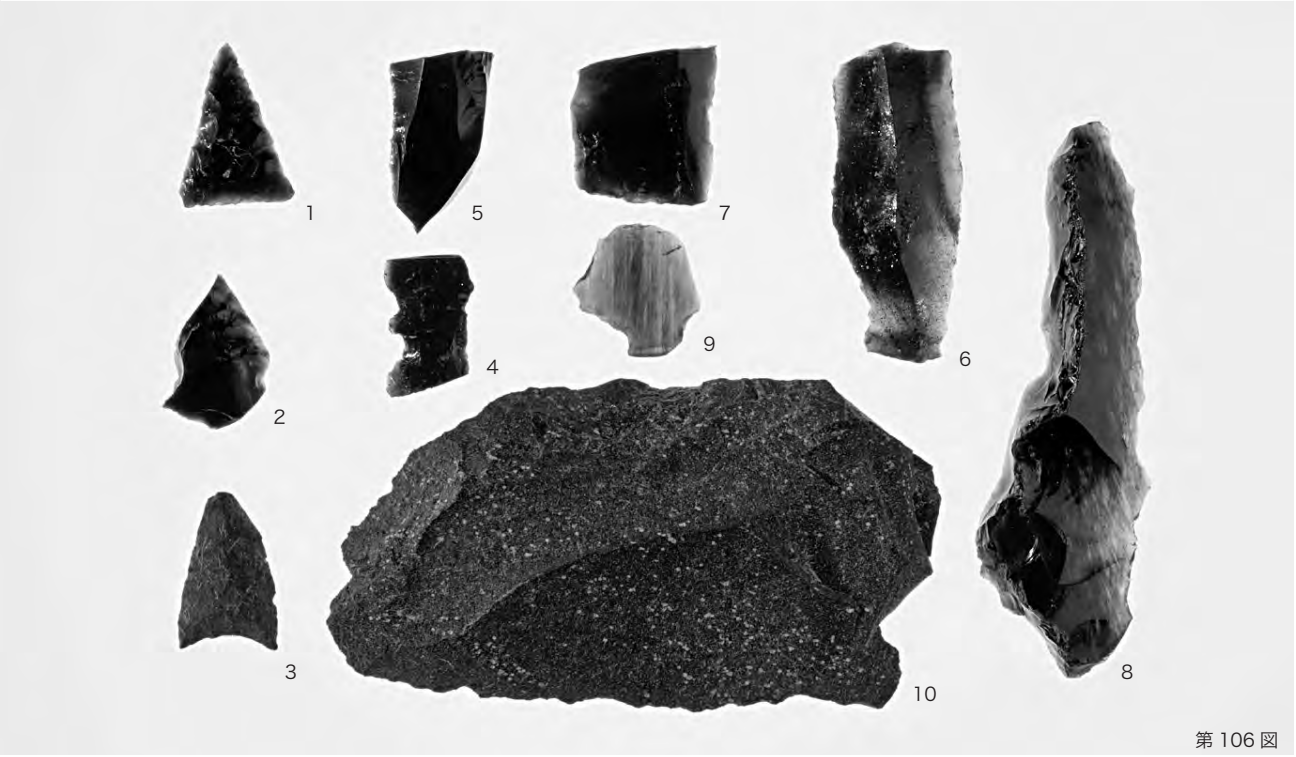
第 104 図 14

第 104 図 16



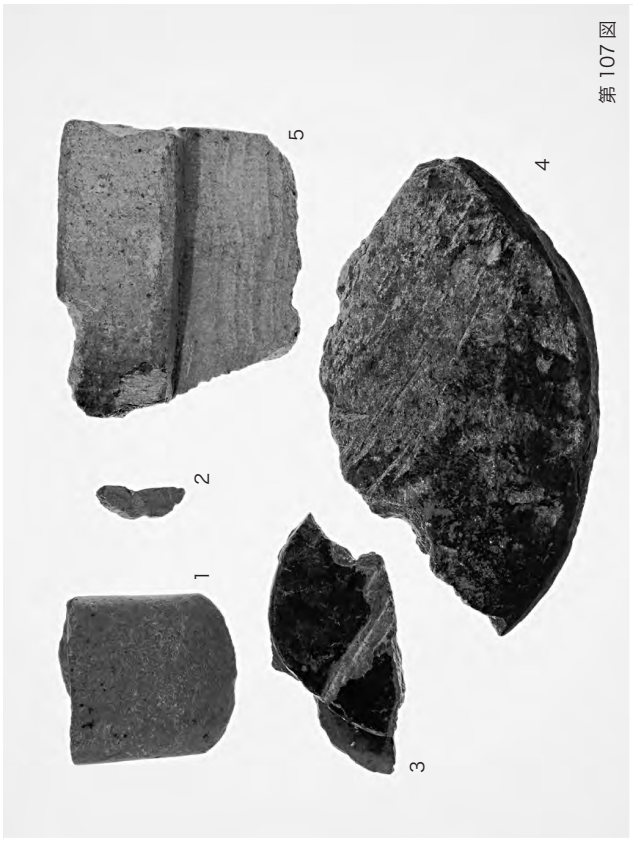
第 105 図

第 105 図

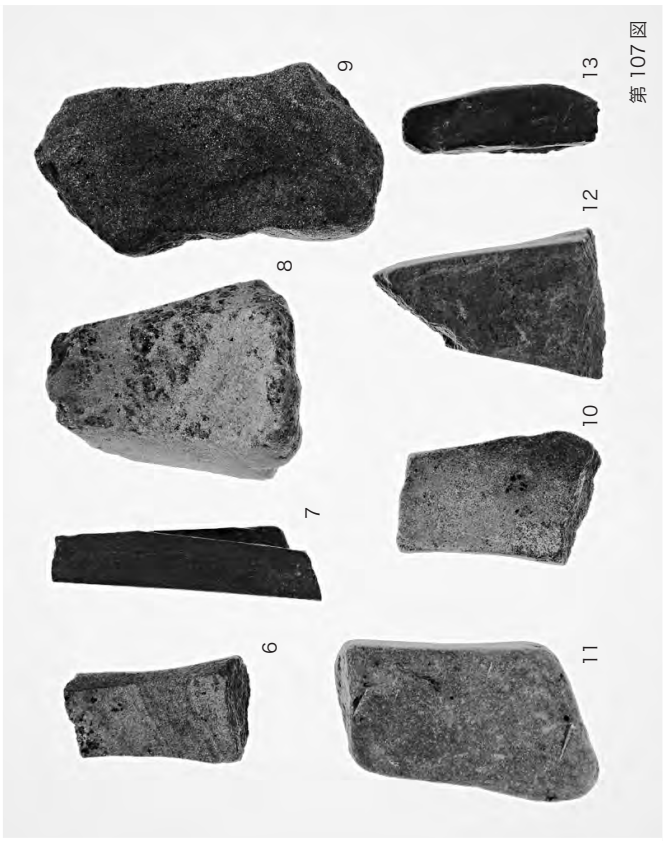


第 106 図

図版 68



第 107 図

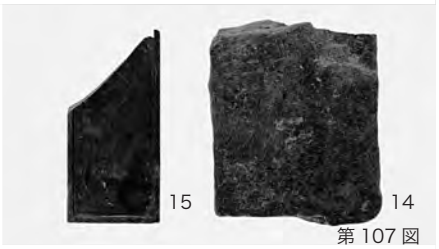


第 107 図

第 109 図 6

第 109 図 3

第 110 図



第 107 図

第 108 図 1

第 110 図

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みやのまえいせき
書 名	宮ノ前遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第２７１集
編 著 者 名	飛野博文（編）　坂本真一
編 集 機 関	九州歴史資料館
所 在 地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208-3　☎0942-75-9575
発 行 年 月 日	西暦2019年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みやのまえいせき 宮ノ前遺跡	ふくおかけんなかがわし 福岡県那珂川市 おおあざちゅう 大字仲424-1、445-3ほか	40231	0082	33度30分24秒	130度25分29秒	20150819～20160226 20160510～20160810 20160908～20170203	約2,000㎡	都市計画道路現人橋乙金線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ前遺跡	散布地	縄文	—	後期土器・石斧・石鏃等	
		弥生	—	土器・石器	
	集落跡	古代	溝	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・初期輸入陶磁器	邢窯・定窯系白磁、越州窯系青磁
		中世	堀立柱建物跡 土坑・溝	土師器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器・石製品	
	集落跡	近世	土坑・溝	土師器・瓦質土器・瓦・陶磁器等	初期伊万里、古唐津等
		～近現代	土坑・溝	瓦・陶磁器等	「大正4年」頃の一括遺物

遺跡の概要

市内で最も古い歴史を有するといわれる現人神社は二級河川那珂川右岸の自然堤防上に位置し、宮ノ前遺跡もほぼその自然堤防と重なっているものと思われる。今回の調査対象地は東端の5区が水田であったが、ほかはすべて宅地化されていて、遺構としてはほとんどが近世以降に形成されたものと思われる。ただ、307号溝および507号溝は12世紀中頃に埋没した遺構で、後者はほぼ条里地割にのるが、前者はまったく方位を異にしていて、ほぼ同時期に廃絶したと考えられる溝の性格が今後の課題となろう。
遺物には縄文後期、弥生前期、奈良平安時代の須恵器・緑釉陶器、灰釉陶器や初期輸入陶磁器などの出土もあって、古代の重要な施設が付近に存在したことが想定され、その解明も今後の課題である。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 30	登録番号 4

宮ノ前遺跡

福岡県那珂川市大字仲所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第271集

平成31年3月31日

発行　九州歴史資料館
〒838−0106　福岡県小郡市三沢5208−3

印刷　福岡印刷株式会社
〒812−0892　福岡県福岡市博多区東那珂1−10−15